鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(30)

高城川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

外川江遺跡
横岡古墳

1984年3月
鹿児島県教育委員会

小形仿製鏡（実大）

建設省川内川工事事務所提供

外川江遺跡

はじめに

この発掘調査報告書は，２級河川高城川改修事業に先がけて，鹿児島県教育委員会が昭和53・58年度に実施した川内市五代町外川江遺跡，同市上川内町横岡古墳の発掘調査の記録であります。

今回の発掘調査は，河川改修部分だけでしたが，外川江遺跡からは本県で初めて弥生時代（後期）の鏡を検出したほか，縄文時代から平安時代にわたる各時代の土器も多く発見しました。また，横岡古墳では死体を埋葬した地下式板石積石室を発見し，残存状況のよい石室からは埋葬した人骨と副葬した鉄製品を検出するなど貴重な成果を上げました。

その後，記録や遺物の整理も進み，ここに調査報告書刊行の運びとなりました。この書を郷土史の研究，文化財の保護及びその思想普及のために活用いただければ幸いです。

終わりに，この発掘調査に終始御尽力下さった県土木部河川課，川内土木事務所第２工務課並びに地元の方々に厚く感謝申し上げます。

昭和５９年３月

鹿児島県教育委員会
教育長　井之口　恒雄

例　　言

1．この報告書は川内市高城川の河川改修事業に伴う「外川江遺跡」，「横岡古墳」の埋蔵文化財調査報告書である。

2．発掘調査に要する経費は事業者が負担し，発掘調査は県教育委員会文化課が当たった。

3．発掘調査及び遺物整理については河口貞徳氏（県考古学会長），平田信芳氏（国分高校教諭），植物遺体の同定は田川日出夫氏（鹿児島大学教養部）の指導を受けた。また，花粉分析については安田喜憲氏（広島大学総合科学部），人骨は松下孝幸氏（長崎大学医学部第二解剖教室）の玉稿をいただいた。

4．横岡古墳については河口貞徳氏に御教示をいただき，資料の提供（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ号墳の分布）を受けた。

5．本報告書の遺物は通し番号を付し，挿図内番号と図版番号は一致するものである。

6．本書で用いたレベル数値はすべて海抜高である。

7．外川江遺跡の現地撮影は平田信芳氏・繁昌，横岡古墳と写真図版は青崎が当った。

8．本書の執筆は，つぎの通りである。

外川江遺跡

第Ⅰ・Ⅲ・Ⅵ章－１節，２節Ⓐ Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ，Ⓑ Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ
Ⓓ，Ⓔ，Ⓖ，Ⓗ，Ⓘ，Ⓚ～Ⓟ　まとめ……青崎

第Ⅱ・Ⅳ章－２節Ⓐ Ⅲ・Ⅴ，Ⓑ Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅸ，Ⅹ，Ⓒ－Ⅰ，Ⅱ
Ⓕ，Ⓙ，Ⓠ，３節，第Ⅴ章　まとめ　……繁昌

鹿児島県川内市外川江遺跡の泥土の花粉分析　……安田喜憲

横岡古墳

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ，(1)－Ｃ～Ｇ，(2)，第Ⅵ章，まとめ……青崎

第Ⅲ，(1)－Ａ・Ｂ……繁昌

Ⅶ号墳出土の人骨について……松下孝幸

目　　次

第Ⅰ章　調査の経過および概要…… 5
第Ⅱ章　環　境…… 11
第Ⅲ章　層　位…… 14
第Ⅳ章　遺　物…… 15
　1節　縄文時代…… 15
　2節　弥生時代～古墳時代…… 20
　3節　歴史時代…… 92
第Ⅴ章　遺　構…… 95
まとめ…… 96
鹿児島県川内市外川江遺跡の泥土の花粉分析…… 113

挿　図　目　次

第1図　外川江遺跡・横岡古墳周辺地形図 8
第2図　グリッド配置図…… 9
第3図　銅鏡・土器出土状況……10
第4図　周辺遺跡……13
第5図　土層図……14
第6図　縄文式土器（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類）……15
第7図　縄文式土器（Ⅵa類）……17
第8図　縄文式土器（Ⅶa類）・底部……18
第9図　縄文式土器（器台・Ⅴa・Ⅴb類）19
第10図　小玉（ガラス製）……27
第11図　小形彷製鏡……28
第12図　木器……28
第13図　甕形土器（Ⅰ・Ⅱ類）……34
第14図　甕形土器（Ⅲ類）－1……35
第15図　甕形土器（Ⅲ類）－2……36
第16図　甕形土器（Ⅲ類）－3……37
第17図　甕形土器（Ⅲ類）－4……38
第18図　甕形土器（Ⅲ類）－5……39
第19図　甕形土器（Ⅲ類）－6……40
第20図　甕形土器（Ⅲ類）－7……41
第21図　甕形土器（Ⅲ類）－8……42
第22図　甕形土器（Ⅲ類）－9……43
第23図　甕形土器（Ⅲ類）－10……44
第24図　甕形土器（Ⅵa類）……45
第25図　甕形土器（Ⅵa類）……46
第26図　甕形土器（Ⅳa類）……47
第27図　甕形土器（Ⅵa類）……48
第28図　甕形土器（Ⅳb類）……49
第29図　甕形土器（Ⅴ類）……50
第30図　壺形土器（Ⅰ類・Ⅱ類）……51
第31図　壺形土器（Ⅲ類）－1……52
第32図　壺形土器（Ⅲ類）－2……53
第33図　壺形土器（Ⅲ類）－3……54
第34図　壺形土器（Ⅲ類）－4……55
第35図　壺形土器（Ⅲ類）－5……56
第36図　壺形土器（Ⅵ類）－1……57
第37図　壺形土器（Ⅳ類）－2……58
第38図　壺形土器（Ⅵ類）－3……59
第39図　壺形土器（Ⅳ類）－4……60
第40図　壺形土器（Ⅴ類）……61
第41図　壺形土器（Ⅵa類）……62
第42図　壺形土器（Ⅵb類）……63

第43図　壺形土器（Ⅶ類）－1……64
第44図　壺形土器（Ⅶ類）－2……65
第45図　壺形土器（Ⅶ類）－1……66
第46図　壺形土器（Ⅷ類）－2……67
第47図　壺形土器（Ⅸ類）……68
第48図　壺形土器（Ⅸ類）・坩（Ⅹ類）…69
第49図　鉢形土器（Ⅰ類）－1……70
第50図　鉢形土器（Ⅰ類）－2……71
第51図　鉢形土器（Ⅰ・Ⅱ類）……72
第52図　鉢形土器（Ⅱ類）……73
第53図　鉢形土器（Ⅱ類）……74
第54図　高坏（Ⅰa類・Ⅰb類）……75
第55図　高坏（Ⅱ類）……76
第56図　高坏脚部－1……77
第57図　高坏脚部－2……78
第58図　蓋形土器（Ⅰ類）－1……79
第59図　蓋形土器（Ⅰ類）－2……80
第60図　蓋形土器（Ⅰ・Ⅱ類）……81
第61図　手捏ね土器－1……82
第62図　手捏ね土器－2……83
第63図　器台（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・類）……84
第64図　ジョッキ型土器・特殊土器ほか…85
第65図　杓子型土器……86
第66図　石庖丁・磨製石鏃ほか……87
第67図　石錘・磨石……88
第68図　敲石・凹石……89
第69図　凹石・砥石……90
第70図　砥石・線刻礫ほか……91
第71図　須恵器……93
第72図　瓦……94
第73図　内黒土師器・青磁・古銭……94
第74図　帯状遺構Ⅰ・Ⅱ……95
第75図　帯状遺構出土遺物……97

図　版　目　次

図版　　航空写真
図版1　外川江遺跡遠影……99
図版2　遺物出土状況……100
図版3　出土遺物……101
図版4　出土遺物……102
図版5　出土遺物……103
図版6　出土遺物……104
図版7　出土遺物……105
図版8　出土遺物……106
図版9　出土遺物……107
図版10　出土遺物……108
図版11　出土遺物……109
図版12　出土遺物……110
図版13　出土遺物……111
図版14　出土遺物……112

表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧表……12
第2表　土器一覧表(1)……29
第3表　土器一覧表(2)……30
第4表　土器一覧表(3)……31
第5表　土器一覧表(4)……32
第6表　土器一覧表(5)……33
第7表　石器一覧表……34

第Ⅰ章　調査の経過および概要

1．調査に至るまでの経過

外川江遺跡は，昭和50年８月に川内市五代町久留巣植平遺跡の発掘調査（鹿児島県考古学会調査）期間中に，地元住民から同市五代町外川江の高城川改修工事中に土器片が多数出土している旨の通報によって判明したものである。河川改修工事は県土木部による高城川の川幅の拡幅，蛇行部の河道整正等の大規模な河川改修事業である。遺跡発見当時は，水田地掘削部の両岸の断面に幅約 100 m にわたって夥しい土器片が露出し，地表面下約１m には土器片が層を成し良好な状態での遺物包含層が確認された。

なお河川幅約60m については，工事によって破壊されていた。

県教育委員会は県土木部とその取扱いについて協議し，同年12月に外川江遺跡の確認調査を実施した。その結果，緊急度の高い左岸を昭和53年10月23日～同54年１月18日（右岸の確認調査も実施），右岸と横岡古墳は昭和58年７月４日～９月22日（上流の横岡古墳も平行して調査）の期間で発掘調査を行った。本調査については，文化財保護法57条３の適応を受け，経費については原因者負担の原則により事業者である県土木部が負担し，調査は鹿児島県教育委員会が実施した。

2．調査組織

予備調査（S．50.12.11～18）

調査責任者	鹿児島県教育庁文化課長		宇都　哲
調査企画	〃	専門員	河野治雄
調査担当者	〃	主任文化財研究員	平田信芳
	〃	主　事	新東晃一
調査事務	〃	係　長	中島敏光
	〃	主　事	野村和徳

１次調査（S．53.10.23～S．54.1.18）

調査責任者	鹿児島県教育庁文化課長		谷崎哲男
調査介画	〃	専門員	本蔵久三
調査担当者	〃	主任文化財研究員	平田信芳
	〃	主　事	青崎和憲
調査事務	〃	係　長	中条　亨
	〃	主　事	伊地知千晴

２次調査（S．58.7.4～9.22）

調査責任者	鹿児島県教育庁文化課		猿渡侯昭
	〃	課長補佐	本田武郎
	〃	主　幹	中村文夫
調査企画	〃	主任文化財研究員	諏訪昭千代
調査担当	〃	主　事	青崎和憲
	〃	研究員	繁昌正幸
調査事務	〃	係　長	寺園　晃
	〃	主　査	安藤幸次
担　当	〃	土木部河川課	牟田神宗征
	〃	川内土木事務所	前原幸夫

3．日誌抄（予備調査　S．50．12．11～18）

12/11　土木事務所・教育事務所との事前打合せ及び，トレンチ設定。

12　発掘調査開始。D－4・7・11区，A－27・30・32区土器出土，南日本新聞記者来訪

15　D－1・4・7，C－11，D－12～14，23・25・27・30深掘り，D－30－Ⅵ層に木片や木の葉・松カサ類が原形のまま保たれて出土。土木事務所・川内市教委職員来訪。

16　B－11～13区，F－8～10区，F－13・16・20・23・26・28・30区調査。

17　前日に引き続いてのトレンチ掘り，D－11～13区，L－5～13区，L－23・24区掘り濃密な土器分布。全体の平板測量。各トレンチの測量及び柱状図作成。

18　遺物出土面の清掃，写真撮影。土層実測D－11～15区，F－26区。出土地点のみの埋め戻し。器材・遺物の搬出準備。

1次調査（昭和53年9月26～昭和54年1月18日）

9/26　川内土木第2工務課との打合せ。

10/5　ブルドーザーによる表層除去。

10/18　器材搬入，グリッド杭打ち，グリッド方位N－8°－Eとする。

10/23～27　器材準備。発掘調査開始。B－1～7，C－8～11，C～E－3，D－4，7，B－3～6，掘り下げ作業。土質が粘土の為，固くしまり作業難渋　25日川内市・出水市文化財審議会委員来訪。

10/30～11/2　C～E－3～12，D－7～9，E－7・8Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ，特にE－7・8区に土器部の堆積がみられる。D－9区に旧水田用水路が検出された。

11/6～10　D－3～6，C－6，B－6，C－9，E－4，B－10区など調査開始，E－4区で手捏土器出土。壺完形など写真撮影。11/8川内土木山下工務課長来訪。

11/13～17　C～F－2，D－1，C－11，B・C－26～30，E－7・8，B・4～11，C－9～11など掘り下げ。グリッド単位の撮影のため水糸設定。川の満水時には調査面が低いので冠水の現象がみられ，調査は困難をきたす。

11/20～24　全体の平板測量，遺物取りあげ作業，写真撮影など。

11/27～12/9　全体的に遺物の量が多い。B～D－25～27，E・D－25・26掘り下げ開始。遺物取り上げ及び水洗い作業。E－25区より銅鏡出土。C－27～29区は大型の土器片が多量に出土する。12/1　南日本新聞記者来訪。

12/4～8　先週に引き続き掘り下げ作業。A－27～29，B～D・28，A～E－28，A～D－25～29，E－25，B－27掘り下げ及び遺物取り上げ，12/5NHK・西日本・読売新聞社取材，12/7大根占町文化財審議員，鹿児島新報記者，川内市広報課など来訪。

12/11～15　5～7－C・D，A～D－26～28，B・E－5～7，C・E－25・26，B・C－7～10など掘り下げ作業。12/14C－30，C－②－Ⅴ・Ⅵ自然遺物（植物）採集のため田川日出夫（鹿大教授）来訪。12/15川内市文化財審議員一行見学。

12/18～22　遺物取りあげ，土層実測。B～E－25・26－Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，縄文土器出土。又，須恵器や古瓦などの破片も出土し，乱されていた。C～E－1～5掘り下げ。

1/8～12　B～E－②～11遺物取りあげ，D－9－Ⅲ北宋銭出土。D区深掘り，右岸の確認調査のためグリッド設定。P－8，P－16，P－20，P－24，P－28，T－20，Y－20，R－12，J－12など掘り下げ。

1/16～18　グリッド調査及び埋め戻し作業。1/18発掘調査修了。

2次調査（昭和58年7月27日～9月22日）

7/27～29　外川江遺跡右岸発掘調査開始。グリッド設定。掘り下げ作業。

8/1～5　右岸断面に夥しい土器片が露呈している。8/4南日本新聞記者来訪。一部上流の横岡古墳の実測。8/5新田栄治先生（鹿児島大学）来訪。

8/8～12　O・P－11・12，R－9・10，O・P－8，R－9～11，Q－9～12，P－9～12，O－8～12など掘り下げ，8/11西日本新聞記者，川内市歴史資料館職員来訪。

8/17～19　先週に引き続き掘り下げ作業。遺物取り上げ，R・S－10・11掘り下げ。

8/22～26　遺物の分布は，2ケ所に分散し，中央部は遺物包含層が削除されている。R・S－10掘り下げ。遺物の出土状況写真撮影。O－8～10・13～15・18～25，N－11・12，NO－22～24など全体的に掘り下げ作業。N－23区に溝状遺構出土，Q－24区に木器出土。O－10・11実測。8/26川内北中学校福元教諭ら見学。

8/29～9/2　P－21，O－20～24検出作業。遺物取り上げ。O・P－20～23掘り下げ。P－23区より溝状遺構検出。8/29川内市内社会科研究会10名。8/30上村俊雄・本田氏来訪。

9/5～9　遺物取り上げ，甕・壺・ミニチュア土器など多量の出土である。9/6柏木君（同志社大）9/8猿渡文化課長見学。

9/12～16　全体の掘り下げ作業。N－21～23溝工掘り下げ及び実測。

9/19～22　遺物取り上げ作業，写真撮影。P－20，P－21区に石包丁出土。9/22発掘調査終了。

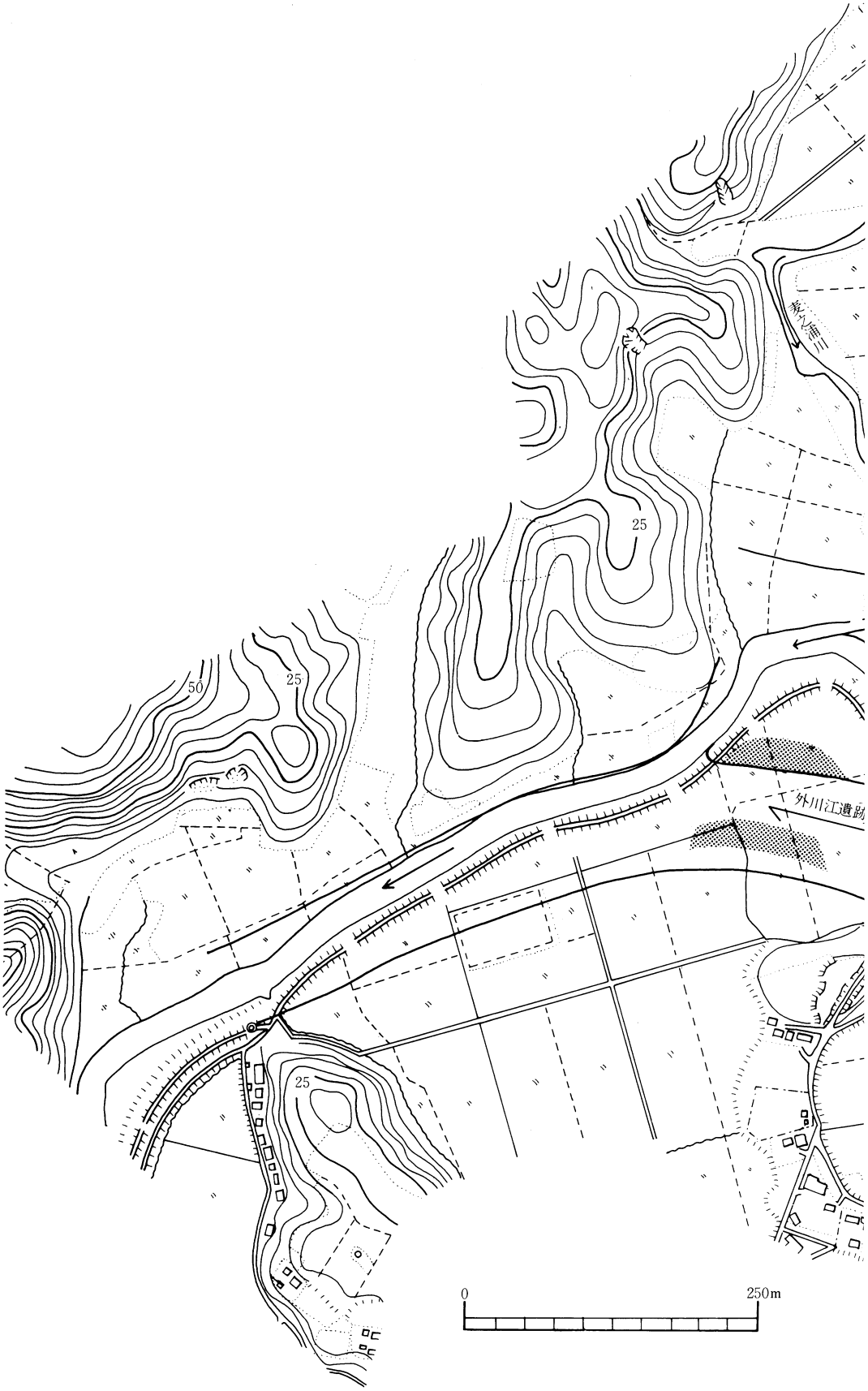
4．概要

高城川の河道整正後の掘削河床に平行して，5m単位のグリッドを組み（グリッド方位N8°E）左岸（1・2地点－1次調査），右岸（3・4地点－2次調査）を調査した。

なお左岸の西端から東へ1・2・3……，南から北へA・B・C……とし，5m単位のグリッドをさらに1・2・3……25の小グリッドに細分した。

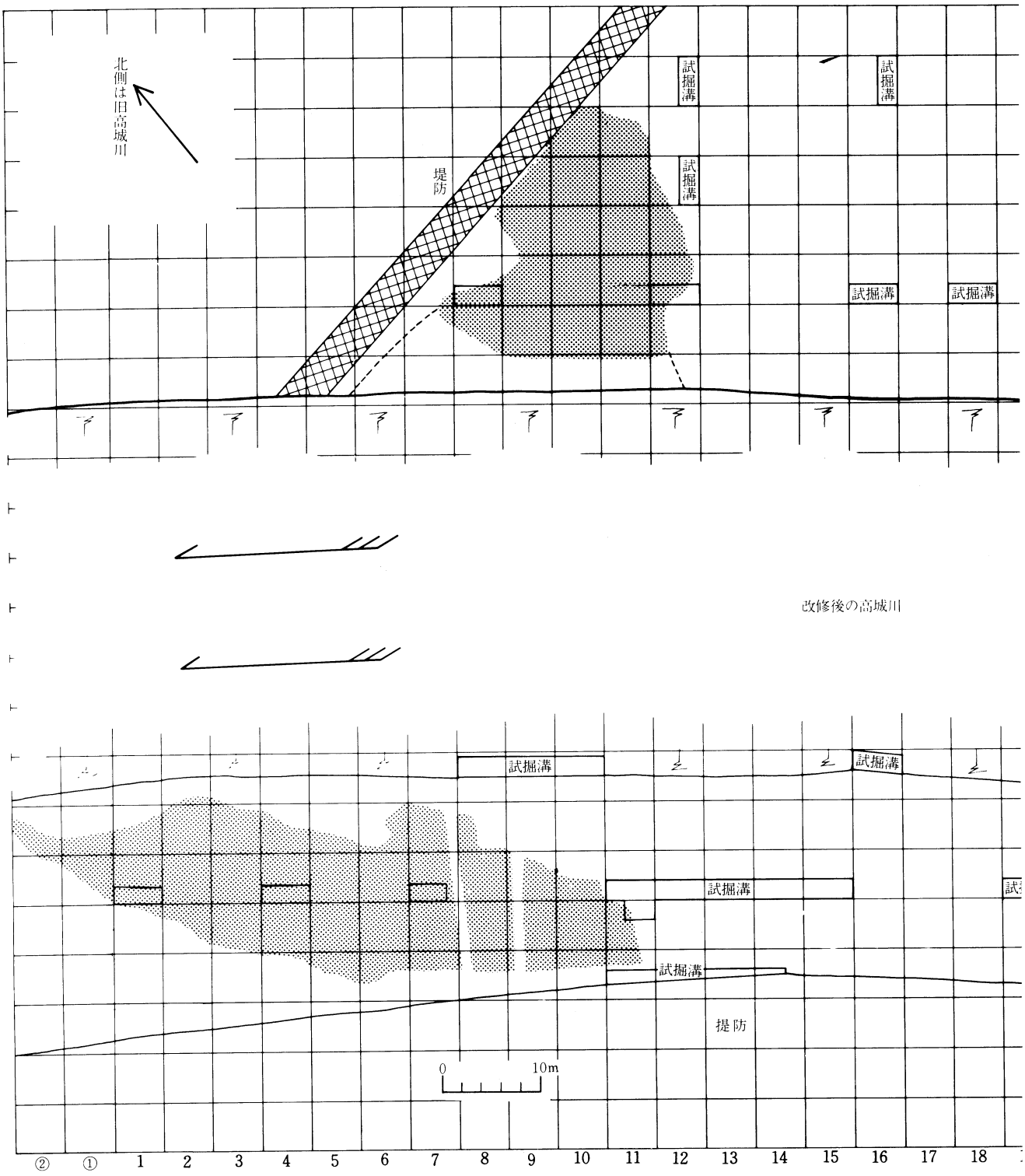
遺跡の中心部はすでに破壊されているため，弥生～古墳時代の遺構は確認出来なかったが，足の踏場もない程の夥しい土器が出土した。

なおこの他，土師器を伴う帯状遺構が2本検出され，縄文後期～晩期の土器も少量出土した。

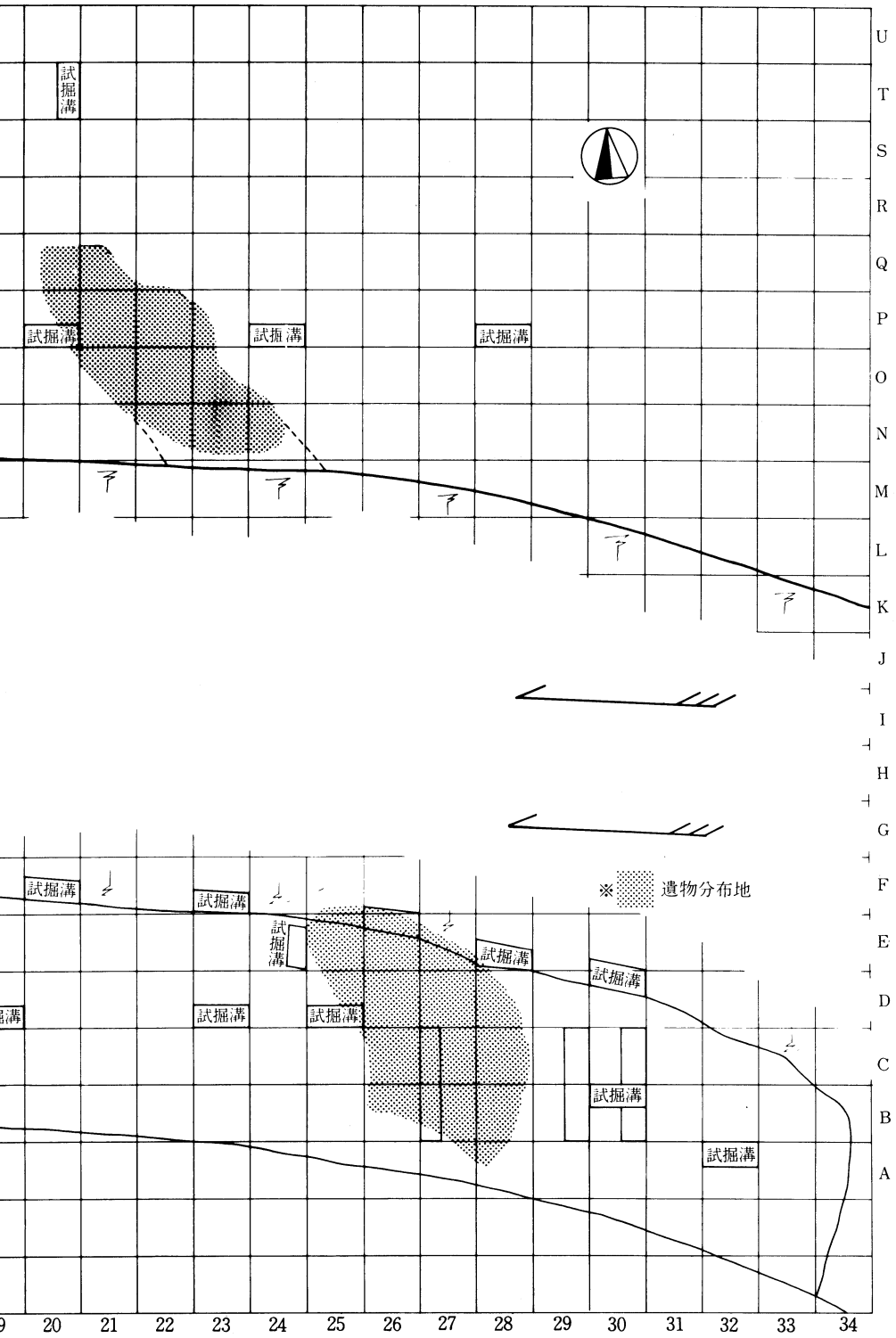

25
50
25
25
外川江遺跡
0
250m

第１図　外川江遺跡・横岡古墳周辺地形図

横岡古墳
高城川旧河川


北側は旧高城川
堤防
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
改修後の高城川
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
堤防
0
10m
②
①
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18

第2図　グ　リ　ッ　ド　配


試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
試掘溝
※ 遺物分布地
U
T
S
R
Q
P
O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

置　図

第3図　銅鏡・土器出土状況

第Ⅱ章　位置と環境

川内市街地は，鹿児島県の西半を占める薩摩半島の北西部に位置し，熊本県球磨郡の白髪岳に源を発する総延長137kmに及ぶ本県最大の河川，川内川下流の沖積地に開けている。北は紫尾山を中心とする出水山地により阿久根市，東は薩摩郡東郷町及び上床山山地により樋脇町，南は冠岳及び高江山地で串木野市と接し，西方のみ東シナ海に開けている。

外川江遺跡は高城川と川内川の合流地点から北へ約1.5km遡った地点の平地にあり，そこは川内温泉付近を源とする麦之浦川との合流点でもある。標高約4mで，満潮時には鹹水を帯びた水が上って来る。周囲は田圃であり，五代町西外川江が所在地である。

横岡古墳は，外川江遺跡を高城川沿いに遡ること東方約1kmの地点の小台地上にある。標高約7mで外川江遺跡よりはやや高いが，周囲の田圃との比高差は約4m程度である。所在地は上川内町釜口である。

次に川内市の主な遺跡について若干述べることにしたい。先ず旧石器時代は，県下最初の尖頭器を確認した中村町の楠元遺跡(註1)，剝片尖頭器や加治屋園型の細石核を出土した隈之城町成岡遺跡(註2)，ナイフ形石器や石核が検出された同町西ノ平遺跡(註3)などがある。縄文時代に入ると，後期の出水・指宿・松山・鐘ヶ崎式土器などの麦之浦貝塚(註4)，同じく後期の市来式土器を出土する尾賀台貝塚(註5)が知られ，成岡遺跡からは早期の手向山・石坂・前平式，後期の市来・鐘ヶ崎式，晩期のⅡ式（黒川式），Ⅲ式（夜臼式）土器が，西ノ平遺跡からは早期の手向山式，晩期の黒川式土器及び軽石製岩偶などが出土している。

弥生時代の遺跡では，石庖丁・石鎌が前期の土器に伴って出土した五代町若宮遺跡(註6)，弥生時代終末～古墳時代にかけては同町久留巣原(註7)・崎原・戦の原遺跡や向田町日暮丘遺跡などに土器の散布が見られる。古墳時代には，川内川流域を中心とする地下式板石積石室の本報告書記載の横岡古墳や，今日では消失した五代町若宮古墳が知られているほか，畿内あるいは北部九州系の竪穴式石室の港町船間島古墳(註8)があり，従来言われて来た地下式板石積石室古墳の文化圏内における位置として注目に値しよう。また，成岡遺跡からは16基の竪穴式住居跡と1基の土坑が検出されたほか，多くの土器や須恵器も出土しており，西ノ平遺跡からも遺物が出土している。

奈良時代のものとしては薩摩国府跡(註9)が御陵下町に比定され，また，薩摩国分寺跡(註10)が国分寺町に建立され伽藍とそれに伴う遺物が調査によって確認されている。また，天辰町の天辰廃寺跡は出土遺物から平安時代と推定され，成岡遺跡では平安時代後半～鎌倉時代前半と思われる掘立柱の建物跡や竪穴式住居跡，平安時代から室町時代にかけての土坑などが検出されているほか，緑釉・墨書土器，転用硯や土師器類が多数出土している。西ノ平遺跡からも奈良～鎌倉時代にかけての掘立柱建物，土坑，溝状遺構が検出され，土師器・黒色土器・須恵器や磁器などが出土した。鎌倉時代以降各地に山城が築かれたが，天辰町の碇山城もその一つである。江戸時代の遺跡・遺構では，成岡・西ノ平遺跡の墓坑などが知られている。

註1・5・6　『川内市史』上巻　19　年

註2・3　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（28）『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』1983年

註4　昭和28年発見，昭和37年調査。昭和58年川内市教育委員会発掘調査。

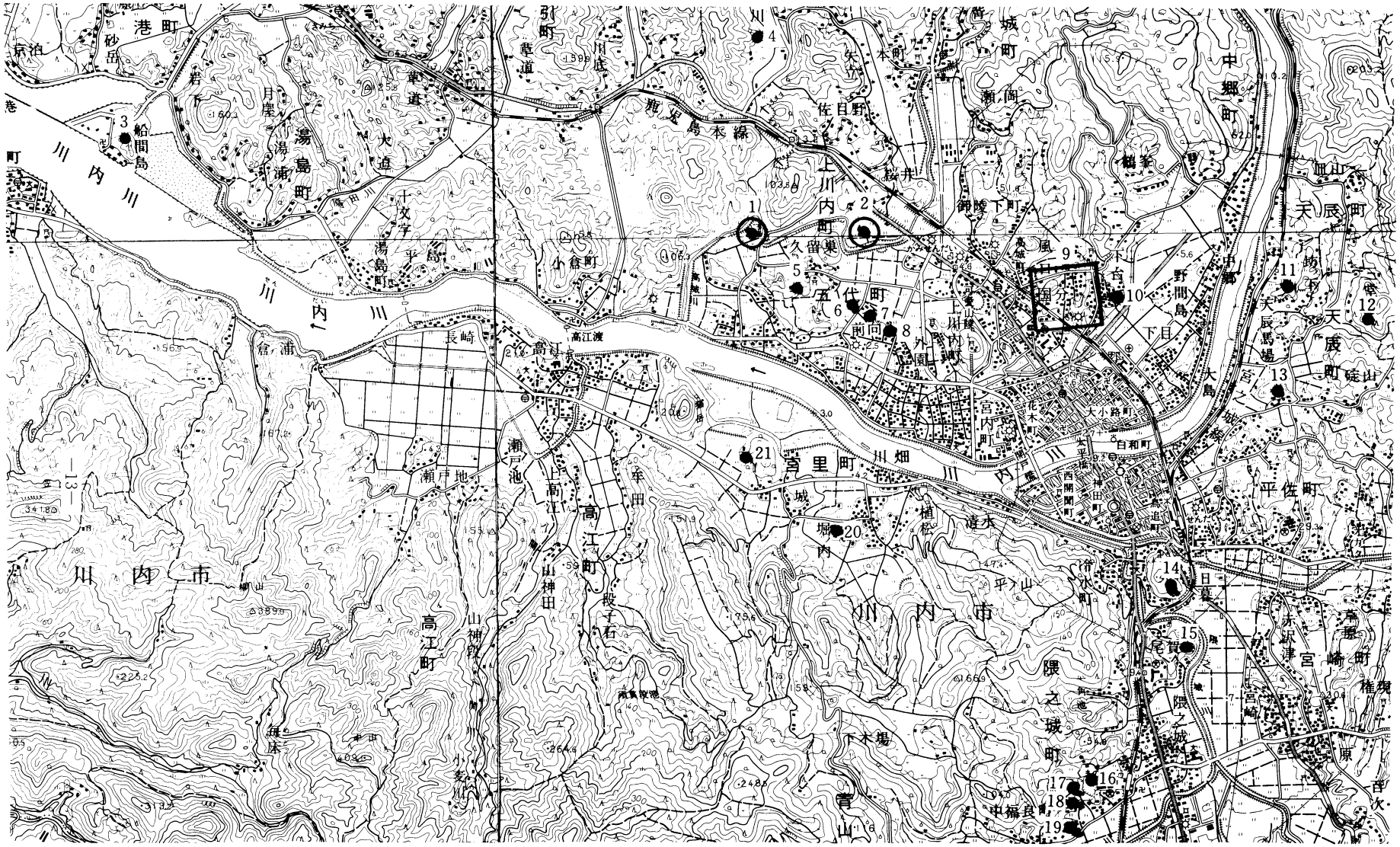
註7　昭和50年，植平遺跡として河口貞徳氏らが調査。

註8　『川内市史』では「地下式板石積石室といわれる形のもの」として出ている。

註9・10　鹿児島県教育委員会『薩摩国府跡・国分寺跡』昭和50年

（第1表　周辺遺跡一覧表）

番号	遺跡名	所在地	地形	出土遺物及び時期	備考	地名表番号
1	外川江	五代町西外川江	川中	縄文後・晩期土器，弥生～古墳土器・石器	本報告書	6－04
2	横岡古墳	上川内町釜口	丘陵端	地下式板石積石室	〃	6－15
3	船間島古墳	港町	島	竪穴式石室	川内市史	6－17
4	麦之浦貝塚	陽成町	段丘	縄文土器・古墳～中世土器・青磁等・出水・指宿・市来・松山式	昭和37年・58年発掘	6－4
5	久留巣原	五代町久留巣原	台地	弥生～平安時代の散布地		6－7
6	崎原	〃　崎原	沖積地	弥生土器片散布		6－8
7	若宮	〃　若宮	沖積地	弥生土器・石庖丁・石斧，板石積石室		6－14，18
8	戦の原	〃　若宮戦の原	沖積地	弥生土器片散布		6－9
9	薩摩国府跡	御陵下町	台地	六町四方の庁域	薩摩国府・国分寺跡 昭和50年	
10	薩摩国分寺跡	国分寺町	台地	国指定史跡。史跡公園として整備中	〃	6－20
11	天辰	天辰町坊下	台地	古墳時代土師器散布地		
12	天辰廃寺	〃　川原	山麓	平安時代の軒丸瓦・軒平瓦出土		
13	碇山城跡	〃　碇山	丘陵	中世山城，ほとんど破壊		
14	日暮丘	向田町日暮丘	独立丘陵	弥生土器散布地		6－10
15	尾賀台貝塚	隈之城町尾賀古寺	丘陵	縄文後期（市来式）ほとんど破壊		6－1
16	川実高グランド	中福良町	台地	縄文後期散布地。消滅		
17	上ノ原	〃　上ノ原	台地	縄文・古墳～中世の土器等	県埋蔵文化財報告書 (28)　1983年	
18	西ノ平	〃　西ノ平	台地	旧石器～近代の土器・石器・金具・陶磁器等	〃	
19	成岡	〃　成岡	台地	旧石器～近代の土器・石器・陶磁器等	〃	
20	日吉	宮里町堀之内日吉	微高地	古墳時代土師器散布地。鉄刀		6－12
21	安養寺丘	〃　安養寺丘	山麓	古墳時代土師器散布地。竪穴式石室	川内市史	6－13，19



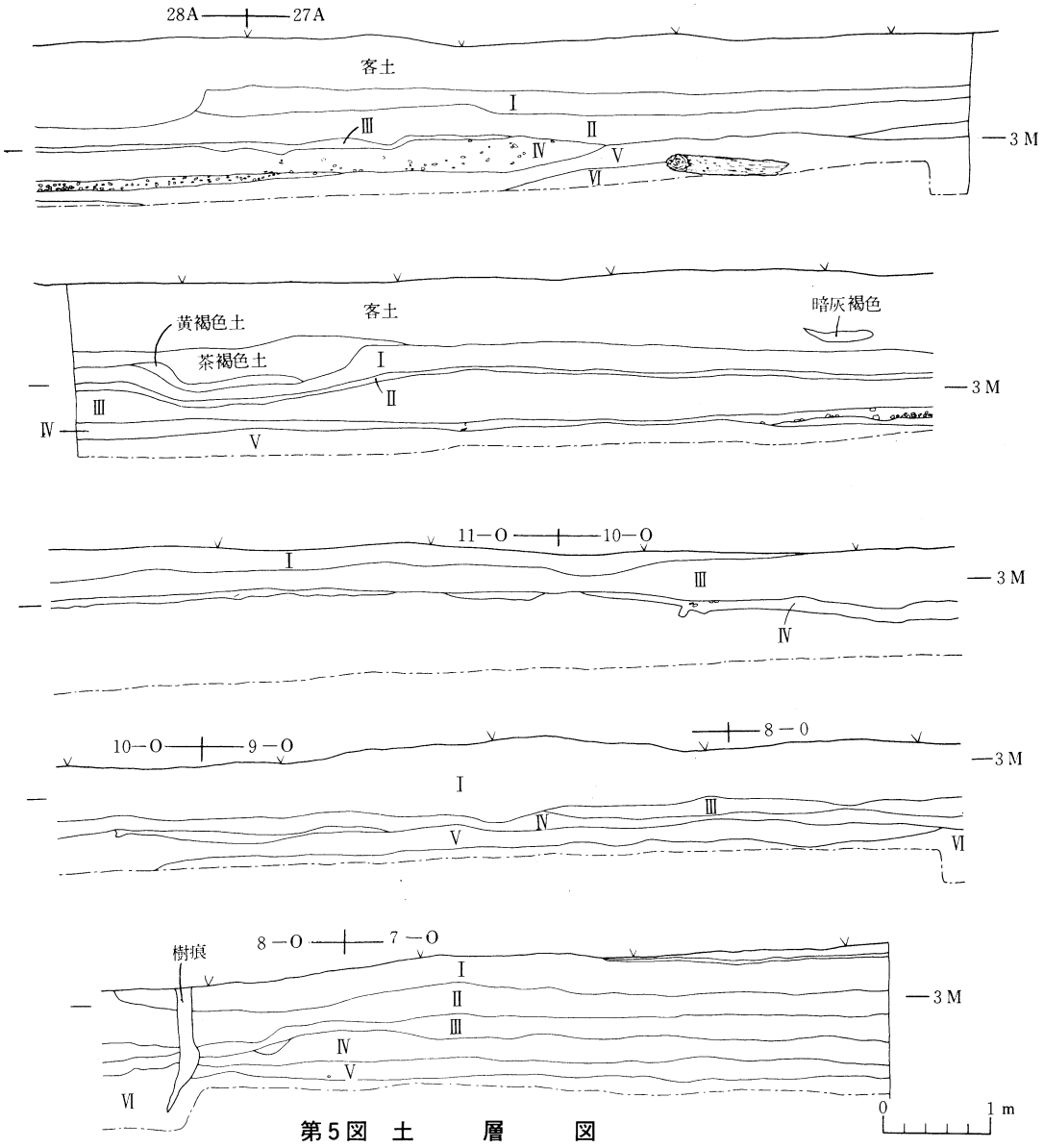
この地形図は、国土地理院発行の５万分の１地形図（西方・宮之城・羽島・川内）を使用したものである。

第４図　周　辺　遺　跡

第Ⅲ章　土　　層

層位は地点によって若干の違いがあるが，標準な層序は以下のとおりである。

Ⅰ層―攪乱層，**Ⅱ層**―耕作土で灰色粘質土層，**Ⅲ層**―粘質茶褐色土層でマンガンを含む，**Ⅵ層**―粘質黄褐色土でマンガンや砂を含み緻密である，**Ⅴ層**―粘質灰白色土が緻密である，**Ⅵ層**―粘質黒色土で砂を含む，Ⅳ層が弥生～古墳時代にかけての遺物包含層である。2地点にみられる縄文層はⅥ層下の砂質層の堆積層にあたる。なお，遺物包含層は満潮時にはその大半が水面下に没する低地にあたる。Ⅵ層は木の葉，樹根，木皮など植物遺体が多く残存していた。



第5図　土　　層　　図

第Ⅳ章　遺　　物

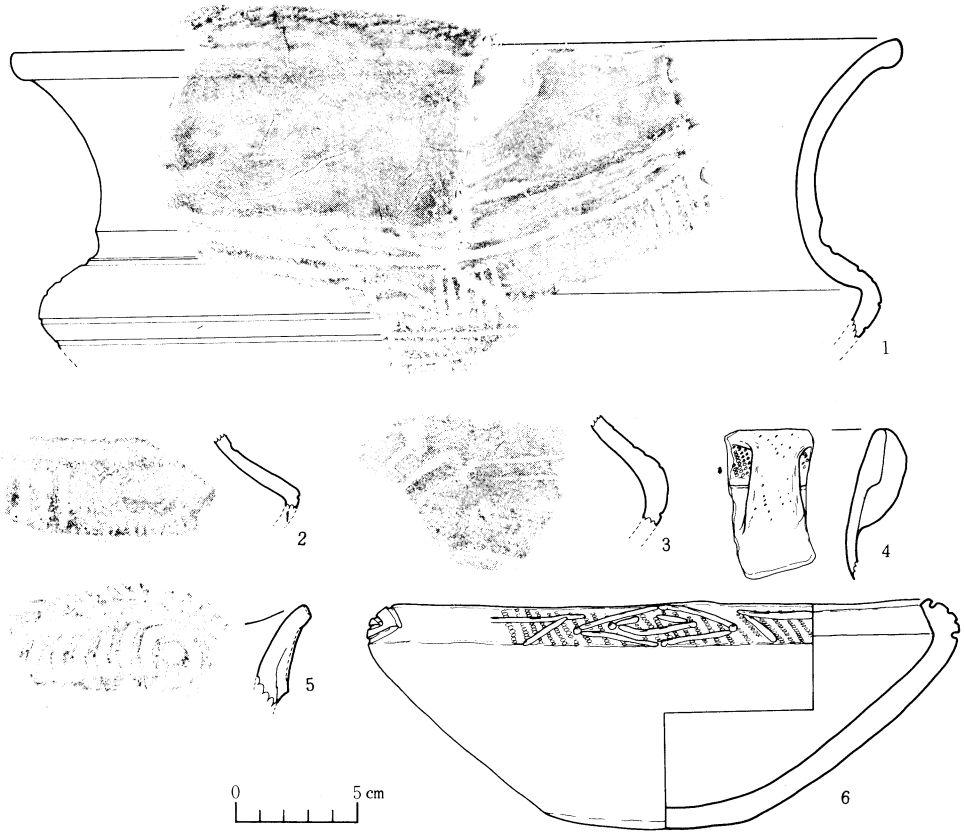
外川江遺跡出土の遺物には，主体を占める弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての夥しい量の土器のほかに縄文時代後期・晩期，弥生前・中期，土師器，須恵器や小型仿製鏡，ガラス小玉，土製勾玉，石包丁，磨石，タタキ石などの石器も出土した。

1節　縄文時代

Ⅳ層を遺物包含層としたB～D－25・26区に分布は限られている。5類に大別した。

Ⅰ類（第6図－1～4）

1は復元口径36.8cmを計る精製の鉢形土器である。口は開き頸部がしまり胴部が張る。口縁部は玉縁状に肥厚し擬似縄文が施される。頸部はやや長く無文で，頸部と胴部の境には太型の押線文が廻り明瞭な段を有す。胴部上位と下位には沈線文とその間に弧文・縦線文が施され，貝殻腹縁の刺突による擬似縄文がつけられる。胎土は黒曜石片・角セン石を含む。焼成は良好，色調は暗灰色を呈す。2・3は擬似縄文を施す胴部片である。全体的に磨耗をうけている。3の内面は横位に篦調整痕を残す。4は口唇部から口縁部にかけて単純な橋状把手を有し，把手



第6図　縄　文　式　土　器（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類）

と口縁部には貝殻腹縁による擬似縄文が施された深鉢形土器である。頸部はしまり外反気味の口縁部となる。1～3は北久根山式第二類，4は第一類の比定されよう。

Ⅱ類（第6図－5）

山形口縁で口縁部は外反する。口縁部下は貼付によって稜が生じている。口唇部には刻目文様口縁部には同心円文と弧文を施文する。胎土は石英を多量に含む。焼成は良好。色調は灰色。瀬戸内系の津雲A式類似の土器か。

Ⅲ類（第6図－6）

6は口径22.1cm，高さ8cmの鉢型土器である。口縁部は「く」の字形に内行し，胴部はわずかに丸味を帯び丸底気味の平底となる。器壁は比較的厚い。口縁部には略菱形文と長線・短線文を施し磨消縄文を有す。全体的に磨耗が著しい，西平式土器がある。

Ⅳ類　口縁部の形状に若干の相異がみられ，2つに細分した。

Ⅵa類（第7・8図－7～30）

口縁部は外反し，頸部はわずかにしまり，胴部はふくらむ鉢形土器である。口縁部は幅広く充実し，断面は略三角形に肥厚する。口唇部は平縁となる。文様は口縁部に雑な箆書き沈線文8～22や据歯文23，斜行短線文17を施すものや口唇部には刻目文8・11～13・21・26を有すものがある。24・25・27～30は無文。

Ⅵb類（第8図－31～34）

口縁部は幅が狭く弱く肥厚する。頸部はわずかにしまり外反する口縁部を呈す。31は口唇部に低い凸起を有す。口縁部には浅い沈線文，内側の凸起下位には2本の短線文を施す。頸部には円孔が穿かれている。32・33の口縁部には弱い斜行の刻目文がみられる。34は山形口縁で頸部がしまり，外反する口縁部である。山形の頂部には押圧文，口縁部には2本の沈線文と内側口縁部にも短線文を2本施す。頸部に円孔が穿かれている。Ⅵ類の胎土は石英・角セン石・砂粒を含む，焼成はやや軟弱，色調は赤褐色Ⅵ類土器は市来式土器に先行する松山式系の土器と思われる。

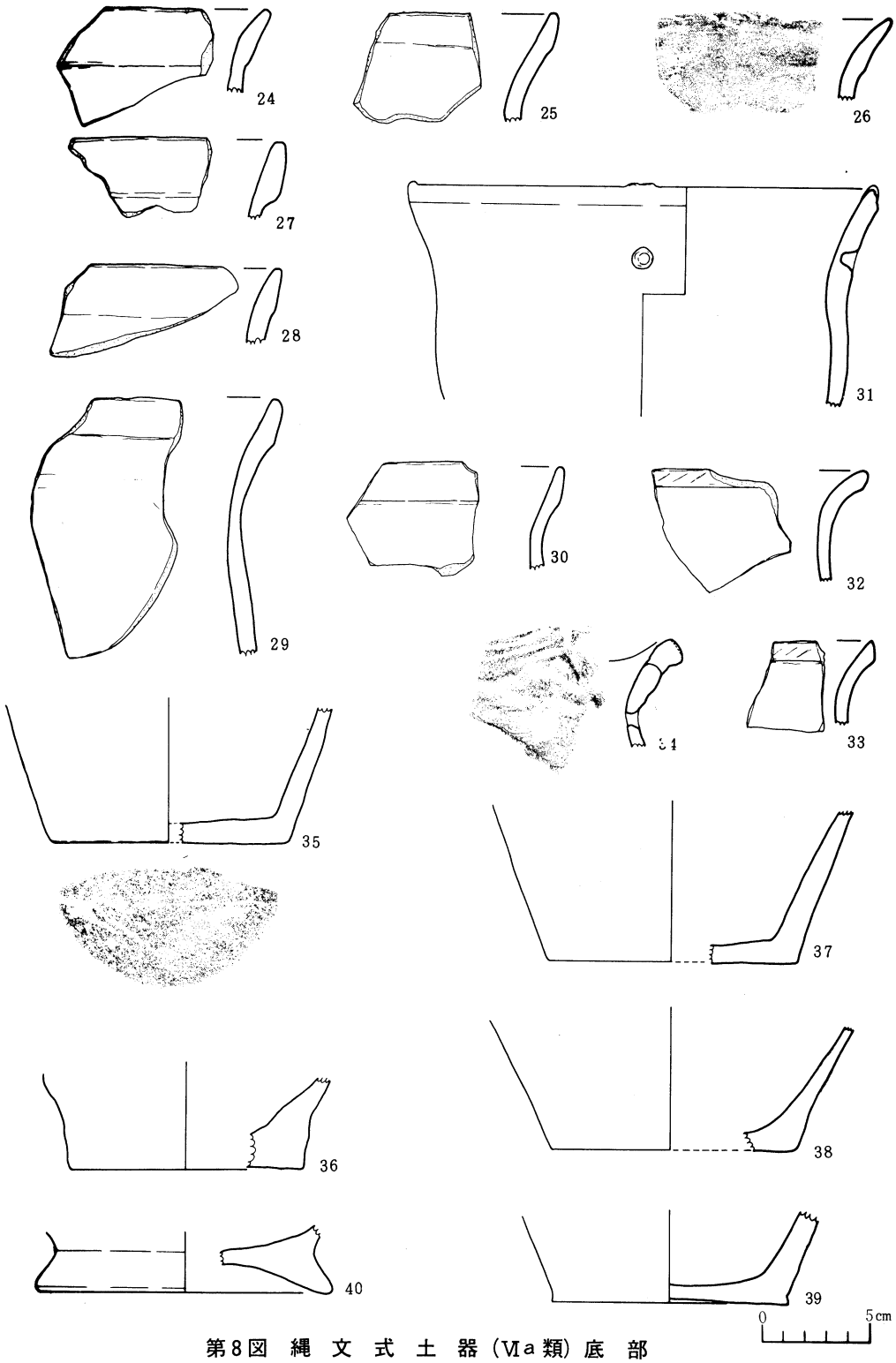
底部（第8図－35～40）

35～38は平底で39はわずかに上げ底，40は外開きの低い脚を有す。35は外低部に木葉の圧痕がみられる。

台付皿形土器（第9図－41～53）

41は台付皿形土器の皿部片である。外開きで直行する口縁部である。口唇部は平担で，小型の貼付凸起を付し刻目文を施す。内側には横・縦に短線文と連点文を施す。短線の両端は強く刺突する。胎土は石英や小礫を含む。焼成は良好。色調は赤褐色を呈す。42～51は台部で充実外開きとある。外底部が上向きになるものと，水平になるものがみられる。胎土は砂粒を多く含む。焼成はやや軟弱。色調は赤褐色を呈す。

第7図　縄　文　式　土　器（Ⅳa類）



第8図　縄　文　式　土　器（Ⅵa類）底　部

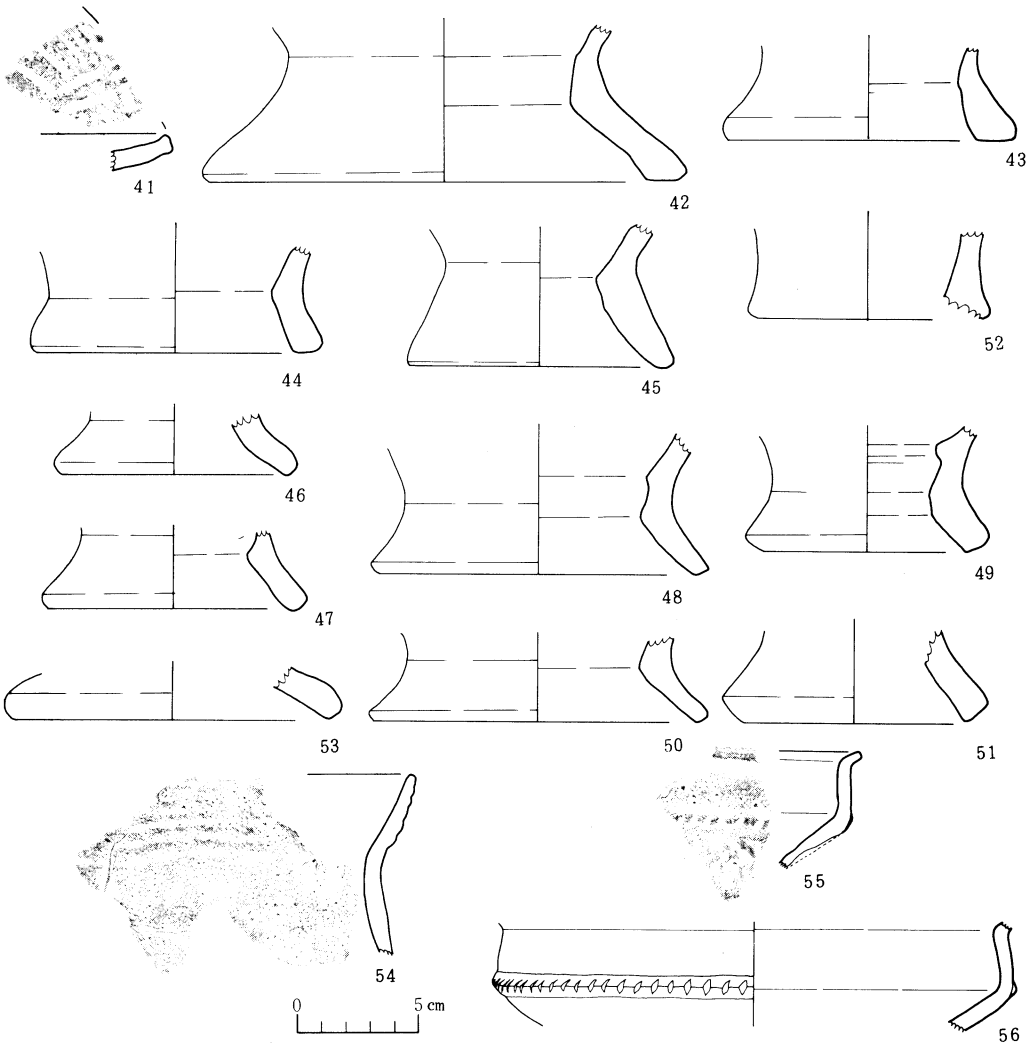
Ｖ類

Ｖａ類（第９図―54）

頸部がしまり「く」字を呈し外開きの口縁部の深鉢形土器である。口縁部には５～６条の浅い沈線文を施す。胎土は石英や小礫を含む。焼成は軟弱。色調は明褐色を呈す。晩期Ⅲ式土器。

Ｖｂ類（第９図55・56）

頸部は「く」の字状に析れ，内外に明瞭な稜が付く。口縁部は垂直に立上り，さらに口縁端部で外析する浅鉢形土器である。口唇部は平縁を呈す。頸部には貼付凸帯に刻目を有す。全体的に磨耗を受けている。胎土には石英を多く含む。焼成はやや軟弱。色調は灰色を呈す。晩期Ⅱ式に相当する。



第９図　縄　文　式　土　器（器台・Va・Vb類）

2節　弥生時代～古墳時代

A．甕形土器　大別して5類に分類した。

Ⅰ類（第13図，57）

口縁部は直行し，口縁端部と口縁下に断面三角形の貼付凸帯を施す。口縁端部凸帯は浅い刻目を有す。弥生時代前期の在地系の高橋Ⅱ式に属すると考えられる。

Ⅱ類（第13図，58～69）

破片のため全体の形状は不明であるが，口縁部は逆L字形を呈し，口縁部の上面に平担面をつくり，その面が水平・やや上向き又は口縁端が下り気味となるものがある。口縁部は弱い鋤形を呈し明瞭な稜が付く，69は充実した甕形土器の底部である。弥生時代中期中葉の土器と思われる。

Ⅲ類（第13～23図，70～179）

本遺跡の主体をなすものである。口縁部は大きく外反し，胴部はやや膨らむものとそれほど張らずになだらかに底部へつながるものとがある。脚台を有し，高さも低いものから大きく裾広がりになるものまである。胴部には突帯を付さないものである。時期を細分することはできず，ここでは弥生後期～古墳時代として取り扱うことにする。器面は荒れているものが多いが，刷毛目による調整が随所に見られる。口縁下内面に稜をもつものがほとんどである。

75は胴部最大径が胴部のやや上位にあり，割合に締まった頸部から直に外反する。底部は中程度の上げ底で裾広がりとなる。84は胴部最大径が口縁径より大きく，胴部の中程にあって，高く割合薄い脚台は裾が広がり，体部は全体的に傾く。88・89・91は体部の割に脚台が小さい。91は体部が傾き，脚台の開きはほぼ直である。73は口縁部が断面構円形状に肥厚し，内面の稜が極めて明確である。78は口縁部から頸部，胴部に至るラインがなだらかなS字状を呈し，口唇部が丸味を帯びる。95～103は胴部が丸味を帯び，外見上は球状に近い形を呈する。111は頸部から直立気味に小さく外反し，頸部直下に最大径があり，底部へかけてはほぼ一直線に下る。115～121は胴部の張りがほとんどなく，頸部から一担直気味に下りた後に，底部に一直線に下る。外見上は逆三角形或は倒卵形状を呈する。127は器壁薄く，高い脚台がスラリと広がる。129は縦長であるが脚台は割合に低く，口縁部は若干立ち上り気味に外反する。133～170は割合に小型のものである。134は深さの割に口縁部が長く，高い脚台はスラリと広がる。137・142，143は脚台が低く，直に広がる。148・149・153～155・159・160の口縁部はわずかに先端部のみが外反するだけである。152と160は鉢形土器Ⅰ類（脚台をもつもの）に類似する。178・179も鉢形土器に近い。156は壺形土器に類似するが，底部に脚台の貼り付け痕が残る。167・171・177の口縁部は大きく外反する。172～176は高さ11cm内外で，小型土器である。底部について眺めてみると，全体的に中～高位の脚台を有するものが多いと言えそうである。

Ⅳa類（第24～27図，180～201）

Ⅳa類の器形は，頸部は若干しまり「く」字形を呈した外開きの口縁部となる。頸部裏面に

は弱い稜線が付されるが張り出しは見られない。胴部は外側に膨らむ。頸部付近には三角凸帯が廻り，二重口縁状を呈している。「く」字口縁には外開きの著しいもの（180～200），やや外開するもの（201～208）がある。三角凸帯にも大小がみられ，口縁径より外に突出た大型の（230～233）や小型の凸帯がある。口唇部・三角凸帯端部は平担に仕上げる傾向にある。全体的に磨耗を受けているが，器面には太目の刷目痕が残る。胎土には石英粒・小礫粒を多量に含む。焼成は良好。色調は赤褐色を呈している。

180は口径47.4cm，高さ59.5cmの大形甕形土器である。頸部がしまり「く」字形口縁で，頸部内側には弱い稜線がみられる。胴部は丸味を呈し最大径が上位にある。底部は丸底である。頸部の直下に口縁径より外に突き出た充実した三角凸帯が廻る。磨耗が著しく調整痕は不明。

Ⅳb類（第28図，209～217）

頸部はしまり「く」字形に外開きする口縁部である。胴部はⅣa類より丸味が著しい。頸部の内側には明瞭な稜が付く。頸部には小型の刻目凸帯を廻らす。口唇部は平担となる。器面には太目の刷毛目痕が残る。

Ⅴ類（第29図，218～236）

外面に叩き目を有するもので，胴部はやや膨らんで頸部が多少締まり，中には段を有するものもある。口縁部は外反し，口唇部は丸味を帯びるものと角張るものとがある。叩き目は右下りが多いが，中に左下り（221・231）もある。内面は刷毛目による調整も多いが剝離・磨耗が著しく，指頭痕の残るものもある。内側には明確な稜のつくタイプである。236は底部で，平底である。煤の付着が219・221・223・235に見られる。

B．壺形土器

Ⅰ類（第30図，237）

口縁部は逆「L」字形を呈す。口唇部上面は丸味を帯び，肥厚な口縁部となる。口縁外側端部には凹線文を施し，口唇部上面には2本の貼付け凸帯，口縁部内側にも1本の貼付凸帯を施す。復元口縁径18.2cm，摩耗が激しい。内面はナデ整形。胎土には石英や小礫を多量に含む。

Ⅱa類（第30図，238～242）

肩部～頸部にかけて断面三角形の貼付け凸帯を有す土器である。肩部と頸部の接合部はゆるやかにカーブし直口気味の頸部へと移行する。接合部に2～3本の貼付け凸帯を施す。器面は篦磨き調整で支上げる。241にはかすかに丹塗りの跡が残る。

Ⅱb類（第30図，243・244）

口縁部が大きく開き櫛描き文様を有す土器である。口縁部のみで詳細は不明である。口縁部は大きく外反し，口唇部は平担に支上げ，口唇端部をわずかに引き出す。口縁部外側に浅い凹線がみられる。口縁内側には波状の櫛描文・口唇部の平担部には雑な浅い刻目文を施す。ナデ整形。302は口縁端部の上・下を引き出す。口唇部には波状に櫛描文を施す。器面はていねいに太目の刷毛目調整が施される。

Ⅲ類（第31～35図，245～296）

本遺跡の主体をなすものである。胴部及び頸部に突帯をもたない。245～279は口縁部が外反し，それほど長くはない。頸部は割合締まり，卵形或は球形の胴部を有し，平底及び尖底気味の丸底である。内面口縁部下にゆるやかな稜をもつものがほとんどである。280～293は口縁部が長く，ラッパ状に外反し，器壁も厚く，大型の壺形土器と思われる。294は大型壺の肩～胴部にかけてである。全体的に，器面は剝離・磨耗しているものが多いが，刷毛目調整がほとんどである。

245はゆるやかに締まった頸部から立ち上り気味に伸びた口縁部が中位より外反し，胴部は球形に近い。内面口縁下に明確な稜をもつ。不安定な平底である。247は頸部からすぐに大きく口縁部へ外反し，算盤玉状の楕円形の胴部に不安定な丸底，246・249・250はよく締まった頸部から口縁部がほぼ直に外反し，卵形の胴部，丸底気味の平底をもつ。248は胴部が間のびし，底部が肥厚する。251は口縁部が立ち上る。255及び256は胴部は共に球形であるが，口縁部が前者は頸部からすぐに大きく外反しているのに対して，後者は直に立ち上ったあとで外反する。258は楕円形の胴部にラッパ状の口縁部を有し，尖底気味の丸底である。268～278は大きく外反した口縁部とよく締まった頸部をもち，ナデ肩で胴部へ下る。283はラッパ状に開く口縁部の中でも特に大きく，頸部から立ち上り気味に外反し，上部で大きく外反する。285～294の大型壺形土器の中には，Ⅳ類の297～300のように胴部に突帯の付く大型のものもあるかも知れない。また，大型の壺形土器まで含めて，安定した平底から尖底気味の丸底まで各種見られる。

Ⅳ類（第36～39図，297～344）

肩～胴部に1～3条の貼り付け突帯を付すもので，刻み目の付くものと全く付かないものがある。301～328は1条の突帯を有する。320・323～328は突帯に刻みの付かないもので，306は半円形，320・323・324は三角形，325・327・328は台形，326は台形に作ったものの中央に逆三角形の凹線を入れたものを突帯としている。刻み目を有するもののうち321・322は幅広の突帯を巡らし，前者は板目を縦に付し，後者は布目で斜格子状に付す。301～305。307～319は半円形や三角形の幅の狭い突帯に篦先や布目による刻みを付すものである。器形は口縁部が大きく外反し，それほど長くない点はⅢ類とほぼ同様であるが，胴部が倒卵型を呈するものが多い点で異なる。301は胴部最大径のやや上位に篦先による刻みを施した突帯を巡らす。304は最大径付近に同様に巡らし，尖底気味の丸底である。307は口縁部が短く，直立気味に外反する。319は高い三角形の突帯に浅い刻みを入れる。329～338は2条，339～344は3条の突帯を有するが，刻み目の付し方は1条のものとほぼ同じである。330は刻み目を有しない。333は2条の台形状の突帯をつないで布目圧痕を付す。339は刻みの間隔が他に比して著しく狭い。

297～300はそれらの中でも割合大型の器形である。297と298は2条の刻み目のない突帯である。298は倒卵形で平底気味の丸底である。299と300は刻み目を有する1条の突帯で，

何れも丸底気味の平底である。300は突帯部分の上方がU字状で短く下方が直で長い三角形状の断面を呈し，刻み目を有する。前畑遺跡[註11]の表採資料に類例が知られる。

V類（第40図，345～353）

外面に叩き目を有するもので，345～347は口縁部及び頸部，348以下は突帯を有する胴部である。345は外反する口縁部をもち，端部はやや丸味を帯びる。大きく締まる頸部からナデ肩で胴部に至る。内面にはゆるやかな稜をもつ。346は肩部が丸味を帯び，347はナデ肩である。348は2条のカマボコ状の突帯に篦によると思われる刻みを付す。349と350は太い1条の突帯に布目圧痕を深く刻し，351と352は1条の突帯に前者は篦状の施文具で刻みを入れ，後者は叩き目を入れる。353は突帯部分を欠損するが434と同一と思われる。

Ⅵ類　複合口縁壺で口縁部の形状から2つに分類した。

Ⅵa類（第41図，354～362）

内傾する頸部から急に開き，拡張部が大きく内傾する比較的高い口縁部となる。胴部はやや張る胴長卵形を呈す。口唇部は平担に仕上げる。362は口縁端部を外方に少しつまみ出し丸く仕上げ，口縁部は外傾する口縁部となる。354～356の口縁端部には刻目文を施す。全体的に磨耗をうけているが，器面調整には口縁部は横ナデ，口縁端部以下は縦・斜めに刷毛目，内側は横位の刷毛目整形が施されている。354は口径14.6cm，器高34.3cmを測る。口縁部は内傾し，胴長卵形を呈し丸底気味の平底となる。口縁端部に刻目文を有す。器面は刷毛目調整。

Ⅳb類（第42図，363～374）

Ⅳa類の口縁部より短かいもので拡張部は比較的小さく，内傾内湾する口縁部である。口縁端部は丸味を帯びる。全体的に器壁も薄い傾向にある。446は口径12.5cm，器高は復元高で約33.5cm。頸部から口縁にかけての拡張は小さく内傾内湾の短かい口縁部である。胴部は卵形を呈し，丸底気味の平底となる。

Ⅶ類（第43・44図，375～393）

櫛描文や篦書文・重孤文を有する壺形土器である。器形は，頸部がしまり胴部は大きく張り出し丸味を呈す。384・388は胴部最張部に刻目凸帯を施す。文様帯は肩部と胴部にあり，肩には数条の平行沈線文・胴部には平行沈線文や重孤文を描く。平行沈線文は篦を用いていねいな太線（375～377，383・358）や細線（378・383・384・386・387）を施す。重孤文は篦書きの（375・378～382・384）や櫛書きの（383）がある。383は肩部に5条の平行篦書き凹線文と下方に10条の櫛描文，胴部上位に平行櫛描文と上位・下位に櫛描きによる重孤文が施文される。384は胴部に2条の刻目凸帯を有し，上位に櫛描平行沈線文と篦書きの重孤文を施す。386・387は櫛描平行沈線文と櫛描波状文の組合せによる文様がていねいに付されている。その他，389～392は同一個体と思われるが，肩部から胴部に篦を用いて2本の沈線文と，その中に斜行の短線文や曲線文・直線文によって幾何学文様を描いている。476は篦書き沈線文を施す。

Ⅷ類（第45・46図，394～419）

頸部は筒状に細長い長頸壺形土器である。胴部は取張部で「く」字形に折れソロバン玉状を呈し明瞭な稜が付くのが一般的であるが，丸味を帯びた402・416もある。口縁部はゆるやかに外反し，口唇部は鋭がり気味の394と平担に支上げる395がみられる。底部は小さな平底を呈す。肩部には篦書き櫛描きによる数条の平行沈線文，体部には篦書きの重弧文を施す。397は胴部径22.5cm，底部は径1.3cmの小さい平底。頸部から上位は欠損しているが体部の高さは約19.6cmと比較的間延している。胴部は「く」字形を呈す。肩部から体部中ほどに17条，体部最上部上位に3条の篦書平行沈線文帯を有し，上・中・下には縦に刻目を施す。沈線文帯の中間には上向きの篦書重弧文を付す。402・403は重弧文が2段に，415は小型の重弧文を3段に，414は縦に据歯文を施す。416は櫛描平行沈線文のみである。418～420は無文の長頸壺である。420は円塗り土器となる。

Ⅸ類（第47・48図，420～450）

小型のものである。口縁部は短く外反し，頸部が締まる。胴部は最大径が頸部直下にあって底部にかけてほぼまっすぐにすぼまるもの（420），ナデ肩を呈し最大径が胴部下位にあるもの（427・431・434），頸部からなだらかに底部へつながるもの（429）などのほかは，胴部の中心部付近に最大径を有する。縦に長いもの，横に広いものなどのバリエーションが見られる。底部は平底（422・428・440～446・450）から不安定な平底（420・439），若干上げ底のもの（423），丸底（421・447～449）がある。420と424・435は割合に口縁部が長く，大きく外反する。421・425～427は極端に短い口縁部を有し，425は直口，427は頸部に2個の孔を有する。焼成良好なものがほとんどである。

Ⅹ類（第48図，451～453）

小型の丸底壺で，坩である。451は完形品で丸い胴部から頸部で一担小さく締まり，口縁部が長く立ち上がる。452は頸部近くに最大径があり，すぐに底部にすぼまる。453は胴部ほぼ中央に最大径を有し，丸味をもって底部へ下る。全て焼成良好である。

C．鉢形土器（第49～53図，454～571）

若干上げ底を呈するものまで含めて脚台を有するものをⅠ類，そうでないものをⅡ類として分けて説明を行う。

Ⅰ類（第49～51図，454～502）

種々の高さの脚台を有するもので，図では高いものから低くなるものへと配列してある。脚台がそれほど高くないものは，本体との接合部に指頭痕を残すものが多い。内面は刷毛目による調整のなされるものも多い。器形は，脚台の高いものの口縁部は内彎する傾向が認められ，逆に低いものは直口及び外反するものが多く，中位のものは様々である。脚部の広がりについて見ると，裾の広がるものと直に下りるもの，内向気味になるものなどあり一定しない。454は内彎する口縁部に深い体部をもち，脚台も高く裾は若干広がる。455は内彎する口縁部は同様であるが，体部がそれほど深くない点，高い脚台の裾が大きく広がる点で454とは異なる。

461は高い脚台の裾部に孔を空けており，高坏に似る。456は口縁部が大きく内傾し，体部が深く，コップ状を呈する。483も直口するものの体部が深い。498と499は口縁部が大きく外反し，一見高坏風である。全体的に体部の深さに対して口縁径が大きく，横広のものが多いといえそうである。

Ⅱ類（第51～53図，503～571）

底部が上げ底にならないもので，肥厚して平底となるものや丸底，尖底気味の丸底のものがある。口縁部は一直線に広いV字状に広がるものが大部分であり，中に内彎・外反するタイプのものも見られる。磨耗しているものも多いが，器面調整は刷毛目によるものが多いようである。総体的にⅠ類と同様横広のものが多いが，尖底気味の丸底を呈するものは縦長のものがほとんどである。517・518はマリ型を呈し，口縁部は内彎，底部は肥厚した平底である。それらに類似するもので512は器高がやや高く，521・523・531は内彎しない。519は内彎する口縁部に高い器高で安定した平底である。548は口縁部が外反し，底部の整形は粗雑である。553～570は口縁径に比して器高が高いV字状を呈するものである。553は重なって出土したもので，間に粘土が固着する。尖底気味の丸底で，形状はほとんど同じであるものの，内側のものが外側のものに比べて作りが若干粗雑である。571は脚台のない甕形土器に類似し，口縁部が長く外反するが底部は平底である。

D．高坏（第54～57図）

Ⅰa類（第54図，572）

脚は比較的低く裾部がゆるやかに広く，坏部の口縁部は「く」字形を呈し，短かく平担となる。口縁部内側端部は弱い鋤形口縁となり明瞭な稜が付く。口縁径23.5cm，高さ17.1cm，底部径12.2cm，器面は太目の刷毛目調整で支上げる。

Ⅰb類（第54図，573～578）

坏部の形状はⅠa類に類似するが，口縁部がやや長くなり，外側口縁部はゆるやかに外析反転するは体部が内行し「く」字形に析れ内側口縁端部には明瞭な稜が付される。573は口縁径29cm，高さ22.3cm，底部径36.4cm，脚部は高く裾部が若干引き出される。口縁内側は横位，内面や外面は縦・斜めに刷毛目を施す。

Ⅱ類（第55図，579～587）

基本的にはⅠb類に類似し，口縁部は体部から大きく外折反転し，内側に屈折部がみられる。587を除き大形の高坏である。全体的に摩耗が著しい。

高坏脚部（第56図，588～628）

脚部には大型・小型がある。形状は裾部がゆるやかに外開きする588～604・620～626や裾部が屈曲し弱い稜線を施し直行する610～612・615，裾部が屈曲し内湾する613・614・616，筒形の柱脚で裾部が屈曲する617・619がある。又，593～627には円形の透孔が穿たれ，4孔を等間隔に穿つが，616には3孔，606・608・609・596は5孔，598は6孔，599には上下2段に4孔づつを各々穿っている。620～626の脚部上位の坏部との接合部に3～4条の凹線

文が施されている。703は高坏Ⅰ・Ⅱ類とは坏部に形態の違がみられ，坏部は椀形となる。

E．蓋形土器（第58～60図）

Ⅰ類（第58～60図，629～657）

高坏の坏部を思わせる。口縁径の長さに比べ高さが低い。口縁径が33.0cm～22.1cmの大型のもの（629～653）と20.8cm～14.7cmの小型のもの（654～657）がある。頂部は丸く，裾部で「L」字形に屈折し内側に明瞭な稜が施される。裾部は長い。裾部端部は平担に支上げる。器面は刷毛目調整が施される。大型の蓋は甕甲のものと思われる。

Ⅱ類（第60図，658・659）

笠形をした小形の蓋である。741は頂部はややくぼみ，体部は直口し，裾部でわずかに屈折する。742は平担な頂部で，体部から直行して裾部へ移行する。いずれも器壁に比べ頂部が肥厚する。

蓋形土器が多量に出土したことは本遺跡の特徴ともいえる。

F．手捏ね土器（第61・62図，660～749）

指頭圧痕の顕著な土器でミニチュア土器である。748と749はミニチュアとは呼び難いが，鉢形土器の中でも指頭圧痕が器面全体に残り，その他の調整がなされていないことからこの類に入れた。

660～688は脚台を有するもので甕形土器（一部鉢形土器もある）を模したものと思われ，689～743は鉢形土器，744～747は壺形土器をそれぞれ意図して作ったと思われる。ほとんど左右対称とはならず，口唇部も波うつものが大部分である。

G．器台（第63図）

Ⅰ類（750・751）鼓形器台の系譜をひくもので，750は上端，751は両端を欠落しているが，上端と下端がほぼ同形の形状を呈していると思われる。750は復元高24.6cm。両裾部が弧状に開き下端は平担に支上げる。体部の上位・下位に直径約23cmの円形透しを交互になるように4個づつ穿っている。器面は太目の刷毛目で支上げる。胎土には石英粒や小礫粒を含む。焼成は良好。色調は赤褐色を呈す。751は両端を欠く。上端のくびれが著しい。体部の上位・下位に交互に円形透しを穿つ。全体的に摩耗が著しくザラザラしている。胎土には小礫を多量に含む。焼成はやや軟弱。色調はレンガ色を呈す。

Ⅱ類（752）小型で外形は鼓形を呈すが，受部と脚部からなる。受部と脚部は同様な形状を呈し外開きとなる。器壁は比較的厚い。受部は径10cm。脚部には円形透しを穿つ。

Ⅲ類（753，754）小型の高坏模造品を思わせるが小型器台としてとらえた。Ⅱ類と同様に受部と脚部からなる。脚部の裾は大きく外開きとなる。753の受部の口縁は内湾気味で口唇部は三角形に尖がる。受部径7cm。両者ともに器壁が薄く，ていねいに支上げる。

Ⅱ類・Ⅲ類は微細な粘土を用い，焼成はやや軟弱で，色調は灰色を呈す。

H．ジョッキ形土器（第64図，755～760）

755～759の胴部は内傾し外側に反る。上位は欠落しているため不明。底部径は胴部径より

大きくなる。器壁は全体的に薄い。758，759の胴部と底部の接合部には指頭痕がみられる。758，759は刷毛目で支上げる。843は平底で胴部は若干外開きを呈し外底部は丸味を帯びる。755～760の胎土は石英，長石を含む，758と759は銀雲母も含まれる。

I．特殊土器（第64図，761～774）

761～763は体部に据歯状の線刻文を施す甕形土器である。765・760は格子目文。767は羽状文を施す鉢形土器，764は体部に篦による刻目文を施す壺形土器である。768は口縁径11cmの小形の甕形土器で充実した逆「U」形の橋状肥手を有す。769・770はたこ壺様の土器で仕上げは雑なものである。771～773は底部に小型の突起を有す椀形土器である。胴部は丸く直口する口縁部となる。771は口縁径10.6cm，高さ5.8cm，772は口縁径8.8cm，高さ3.8cmを測る。胎土は細砂を含み，焼成は良好，色調は灰色を呈す。774は甑の取手と思われる。

J．杓子形土器（第65図，791～813）

杓子型を呈するものである。U字型の深い体部に直立気味に柄部を付け，パイプ状となるもの（791～793）と割合に浅い体部に斜め上方～ほぼ直に柄部を設けるもの（794～809）の2つのタイプに大別できる。810～813は柄の部分であるが，ほとんど後者に属すると思われる。791は前者のタイプの中でも大型のもので，柄部が若干ねじれる。792と793はミニチュア的である。後者のタイプには体部の口径が大きいものが多く，柄部は長短見られる。胎土・焼成共に他の土器と変わるものではない。本遺跡の主体をなす成川期のものと考えて大過ないであろう。類例は萩原遺跡[註12]・成岡遺跡[註13]などに知られる。

K．土製勾玉（第64図，775）

B－11区より出土した。現存の高さは5.8cm，断面は略方形で1.8cmを計る大型の土製勾玉である。末端は欠落している。丁字に孔を穿ち，丁字頭は丸味を呈し，縦線を陰刻する。全体が摩耗を受けている。胎土は石英や小礫粒を多く含む。焼成は良好。色調は明褐色を呈す。

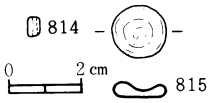
L．土錘（第64図，776～786）

776・777は胴ぶくらみを呈し，778～780は管玉状の細い土錘である。781～786は双孔棒状の土錘である。この種の土錘は前者に比べ大型である。胎土は細砂を含み緻密である。

M．土製円板（第64図，787～790）

土器片を用い，周囲を打ちかき，磨って円板状に仕上げる。893はススが付着している。

N．ガラス製小玉（第10図）



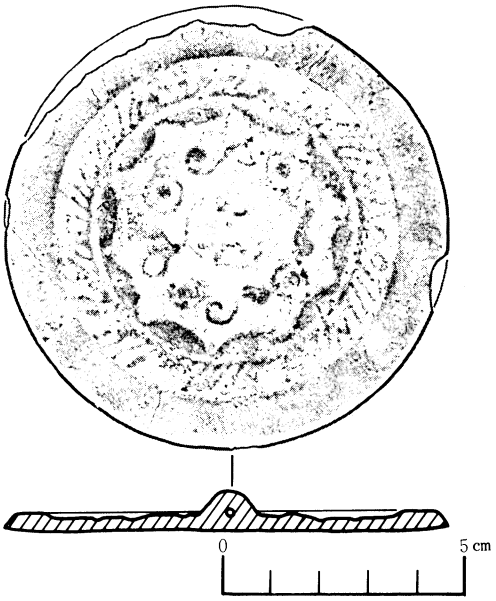
第10図
小玉（ガラス製）

814はR－12区から出土した。長さ5mm，幅3.5mmで細い管玉状を呈し，穴が穿かれている。ガラスは青色に透通り，一部細かい気泡を生じている。815はP－4区から出土した。直径1.5cmで円形の小玉である。厚さは5～4mmを測る。片面は平担で，もう一方は凹みがみられる。薄い青色の透明なもので気泡がみられる。両者ともに亜鉛ガラス製と思われる。

O．小形彷製鏡（第11図）

E－25区のⅥ層上部から出土した。周辺には土器片が散在していた。

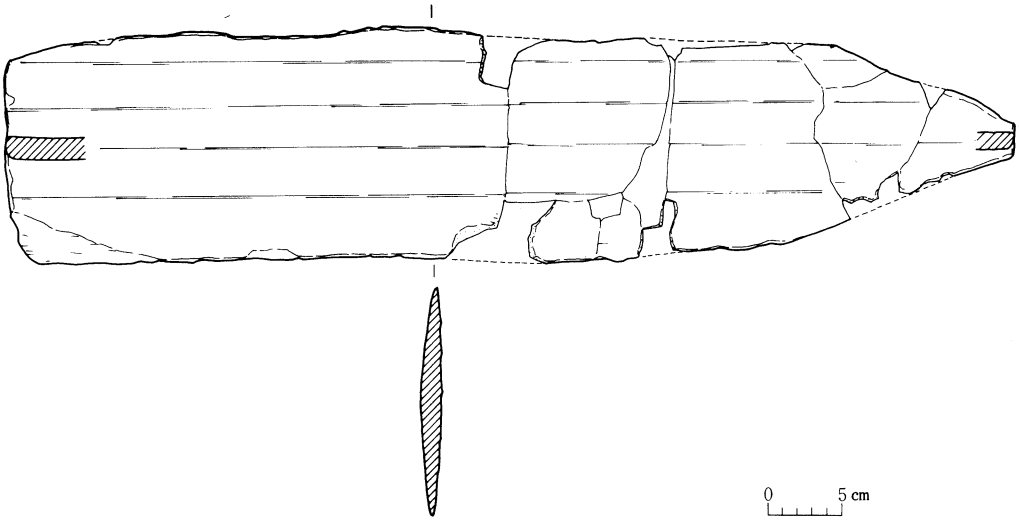
面径 9.1 cm，厚さ 4 mmを測る。鏡面の端部はわずかに反る。一部縁を欠いているが幅 1 cmの平縁である。平縁の内側には右上りの斜行櫛歯文帯を配し，一圏の内側に半月形浮彫状の内行10花文帯，その内側には等間隔に 4 個の「S」字状文を浮彫させ，間には円圏を有す四乳文を配す。紐の周囲には円圏が付される。全体に型くずれや鋳ながれが認められる。小形内行花文彷製鏡第Ⅱ型 a 類に属すると思われる。



第11図　小形彷製鏡（内行花文S字状文鏡）

P．木器（第12図）

P－23区のⅣ層から出土した。丸太の縁を縦切りしたもので片面は弧状を呈し，もう一面は平坦に仕上げる。腐蝕をうけているため工具の調整痕は不明である。全長65cm，巾15.4cm，厚さ 1.5 cmを測る。基部両端は長さ14cm，巾 5.8 cmの切り込みが施こされ，幅 2.3 cmの頂部となる。用途や材質は不明。



第12図　木　　器

土器一覧表(1)

番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調
57	變I		砂粒	やや粗	暗褐	108	Ⅲ	N-23-11Ⅳ	砂粒	普通	灰褐	159	Ⅲ	P-21-3	角閃石	良好	淡紫褐
58	Ⅱ	D-27	角閃石	良好	黄白	109	〃	P-11-5Ⅳ	角閃石，長石	良好	灰紫	160	〃		長石，角閃石	良好	淡灰褐
59	〃	C-27-11	砂粒	やや粗	灰褐	110	〃	R-11-3Ⅳ	石英，角閃石	良好	淡赤褐	161	〃	S-11-15Ⅳ	砂粒	普通	暗褐
60	〃	B-27 Ⅳ	砂粒	やや粗	〃	111	〃	R-10-2Ⅳ	長石	良好	暗褐	162	〃	E-25-9Ⅲ	石英	良好	暗褐
61	〃	I	角閃石，雲母	普通	褐	112	〃	O-10-18Ⅳ	石英，長石	良好	灰暗褐	163	〃	N-20 Ⅱ	長石，角閃石	良好	暗褐
62	〃	B-27 Ⅳ	長石	普通	灰白	113	〃	P-11-10Ⅳ	角閃石，石英	普通	灰	164	〃	Q-10 Ⅳ	石英	良好	淡褐
63	〃	B-27 Ⅳ	長石	良好	明褐	114	〃	D-26-15Ⅳ	角閃石	良好	暗褐	165	〃	Q-12-1Ⅳ	角閃石，石英	良好	明褐
64	〃	B-27 Ⅳ	長石	良好	〃	115	〃	Q-12- Ⅳ	石英，角閃石	やや粗	赤褐	166	〃	O-10-$^{19}_{24}$Ⅳ	石英，長石	良好	淡黄褐
65	〃	D-28 Ⅳ	石英	良好	黄褐	116	〃	P-21-7Ⅳ	角閃石，砂粒	良好	黒淡・暗紫	167	〃	Q-20-5Ⅳ	角閃石，石英	良好	灰褐
66	〃	Q-21-1Ⅳ	角閃石	良好	灰	117	〃	S-11-18Ⅳ	砂粒	良好	褐	168	〃	Q-12-2	石英，角閃石	良好	淡黄褐
67	〃	P-22 Ⅳ	雲母	良好	灰褐	118	〃	E-25 Ⅳ	砂粒，雲母	粗	暗褐	169	〃	Q-12-2	長石，角閃石	普通	淡灰
68	〃	Q-12-4Ⅳ	角閃石	良好	灰	119	〃		石英	良好	灰褐	170	〃	E-6-13Ⅲ	石英，雲母	良好	灰褐
69	〃	P-22 Ⅳ	砂粒	やや粗	褐	120	〃	B-27-6Ⅳ	角閃石，長石	普通	灰褐	171	〃	O-11-14Ⅳ	角閃石，長石	やや粗	明褐
70	Ⅲ	O-25-5Ⅳ	石英，角閃石	良好	黄褐	121	〃	D-4-2Ⅳ	石英，雲母	やや粗	橙	172	〃	E-26 Ⅳ	石英，砂粒	普通	淡黄白
71	〃	E-25 Ⅳ	長石	良好	暗褐	122	〃	B-27-7Ⅱ	角閃石	良好	暗褐	173	〃	R-12-16	長石，石英	良好	褐
72	〃	B-27-6Ⅳ	石英	良好	暗褐	123	〃	O-22 Ⅳ	雲母，石英，長石	良好	灰褐，スス	174	〃		砂粒	良好	明褐
73	〃	E-25-10	石英，砂粒	良好	灰褐	124	〃	O-24 Ⅳ	石英，長石	良好	灰褐	175	〃		砂粒	普通	褐
74	〃	E-25 Ⅳ	石英，砂粒	普通	灰褐	125	〃	P-22-8Ⅳ	長石	良好	淡灰褐	176	〃	I	長石	良好	褐
75	〃	P-12-6Ⅳ	石英	良好	淡黄白	126	〃	D-10-14Ⅳ	長石，石英	良好	淡紫褐	177	〃	Ⅳ	石英，長石	普通	淡灰褐
76	〃	E-26-15Ⅳ	砂粒	普通	橙	127	〃	R-8-15Ⅳ	長石	良好	赤褐	178	〃	Q-12-3Ⅳ	長石，角閃石	良好	褐
77	〃	D-26-8Ⅳ	砂粒，石英	良好	暗褐	128	〃	D-26-6Ⅳ	角閃石，長石	良好	淡黄白	179	〃	S-11-3Ⅳ	石英，角閃石	良好	暗褐
78	〃	B-27-1Ⅳ	砂粒	粗	橙	129	〃		石英，角閃石	良好	淡赤褐	180	Ⅳa		石英，長石	良好	褐
79	〃	P-12-$^{22}_{21}$Ⅳ	砂粒，長石	粗	褐	130	〃		石英，小礫	良好	暗褐	181	〃	P-11-25Ⅳ	石英	良好	灰褐
80	〃	O-10-15Ⅳ	砂粒	普通	淡黄褐	131	〃	D-26 26Ⅳ	石英，長石	良好	灰暗褐	182	〃		雲母，角閃石	良好	明褐
81	〃	P-11-5Ⅳ	角閃石，長石	普通	黄白	132	〃	D-26 26Ⅳ	角閃石，石英	普通	灰	183	〃	I	雲母	良好	灰褐
82	〃	Q-10-19Ⅳ	角閃石，長石	良好	黄白	133	〃	11-22Ⅳ	石英	良好	灰	184	〃	Q-21-8Ⅳ	石英	良好	黒褐
83	〃		長石，石英	良好	暗褐スス	134	〃	Q-21-7Ⅳ	角閃石，石英	良好	淡黄褐	185	〃		長石，石英	良好	明褐
84	〃	D-19-19Ⅳ	砂粒，石英	良好	淡灰褐	135	〃	Q-21-6Ⅳ	長石，石英，角閃石	良好	淡黄褐	186	〃		砂粒	普通	明赤褐
85	〃	E-7-2Ⅳ	砂粒	良好	淡褐	136	〃	P-21-10Ⅳ	長石，砂粒	やや粗	淡白褐	187	〃	P-11-23	砂粒	普通	明赤褐
86	〃	D-27-6Ⅳ	長石	良好	黒褐	137	〃	P-22-6Ⅳ	長石	良好	淡灰	188	〃	P-12-12	砂粒	普通	白褐
87	〃	R-11-3Ⅳ	砂粒	良好	灰	138	〃		石英	良好	灰褐	189	〃		砂粒	やや粗	明白褐
88	〃	P-12-22Ⅳ	砂粒，長石	普通	淡明褐	139	〃	S-11-6Ⅳ	長石	良好	淡灰褐	190	〃		石英	良好	明褐
89	〃	Q-11-22Ⅳ	石英	良好	淡灰褐	140	〃	E-26-22Ⅳ	長石，石英	普通	褐	191	〃	R-36-11-24	石英	やや粗	明褐
90	〃	E-25-19Ⅳ	長石，角閃石	良好	灰褐	141	〃	O-22-23Ⅳ	石英，砂粒	普通	淡黄白	192	〃	Q-21-13Ⅳ	石英，長石	やや粗	黒灰
91	〃	Q-10-25Ⅳ	砂粒，長石	良好	赤褐	142	〃	S-11-6Ⅳ	石英，長石	良好	淡灰褐	193	〃		石英，角閃石	やや粗	白灰
92	〃	E-25 Ⅳ	雲母，角閃石	良好	灰褐	143	〃	S-10-15Ⅳ	石英，長石	普通	淡灰褐	194	〃	P-12-22Ⅳ	雲母，長石	普通	黄白
93	〃	D-27-21Ⅳ	砂粒	良好	橙褐	144	〃	Q-11-3Ⅳ	長石，石英	良好	淡灰褐	195	〃	O-22-20Ⅳ	角閃石，長石	良好	淡赤褐
94	〃	E-25 Ⅳ	石英，長石	良好	淡褐	145	〃	I	長石	良好	淡灰褐	196	〃	P-12-16Ⅳ	砂粒	粗	黄白
95	〃	O-25-5Ⅳ	長石	良好	明褐	146	〃	P-11-4Ⅳ	石英，長石	良好	暗褐	197	〃		角閃石，石英	やや粗	黄白
96	〃	E-26-5Ⅳ	石英	良好	褐	147	〃	P-21-8Ⅳ	砂粒	やや粗	淡灰	198	〃		長石	良好	明褐
97	〃	D-26-10Ⅳ	雲母，角閃石	良好	褐	148	〃		石英，角閃石	良好	淡黄褐	199	〃	P-12-18Ⅳ	石英	普通	灰
98	〃		石英，長石	良好	淡褐	149	〃	D-11-19Ⅳ	長石	粗	淡明褐	200	〃	P-12-21Ⅳ	砂粒	やや粗	赤褐
99	〃	D-26-12Ⅳ	石英，砂粒	普通	暗褐	150	〃	Q-11-22Ⅳ	石英，角閃石	良好	淡黄白	201	〃	E-8-11Ⅲ	砂粒	やや粗	暗褐
100	〃	E-25 Ⅳ	石英	良好	暗褐	151	〃	E-25 Ⅳ	長石，角閃石	良好	暗褐	202	〃	Q-12-2Ⅳ	石英	良好	黄褐
101	〃	E-25-20Ⅳ	石英	良好	灰褐	152	〃	O-22-23Ⅳ	角閃石，石英	良好	灰白褐	203	〃	P-12	砂粒	やや粗	黄褐
102	〃	B-27-2Ⅳ	角閃石，砂粒	やや粗	黄褐	153	〃	P-21-3Ⅳ	石英，長石	普通	淡紫白	204	〃	R-12-18Ⅳ	角閃石	良好	灰褐
103	〃	E-25-19Ⅳ	砂粒，角閃石	普通	黄褐	154	〃	O-11-20Ⅳ	石英	普通	灰	205	〃		角閃石	良好	灰黄褐
104	〃	P-20-25Ⅳ	角閃石，長石	良好	淡灰褐	155	〃	Q-11-13Ⅳ	砂粒	やや粗	淡灰褐	206	〃	P-11-8Ⅳ	砂粒	普通	白褐
105	〃	B-26-10Ⅳ	長石	良好	褐	156	〃	S-11-6Ⅳ	角閃石，石英	普通	淡紫褐	207	〃	P-11-9Ⅳ	輝石，石英	普通	黄白
106	〃	E-6-10Ⅳ	石英	良好	淡褐	157	〃	Q-11-7Ⅳ	石英	良好	濃灰褐	208	〃	P-12 Ⅳ	砂粒	普通	黒
107	〃	O-10-5Ⅳ	長石，石英	普通	淡 褐	158	〃	O-10-10Ⅳ	砂粒	良好	淡黄白	209	Ⅳb	P-22-4Ⅳ	長石，石英	良好	黄白

土器一覧表(2)

番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調
210	甕Nb		石英	普通	暗褐	261	Ⅲ	B-26-10Ⅳ	長石，石英	普通	明褐	312	Ⅳ	Ⅰ	砂粒，角閃石	普通	褐
211	〃	P-23 Ⅳ	石英	普通	黒	262	〃	O-10-20Ⅳ	石英，長石	良好	淡灰褐	313	〃	O-24 Ⅳ	砂粒	普通	濁淡褐
212	〃	P-24 Ⅳ	石英	良好	濁褐色	263	〃	R-11-23Ⅳ	砂粒，石英	良好	褐	314	〃	O-10-18	砂粒	やや粗	褐
213	〃	P-10-21Ⅳ	長石	普通	明褐	264	〃	P-21-13Ⅳ	石英，角閃石	良好	褐	315	〃	Ⅰ	長石，石英	良好	淡白褐
214	〃	O-23 Ⅳ	雲母，石英	普通	黄白	265	〃	P-21-22Ⅳ	角閃石	良好	淡白褐	316	〃	Ⅰ	長石，角閃石	良好	灰褐
215	〃	O-10-13Ⅳ	石英，長石	良好	暗褐	266	〃	E-26-24Ⅳ	石英，長石	良好	淡灰褐	317	〃	Ⅰ	砂粒	普通	褐
216	〃	P-10 Ⅳ	長石	普通	黄白	267	〃	B-27-6Ⅳ	石英	良好	黄褐	318	〃	O-3	砂粒	やや粗	赤褐
217	〃	P-24 Ⅳ	砂粒	良好	暗褐	268	〃	E-16-3Ⅳ	長石，角閃石	良好	黄褐	319	〃	Ⅰ	砂粒	やや粗	淡白褐
218	Ⅴ	P-10-22	長石，石英	やや粗	褐	269	〃	D-26 Ⅳ	角閃石	良好	褐	320	〃	O-24 Ⅳ	角閃石，長石	良好	濁紫褐
219	〃	O-23 Ⅳ	長英	良好	暗褐	270	〃	P-10-6Ⅳ	石英，砂粒	良好	赤褐	321	〃	O-23 Ⅳ	角閃石，長石	良好	灰褐
220	〃	O-23 Ⅳ	砂粒，角閃石	普通	白褐	271	〃	O-11-4Ⅳ	砂粒	良好	淡褐	322	〃	O-23-13Ⅳ	角閃石，石英	粗	紫褐
221	〃	O-23-12Ⅳ	長石，角閃石	良好	灰褐	272	〃	Q-12-2Ⅳ	石英	良好	灰褐	323	〃	Q-23-13Ⅳ	石英，雲母	良好	淡黄白
222	〃	O-24 Ⅳ	長石	普通	白紫褐	273	〃	Q-12-6Ⅳ	砂粒，長石	良好	淡褐	324	〃	E-19	砂粒	普通	淡白褐
223	〃	O-23 Ⅳ	長石	良好	暗褐	274	〃	Q-12-6Ⅳ	砂粒	良好	灰	325	〃	P-24 Ⅳ	角閃石，石英	普通	濁褐
224	〃	Q-9-5Ⅳ	角閃石，長石	普通	明褐	275	〃	B-27-11Ⅳ	砂粒	普通	黄褐	326	〃		長石	良好	淡白褐
225	〃	O-10-7Ⅳ	長石，石英	良好	灰褐	276	〃	D-24 Ⅳ	長石	良好	橙褐	327	〃	Ⅰ	石英，輝石	良好	淡褐
226	〃	O-20 Ⅳ	砂粒，角閃石	良好	淡褐	277	〃	P-11-23Ⅳ	角閃石，砂粒	良好	淡白褐	328	〃	O-10-18Ⅳ	角閃石	普通	明褐
227	〃	P-24 Ⅳ	砂粒，角閃石	良好	淡灰褐	278	〃	D-23-13Ⅳ	長石，砂粒	良好	白褐	329	〃	P-23-2Ⅳ	石粒，角閃石	良好	淡白褐
228	〃	D-23-13Ⅳ	砂粒，石英	普通	白褐	279	〃	P-10-4Ⅳ	砂粒，角閃石	普通	淡明褐	330	〃	O-10-6Ⅳ	長石，石英	良好	淡明褐
229	〃	Ⅰ	石英，角閃石	良好	暗褐	280	〃		石英，角閃石	良好	淡褐	331	〃	Ⅰ	角閃石，長石	良好	灰褐
230	〃	土手 Ⅳ	角閃石，長石	良好	白褐	281	〃	E-26-13	長石	良好		332	〃	Ⅰ	砂粒，雲母	粗	黄褐
231	〃	Ⅰ	角閃石	良好	淡明褐	282	〃	P-11-20	砂粒	普通	淡明褐	333	〃	C-5 Ⅳ	砂粒	普通	褐
232	〃	O-10-7 Ⅳ	角閃石	普通	淡黄褐	283	〃	B-11-13Ⅳ	角閃石	良好	淡灰褐	334	〃	P-23 Ⅳ	角閃石	良好	明褐
233	〃	O-10-24Ⅳ	長石，石英	良好	明褐	284	〃	O-10-21Ⅳ	石英，角閃石	良好	褐	335	〃	Ⅳ	砂粒	普通	淡白褐
234	〃	Q-10-8Ⅳ	砂粒	普通	黒	285	〃	P-11-2Ⅳ	砂粒	良好	茶白	336	〃	P-24 Ⅳ	砂粒，角閃石	良好	淡白褐
235	〃	P-7-10Ⅳ	砂粒	やや粗	白褐	286	〃	E-25-10Ⅳ	角閃石，砂粒	良好		337	〃	A-28 Ⅳ	砂粒	良好	淡濁褐
236	〃	P-24 Ⅳ	長石	やや粗	灰	287	〃	N-23-24Ⅳ	砂粒，角閃石	良好	灰褐	338	〃	P-23 Ⅳ	砂粒，石英	良好	黒淡灰褐
237	壺Ⅰ—Ⅱ	P-9-21Ⅳ	砂粒，長石	良好	黒褐	288	〃	P-11 Ⅳ		良好	赤褐	339	〃	P-23 Ⅳ	角閃石，長石	普通	淡明褐
238	〃	P-23-2Ⅳ	長石，角閃石	良好	暗褐	289	〃	O-22-17Ⅳ	雲母，長石	普通	淡白褐	340	〃	O-23 Ⅳ	長石	普通	灰褐
239	〃	P-23 Ⅳ	長石，角閃石	良好	暗褐	290	〃		長石，石英	普通	淡褐	341	〃	P-24 Ⅳ	長石，石英	良好	黒濁褐
240	〃	Ⅰ	砂粒	やや粗	橙	291	〃	O-22-4Ⅳ	砂粒	普通	灰褐	342	〃	O-23 Ⅳ	石英	良好	淡白褐
241	〃	P-23 Ⅳ	長石	良好	黒	292	〃		角閃石，石英	良好	淡灰褐	343	〃		雲母，石英	普通	濁褐
242	〃	P-23 Ⅳ	長石	良好	灰	293	〃	N-24 Ⅳ	砂粒，輝石	やや粒	淡褐	344	〃		角閃石，石英	普通	濁褐
243	〃	C-11-6Ⅳ	角閃石	良好	黄白	294	〃	Q-11-20Ⅳ	砂粒，角閃石	普通	黄白	345	Ⅴ	P-22-24Ⅳ	角閃石，石粒	普通	白褐
244	〃	E-25 Ⅳ	石英	良好	褐	295	〃	O-11-3Ⅳ	長石	良好	淡灰褐	346	〃	P-7-10Ⅳ	砂粒，長石	普通	白褐
245	Ⅲ	P-12-22Ⅳ	砂粒，長石	普通	褐	296	〃	P-23-12Ⅳ	長石，砂粒	良好	灰	347	〃	P-10-4Ⅳ	雲母，砂粒	普通	赤褐
246	〃	O-10-19Ⅳ	長石，角閃石	良好	淡褐	297	Ⅳ	P-22 Ⅳ	角閃石，長石	普通	淡灰褐	348	〃		砂粒	普通	白褐
247	〃	P-23 Ⅳ	砂粒	普通	淡白褐	298	〃		長石	普通		349	〃	O-10-23Ⅳ	角閃石	良好	淡明褐
248	〃	O-10-15Ⅳ	砂粒	良好	淡灰褐	299	〃	P-21-16Ⅳ	砂粒	普通	淡褐	350	〃	O-10-23Ⅳ	砂粒	良好	灰
249	〃	O-26-7Ⅳ	長石，石英	良好	灰褐	300	〃		長石，角閃石	良好	淡濁褐	351	〃	R-10-9Ⅳ	長石	良好	明褐
250	〃	R-10-7Ⅳ	砂粒，長石	普通	淡褐	301	〃		長石，石英	良好	淡白褐	352	〃	R-10-13	長石，角閃石	普通	灰褐
251	〃		長石，石英	普通	淡褐	302	〃	Q-20-5Ⅳ	角閃石，石英	良好	淡褐	353	〃	R-10 Ⅳ	長石，石英	良好	明褐
252	〃	S-17-7Ⅳ S-11-7Ⅳ	長石，石英	普通	淡紫	303	〃	Q-21-3Ⅳ	石英，砂粒	普通	淡褐	354	Ⅵa	E-26-22Ⅲ	長石，砂粒	良好	灰
253	〃	P-23 Ⅳ	砂粒，角閃石	良好	淡白褐	304	〃		石英	良好	灰褐	355	〃	Ⅰ	角閃石	良好	灰褐
254	〃	P-9-13Ⅳ	砂粒，角閃石	良好	淡褐	305	〃	P-12-18Ⅳ	角閃石，石英	良好	茶褐	356	〃	Q-20-8Ⅳ	角閃石	普通	明褐
255	〃	Q-12-14Ⅳ	長石，雲母	良好	褪黒褐	306	〃	-4-10	角閃石	普通	淡黄褐	357	〃	Q-10-11Ⅳ	石英，長石	良好	明褐
256	〃	P-9-8Ⅳ	雲母，長石	良好	赤褐	307	〃	S-11-17Ⅳ	石英，角閃石	普通	淡灰褐	358	〃	Q-10-22Ⅳ	角閃石	良好	淡明褐
257	〃	B-26	石英，長石	普通	灰褐	308	〃	Q-1-25	長石，石英	普通	明褐	359	〃		角閃石	普通	白褐
258	〃	O-10-19Ⅳ	角閃石，石英	良好	淡白褐	309	〃	O-11 Ⅳ	角閃石，石英	良好	明褐	360	〃	Ⅰ	石英，角閃石	良好	明褐
259	〃	R-11-3Ⅳ	石英，長石	普通	淡褐	310	〃	Q-12-7	雲母，長石	良好	淡褐	361	〃	D-23 Ⅳ	石英	普通	白褐
260	〃	P-11-16Ⅳ	砂粒，石英	普通	淡灰褐	311	〃	Ⅰ	砂粒	普通	淡灰褐	362	〃	P-23 Ⅳ	砂粒	やや粗	灰褐

土器一覧表(3)

番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調
363	表Ⅶb	P-11-22Ⅳ	砂粒	普通	淡白褐	414	Ⅶ	Ⅰ	角閃石，長石	普通	灰白	465	Ⅰ	E-26-16Ⅲ	長石	良好	淡褐
364	〃	P-11-10Ⅳ	砂粒	やや粗	明褐	415	〃	P-9-1Ⅳ	砂粒	普通	灰黒	466	〃		砂粒	良好	褐
365	〃	S-11-2Ⅳ	砂粒	やや粗	白褐	416	〃		角閃石	普通	黄白	467	〃	Q-20-5Ⅳ	砂粒，輝石	普通	暗褐
366	〃	O-21-24Ⅳ	長石，石英	普通	黄白	417	〃	Q-12-3Ⅳ	砂粒	やや粗	褐	468	〃	O-11-4Ⅳ	砂粒	普通	淡褐
367	〃	N-23-19Ⅳ	石英，雲母	普通	灰褐	418	〃	Ⅰ	長石	やや粗	灰白	469	〃	O-15-6Ⅳ	砂粒	普通	暗褐
368	〃	P-11-25Ⅳ	砂粒	やや粗	白褐	419	〃	S-11-14Ⅳ	角閃石，長石	普通	明褐(丹)	470	〃	O-23-21Ⅳ	石英，角閃石	良好	淡黄白
369	〃	P-11-25Ⅳ	角閃石	普通	黄褐	420	Ⅸ	E-26-11Ⅳ	石英	良好	白褐	471	〃	O-22-4Ⅳ	雲母	良好	淡黄白
370	〃	P-21 Ⅳ	長石	やや粗	明褐	421	〃	B-27-7Ⅳ	砂粒	良好	褐	472	〃	O-11-12Ⅳ	砂粒	普通	褐
371	〃	B-5	石英	普通	明褐	422	〃	B-26-14Ⅳ	砂粒	普通	淡褐	473	〃		石英，長石	良好	褐
372	〃	C-11 Ⅳ	砂粒	やや粗	明褐	423	〃	S-10-20Ⅳ	砂粒，石英	良好	淡白褐	474	〃	R-11-13Ⅳ	角閃石，長石	普通	淡褐
373	〃	D-25 Ⅳ	石英	良好	明褐	424	〃	S-11-2Ⅳ	長石，角閃石	良好	淡白褐	475	〃	O-23-21Ⅳ	角閃石	良好	灰
374	〃	N-22 Ⅳ	砂粒	普通	白褐	425	〃	R-10-8Ⅳ	石英，砂粒	良好	淡白褐	476	〃	Q-10-9Ⅳ	砂粒	普通	淡灰褐
375	Ⅶ	Q-21-17Ⅳ	石英，長石	良好	淡褐	426	〃	S-11-3	砂粒，石英	良好	赤褐	477	〃	O-23-16Ⅳ	角閃石	良好	褐
376	〃	E-26 Ⅳ	角閃石	普通	褐	427	〃	Q-12-2	長石	普通	黄褐	478	〃	Q-12-1Ⅳ	角閃石	良好	淡白褐
377	〃	E-26 Ⅳ	輝石，軽石	普通	褐	428	〃	P-12-22Ⅳ	石英，長石	良好	淡灰褐	479	〃	Q-10-8Ⅳ	砂粒	普通	淡褐灰褐
378	〃	P-10 Ⅳ	雲母	良好	淡褐	429	〃	第2 Ⅳ	石英，砂粒	良好	淡明褐	480	〃		角閃石，石英	普通	灰
379	〃	O-22-17Ⅳ	角閃石	やや粗	灰褐	430	〃	Q-21-3Ⅳ	石英，長石	良好	暗灰褐	481	〃		石英，角閃石	良好	褐
380	〃		石英	良好	淡褐	431	〃	P-11-14Ⅳ	角閃石，長石	良好	淡白褐	482	〃	Ⅳ	角閃石，長石	普通	淡黄白
381	〃	P-22 Ⅳ	砂粒	粗	明褐	432	〃	O-21-8Ⅳ	角閃石，石英	良好	淡灰褐	483	〃		石英	良好	淡灰褐
382	〃	Q-11-13Ⅳ	角閃石	普通	黄白	433	〃	E-23 Ⅳ	長石，石英，角閃石	良好	暗褐	484	〃	O-21 Ⅳ	石英	良好	淡黄白
383	〃	N-11-24Ⅳ	砂粒	やや粗	灰	434	〃	O-12-2Ⅳ	長石，角閃石	普通	明褐	485	〃	O-22 Ⅳ	長石，角閃石	普通	淡黄白
384	〃		長石，石英	良好	褐	435	〃	O-26-24Ⅳ	角閃石，砂粒	良好	灰淡褐	486	〃	R-12-16Ⅳ	角閃石	良好	淡明褐
385	〃	O-10-4Ⅳ	砂粒	普通	明褐	436	〃	P-9-23Ⅳ	砂粒，角閃石	普通	淡褐	487	〃	Q-21-6Ⅳ	角閃石，石英	良好	灰
386	〃		石英	普通	褐	437	〃	O-10-20Ⅳ	角閃石，長石	良好	淡白褐	488	〃	P-33 Ⅳ	角閃石	普通	淡灰褐
387	〃	O-26-7Ⅳ	長石，角閃石	普通	明褐	438	〃	P-11-10Ⅳ	砂粒	普通	淡褐	489	〃	P-21-8Ⅳ	砂粒	粗	淡褐
388	〃	P-22 Ⅳ	砂粒	やや粗	白褐	439	〃	S-22-17Ⅳ	砂粒	やや粗	淡明褐	490	〃	Ⅰ	長石，角閃石	良好	淡黄褐
389	〃	O-22-24Ⅳ	長石，石英	普通	灰褐	440	〃	-11-4Ⅳ	角閃石，石英	普通	淡灰褐	491	〃	Ⅰ	石英	良好	淡灰褐
390	〃	D-23-13Ⅳ	長石	普通	白褐	441	〃	O-11-15Ⅳ	長石，角閃石	普通	暗褐	492	〃	Ⅰ	砂粒	普通	淡黄白
391	〃		角閃石	普通	〃	442	〃	Ⅰ	角閃石，石英	良好	淡灰褐	493	〃	Q-21 Ⅳ	雲母，石英	良好	淡黄褐
392	〃	O-23-11Ⅳ	角閃石，石英	普通	灰	443	〃	Q-24 Ⅳ	角閃石，砂粒	普通	灰	494	〃	P-11-24Ⅳ	砂粒	普通	淡褐
393	〃	P-24 Ⅳ	石英英	やや粗	灰白	444	〃	Ⅰ	角閃石，砂粒	良好	淡黄白	495	〃	O-10-23Ⅳ		良好	淡黄白
394	Ⅷ	B-26-5Ⅳ	長石，石英	普通	明褐	445	〃	O-21 Ⅳ	長石，角閃石	良好	黒	496	〃	O-10-15Ⅳ	角閃石，長石	良好	淡黄褐
395	〃		砂粒	普通	明褐	446	〃	P	砂粒	良好	淡黄白	497	〃	O-10-15Ⅳ	石英	良好	淡褐
396	〃	Q-12-3Ⅳ	角閃石	普通	明褐	447	〃	-22-14Ⅳ	砂粒	普通	淡灰褐	498	〃	Q-20-8Ⅳ	長石	良好	暗褐
397	〃	C-27-12Ⅳ	石英	良好	褐	448	〃	P-11-9	砂粒	やや粗	淡灰褐	499	〃	Ⅰ	角閃石，長石	良好	淡灰褐
398	〃	土手	角閃石	普通	白褐	449	〃	O Ⅰ	角閃石	良好	黒	500	〃		石英	良好	淡黄褐
399	〃	P-12-23Ⅳ	石英	良好	明褐	450	〃	R-11-9Ⅳ	石英，角閃石	普通	淡紫黄	501	〃	O-21-22Ⅳ	砂粒	やや粗	淡白褐
400	〃	O-21-22Ⅳ	角閃石	普通	灰	451	Ⅹ	R-10-9Ⅳ	角閃石	良好	暗褐	502	〃	P-10-9	長石，石英	良好	淡灰褐
401	〃	P-12-18Ⅳ	角閃石	良好	明褐	452	〃	D-10-14Ⅳ	長石，角閃石	良好	淡灰褐	503	Ⅱ	S-10-15Ⅳ	長石，石英	普通	淡灰褐
402	〃	O-22	角閃石	粗	黄白	453	〃	Q-10-4	長石	良好	淡灰褐	504	〃	B-27-16Ⅲ	長石	普通	黄褐
403	〃	D-22-14Ⅳ	砂粒	やや粗	黄白	454	鉢1	P-10-18Ⅳ	角閃石，石英	良好	淡黄褐	505	〃	Q-21-6Ⅳ	角閃石，石英	良好	淡濁茶褐
404	〃	Q-20 Ⅳ	長石，角閃石	普通	灰	455	〃	P-18-23Ⅳ	砂粒	良好	淡黄褐	506	〃	C-27-12Ⅲ	砂粒	普通	淡灰褐
405	〃	S-11-14Ⅳ	石英	普通	明褐	456	〃	S-21-17Ⅳ	長石，輝石	普通	淡褐	507	〃	O-21-28Ⅳ	石英，長石	良好	淡灰褐
406	〃	S-11-14Ⅳ	砂粒	普通	黄白	457	〃	I-10-10Ⅳ	砂粒	やや粗	灰白	508	〃	O-9-20Ⅳ	角閃石，長石	良好	褐
407	〃	O-22 Ⅳ	角閃石	やや粗	黄白	458	〃	P-11-12Ⅳ	角閃石，石英	良好	淡黄白	509	〃	O-10 Ⅳ	長石	良好	黒
408	〃	Ⅰ	石英	普通	淡明褐	459	〃	Q-10-3	角閃石，石英	良好	淡黄白	510	〃	C-27-21Ⅳ	砂粒	良好	淡褐
409	〃		砂粒	やや粗	灰褐	460	〃	Q-20-17	砂粒	普通	淡白褐	511	〃		長石，石英	普通	淡褐
410	〃	Ⅰ	雲母，長石	普通	暗褐	461	〃	P-21-24	角閃石	やや粗	灰	512	〃	Q-10-18Ⅳ	角閃石，長石	良好	淡褐
411	〃	N-24 Ⅳ	石英	普通	黄白	462	〃	Q-20-18	角閃石	良好	淡灰褐	513	〃		雲母，石英	良好	淡灰褐
412	〃	O-22-8Ⅳ	角閃石，長石	普通	黄白	463	〃	P-21-17Ⅳ	砂粒	普通	褐	514	〃	R-11-23Ⅳ	砂粒	普通	淡黄白
413	〃	O-23 Ⅳ	角閃石	普通	灰白	464	〃	O-10-25Ⅳ	砂粒	普通	淡灰褐	515	〃	O-23 Ⅳ	砂粒	良好	淡褐

土器一覧表(4)

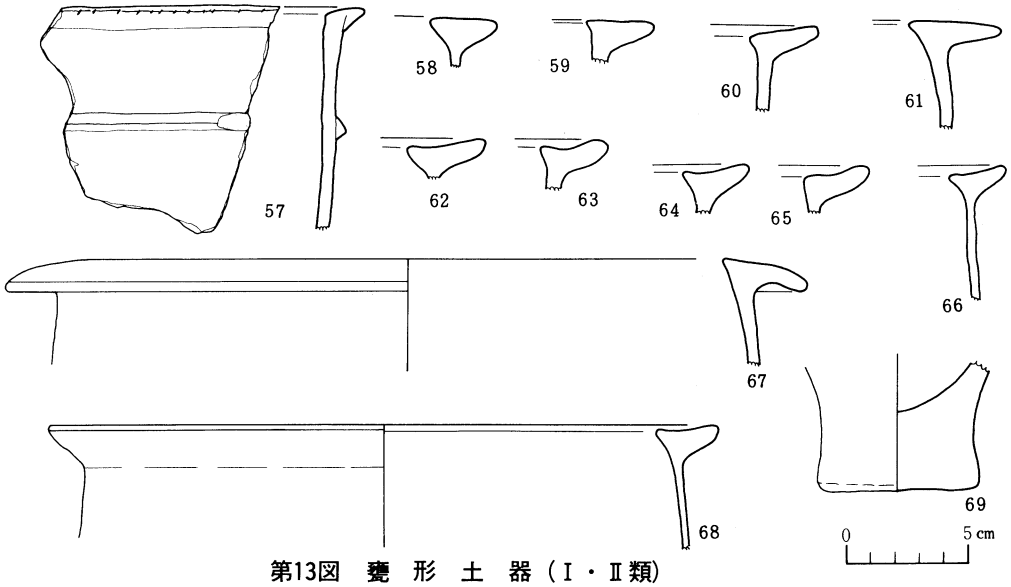
番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調
516	鉢Ⅱ	P-10-3Ⅳ	石英，長石	良好	淡灰褐	567	Ⅱ	Ⅰ	長石	普通	淡黄白	618	脚P	D-24 Ⅳ	角閃石，長石	普通	黄白
517	〃	土手	石英，長石，砂粒	普通	淡灰	568	〃	O-10 Ⅳ	角閃石，長石	良好	淡黄褐	619	〃	P-24 Ⅳ	長石	良好	灰白
518	〃	P-9-5Ⅳ	長石	良好	褐	569	〃	O-13 Ⅳ	雲母，長石	良好	淡褐	620	〃	R-10-20Ⅳ	石英，長石	良好	黄白
519	〃	B-27-12Ⅳ	長石，輝石	良好	淡灰褐	570	〃	O-20-18Ⅳ	角閃石，石英	普通	淡褐	621	〃	P-11-10Ⅳ	角閃石	良好	黄白
520	〃	P-12-18	砂粒	普通	淡濁褐	571	〃	O-22-15Ⅳ	角閃石，砂粒	普通	白褐	622	〃	Q-20-14Ⅳ	石英	良好	黄白，橙(内)
521	〃	Q-21 Ⅳ	石英，砂粒	良好	淡灰褐	572		E-26-22Ⅲ	長石，石英	良好	黄白	623	〃	E-25-20Ⅳ	石英，砂粒	普通	黄白
522	〃	P-11-6	角閃石，長石	良好	淡黄	573	Ⅰb		長石，雲母	普通	黄褐	624	〃	O-26-2Ⅳ	長石，雲母	普通	淡褐
523	〃	Q-10-13Ⅳ	砂粒	普通	褐	574	〃	D-11 Ⅳ	砂粒，石英	粗	黄白	625	〃	Ⅰ	角閃石，石英	普通	褐
524	〃	O-10-13	角閃石，石英	良好	灰褐	575	〃	E-26-15Ⅲ	長石，雲母	良好	黄白	626	〃	Q-11-7Ⅳ	石英，砂粒	良好	黄白
525	〃		石英，長石	良好	淡白褐	576	〃	R-11-23Ⅳ	砂粒	粗	褐	627	〃	N-23-19Ⅳ	長石，角閃石	普通	黄白
526	〃	Ⅰ	石英	良好	白褐	577	〃		砂粒	良好	暗褐	628	〃	D-28 Ⅳ	砂粒	普通	灰
527	〃		長石	良好	淡灰褐	578	〃	P-21-7Ⅳ	石英	やや粗	淡紫	629	蓋Ⅰ	N-20-19Ⅳ	砂粒，角閃石	普通	黄褐
528	〃	P-11-23Ⅳ	砂粒	普通	淡褐	579	Ⅱ	P-23 Ⅳ	長石，角閃石	やや粗	黄白	630	〃	P-11-25Ⅳ	砂粒	普通	白褐
529	〃	R-9-5Ⅳ	砂粒	良好	褐黒	580	〃	P-23 Ⅳ	石英，砂粒	やや粗	黄白	631	〃	P-11-25Ⅳ	砂粒	普通	暗褐
530	〃	O-22-18Ⅳ	石英，角閃石	良好	淡白褐	581	〃	P-9-14Ⅳ	石英	やや粗	黄白	632	〃	P-21-8Ⅳ	砂粒	普通	黄白
531	〃		角閃石	良好	淡黄褐	582	〃	O-10-9Ⅳ	長石	普通	黄白	633	〃	Q-11-1Ⅳ	石英，砂粒	普通	黄白
532	〃	P-11-14Ⅳ	石英，長石	良好	淡灰褐	583	〃	O-10-18Ⅳ	角閃石	良好	黄白	634	〃	P-21-3Ⅳ	砂粒	やや粗	黄褐
533	〃	N-23-2	長石	良好	淡灰褐	584	〃	P-23 Ⅳ	輝石，長石	やや粗	黄白	635	〃	Q-20-10Ⅳ	長石	良好	黄褐
534	〃	O-9-23Ⅳ	石英	良好	淡灰白	585	〃	P-23 Ⅳ	角閃石	普通	灰白	636	〃	Q-11-23Ⅳ	長石，砂粒	普通	黄白
535	〃	P-10-14Ⅳ	長石，石英	良好	灰褐	586	〃	S-11-16Ⅳ	砂粒	良好	明褐	637	〃	Q-21-6Ⅳ	砂粒	良好	灰褐
536	〃		石英，長石	良好	灰	587	〃	O-23 Ⅳ	石英	普通	黄白	638	〃		長石	普通	濁白褐
537	〃	P-11-23Ⅳ	角閃石，石英	良好	淡灰褐	588	脚	Q-21-16Ⅳ	角閃石，長石	普通	灰	639	〃	Ⅳ	砂粒，石英	粗	黒褐
538	〃	P-10-4Ⅳ	石英	良好	灰	589	〃	O-11-24Ⅳ	長石	普通	黄白	640	〃		角閃石	やや粗	黄褐
539	〃	Ⅰ	石英，角閃石	良好	灰	590	〃	P-24 Ⅳ	長石	普通	黄白	641	〃	E-25-24Ⅳ	砂粒，石英	普通	白褐
540	〃	P-21-3Ⅳ	砂粒	良好	黒灰褐	591	〃	P-24 Ⅳ	石英	普通	灰	642	〃	Q-12	砂粒	普通	白褐
541	〃	O-11-1Ⅳ	石英，長石	普通	褐	592	〃	S-51-10Ⅳ	角閃石	良好	黄白	643	〃	O-20-14Ⅳ	石英，長石	良好	暗褐
542	〃		長石	良好	褐	593	〃	P-23-12Ⅳ	石英	普通	黄白	644	〃	Q-11-3Ⅳ	石英，角閃石	普通	白褐
543	〃	E-8 Ⅳ	長石	良好	灰	594	〃	D-10-23Ⅳ	長石	普通	黄白	645	〃	A-27 Ⅳ	砂粒	良好	明白褐
544	〃	R-11-23	角閃石，砂粒	普通	淡白褐	595	〃	N-23-10Ⅳ	石英，角閃石	普通	黄白	646	〃	P-12 Ⅳ	砂粒	やや粗	褐
545	〃	P-22	石英，長石	普通	淡灰褐	596	〃		砂粒	粗	黄白	647	〃	S-10-14Ⅳ	輝石，石英	良好	黄白
546	〃	P-20-25Ⅳ	石粒	良好	淡灰	597	〃	N-23-20Ⅳ	砂粒 粗	粗	黄白	648	〃	E-26-15Ⅳ	角閃石，石英	良好	淡褐
547	〃	P-21-18Ⅳ	角閃石，石英	普通	淡灰褐	598	〃	O-10-15Ⅳ	砂粒	普通	淡褐	649	〃	N-22 Ⅳ	砂粒	普通	淡褐
548	〃	P-20-25Ⅳ	石英，角閃石	良好	灰褐	599	〃	P-11-23Ⅳ	雲母，石英	良好	黄白	650	〃	Q-21 Ⅳ	石英，角閃石	普通	褐
549	〃	Q-10-23	砂粒	普通	淡褐	600	〃	P-11-17Ⅳ	石英，長石	普通	赤褐	651	〃	Q-12-2Ⅳ	石英	普通	褐
550	〃	P-23	長石，角閃石	普通	淡灰褐	601	〃	O-23-16Ⅳ	雲母，石英	普通	黒	652	〃	O-26-7Ⅳ	砂粒	普通	白褐
551	〃	O-10-25Ⅳ	長石，角閃石	良好	淡褐	602	〃	Ⅰ	角閃石	普通	黄白	653	〃		砂粒	やや粗	灰褐
552	〃		石英，長石	良好	淡褐	603	〃	N-23-11Ⅳ	石英	普通	灰	654	〃	Q-21-1Ⅳ	長石，角閃石	普通	白褐
553	〃		砂粒	良好	淡灰褐	604	〃	Q-11-25Ⅳ	長石	良好	灰	655	〃	Q-11-9Ⅳ	砂粒	普通	褐
554	〃	P-10-11Ⅳ	砂粒，石英	普通	淡灰褐	605	〃	Ⅰ	長石，角閃石	良好	淡褐	656	〃	N-23-7Ⅳ	石英，角閃石	普通	灰
555	〃	O-9-23Ⅳ	石英	良好	淡褐	606	〃	Q-20-9Ⅳ	砂粒	普通	淡褐	657	〃	O-22 Ⅳ	長石	やや粗	濁褐
556	〃	O-10-9Ⅳ	長石，石英	良好	淡灰褐	607	〃	D-26-8Ⅳ	砂粒	やや粗	灰白	658	Ⅱ	P-9-12Ⅳ	長石	やや粗	暗褐
557	〃	B-26-15Ⅳ	砂粒	良好	淡灰褐	608	〃	土手Ⅰ	砂粒	やや粗	灰白	659	〃	O-24 Ⅳ	長石，石英	良好	黒褐
558	〃	O-22-15	石英，角閃石	普通	淡灰褐	609	〃	Q-11-8Ⅳ	砂粒	やや粗	灰白	660	手捏	S-11-8Ⅳ	石英	良好	淡黄白
559	〃	D-25 Ⅳ	長石，石英	良好	濁黄褐	610	〃	Ⅰ	長石，石英	普通	黄白	661	〃	O-10-7Ⅳ	石英，角閃石	良好	灰
560	〃	Q-11-7	砂粒，角閃石	普通	淡灰褐	611	〃	Ⅰ	長石	良好	明褐	662	〃	O-23 Ⅳ	角閃石，石英	良好	灰紫
561	〃	E-26-20Ⅳ	砂粒	普通	淡灰褐	612	〃	Ⅰ	長石	良好	赤褐	663	〃	A-27	長石	良好	黒
562	〃	土手Ⅳ	滑	良好	褐	613	〃	P-23 22Ⅳ	砂粒，長石	良好	黄白	664	〃		長石	粗	淡明褐
563	〃	Ⅰ	雲母，石英	良好	黒褐	614	〃	Ⅰ	長石	普通	黄白	665	〃	Q-10-21Ⅳ	砂粒，長石	良好	淡褐
564	〃	Q-21-3Ⅳ	角閃石	良好	淡灰褐	615	〃		砂粒，角閃石	やや粗	黄白	666	〃	O-10-17Ⅳ	長石，角閃石	良好	灰
565	〃	P-$^{10}_{11}$ Ⅳ	角閃石	良好	淡灰褐	616	〃		長石，砂粒	普通	灰	667	〃	O-10-22Ⅳ	角閃石，石英	良好	灰
566	〃	Ⅰ	石英，砂粒	普通	淡白褐	617	〃	O-23 Ⅳ	長石，角閃石	普通	黄白	668	〃	P-12-12Ⅳ	砂粒	普通	淡灰褐

土器一覧表(5)

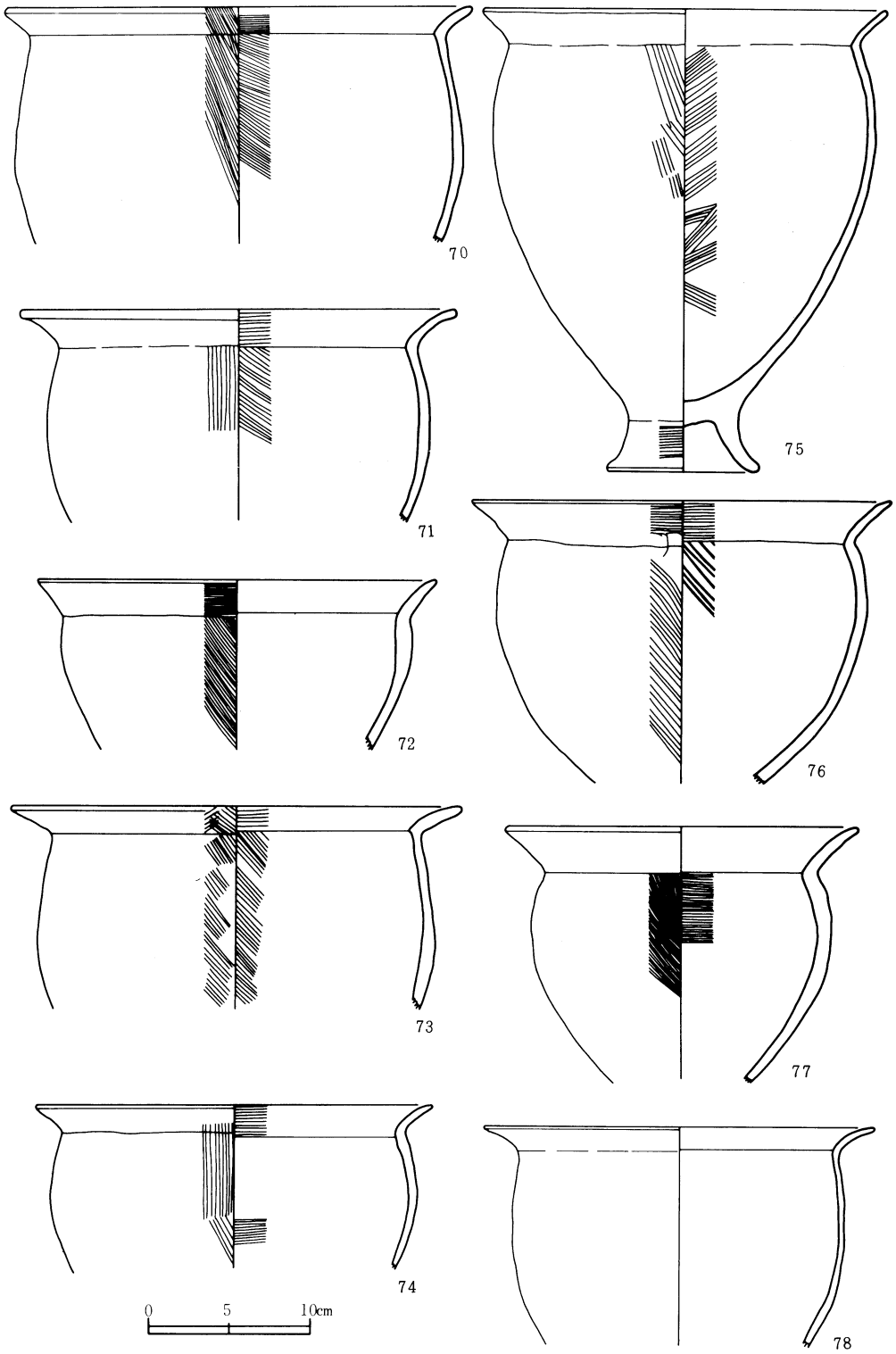
番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調	番号	類	出土区層	胎土	焼成	色調
669	手捏	P-22-6Ⅳ	長石，石英	良好	淡褐	720	手捏	P-9-13Ⅳ	雲母，長石	良好	淡黄褐	771	特殊	O-18-8Ⅳ	角閃石	良好	灰
670	〃	B-27 Ⅳ	雲母，角閃石	普通	淡灰褐	721	〃	P-22-12Ⅳ	角閃石，長石	普通	淡灰褐	772	〃	P-10-21Ⅳ	長石	普通	黄白
671	〃	O-21 Ⅳ	角閃石	良好	淡褐	722	〃	O-10-11Ⅳ	石英，角閃石	普通	黄白	773	〃	O-23 Ⅳ	石英	良好	黒
672	〃	O-12-6Ⅳ	角閃石	普通	淡黄褐	723	〃	Ⅳ	長石，石英	良好	黒褐	774	〃		角閃石	良好	明褐
673	〃	N-11-23Ⅳ	石英，角閃石	普通	淡褐	724	〃	Ⅰ	砂粒，石英	普通	灰	775	勾玉	B-11-1Ⅲ	角閃石，砂粒	普通	灰褐
674	〃	N-23-23Ⅳ	角閃石	良好	淡褐黒	725	〃	P-12-22Ⅳ	長石	良好	暗褐	776	土錘	E-7 Ⅲ			
675	〃	O-10-18Ⅳ	角閃石，石英	普通	淡黄白	726	〃	R-11-14Ⅳ	砂粒	粗	淡白褐	777	〃	O-10-5Ⅳ	角閃石	良好	灰白
676	〃	A-23-1Ⅳ	雲母，角閃石	良好	淡褐	727	〃		長石，石英	良好	淡白褐	778	〃	E-7-16Ⅲ			
677	〃	P-22 Ⅳ	石英，角閃石	良好	灰	728	〃	Q-9-15	石英，長石	普通	淡黄褐	779	〃	C-8-8Ⅲ			
678	〃	O-23-16Ⅳ	角閃石，長石	普通	灰	729	〃	Ⅰ	角閃石，石英	良好	灰	780	〃	D-4 Ⅳ			
679	〃	Ⅰ	角閃石	普通	淡紫褐	730	〃	R-10-2Ⅳ	砂粒	良好	淡褐	781	〃	D-6 Ⅲ			
680	〃	O-23 Ⅳ	長石，石英	良好	淡黄褐	731	〃	E-4-18Ⅲ	砂粒，長石	良好	灰	782	〃	O-10-5Ⅳ	角閃石	普通	灰白
681	〃	O-22-15Ⅳ	砂粒	普通	灰	732	〃	P-10-19Ⅳ	砂粒	良好	灰	783	〃	11-13-3Ⅲ			
682	〃	P-10-13Ⅳ	砂粒，角閃石	普通	淡黄褐	733	〃		砂粒，角閃石	良好	淡白褐	784	〃	N-23-19Ⅳ	長石	普通	黄白
683	〃	Ⅰ	角閃石，長石	普通	淡黄褐	734	〃	O-10-17Ⅳ	石英	良好	灰淡褐	785	〃	E-25 Ⅲ	砂粒，石英	普通	黄白
684	〃	P-9 Ⅳ	長石，角閃石	普通	淡黄褐	735	〃	D-15 Ⅲ	角閃石，輝石	普通	淡褐	786	〃	区なし			
685	〃	O-10-7Ⅳ	砂粒	良好	淡褐	736	〃	O-23 Ⅳ	砂粒，角閃石	良好	灰	787	土板	N-23-10Ⅳ	長石	普通	黒
686	〃	O-22-19Ⅳ	長石	普通	灰	737	〃	P-22-8Ⅳ	角閃石，長石	普通	淡褐	788	〃	O-22 Ⅳ	長石	良好	灰白
687	〃	Ⅰ	長石，石英	普通	淡褐灰	738	〃	N-23-3Ⅳ	石英，長石	良好	灰	789	〃	P-8-9Ⅳ	砂粒	普通	灰
688	〃	Q-10-8Ⅳ	長石，角閃石	普通	灰	739	〃		長石，石英	普通	淡灰褐	790	〃	区なし	砂粒	普通	褐
689	〃	N-23-13Ⅳ	砂粒	良好	淡紫褐	740	〃	O-9 Ⅳ	角閃石，長石	良好	灰	791	石子	N-22-25Ⅳ	角閃石，長石	良好	淡灰
690	〃	Q-10-16Ⅳ	角閃石，長石	普通	淡白褐	741	〃	R-10-2Ⅳ	角閃石，砂粒	良好	淡褐	792	〃	O-10-17Ⅳ	石英	普通	黄白
691	〃	Ⅰ	石英，角閃石	良好	淡黄褐	742	〃		角閃石，石英	良好	淡褐	793	〃	O-10-17Ⅳ	石英，長石	普通	黄白
692	〃	Ⅰ	長石，角閃石	普通	灰	743	〃		長石	普通	淡黄	794	〃	P-11-19Ⅳ	長石	やや粗	淡褐
693	〃	Ⅰ	長石，角閃石	普通	灰	744	〃	O-21-23Ⅳ	角閃石，石英	良好	淡灰褐	795	〃		角閃石	普通	灰褐
694	〃	Ⅰ	石英，長石	良好	灰淡褐	745	〃	Ⅰ	石英，長石	良好	淡褐	796	〃	O-E-25Ⅲ	長石	普通	淡褐
695	〃	O-9-25Ⅳ	長石，角閃石	普通	淡黄褐	746	〃	P-11-13Ⅳ	滑石，石英	普通	淡灰褐	797	〃	C-6 Ⅲ	長石，砂粒	普通	暗褐
696	〃	O-10-18Ⅳ	砂粒，石英	良好	淡灰褐	747	〃	D-10-7Ⅳ	長石，石英	良好	淡灰褐	798	〃		長石，石英	普通	黒
697	〃	O-11 Ⅳ	砂粒	普通	灰褐	748	〃	S-11-2Ⅳ	角閃石，石英	普通	淡黄褐	799	〃		長石，角閃石	普通	暗褐
698	〃	Ⅰ	石英，長石	良好	淡灰	749	〃	P-9-8Ⅳ	石英，角閃石	普通	灰	800	〃		砂粒	普通	明褐
699	〃	O-11-6Ⅳ	砂粒，石英	良好	白褐	750	器台Ⅰ	S-11-15Ⅳ	角閃石，砂粒	良好	黄白	801	〃	E-4-23Ⅲ	長石，砂粒	普通	白褐
700	〃	P-11-18Ⅳ	砂粒	良好	黒淡褐	751	〃		長石	良好	黄白	802	〃		石英，角閃石	普通	灰
701	〃	Q-12-4Ⅳ	長石，角閃石	良好	淡褐	752	〃	Ⅰ	砂粒	普通	黄白	803	〃	O-10-2zⅣ	長石，角粒砂	普通	灰
702	〃	O-10-18Ⅳ	石英，滑石	良好	黒淡灰褐	753	Ⅱ	P-10-3Ⅳ	長石	普通	黄白	804	〃	N-24 Ⅳ	長石石	やや粗	黄白
703	〃	Q-20 Ⅳ	石英	良好	褐	754	Ⅲ	O-9-23Ⅳ	角閃石，石英	普通	黄白	805	〃	D-2 Ⅲ	砂粒	やや粗	明褐
704	〃	Ⅰ	砂粒	普通	淡灰	755	ジョッキ		雲母，長石	普通	黒	806	〃		砂粒	普通	白褐
705	〃	P-22-1Ⅳ	角閃石，石英	良好	黒淡褐	756	〃	N-22 Ⅳ	石英	良好	黒	807	〃	E-1-24Ⅲ	長石	やや粗	灰
706	〃	P-10-15Ⅳ	砂粒	普通	灰淡灰褐	757	〃	土手	長石	良好	明白褐	808	〃		石英	やや粗	黄
707	〃	O-10-17Ⅳ	石英	良好	淡灰褐	758	〃	Ⅰ	雲母	普通	白褐	809	〃		長石	普通	白褐
708	〃	P-22-9Ⅳ	石英，砂粒	普通	淡灰褐	759	〃	P-11-19Ⅳ	角閃石	普通	白褐	810	〃	B-26-10Ⅲ	砂粒	普通	黄褐
709	〃	Ⅰ	石英，砂粒	普通	褐淡褐	760	〃	P-10-18Ⅳ	砂粒	やや粗	黄白	811	〃	D-5-11Ⅲ	角閃石	普通	白褐
710	〃	Q-23 Ⅳ	石英，角閃石	良好	淡灰褐	761	特殊		長石，石英	良好	暗赤褐	812	〃	D-1-2Ⅲ	角閃石	普通	黄
711	〃	P-19 Ⅳ	軽石，石英	普通	淡白褐	762	〃	O-23-11Ⅳ	角閃石，長石	良好	白褐	813	〃	O-10-5Ⅳ	長石，石英	普通	灰
712	〃	Q-20-8Ⅳ	石英，角閃石	普通	淡黄褐	763	〃	R-10-2Ⅳ	石英，角閃石	良好	白褐	814					
713	〃		砂粒，角閃石	普通	灰	764	〃	B-27 Ⅳ	石英	普通	暗褐	815					
714	〃	Q-11-22Ⅳ	長石，石英	普通	淡白褐	765	〃		石英，砂粒	普通	白褐	816					
715	〃	P-10-13Ⅳ	砂粒，石英	普通	灰	766	〃		石英，砂粒	普通	明褐	817					
716	〃	P-10-13Ⅳ	角閃石，砂粒	普通	灰	767	〃	P-9-10Ⅳ	角閃石	普通	黄白	818					
717	〃	P-10-8Ⅳ	長石	良好	淡暗褐	768	〃	S-11-15Ⅳ	石英	良好	明褐	819					
718	〃	S-11-15Ⅳ	長石，石英	普通	黒褐	769	〃	土手	石英	普通	灰	820					
719	〃	O-10-12Ⅳ	長石，角閃石	良好	灰褐	770	〃	E-7-18Ⅲ	砂粒	やや粗	灰	821					

石器一覧表

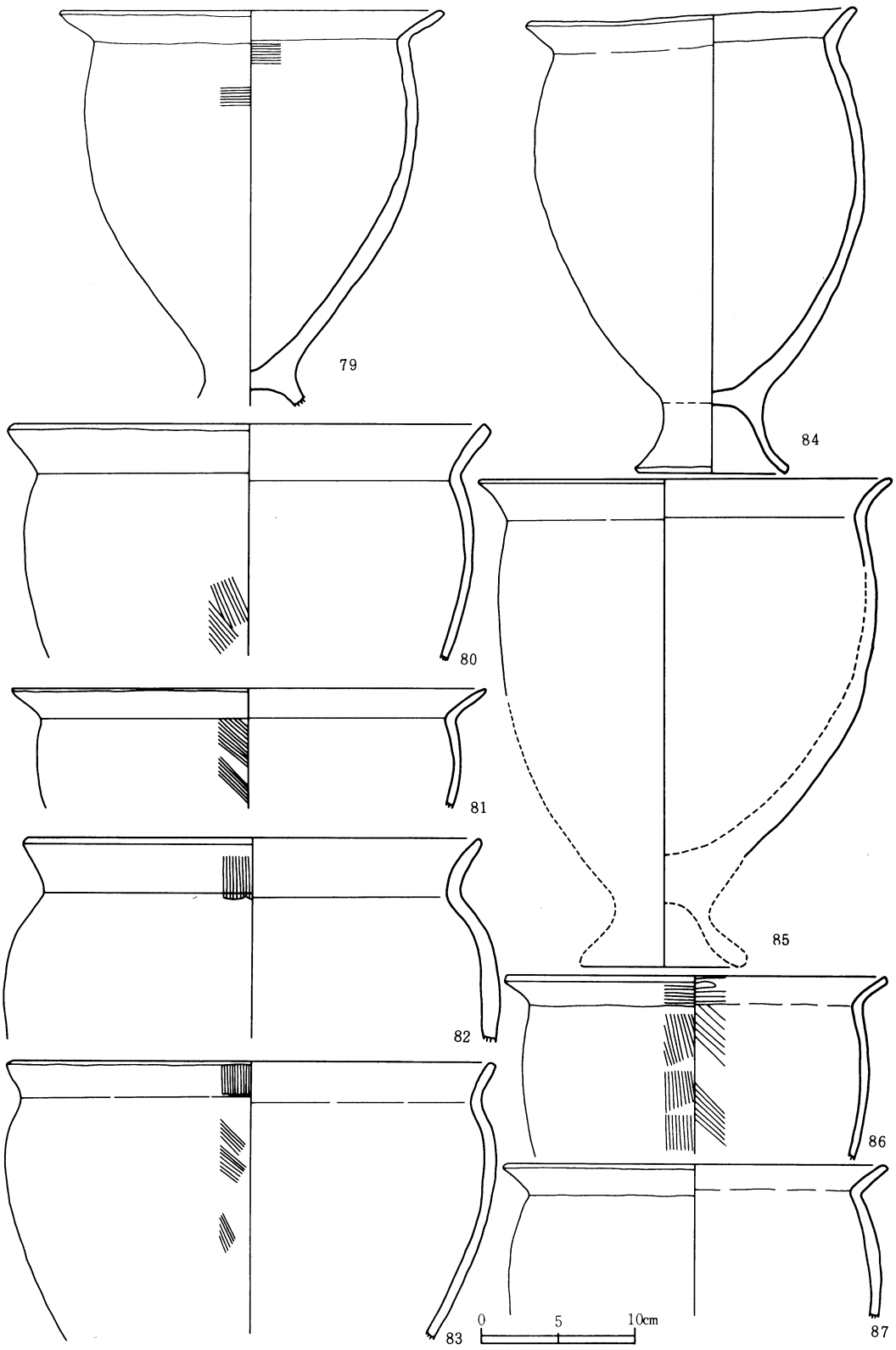
番号	出土区	層位	器種	石材	番号	出土区	層位	器種	石材	番号	出土区	層位	器種	石材
816	P-21-5	Ⅳ	石庖丁	粘板岩	839	Q-21-6	Ⅳ	磨石	安山岩	862	2	Ⅰ	凹石	安山岩
817	P-21-10	Ⅳ	〃	粘板岩	840	R-9-2	Ⅳ	敲石	安山岩	863	P-12-22	Ⅳ	〃	安山岩
818	N-23-15	Ⅳ	〃	粘板岩	841		表	〃	安山岩	864	N-24-7	Ⅳ	〃	安山岩
819	O-10-22	Ⅳ	〃	砂岩	842	N-23-6	Ⅳ	〃	安山岩	865	P-10-25	Ⅳ	砥石	砂岩
820	11-C-	Ⅱ	磨製石鏃	粘板岩	843	O-10-25	Ⅳ	〃	安山岩	866	N-23-14	Ⅳ	〃	砂岩
821	7-B	Ⅲ	〃	粘板岩	844	P-12-23	Ⅳ	〃	砂岩	867	P-22-23	Ⅳ	〃	砂岩
822	7-E-18	Ⅳ	軽石加工品	軽岩	845	Q-10-7	Ⅳ	〃	砂岩	868	N-22-23	Ⅳ	〃	砂岩
823	C-10	Ⅲ	滑石製品	滑岩	846	1-E	Ⅳ	〃	砂岩	869	P-10-22	Ⅳ	〃	砂岩
824	9-E	Ⅲ	石錘	安山岩	847	O-20-21	Ⅳ	〃	砂岩	870	Q-20-10	Ⅳ	〃	砂岩
825	土手	Ⅳ	〃	砂岩	848	2-E-6	Ⅲ	〃	安山岩	871	O-11-24	Ⅳ	〃	砂岩
826	O-10-34	Ⅳ	〃	安山岩	849	23-6	Ⅳ	〃	安山岩	872		表	〃	砂岩
827		表	〃	砂岩	850	Q-10-2	Ⅳ	〃	砂岩	873		表	〃	砂岩
828	S-11	Ⅳ	〃	砂岩	851	R-9-10	Ⅳ	〃	砂岩	874	O-13-9	Ⅳ	〃	砂岩
829	25-1	Ⅳ	石斧	粘板岩	852	1-E	Ⅲ	凹石	安山岩	875	R-10	Ⅳ	〃	砂岩
830	P-10-1	Ⅳ	〃	粘板岩	853	R-8	Ⅲ	〃	安山岩	876	3-E-19		〃	砂岩
831	P-10-3	Ⅳ	〃	安山岩	854	Q-10-2	Ⅳ	〃	砂岩	877	27-B	Ⅳ	〃	砂岩
832	土手	Ⅳ	〃	玄武岩	855	P-10-12	Ⅳ	〃	安山岩	878	P-10-6	Ⅳ	〃	砂岩
833	28-B	Ⅲ	〃	安山岩	856	Q-21-7	Ⅳ	〃	安山岩	879			〃	粘板岩
834	Q-21-1	Ⅳ	〃	砂岩	857	2-1		〃	安山岩	880	P-22-8	Ⅳ	〃	砂岩
835		表	磨石	安山岩	858	O-11-10	Ⅳ	〃	安山岩	881			〃	砂岩
836	S-11-11	Ⅳ	〃	安山岩	859	N-22-23	Ⅳ	〃	安山岩	882		表	線刻礫	砂岩
837		表	〃	安山岩	860	Q-10-15		〃	砂岩	883			台石	安山岩
838	7-2-12	Ⅳ	〃	砂岩	861	R-11-10	Ⅳ	〃	砂岩	884	P-21-7	Ⅳ	〃	安山岩



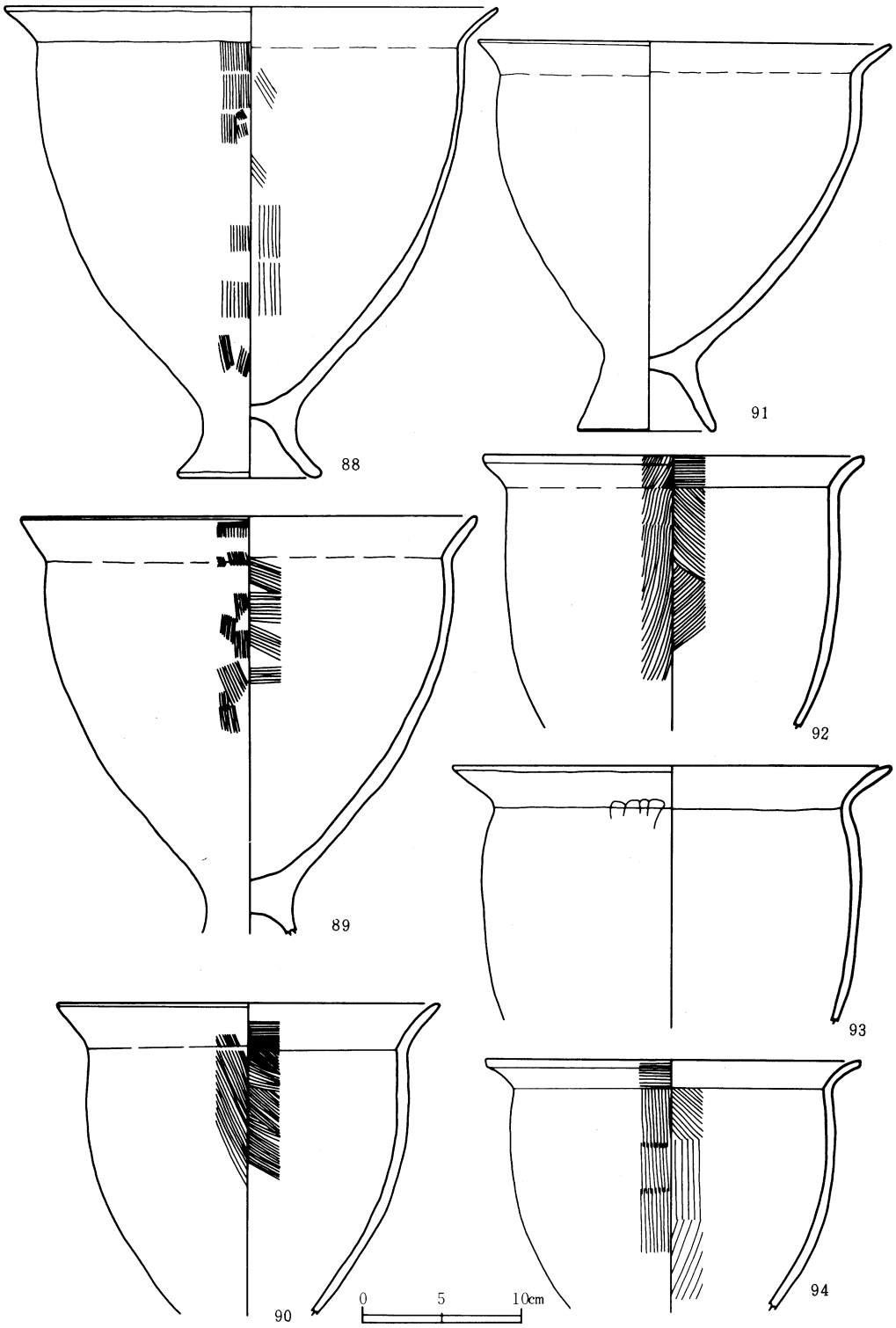
第13図　甕形土器（Ⅰ・Ⅱ類）



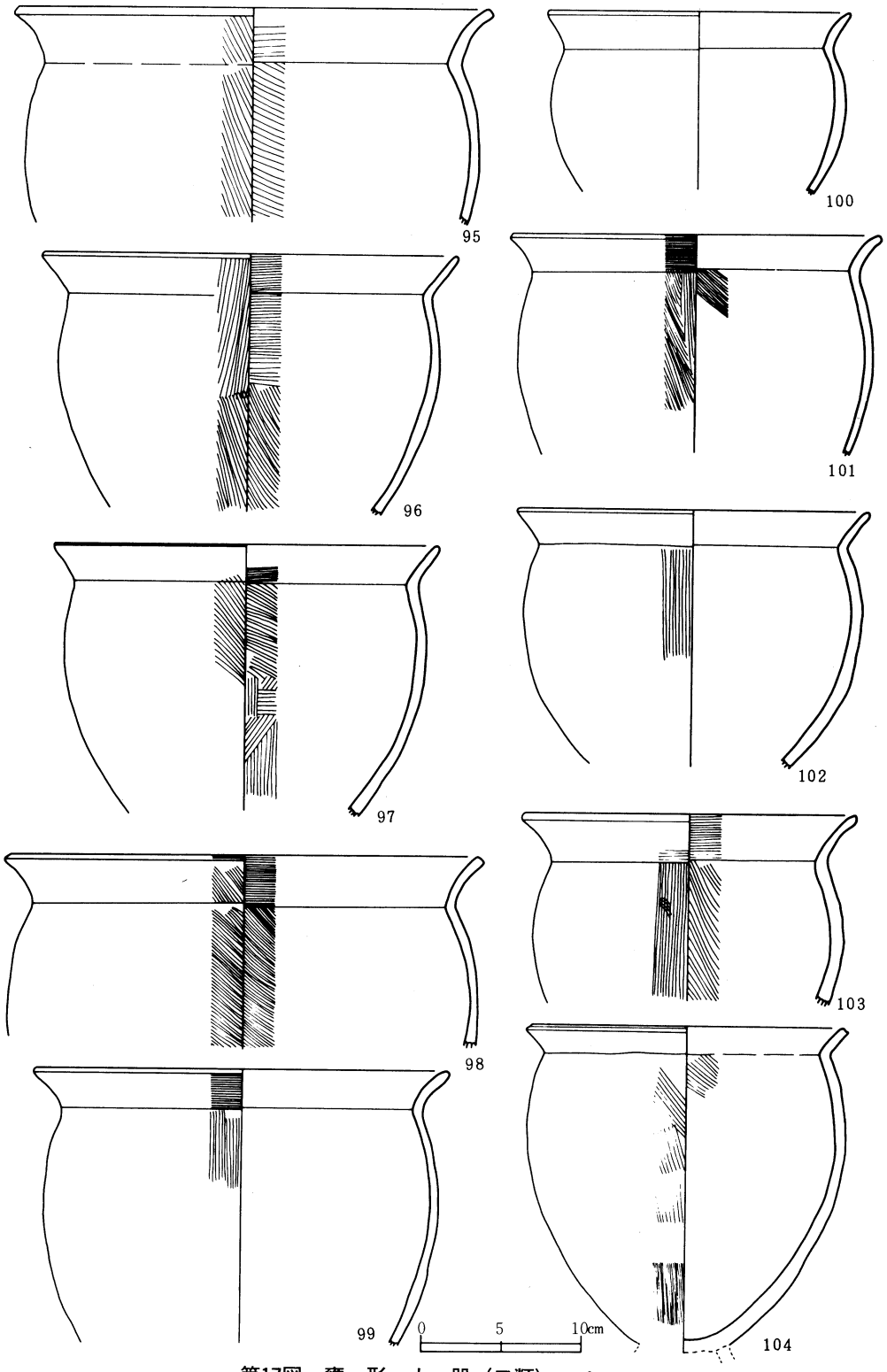
第14図　甕　形　土　器（Ⅲ類）－1



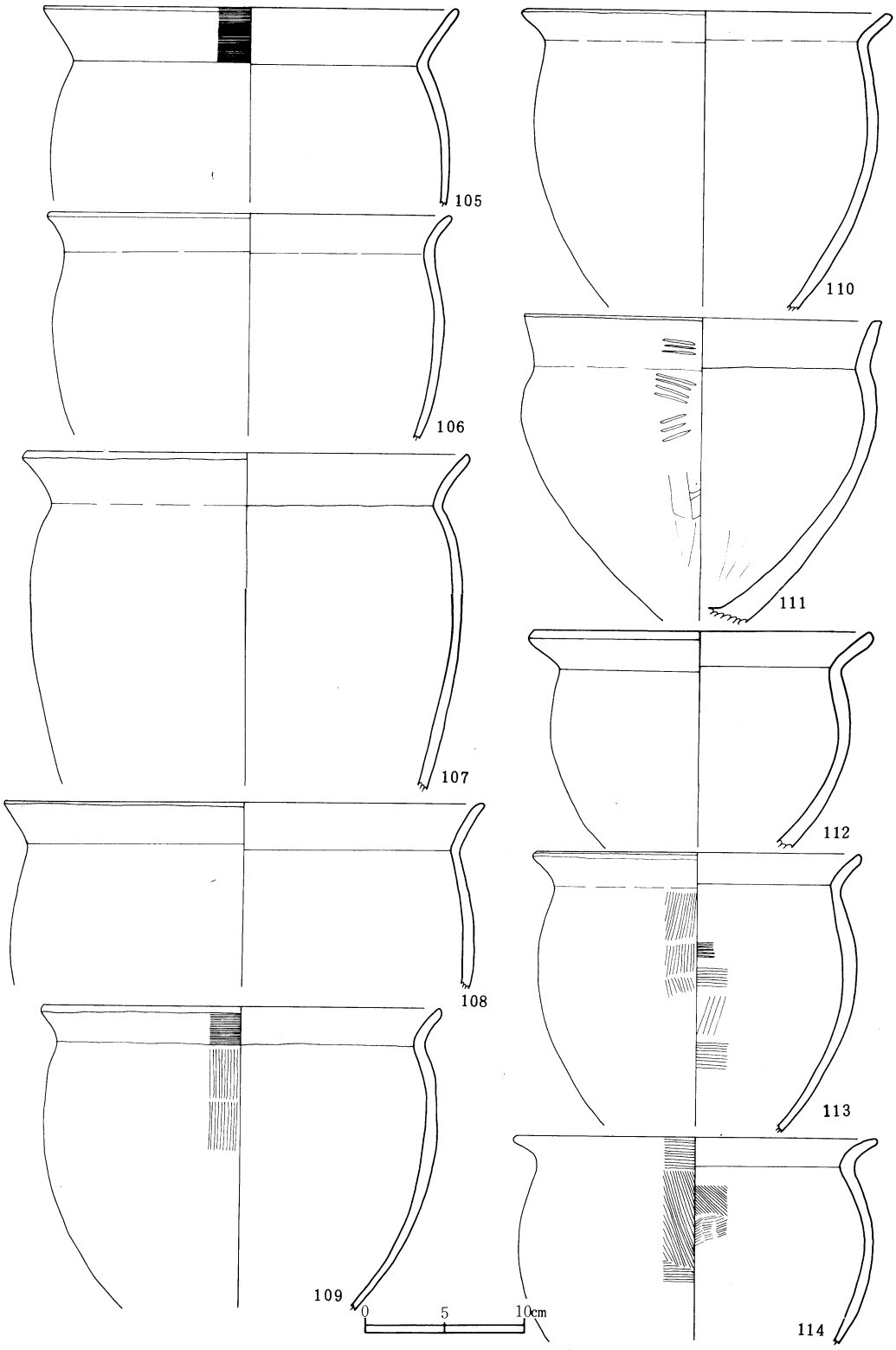
第15図　甕　形　土　器（Ⅲ類）－2



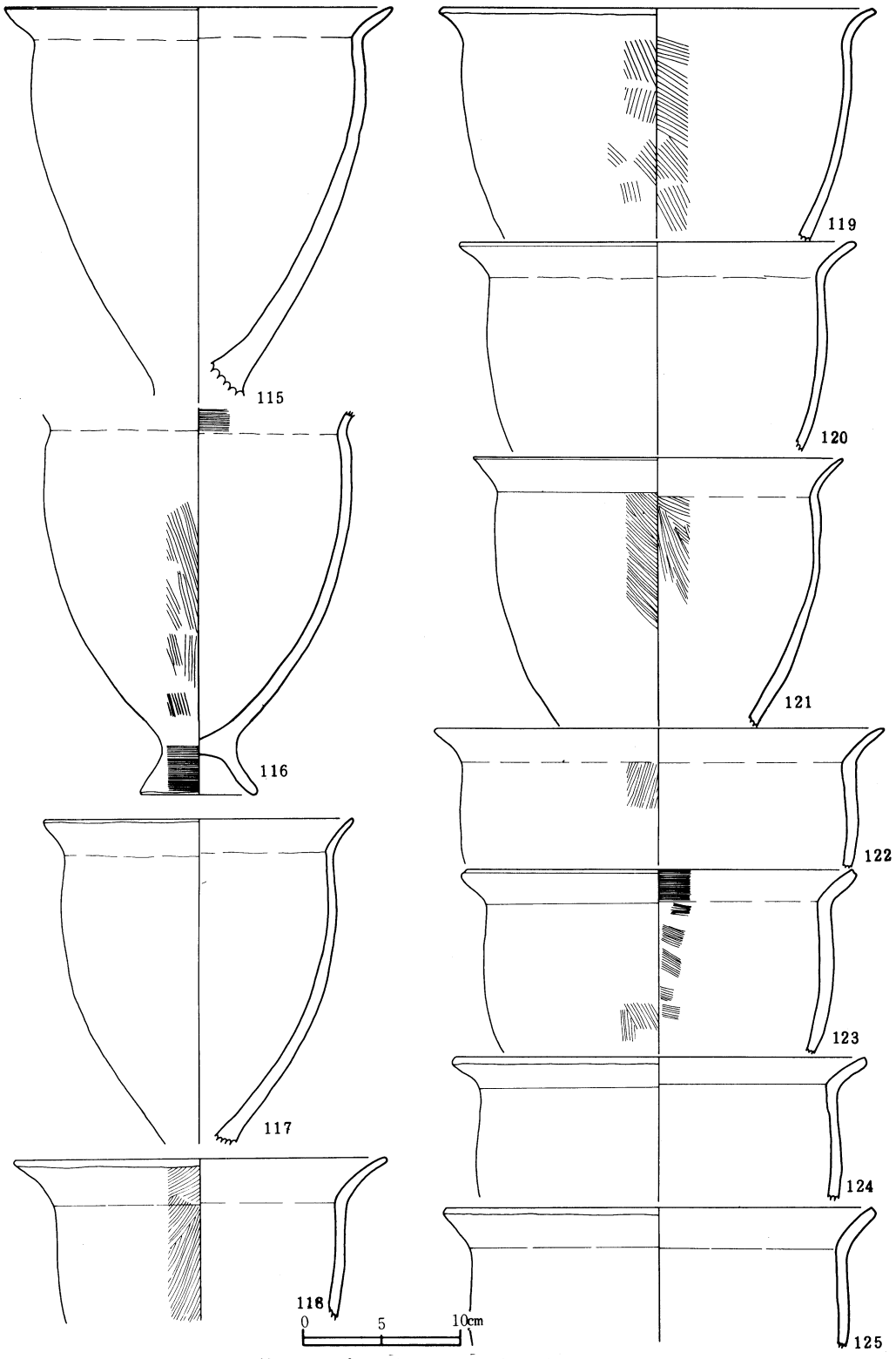
第16図　甕　形　土　器（Ⅲ類）－3



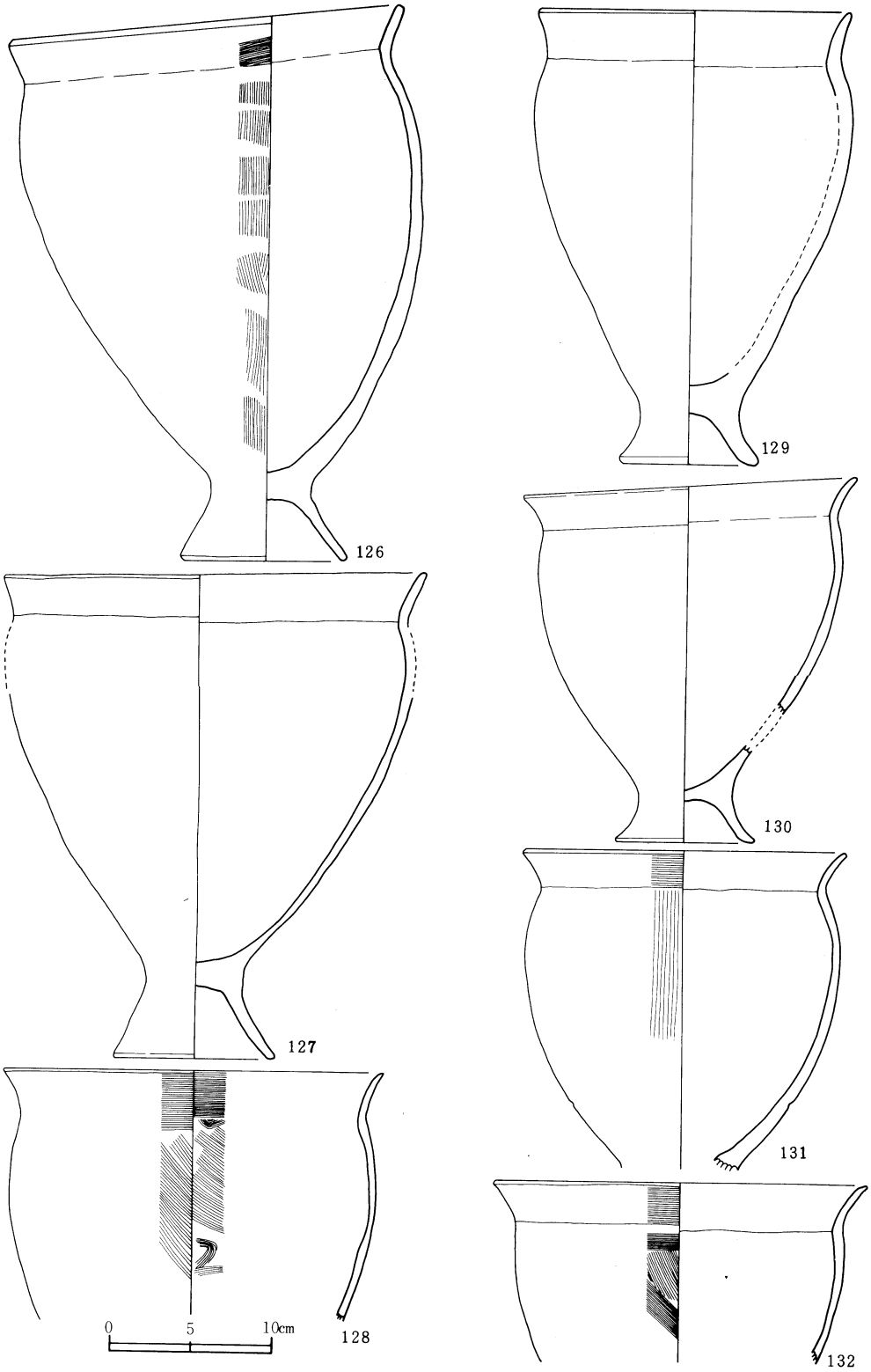
第17図　甕　形　土　器（Ⅲ類）－4



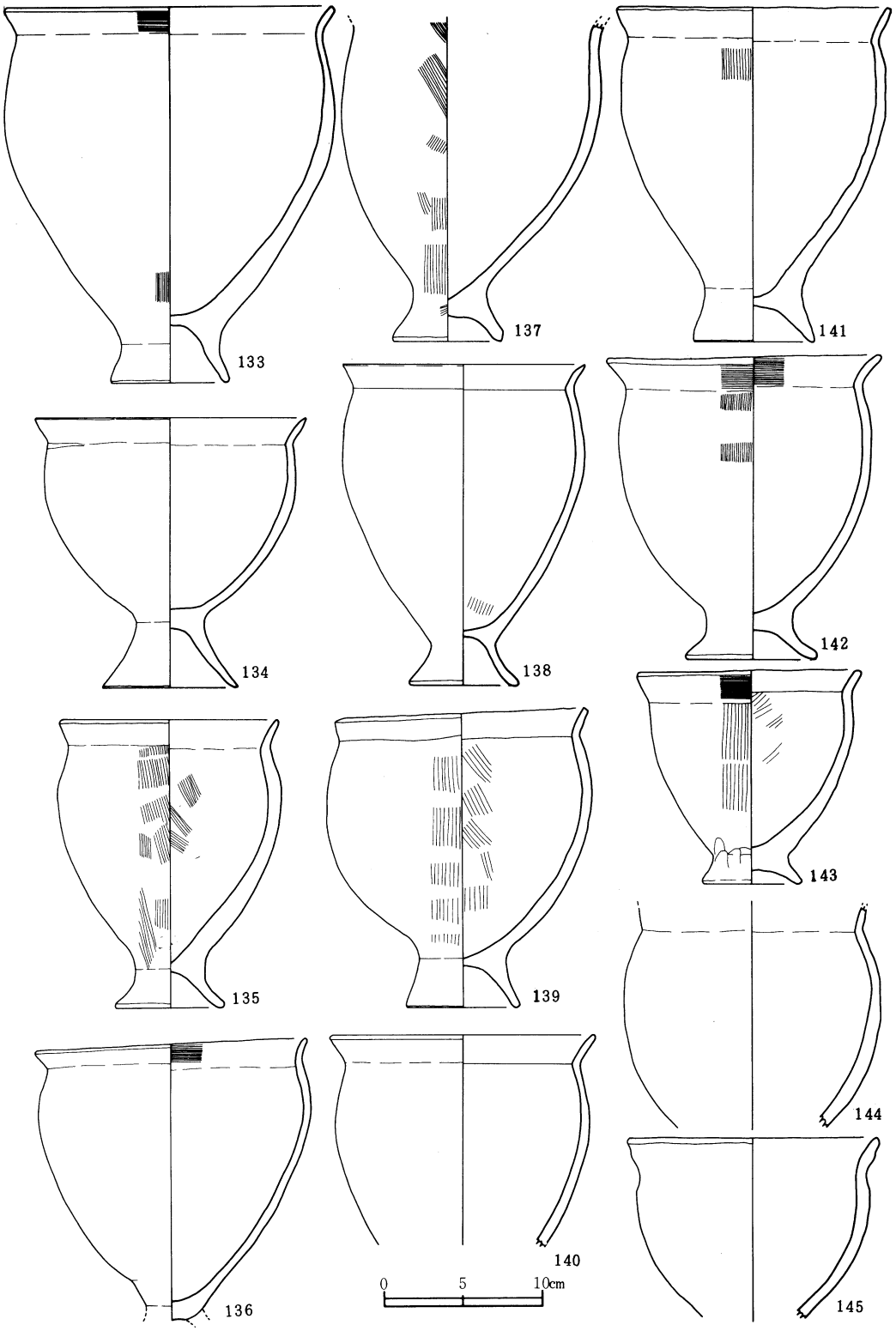
第18図　甕　形　土　器（Ⅲ類）－5



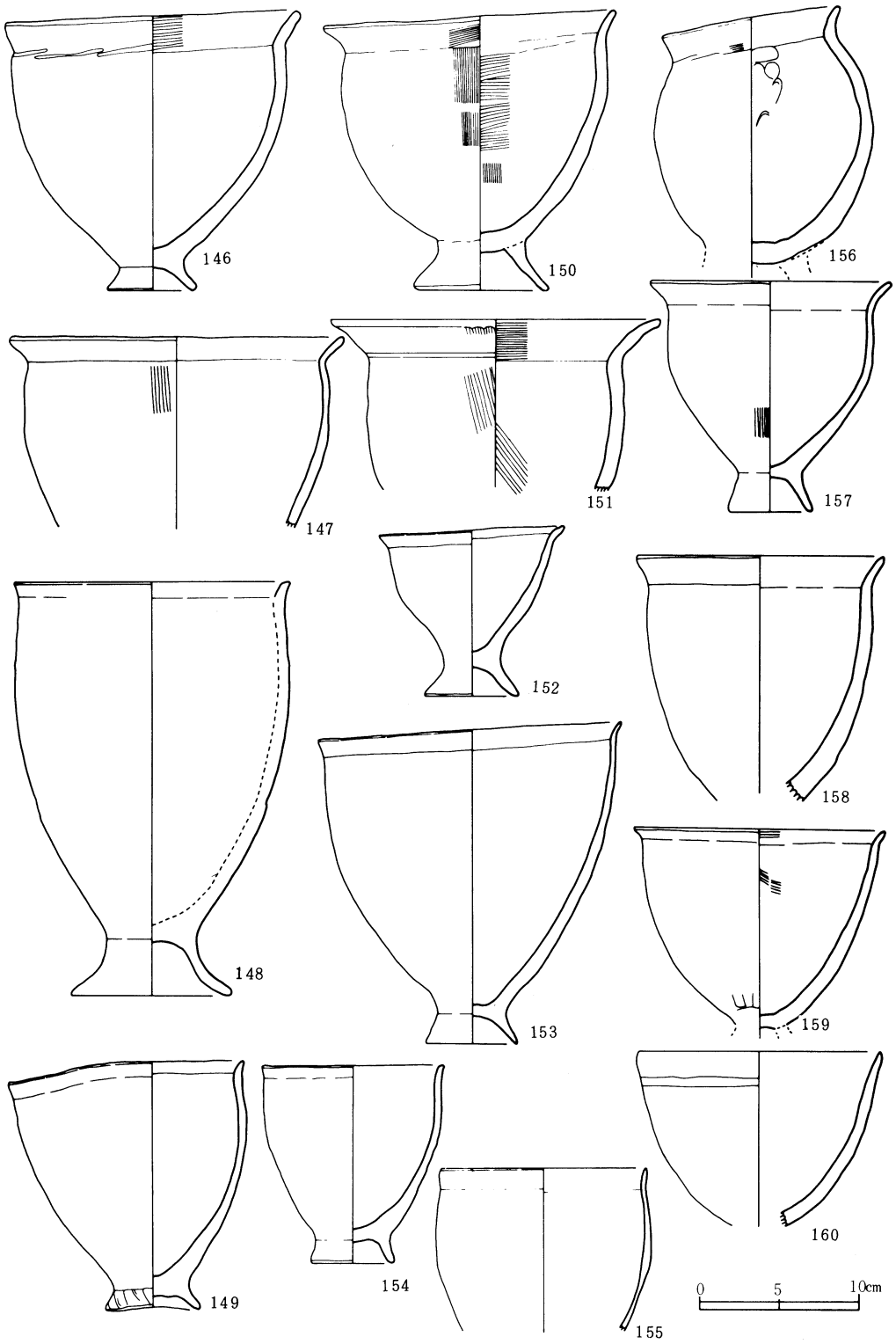
第19図　甕　形　土　器（Ⅲ類）－6



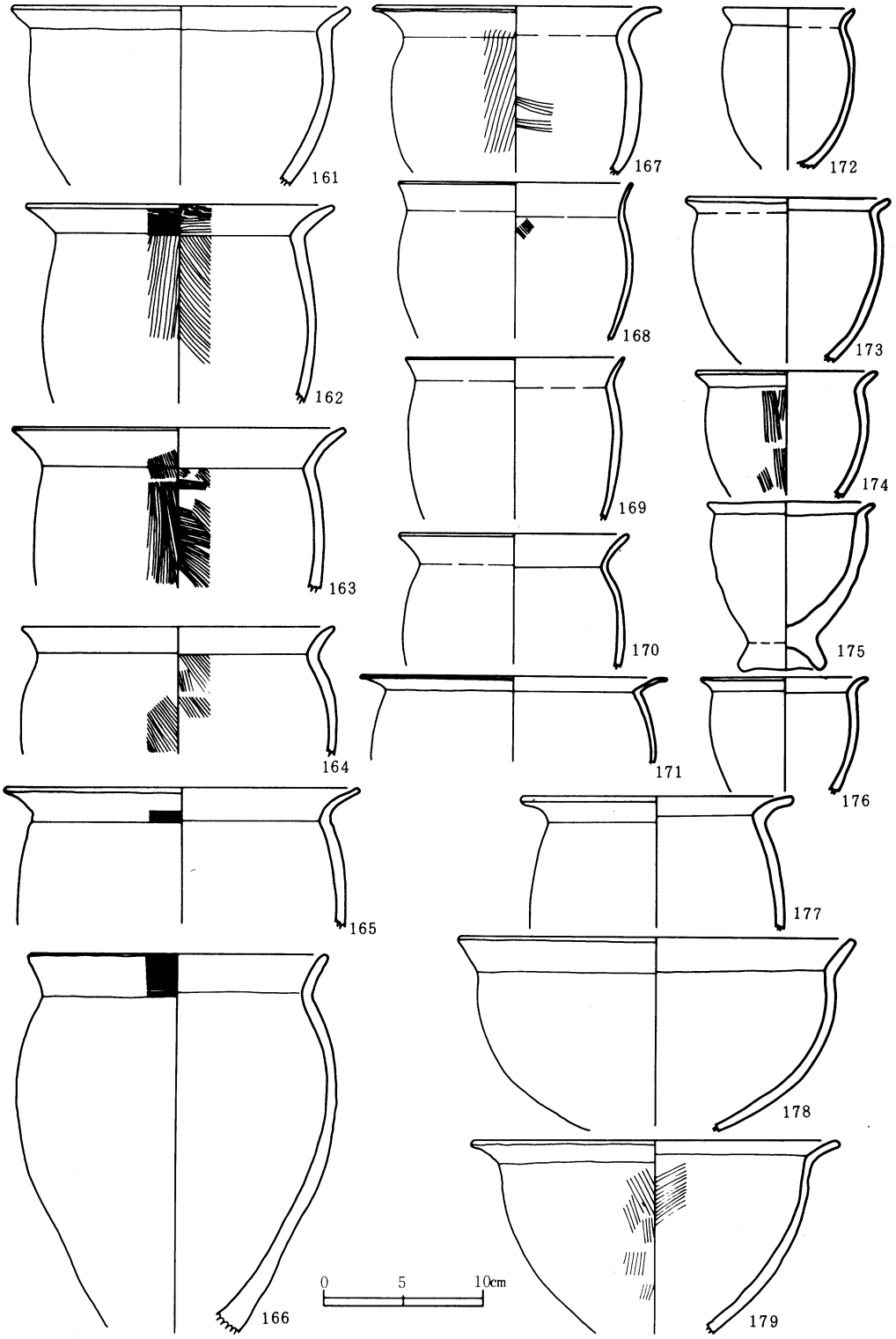
第20図　甕　形　土　器（Ⅲ類）－7



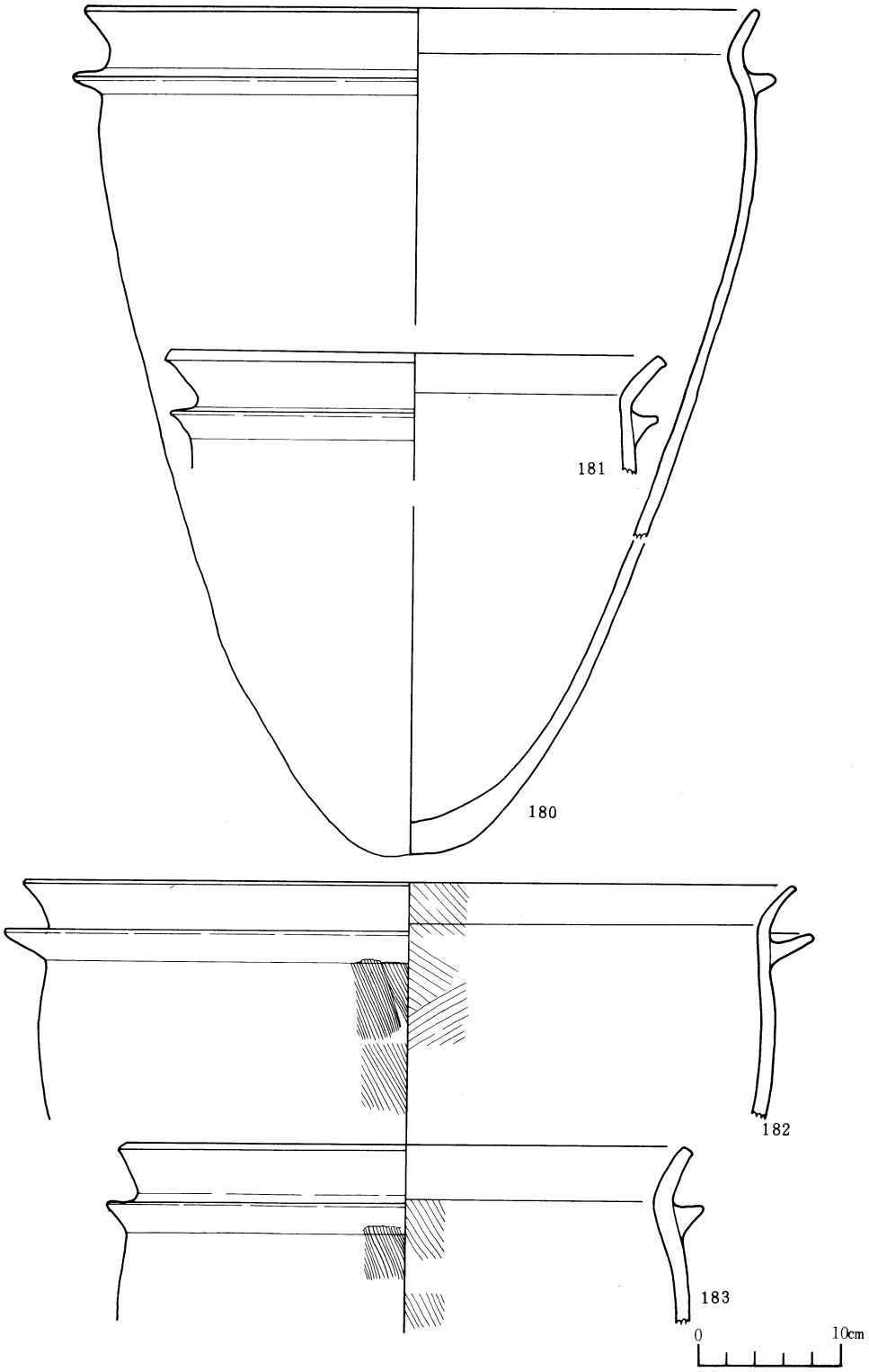
第21図　甕　形　土　器（Ⅲ類）－8



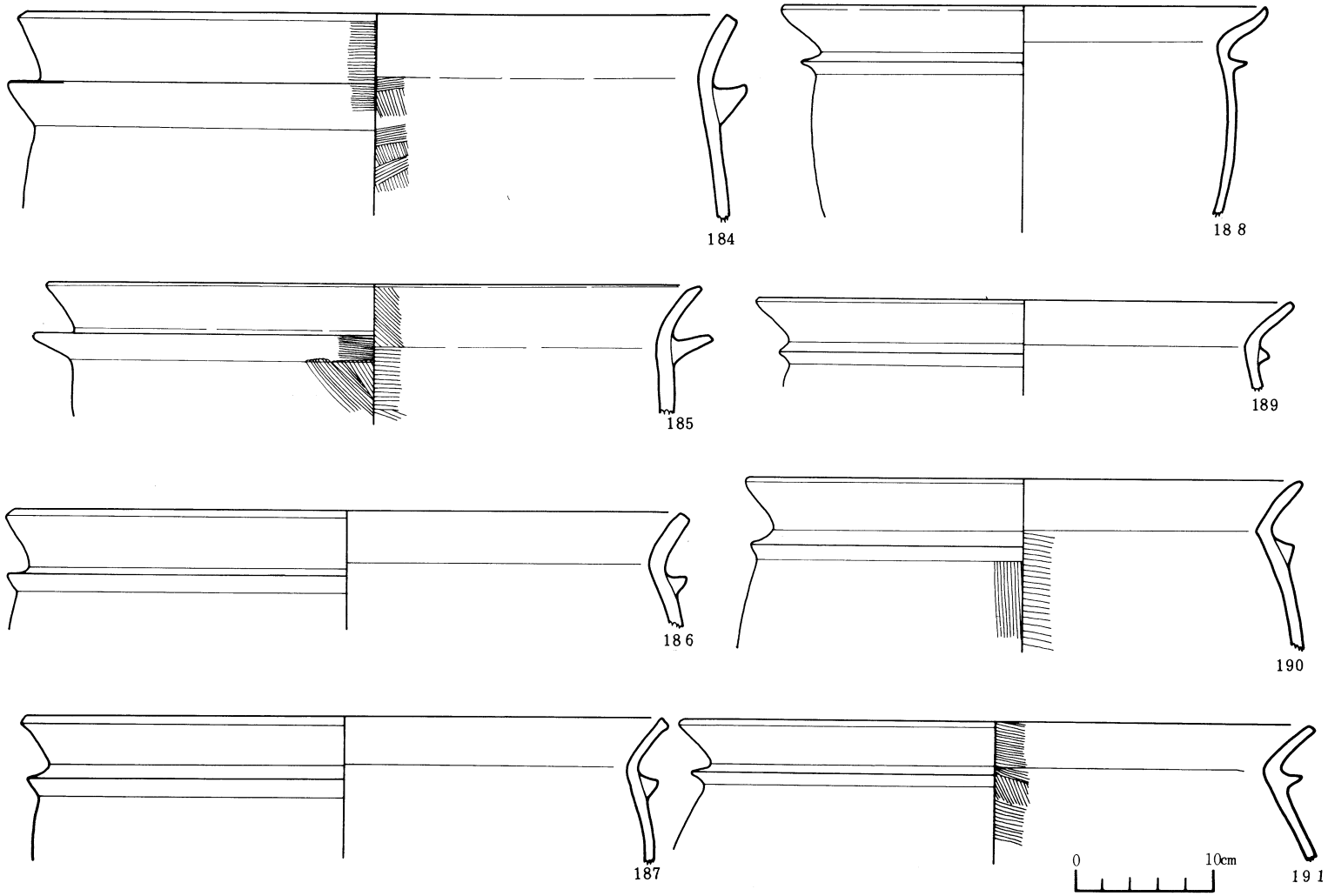
第22図　甕　形　土　器（Ⅲ類）－9



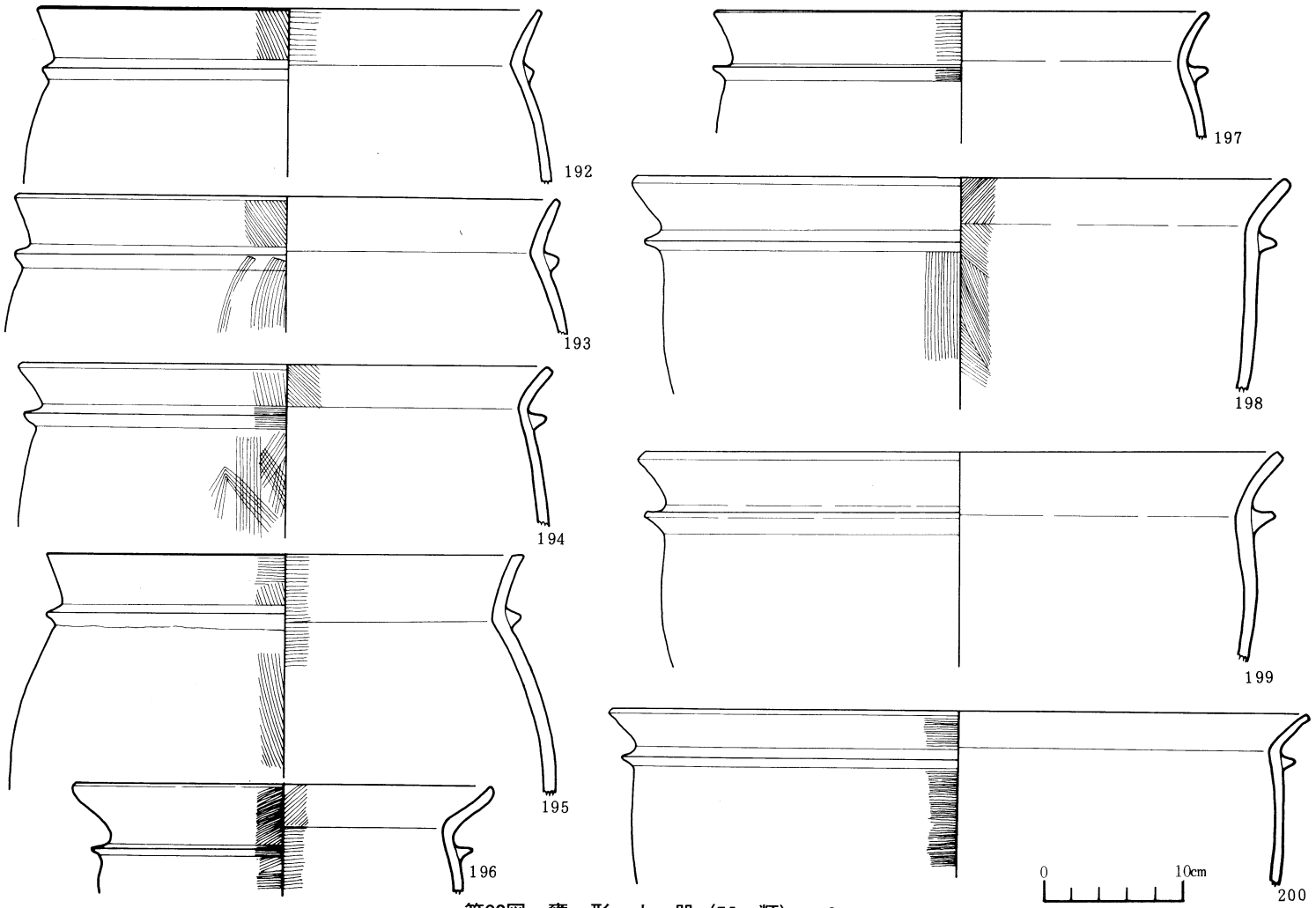
第23図　甕　形　土　器（Ⅲ類）－10



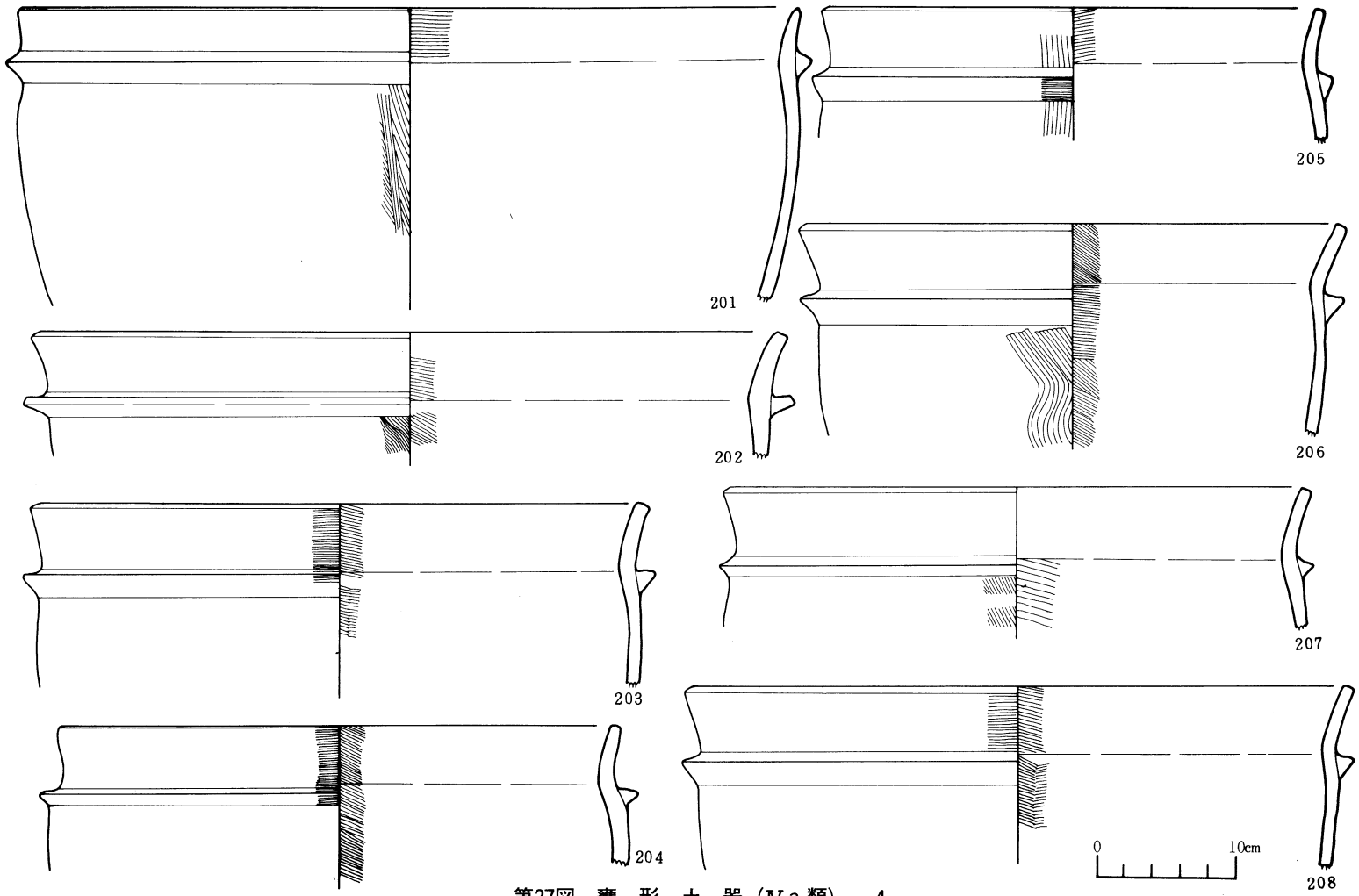
第24図　甕　形　土　器（Ⅳa類）－1



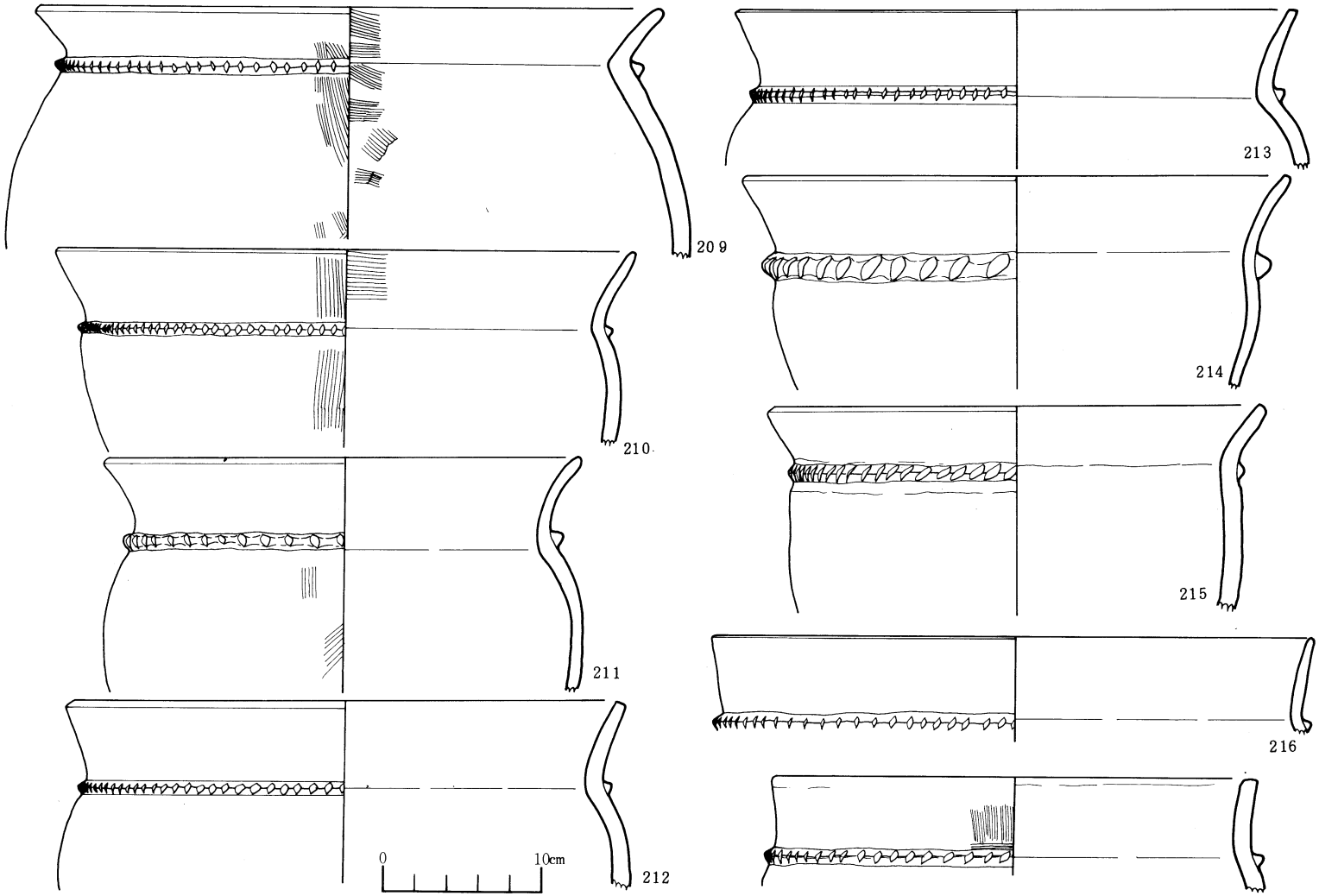
第25図　甕　形　土　器（Ⅳa類）－2



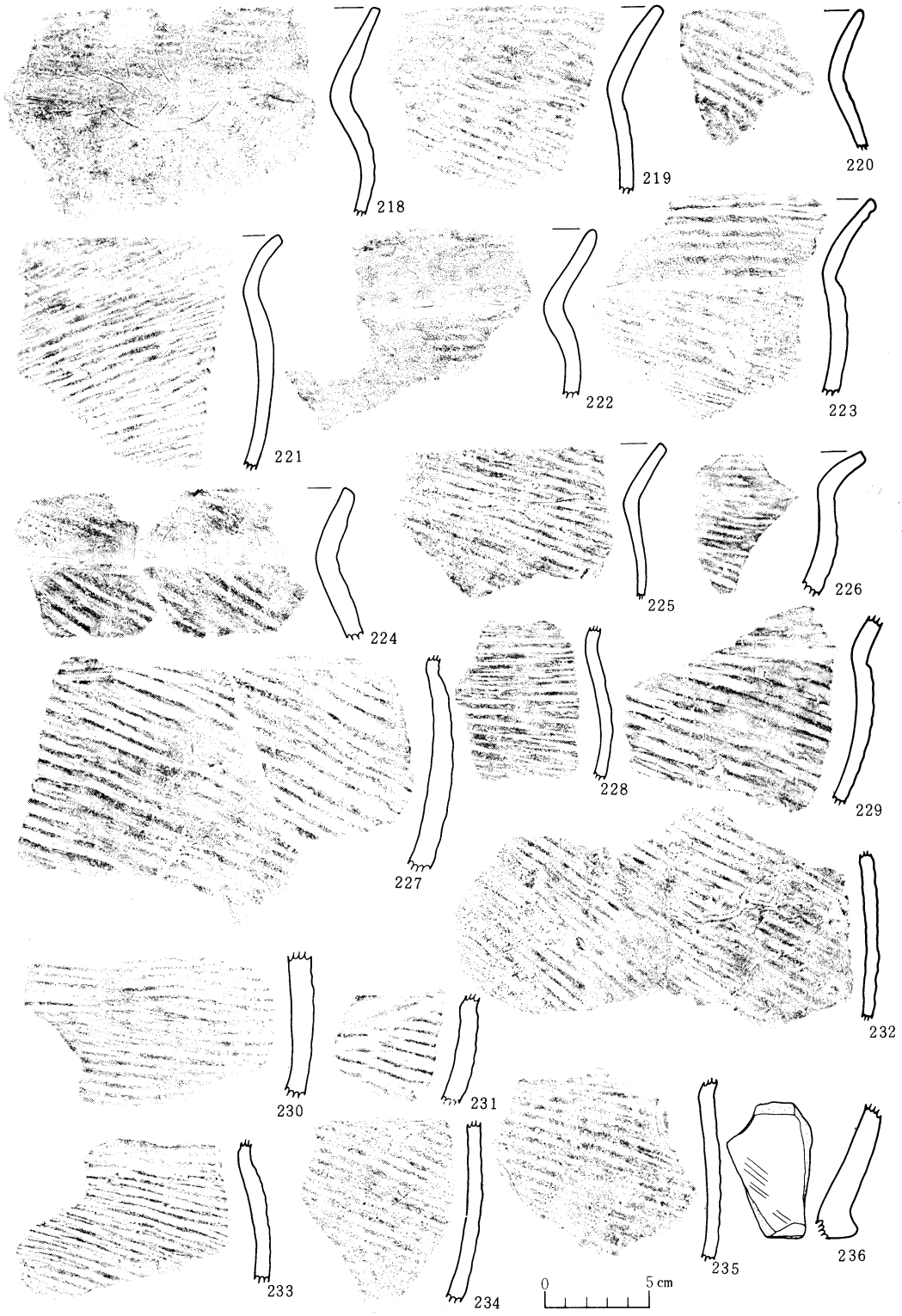
第26図　甕　形　土　器（Ⅳa類）－3



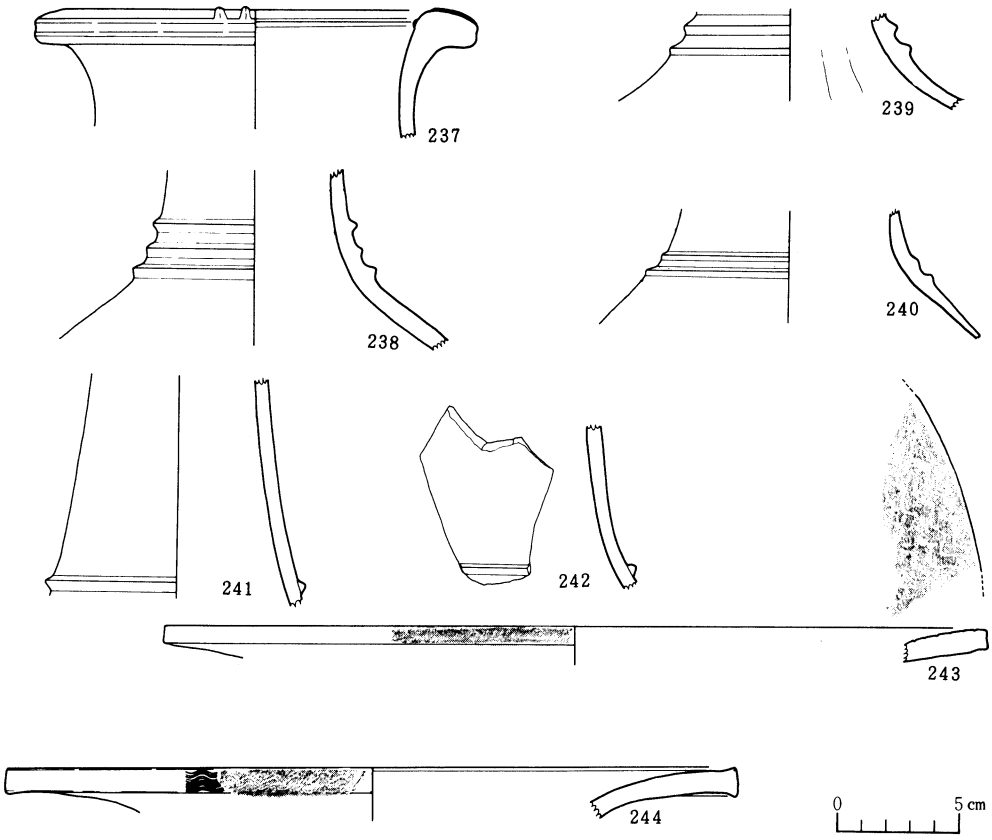
第27図　甕　形　土　器（Ⅳa類）－4



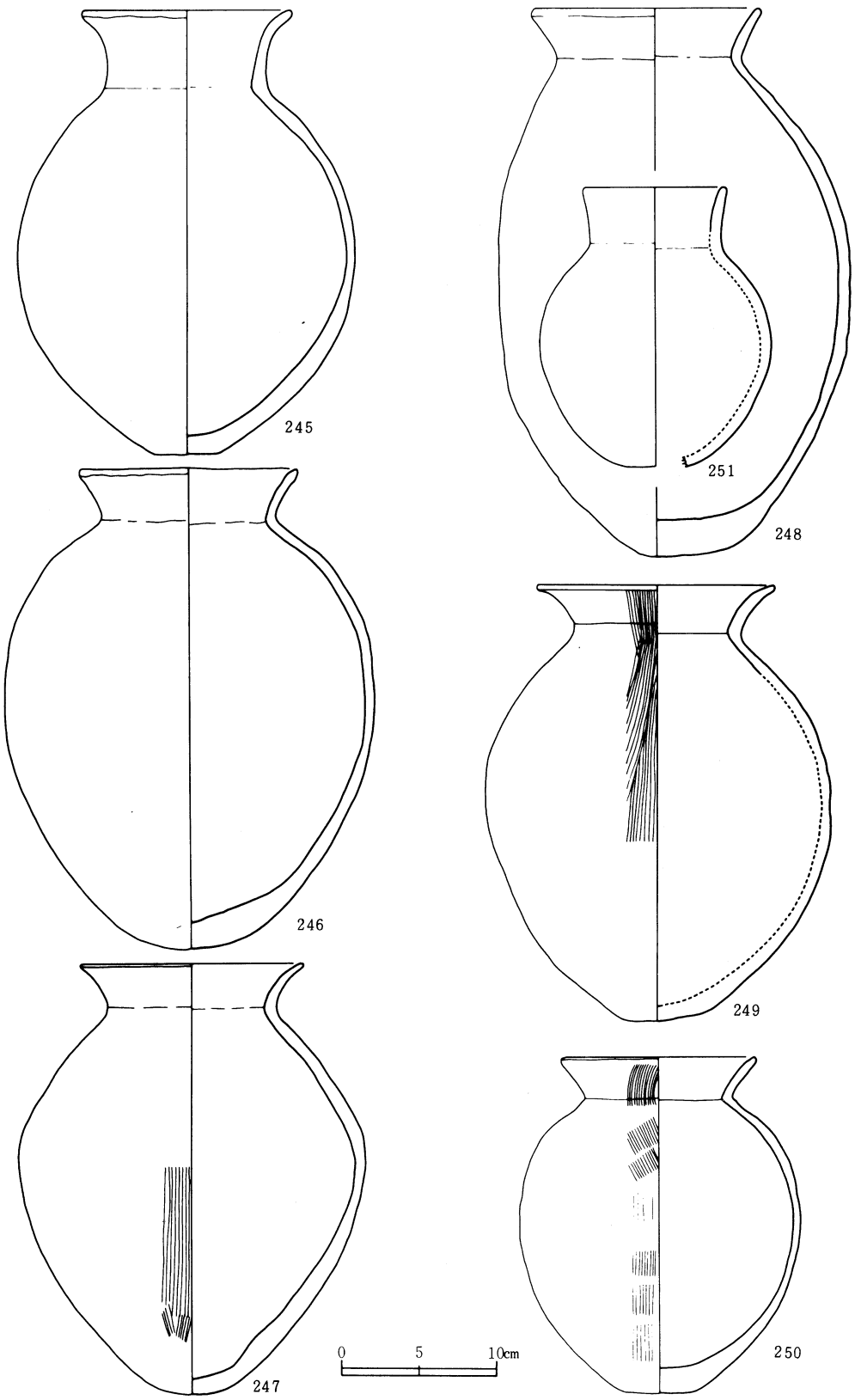
第28図　甕　形　土　器（Ⅳb類）


218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
0
5 cm

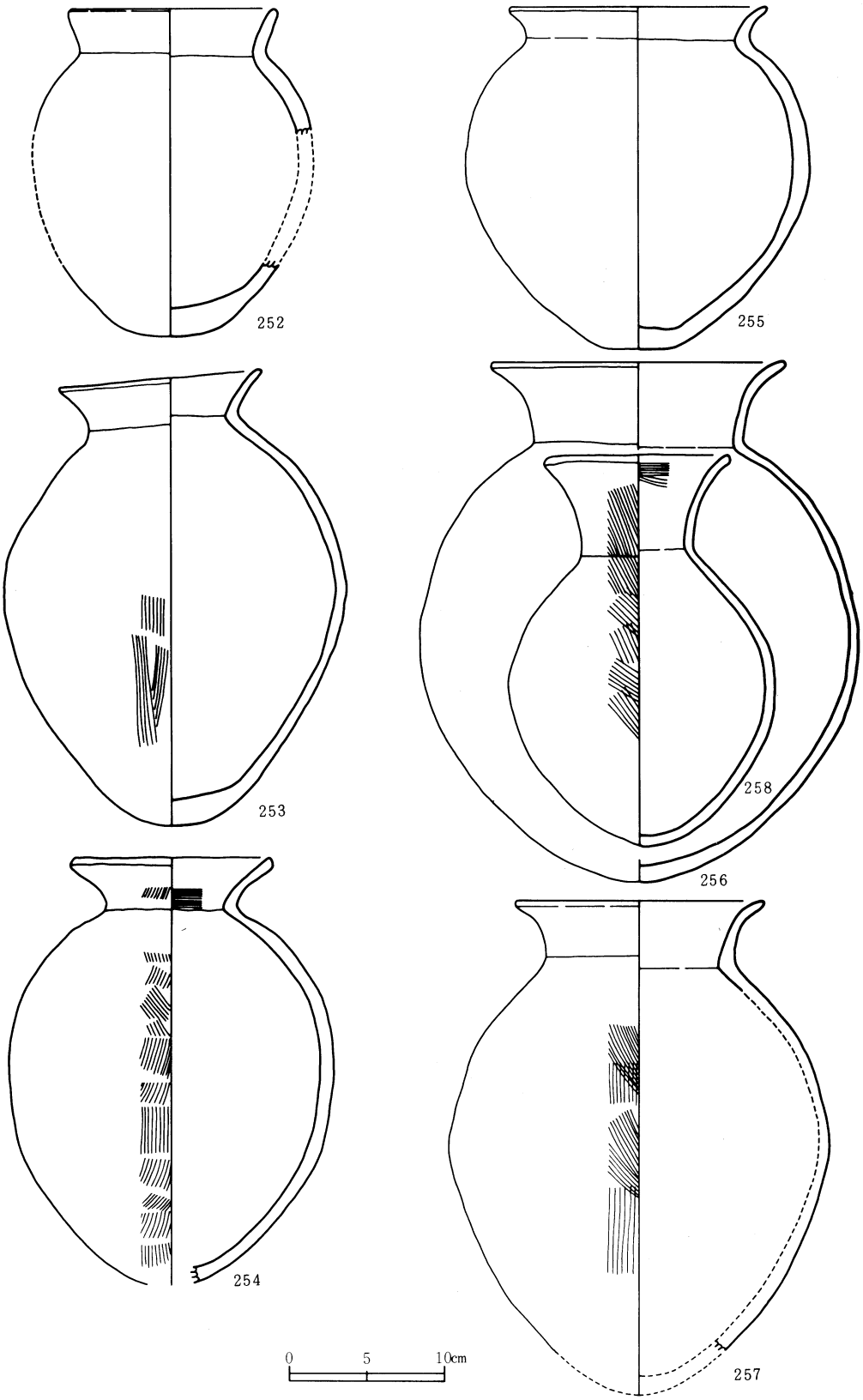
第29図　甕　形　土　器（Ⅳ類）



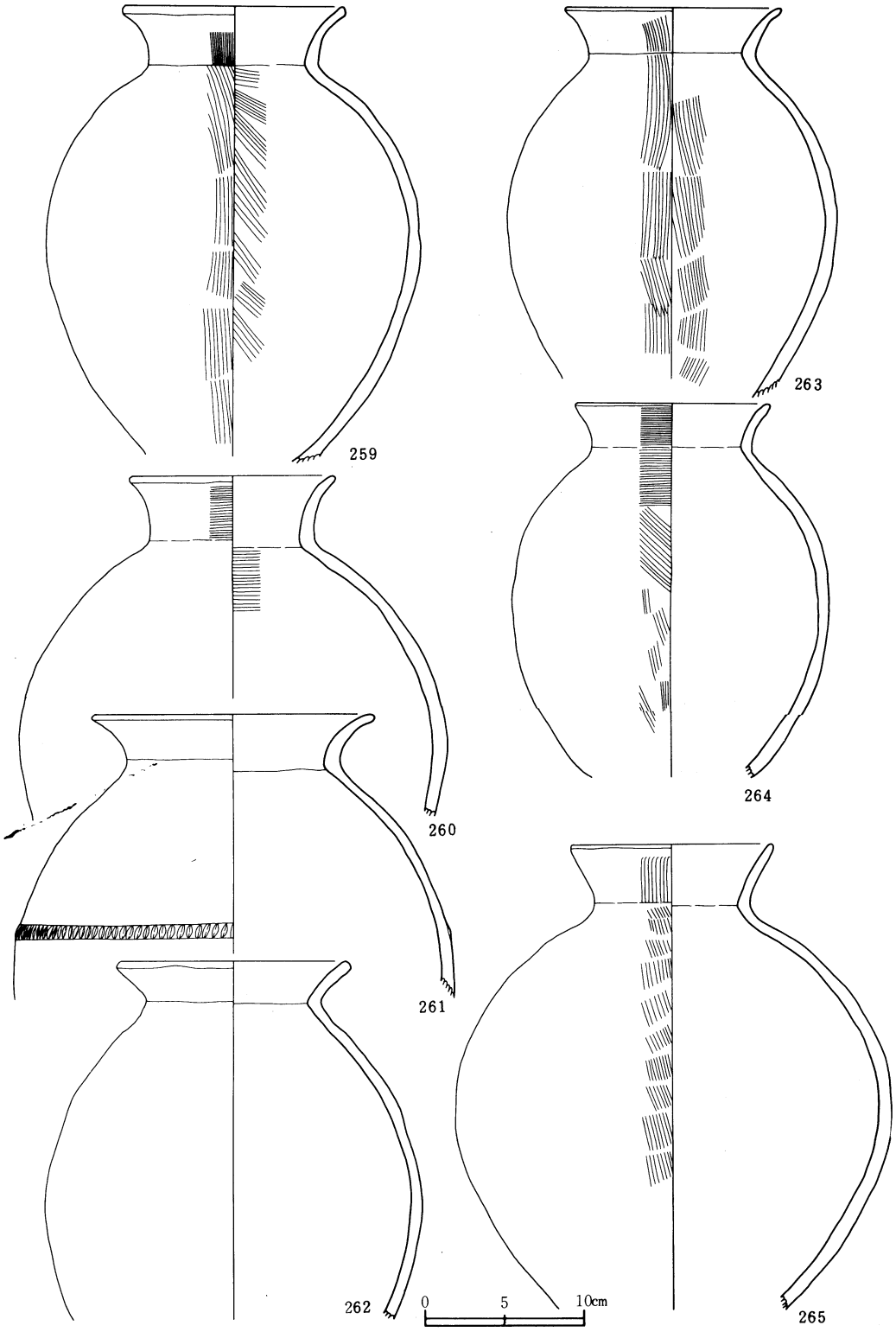
第30図　壺　形　土　器（Ⅰ類・Ⅱ類）



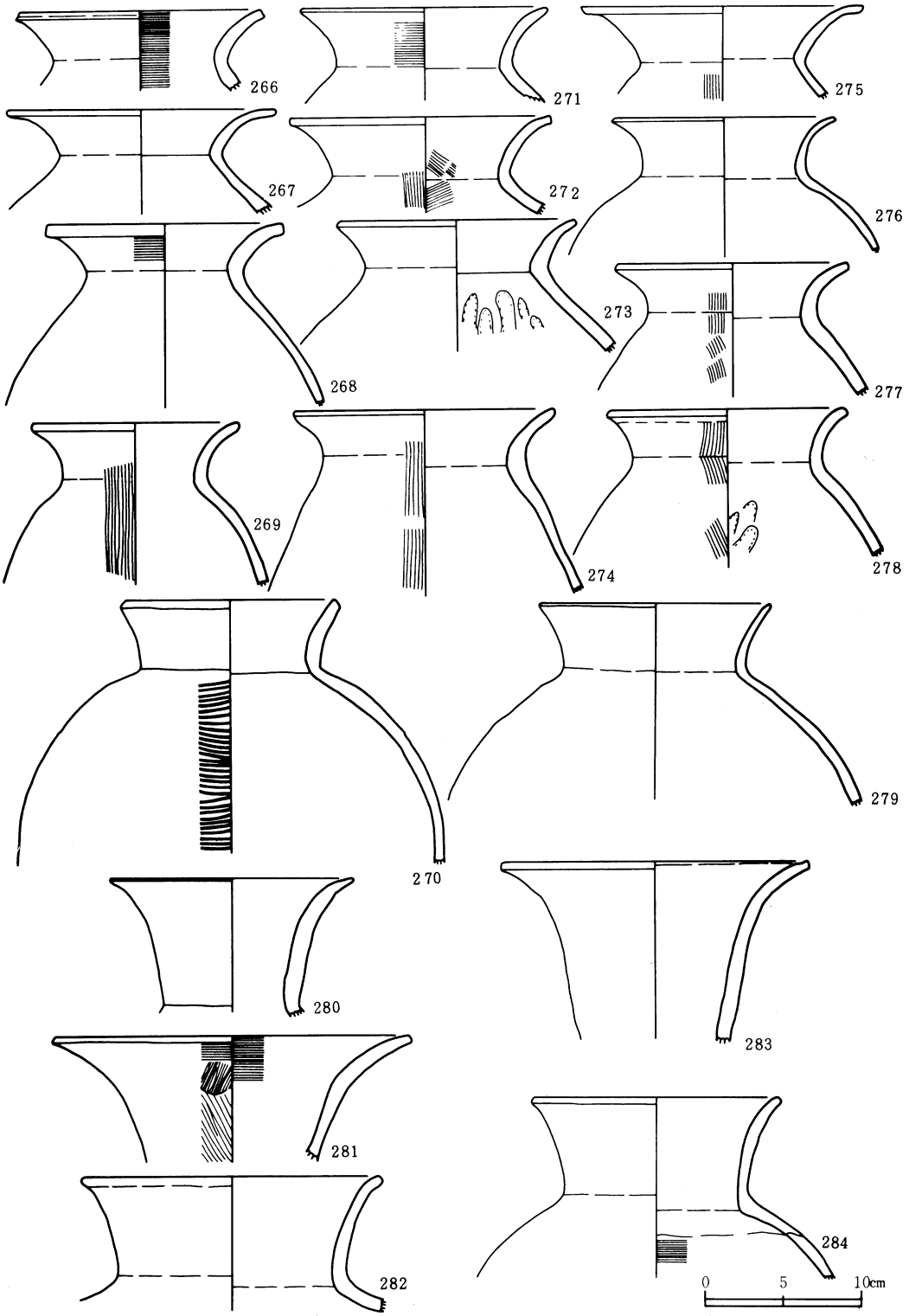
第31図　壺　形　土　器（Ⅲ類）－1



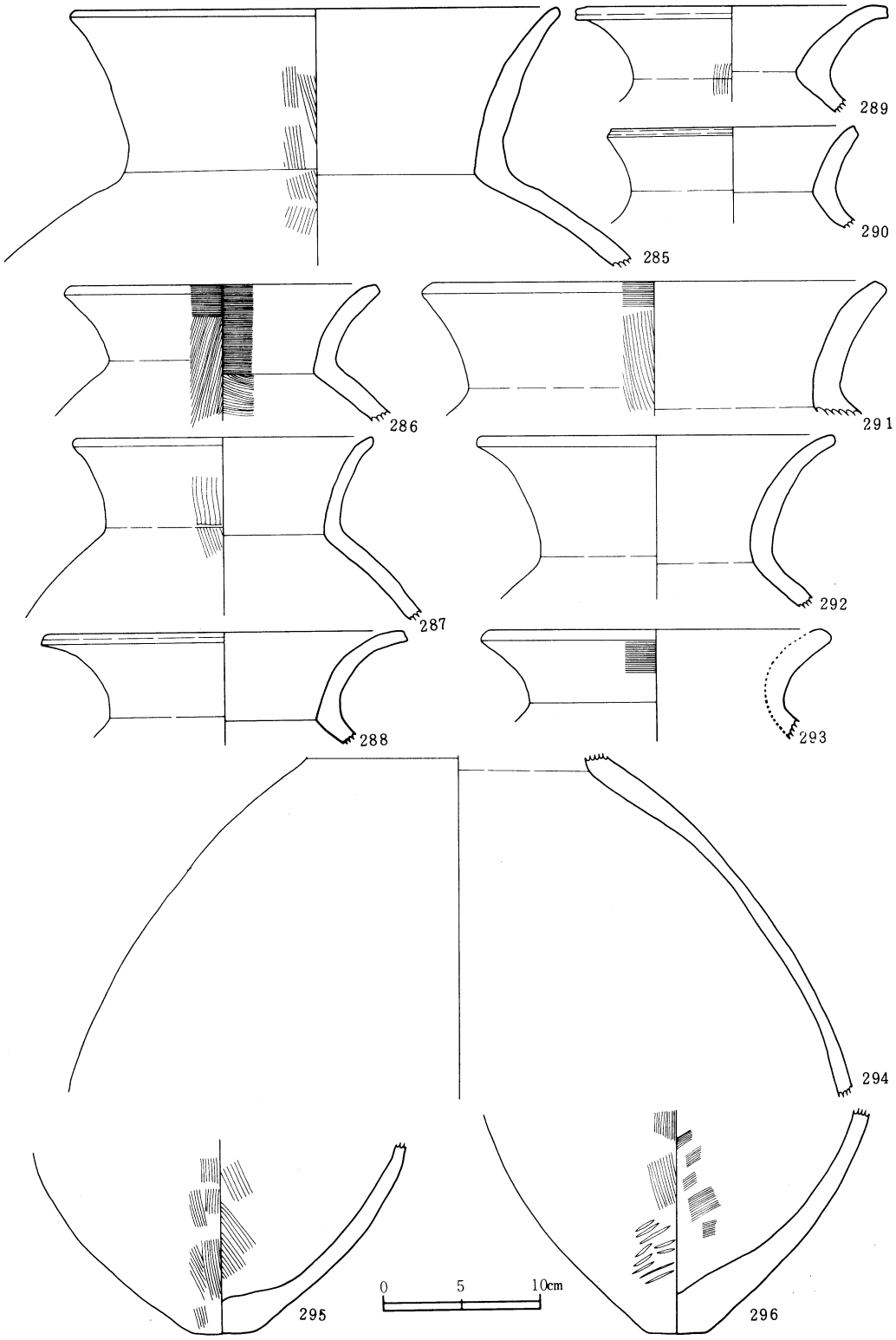
第32図　壺　形　土　器（Ⅲ類）－2



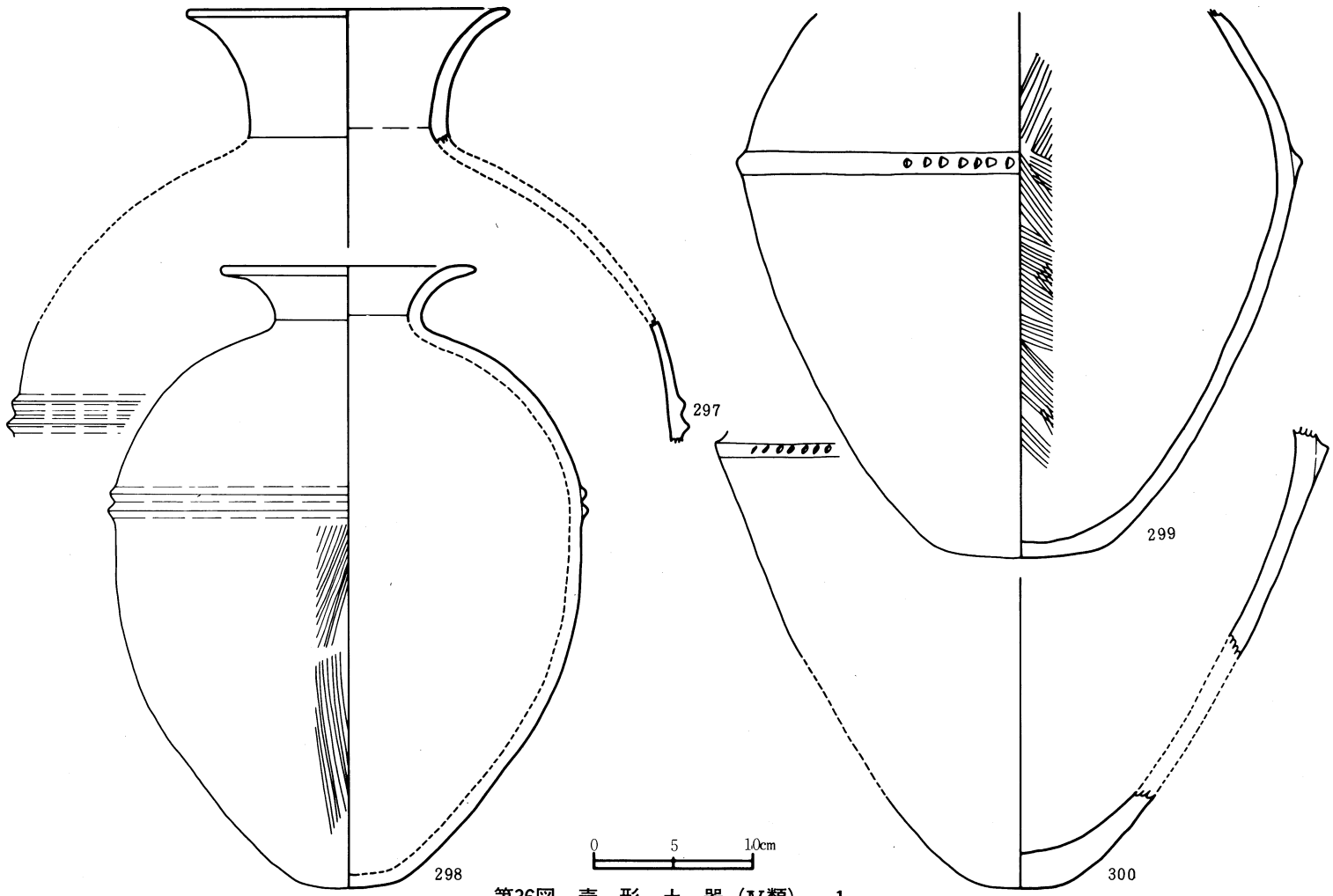
第33図　壺　形　土　器（Ⅲ類）－3



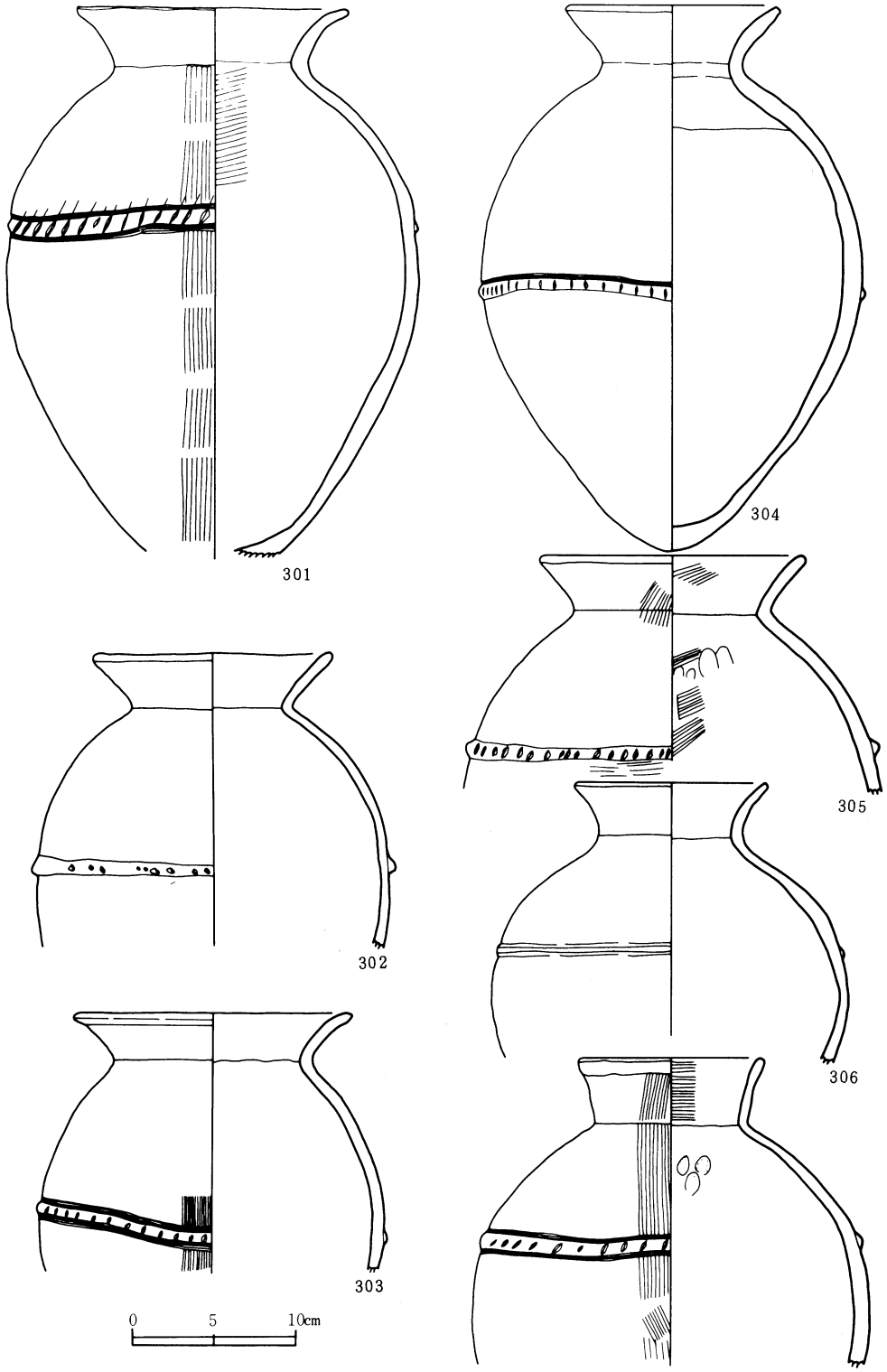
第34図　壺　形　土　器（Ⅲ類）－4



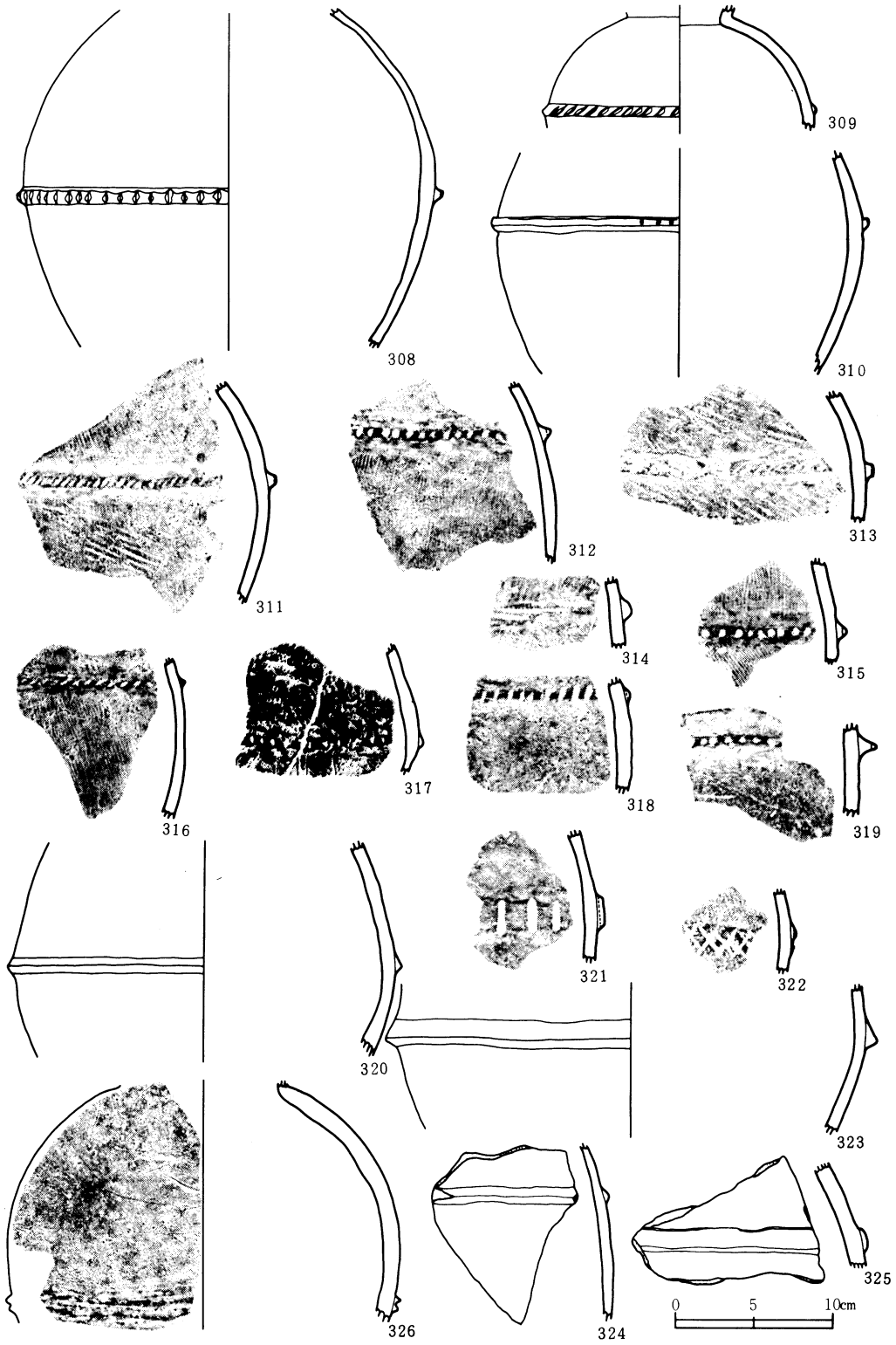
第35図　壺　形　土　器（Ⅲ類）－5



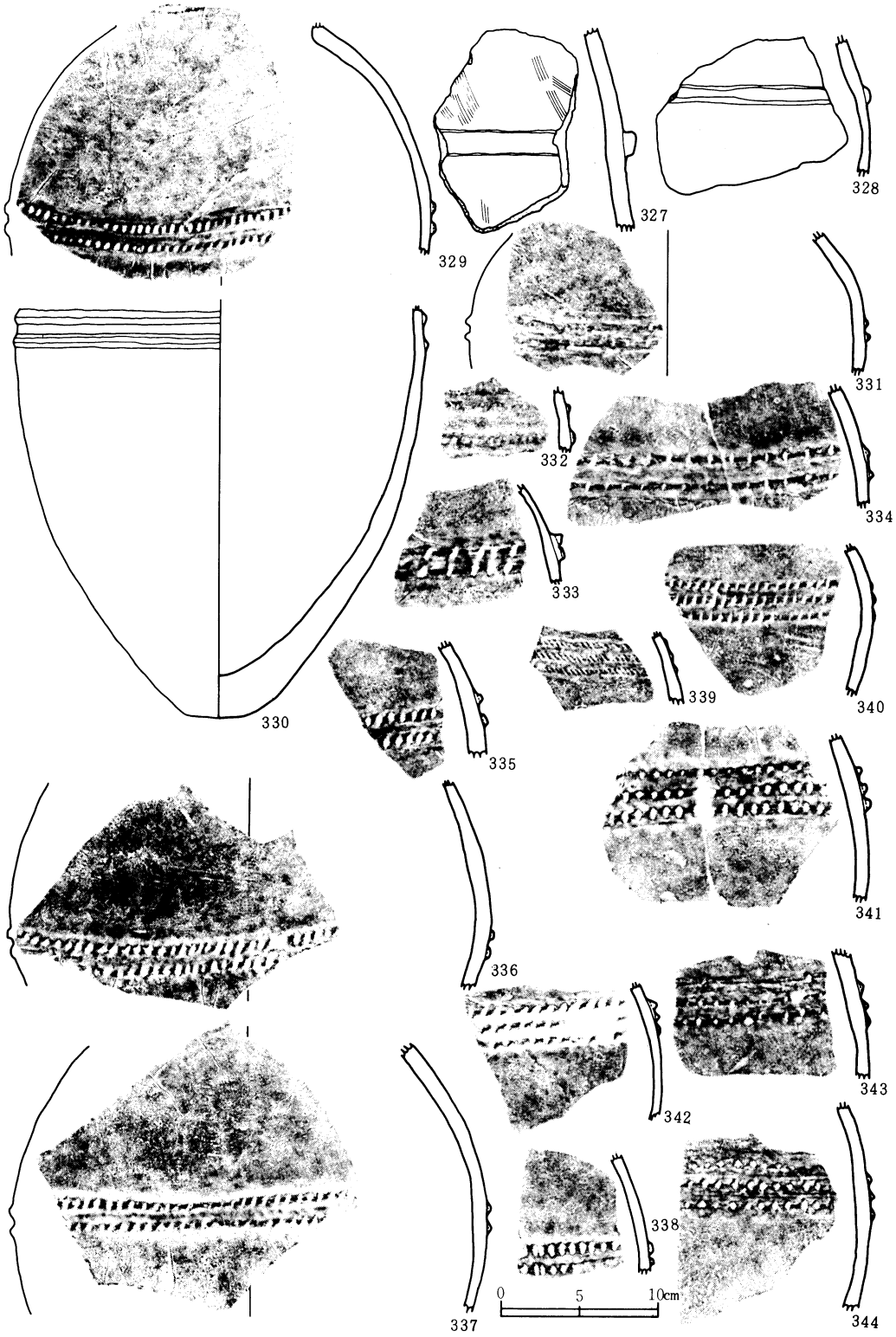
第36図　壺　形　土　器（Ⅳ類）－1



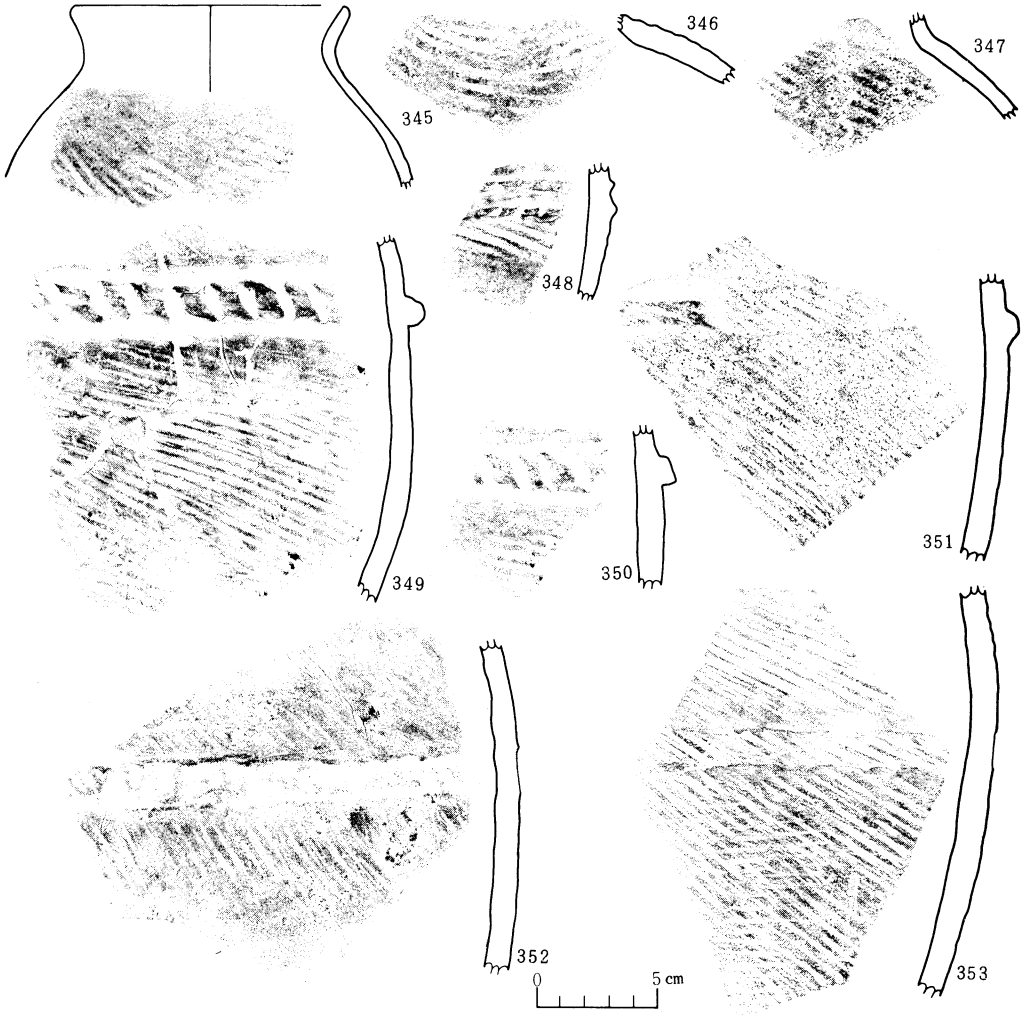
第37図　壺　形　土　器（Ⅳ類）－2



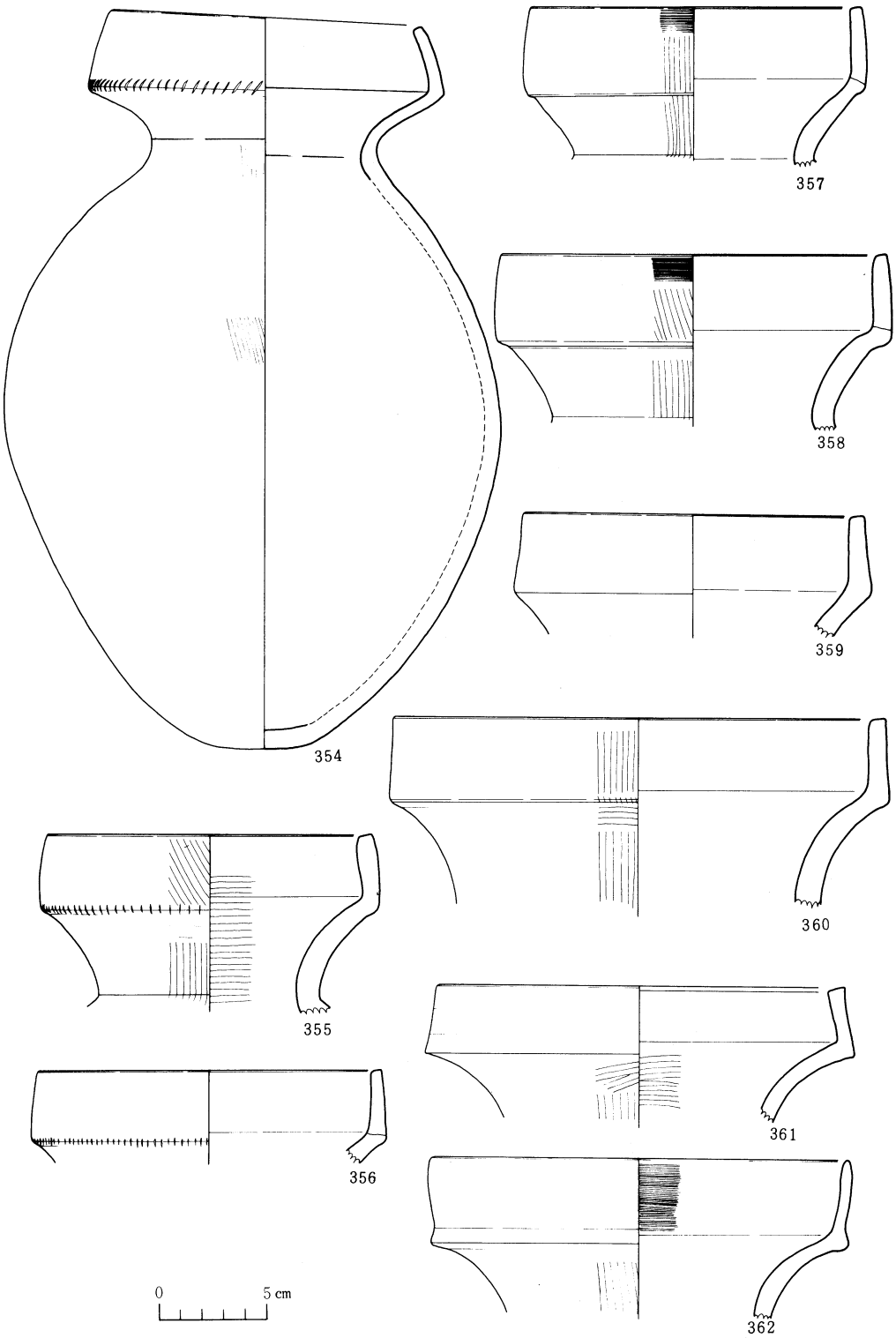
第38図　壺　形　土　器（Ⅳ類）－3



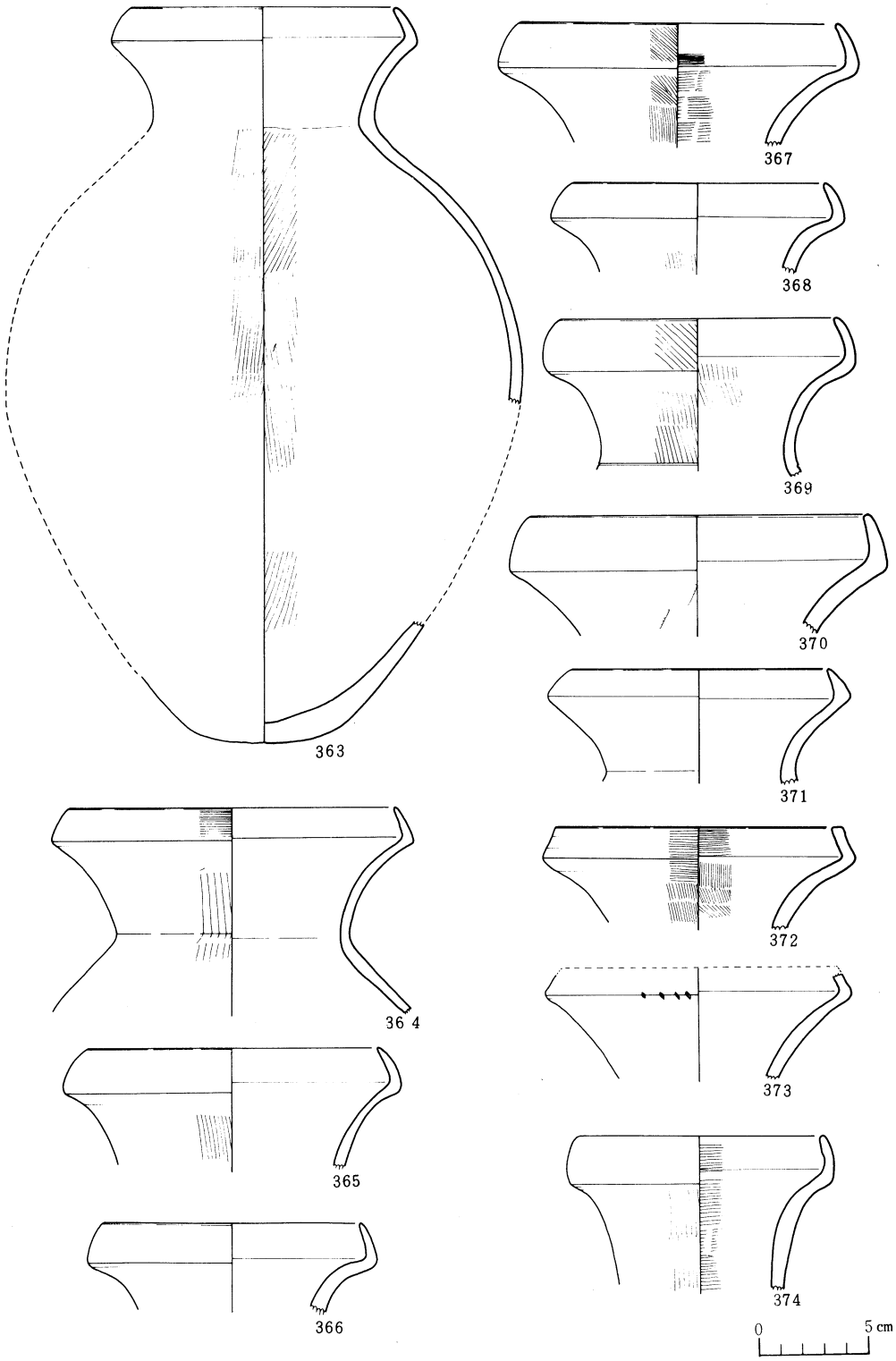
第39図　壺　形　土　器（Ⅳ類）－4



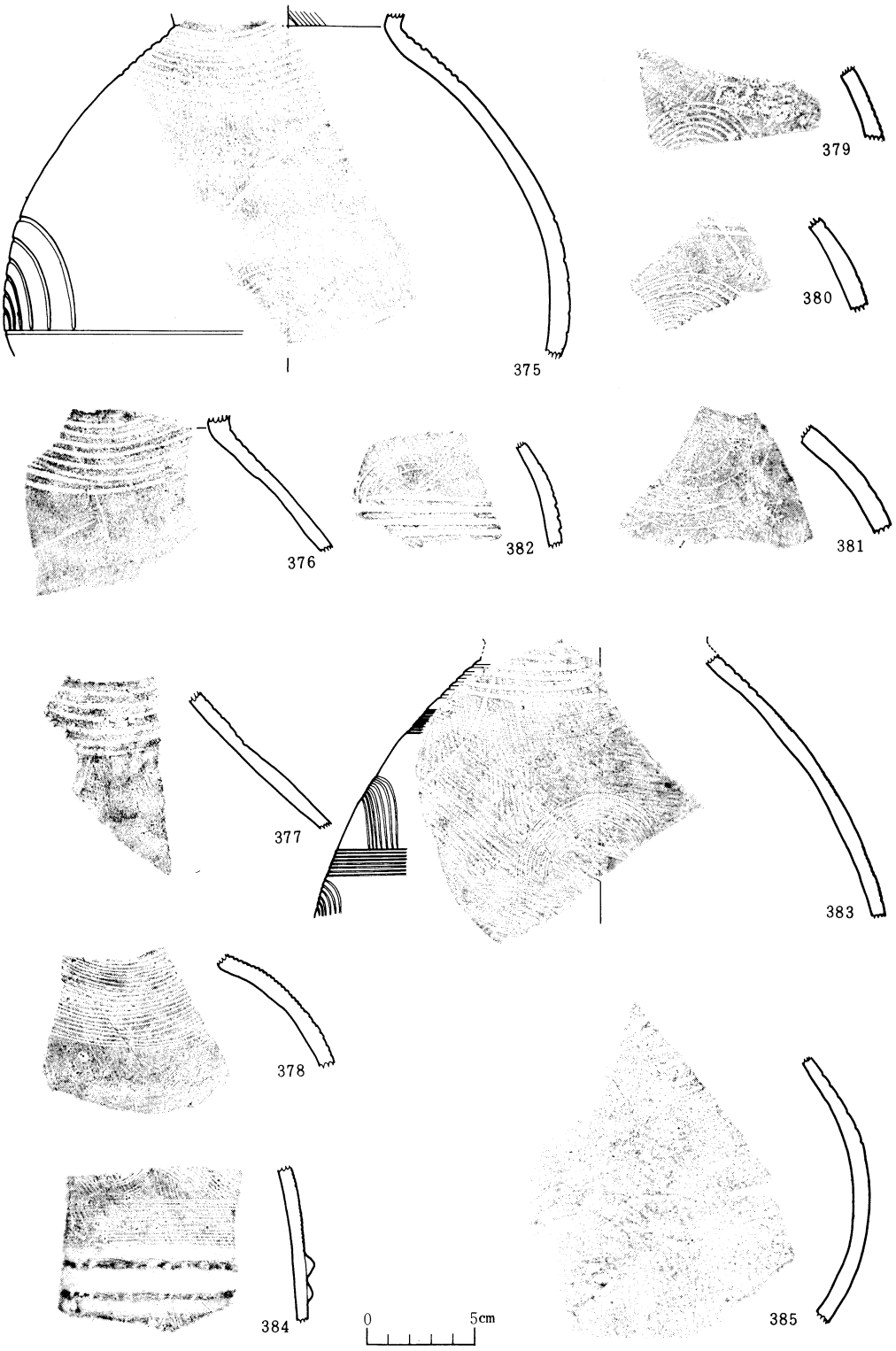
第40図　叩きのある土器（V類）



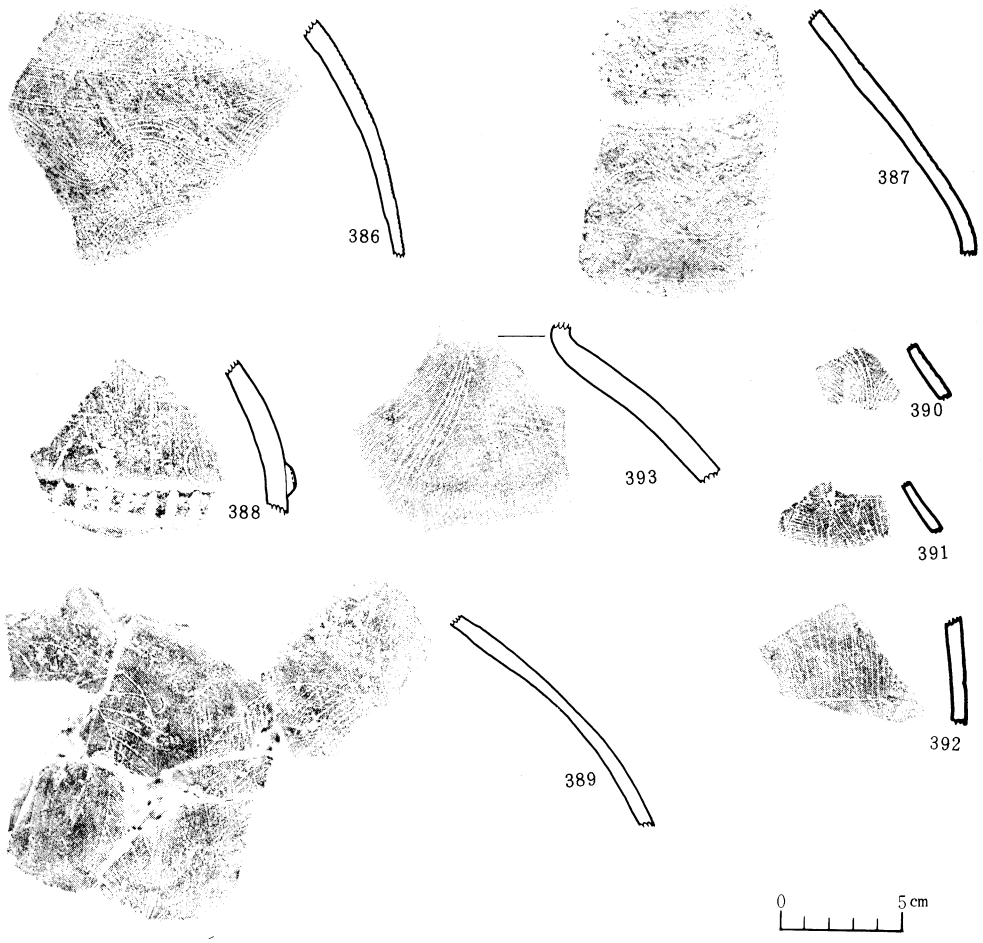
第41図　壺　形　土　器（Ⅵa 類）



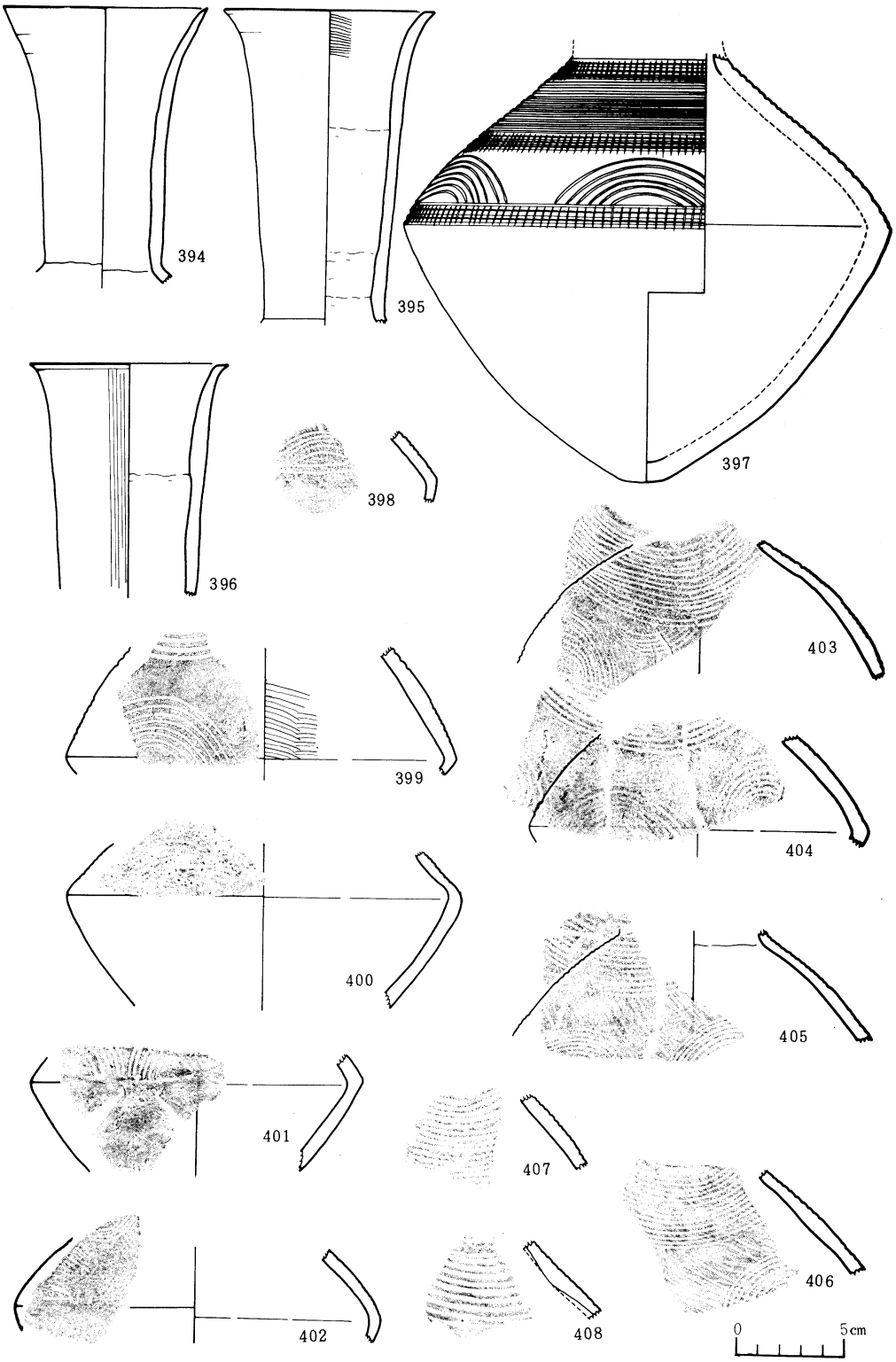
第42図　壺　形　土　器（Ⅵb 類）



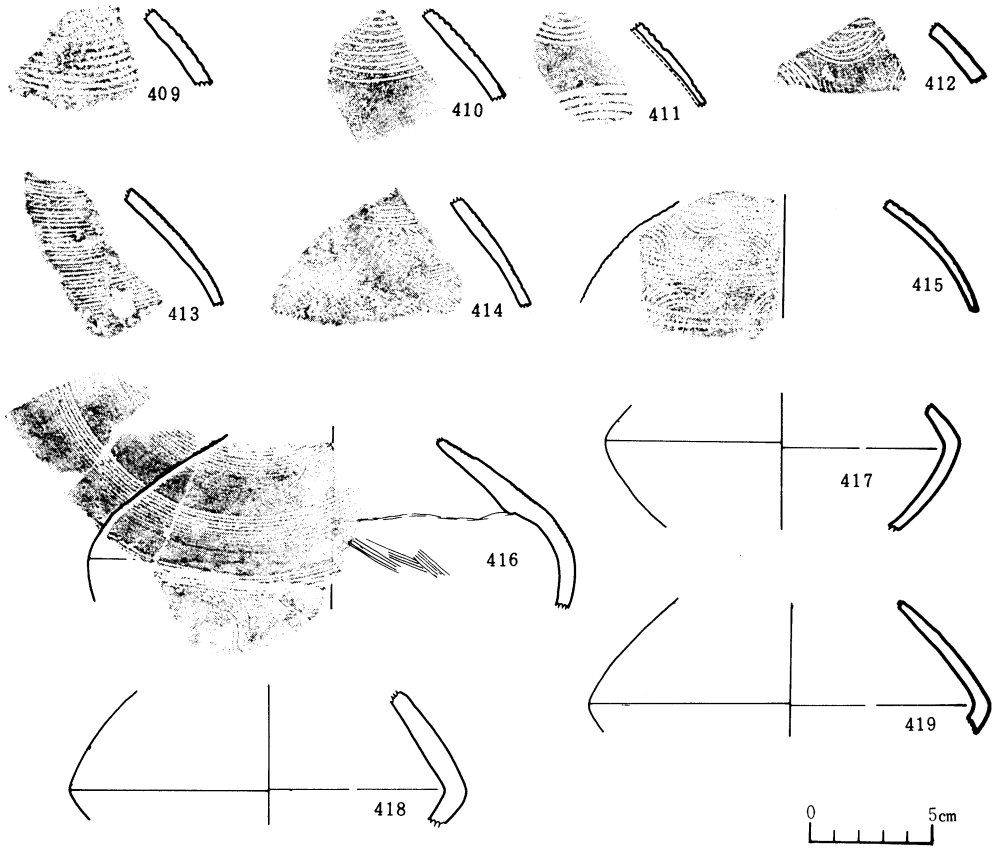
第43図　壺　形　土　器（Ⅶ類）－1



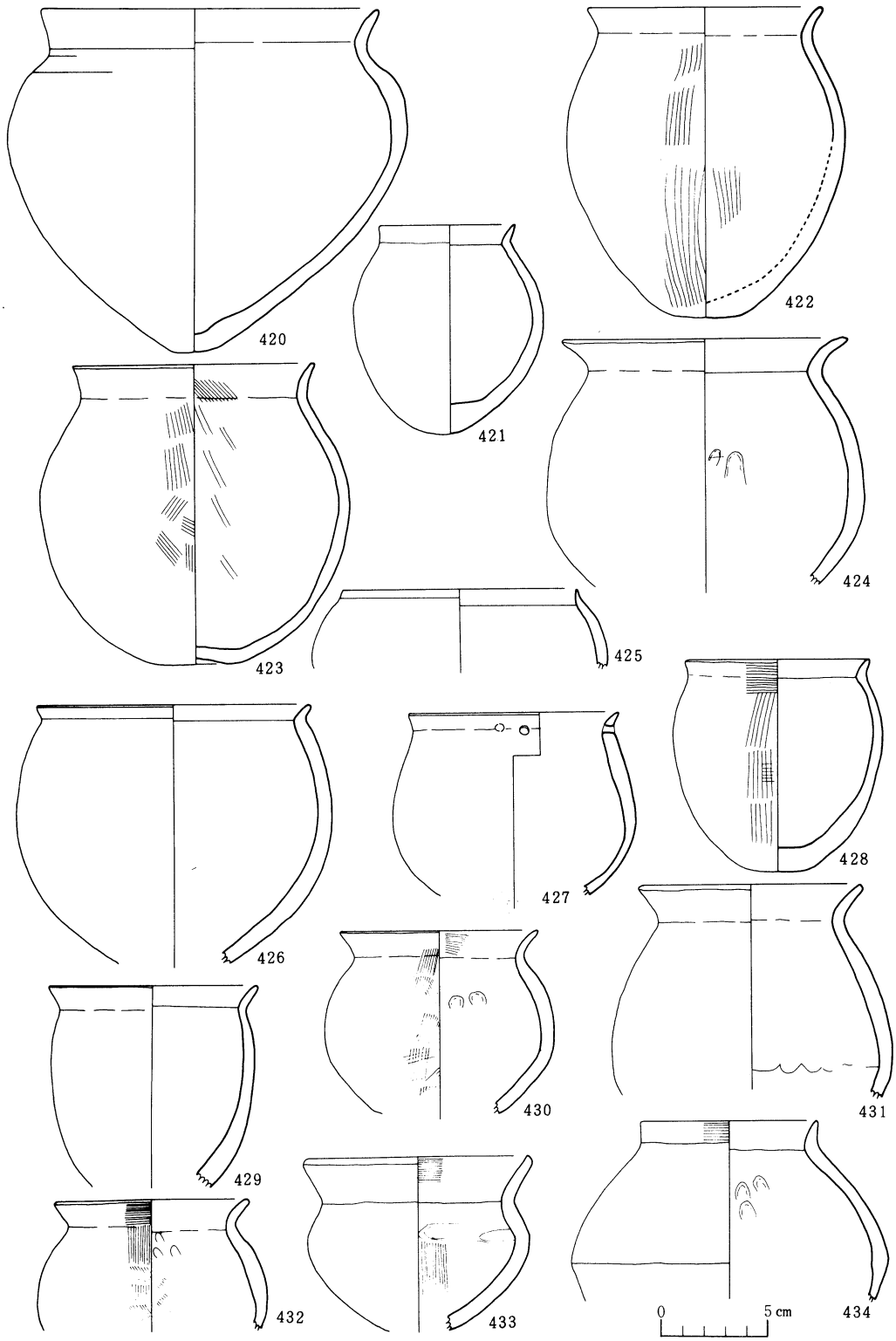
第44図　壺　形　土　器（Ⅶ類）－2



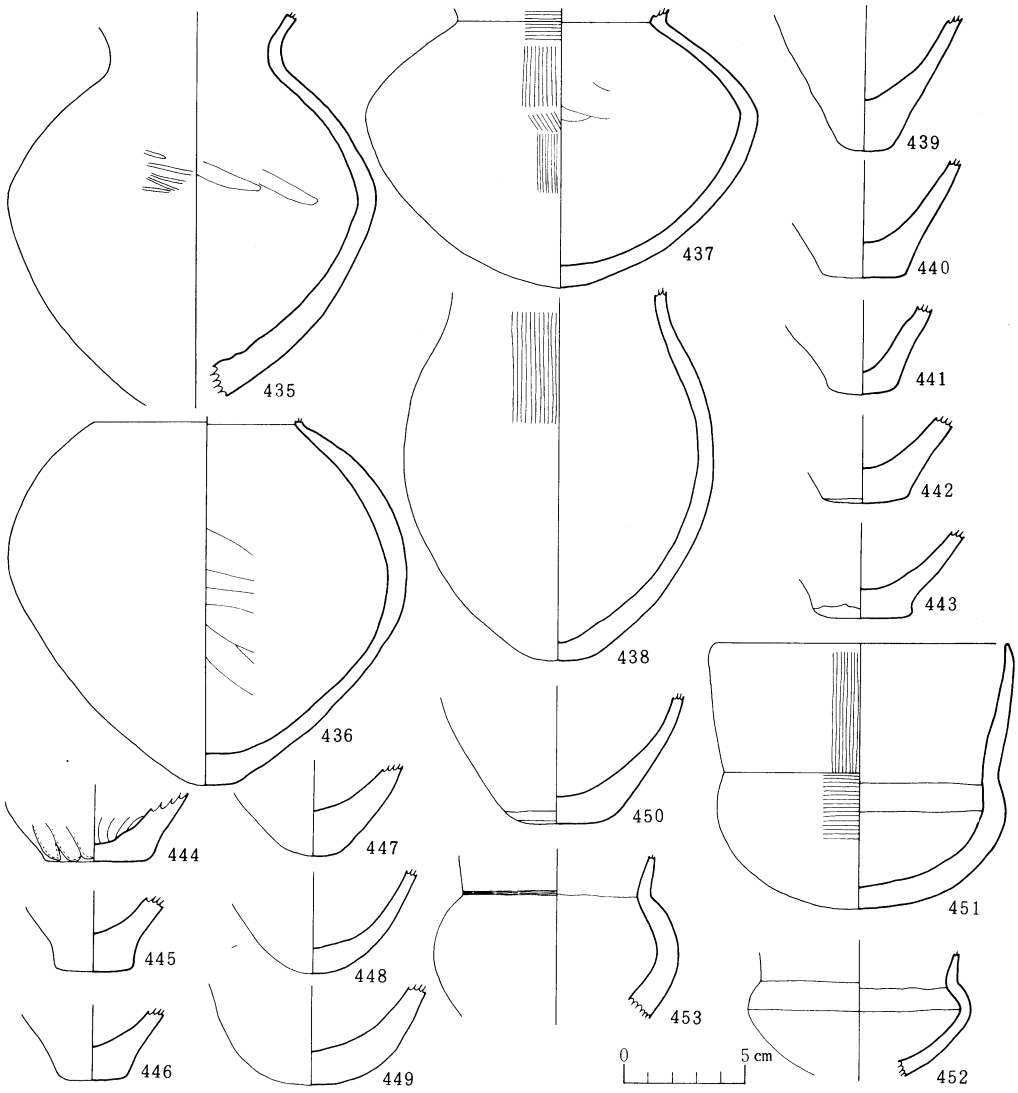
第45図　壺　形　土　器（Ⅷ類）－1



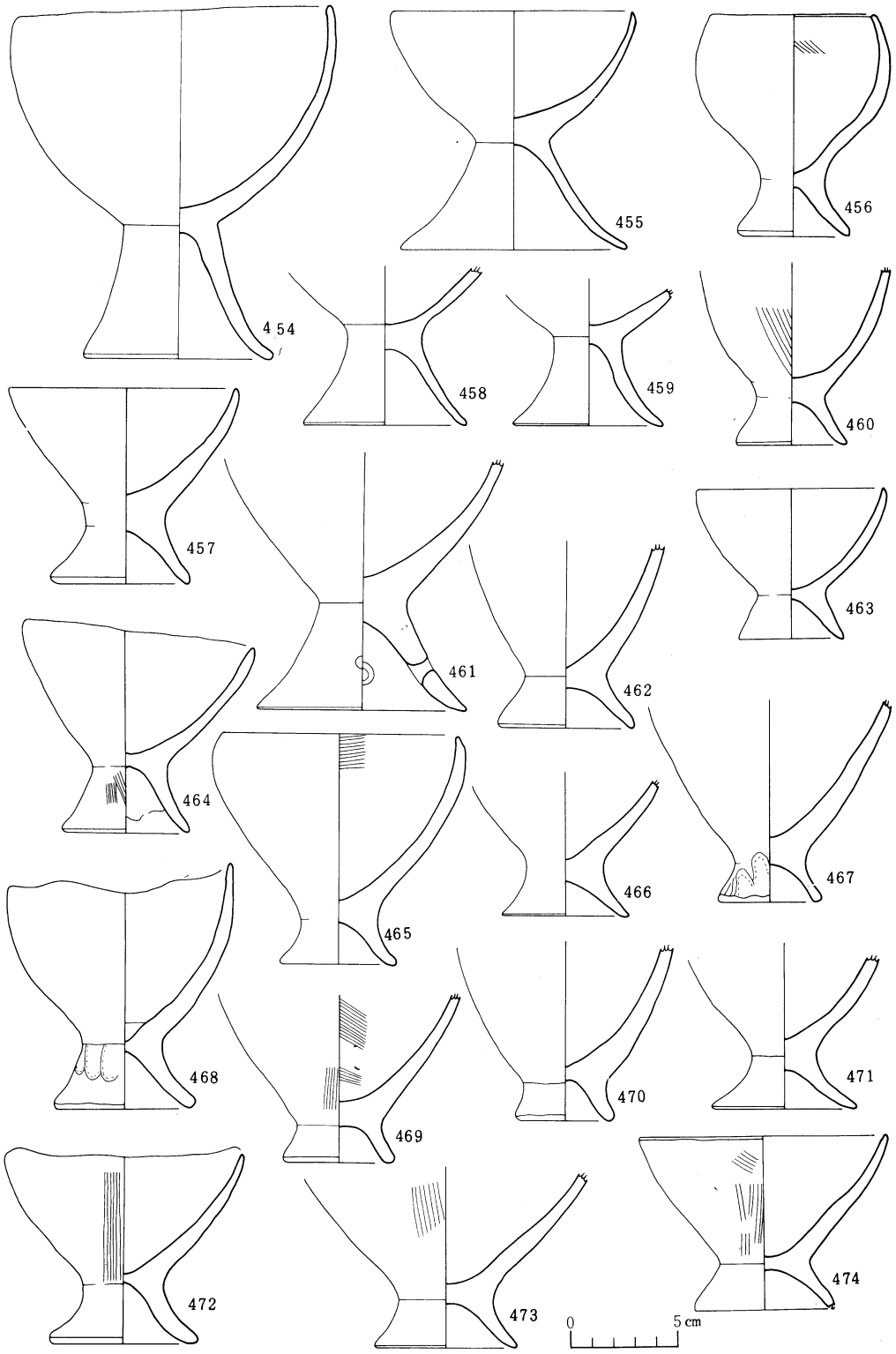
第46図　壺　形　土　器（Ⅷ類）－2



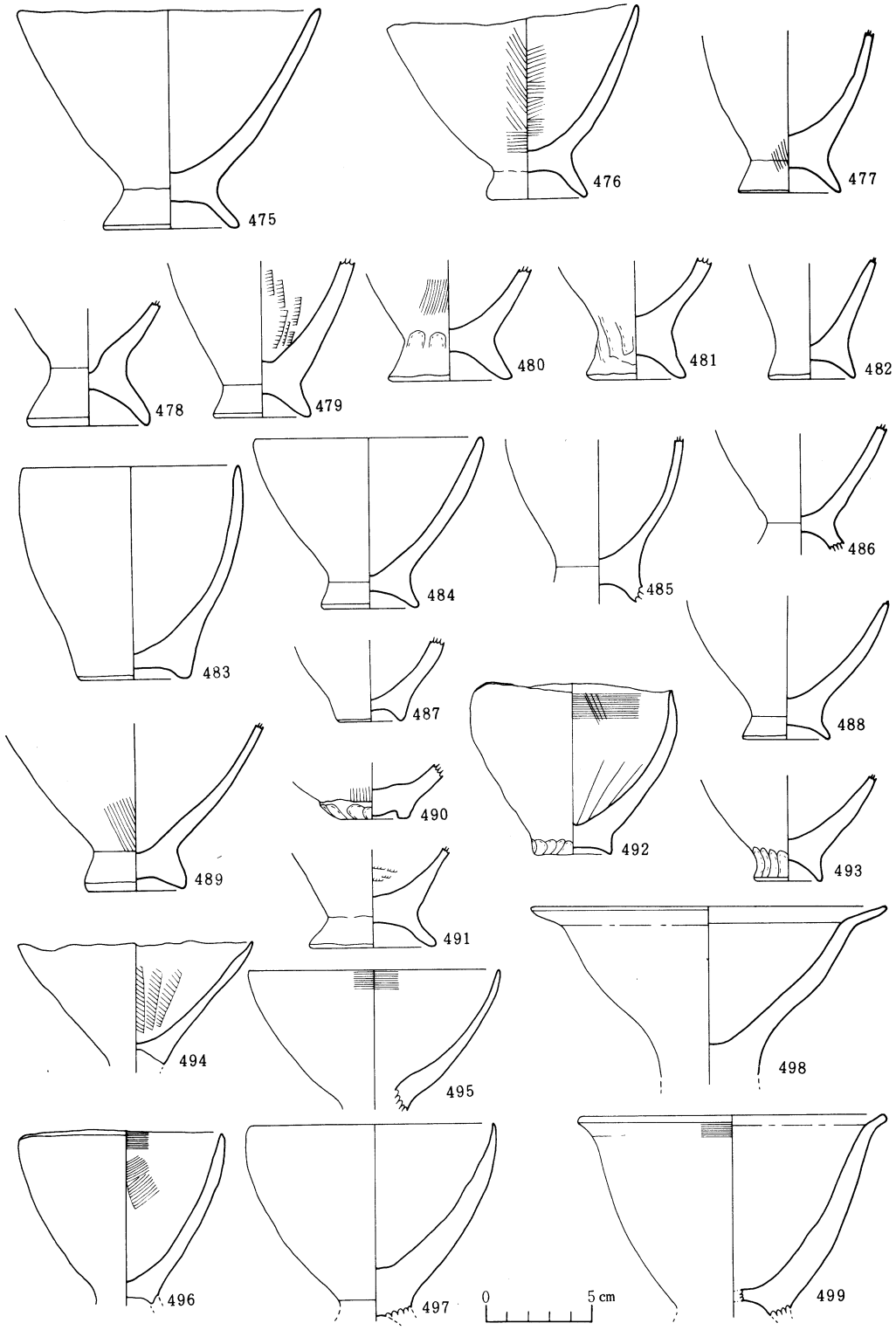
第47図　壺　形　土　器（Ⅸ類）



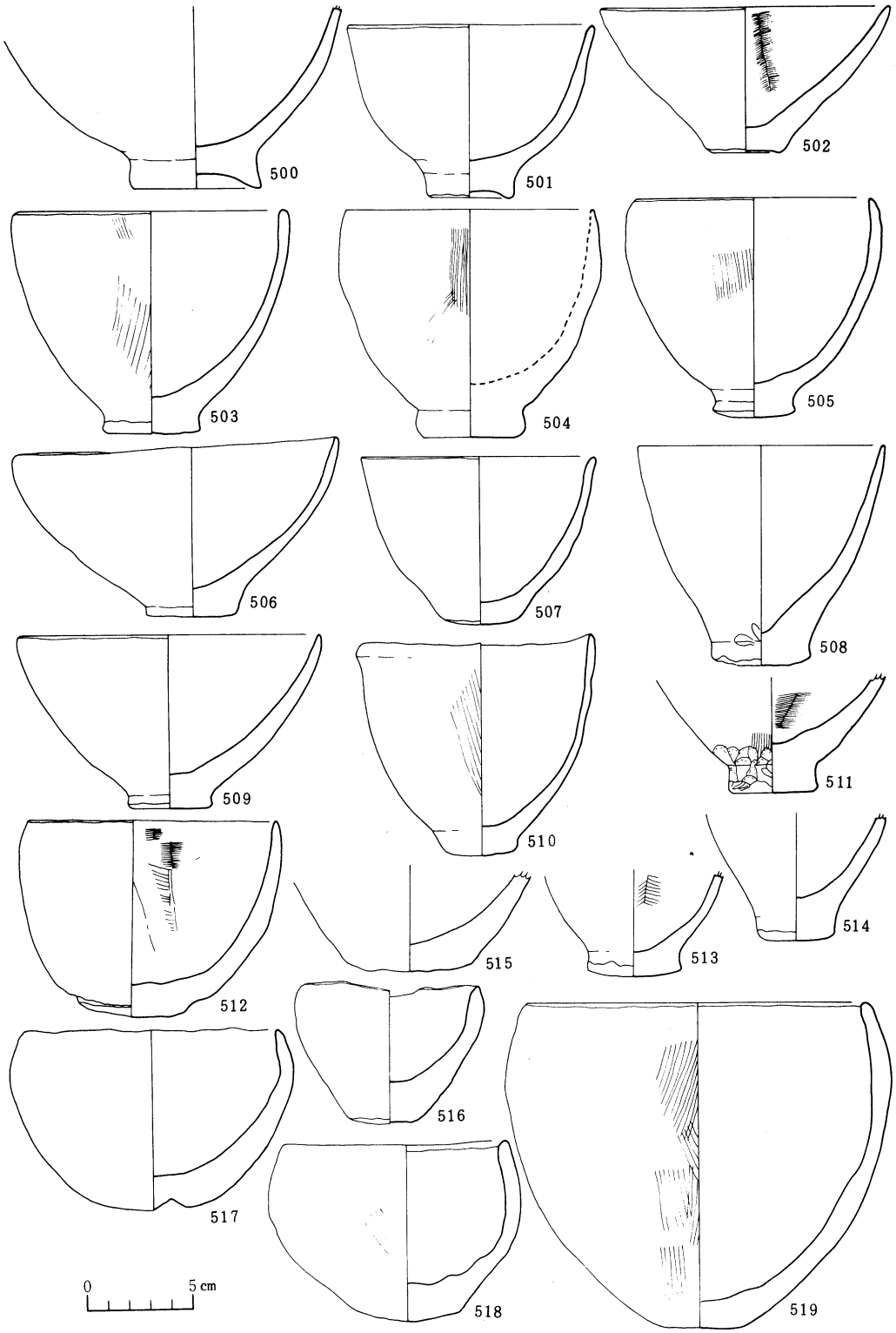
第48図　壺形土器（Ⅸ類）・坩（Ⅹ類）



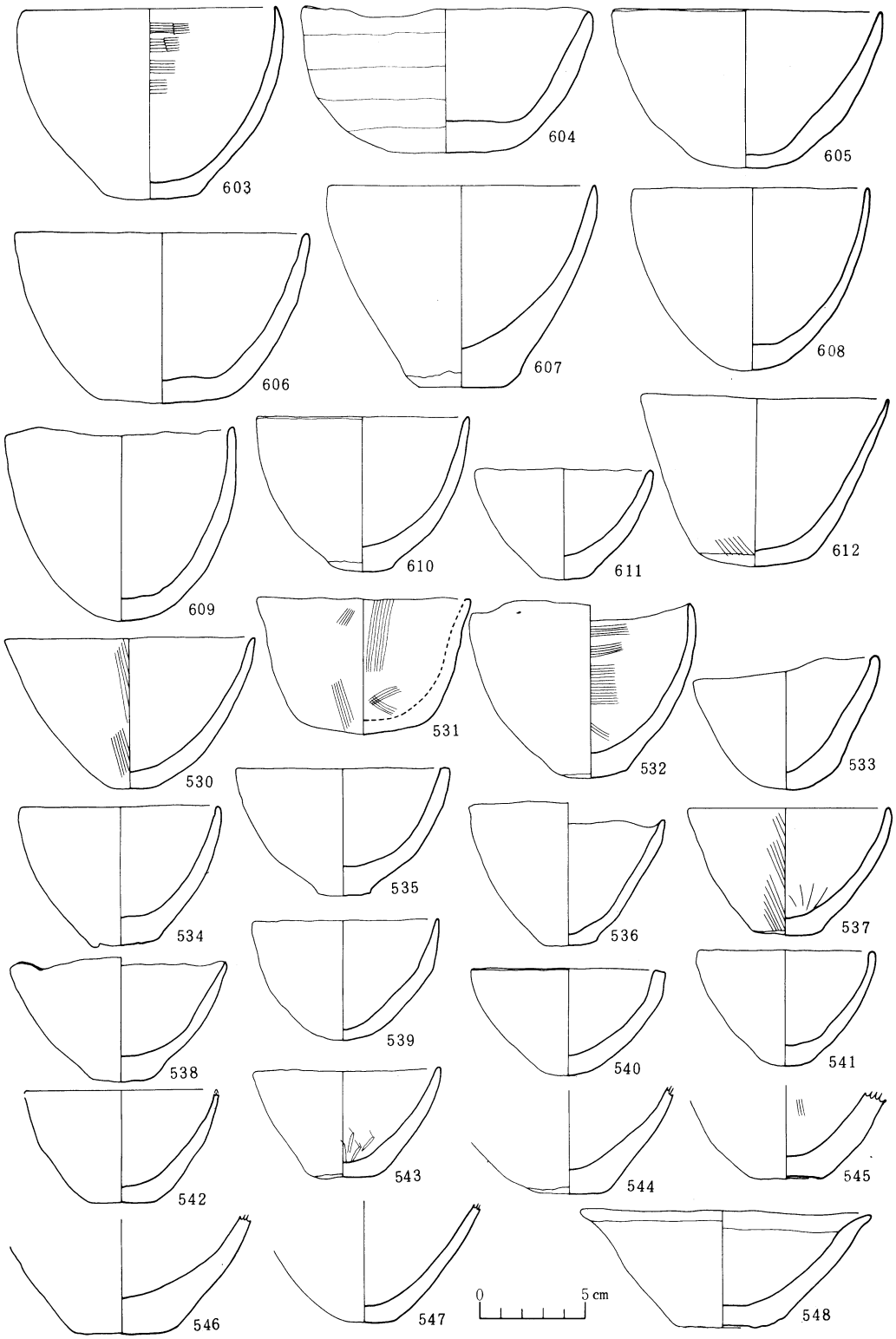
第49図　鉢　形　土　器（Ⅰ類）－1



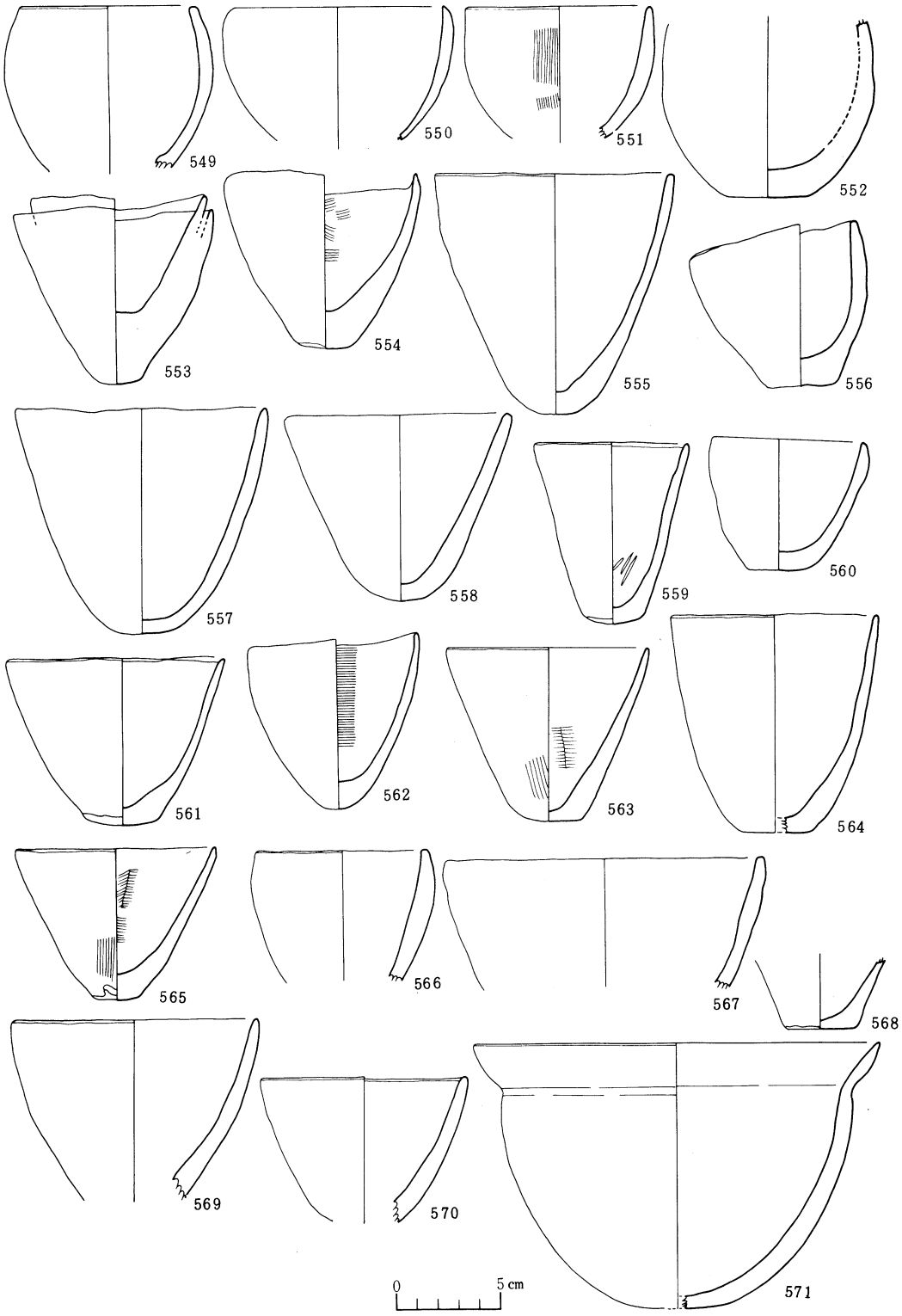
第50図　鉢　形　土　器（Ⅰ類）－2



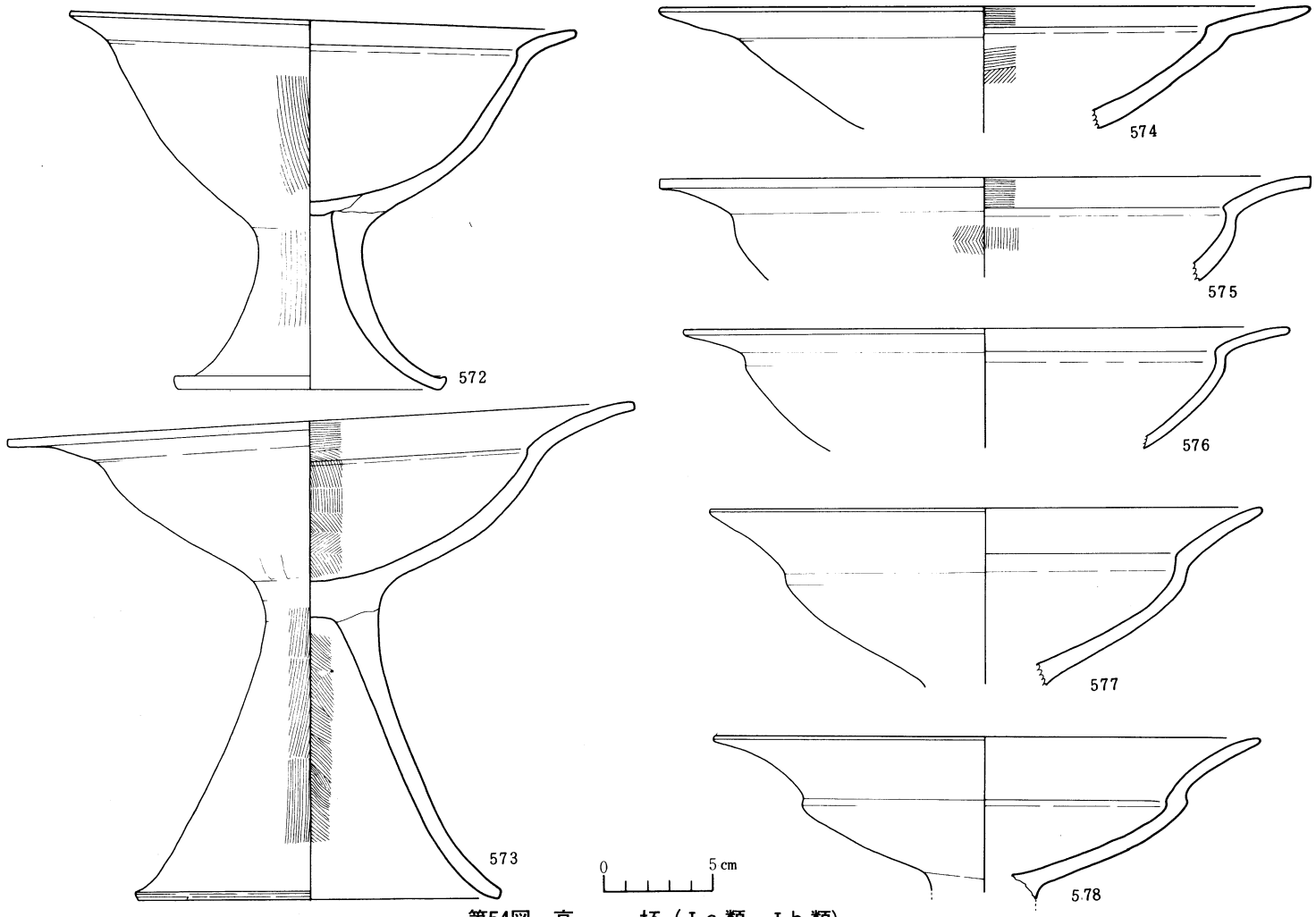
第51図　鉢　形　土　器（Ⅰ類・Ⅱ類）


603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
0
5 cm

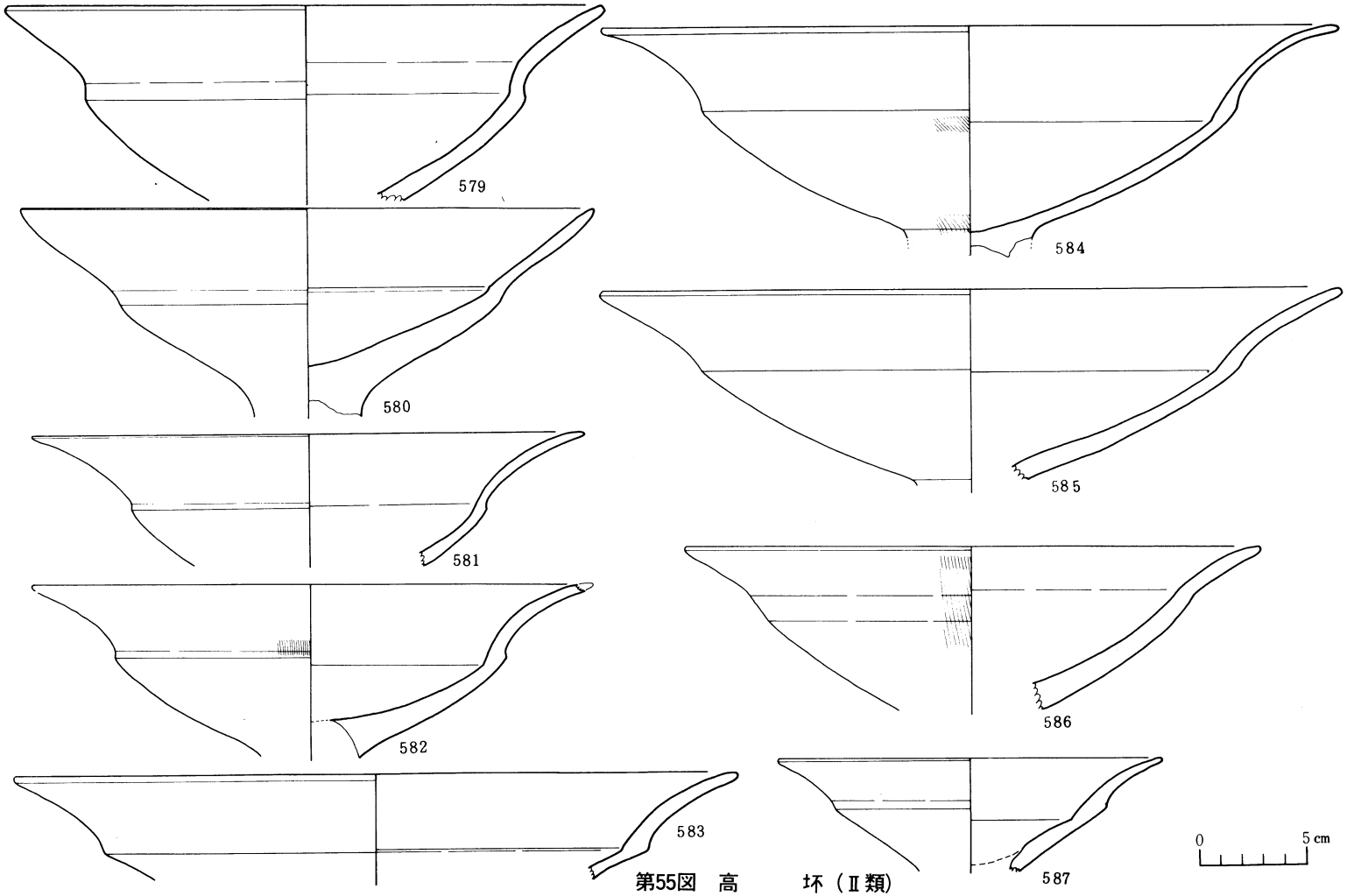
第52図　鉢　形　土　器（Ⅱ類）


549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
0
5 cm

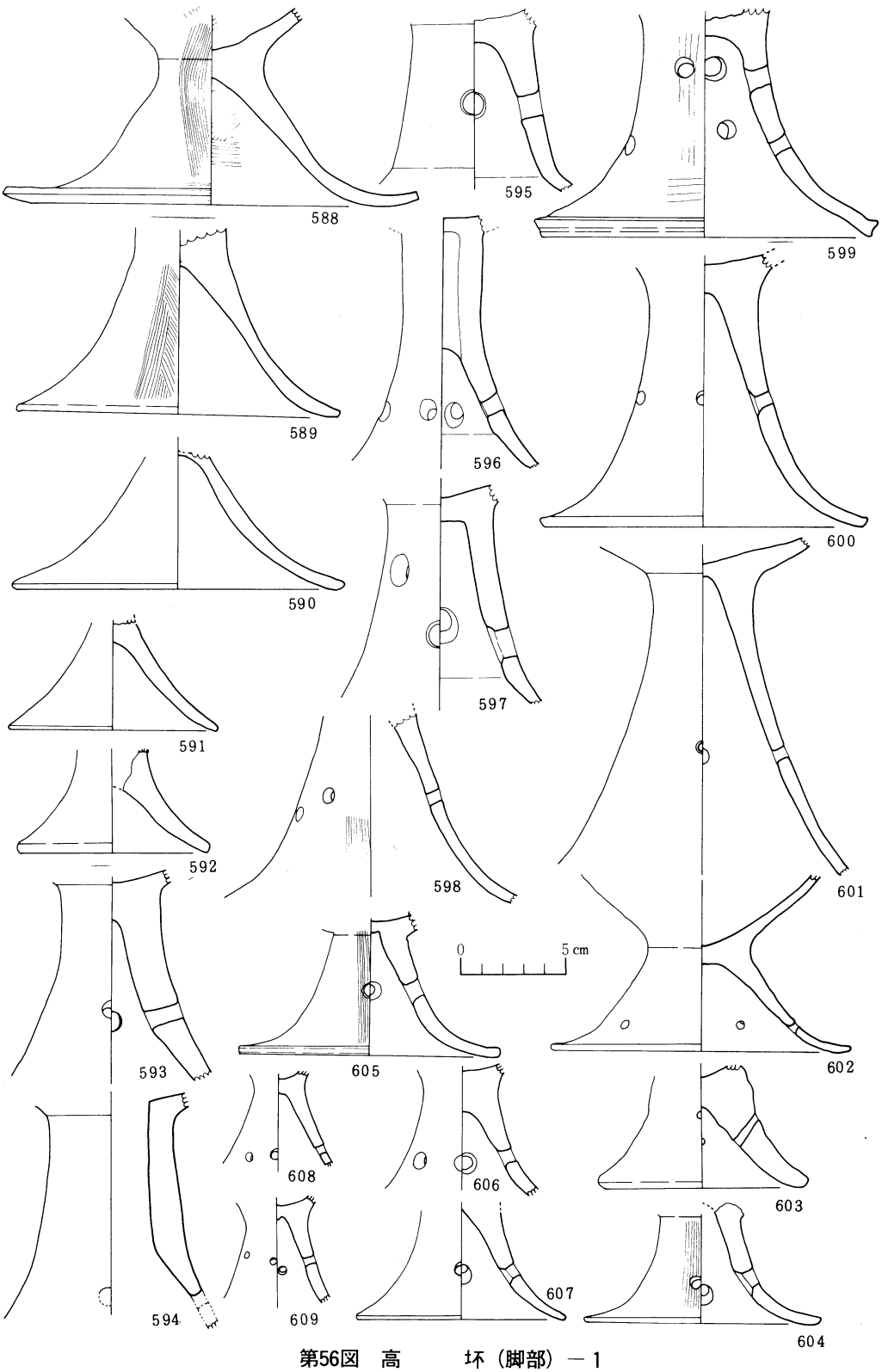
第53図　鉢　形　土　器（Ⅱ類）



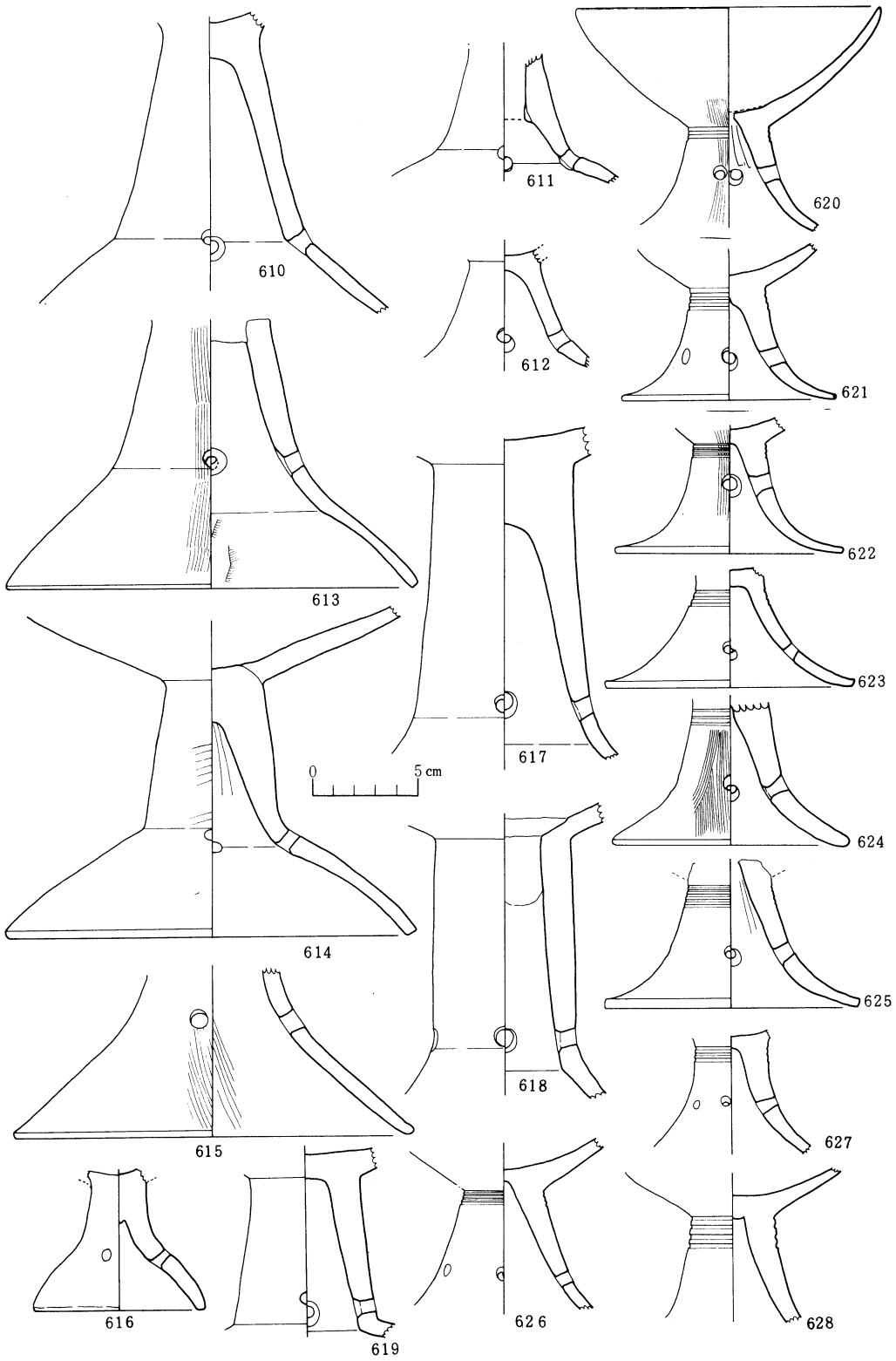
第54図　高　　坏（Ⅰa類・Ⅰb類）



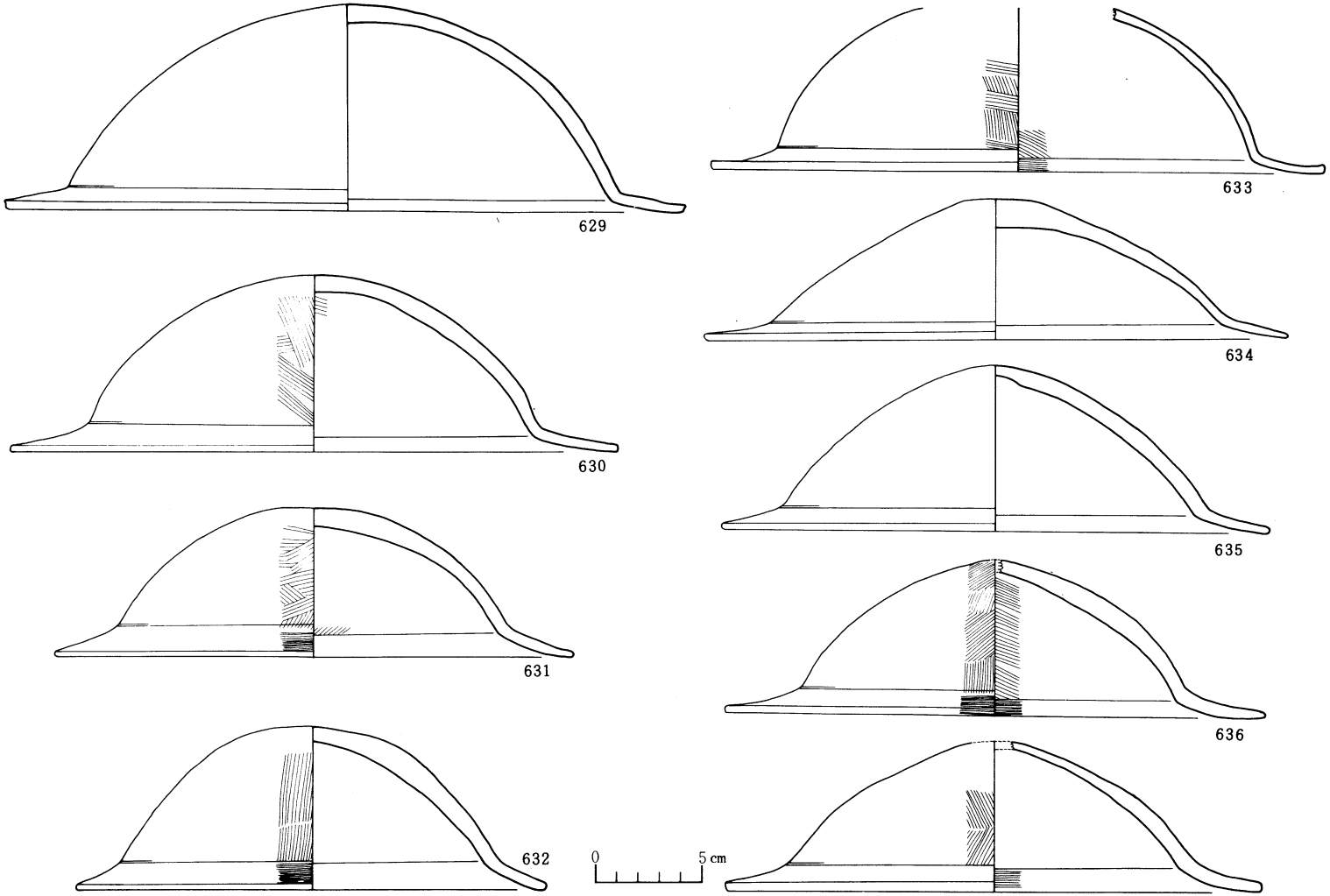
第55図　高　　坏（Ⅱ類）


588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
0
5 cm

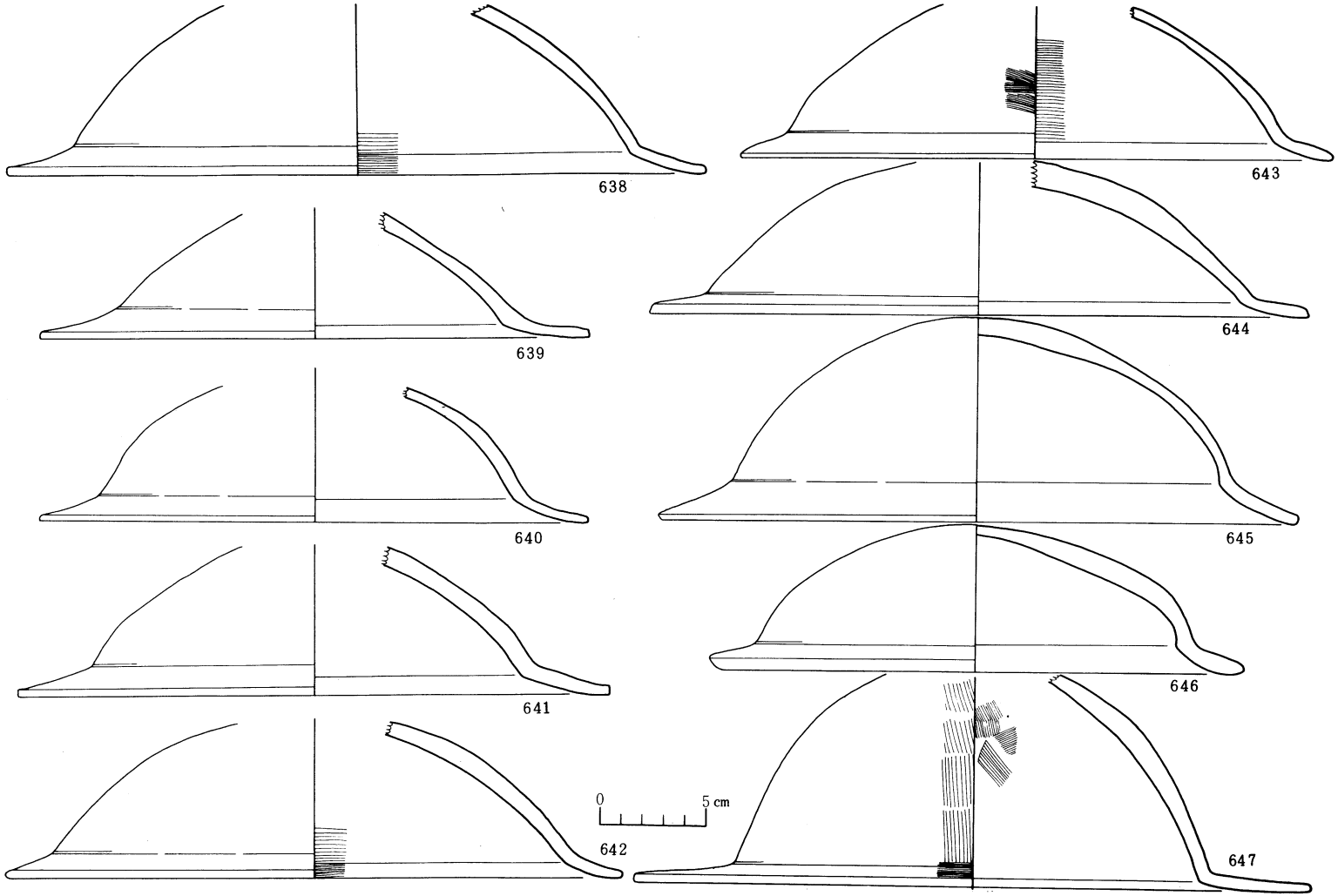
第56図　高　　坏（脚部）－1


610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
0
5 cm

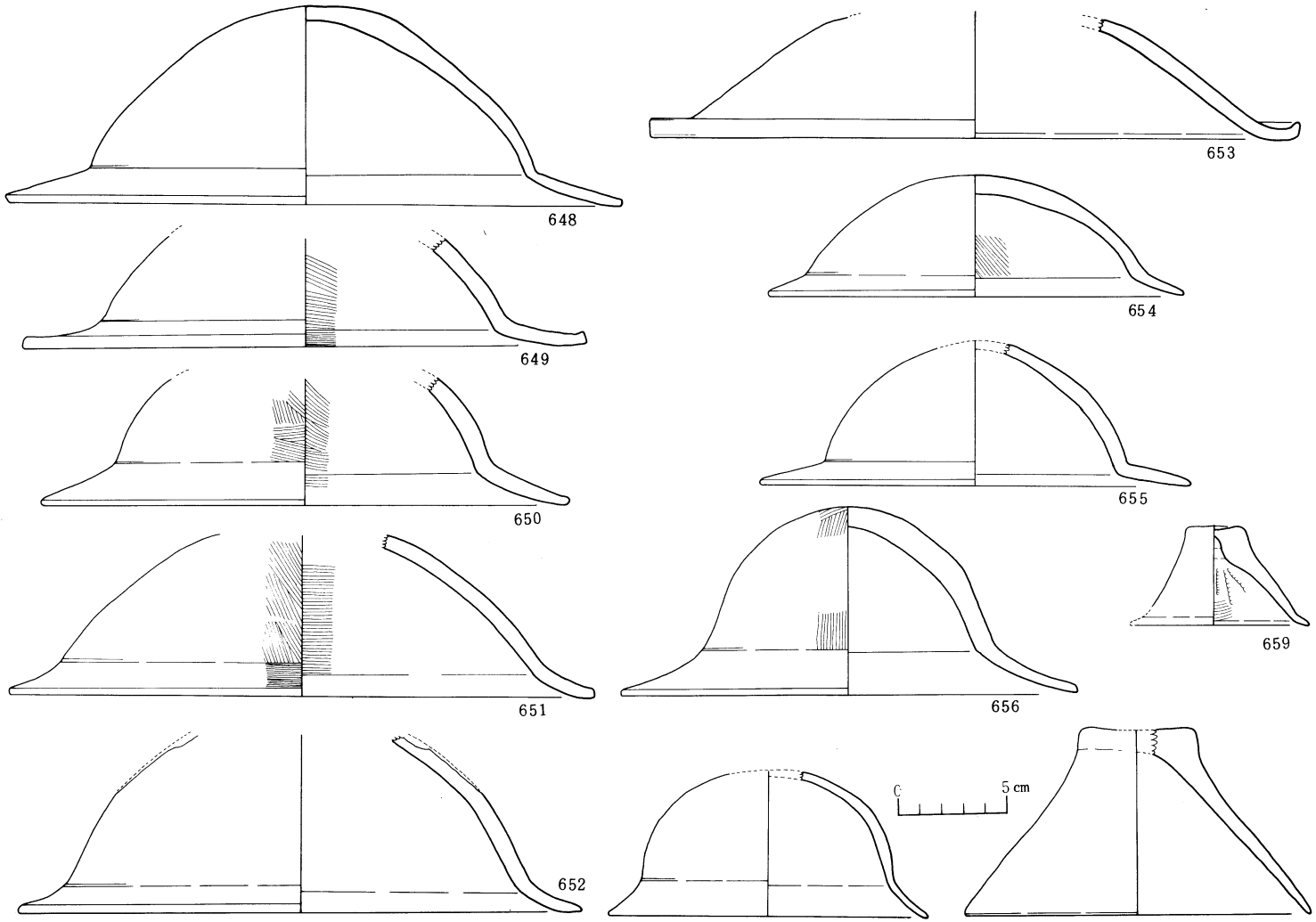
第57図　高　　坏（脚部）－2



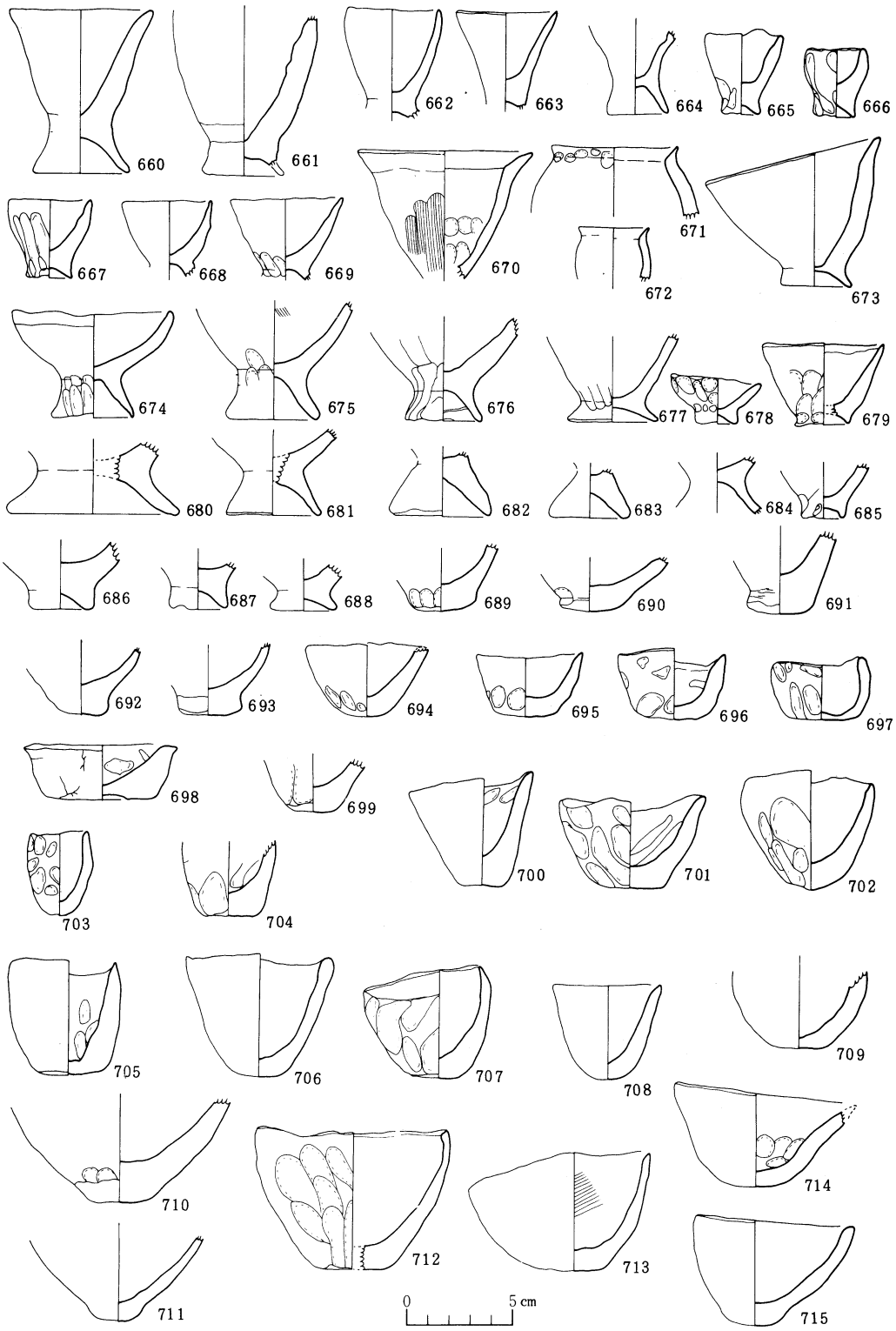
第58図　蓋　形　土　器（Ⅰ類）－1



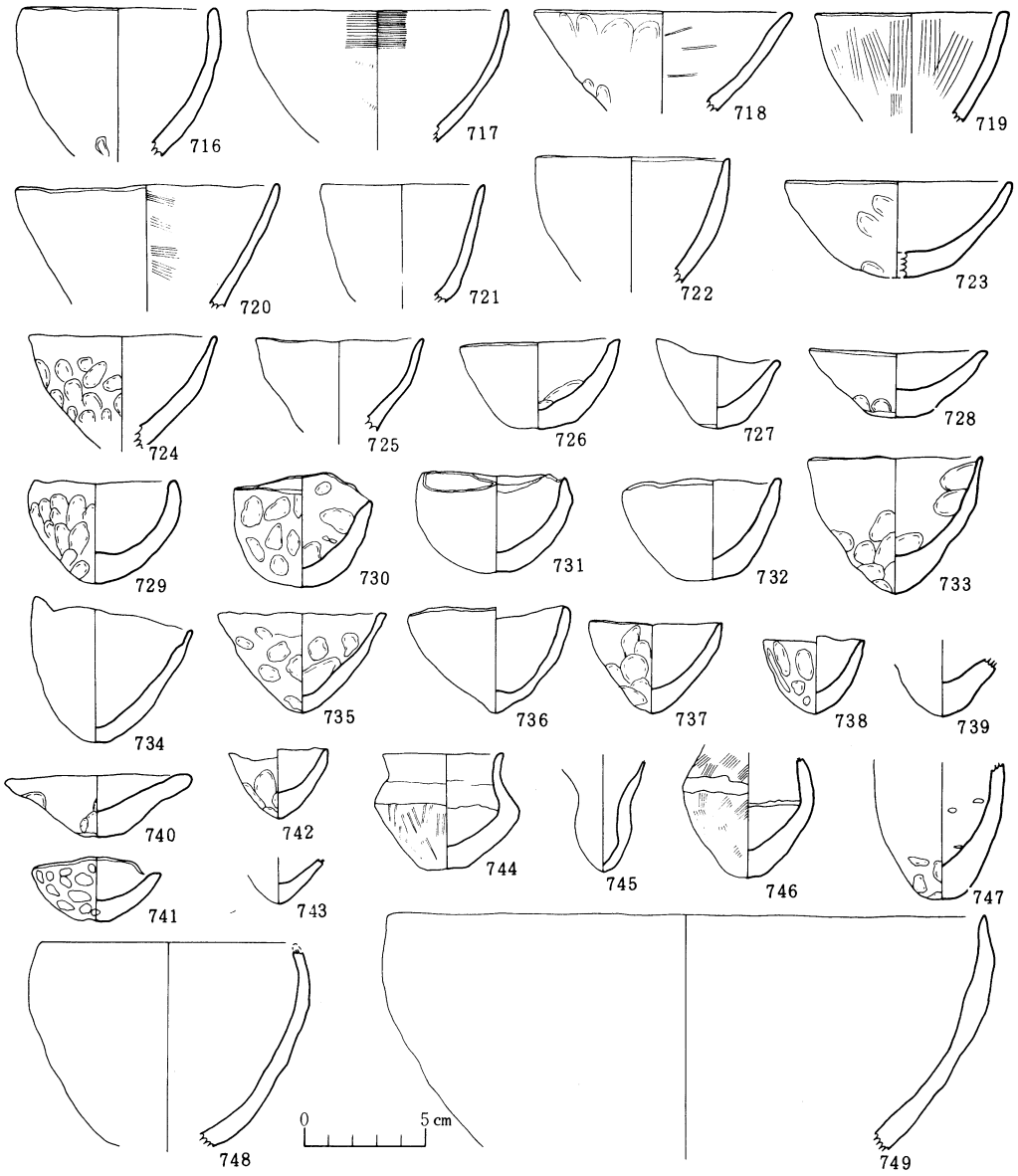
第59図　蓋　形　土　器（Ⅰ類）－2



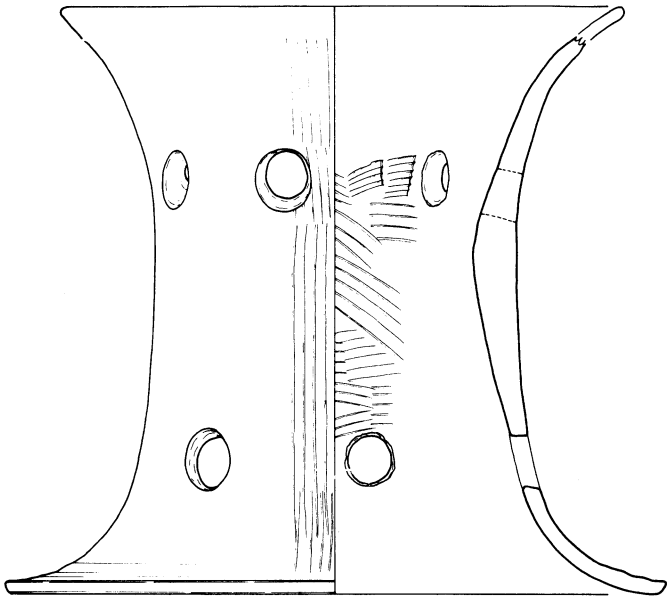
第60図　蓋　形　土　器（Ⅰ類・Ⅱ類）


660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
0
5 cm

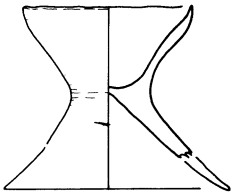
第61図　手　捏　ね　土　器 ― 1


716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
0
5 cm

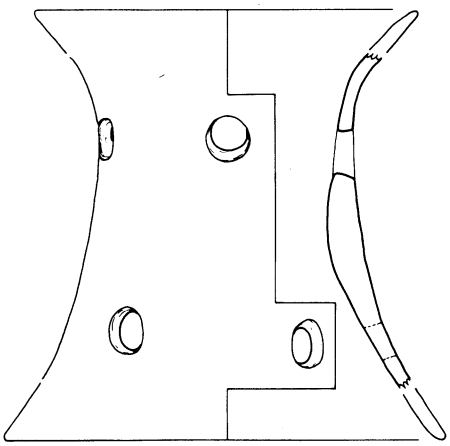
第62図　手 捏 ね 土 器 ― 2



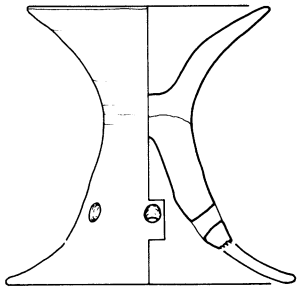
750



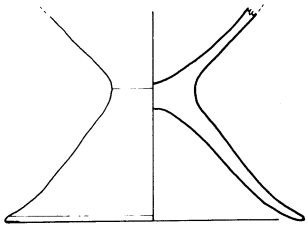
753



751



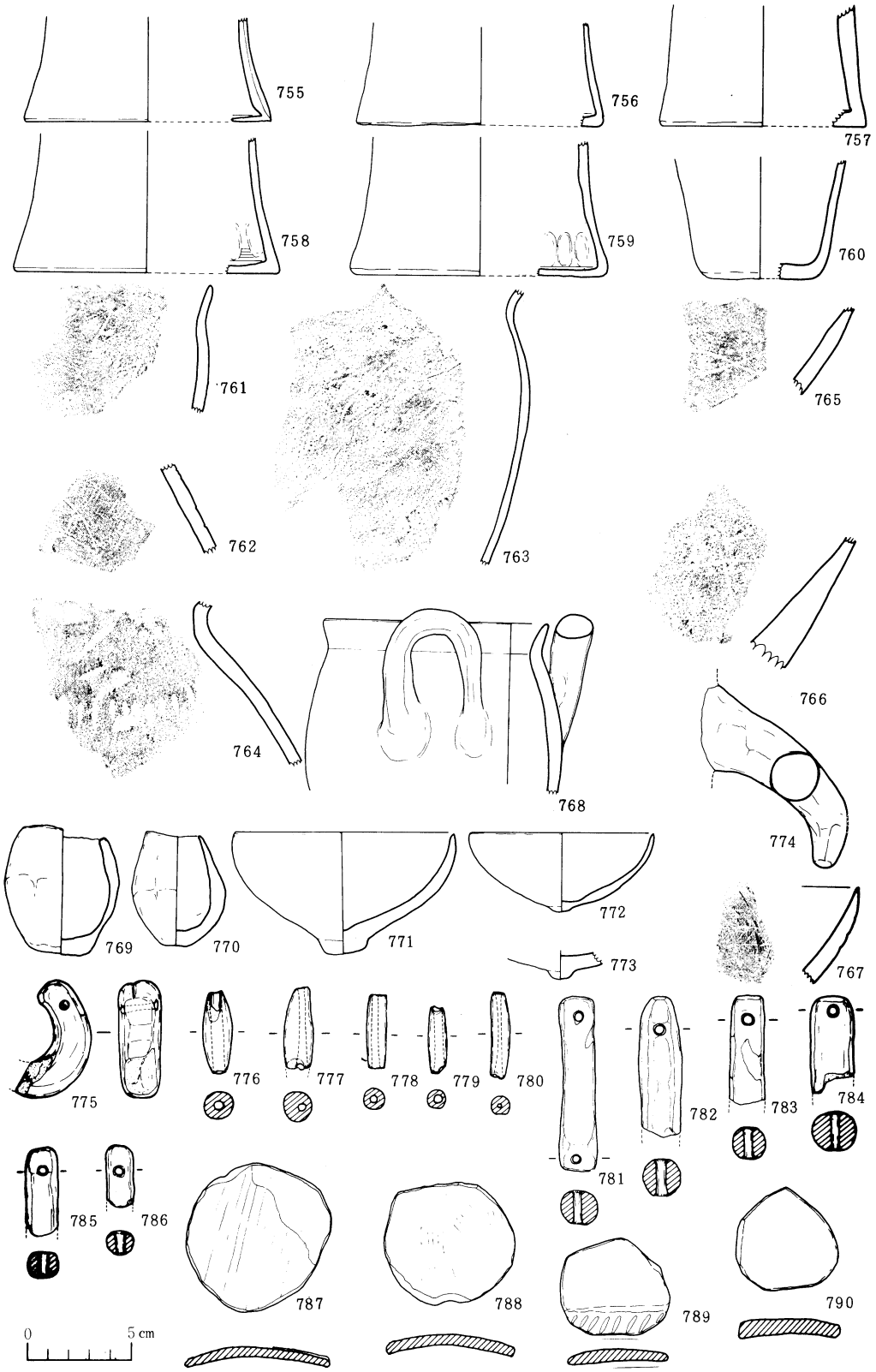
752



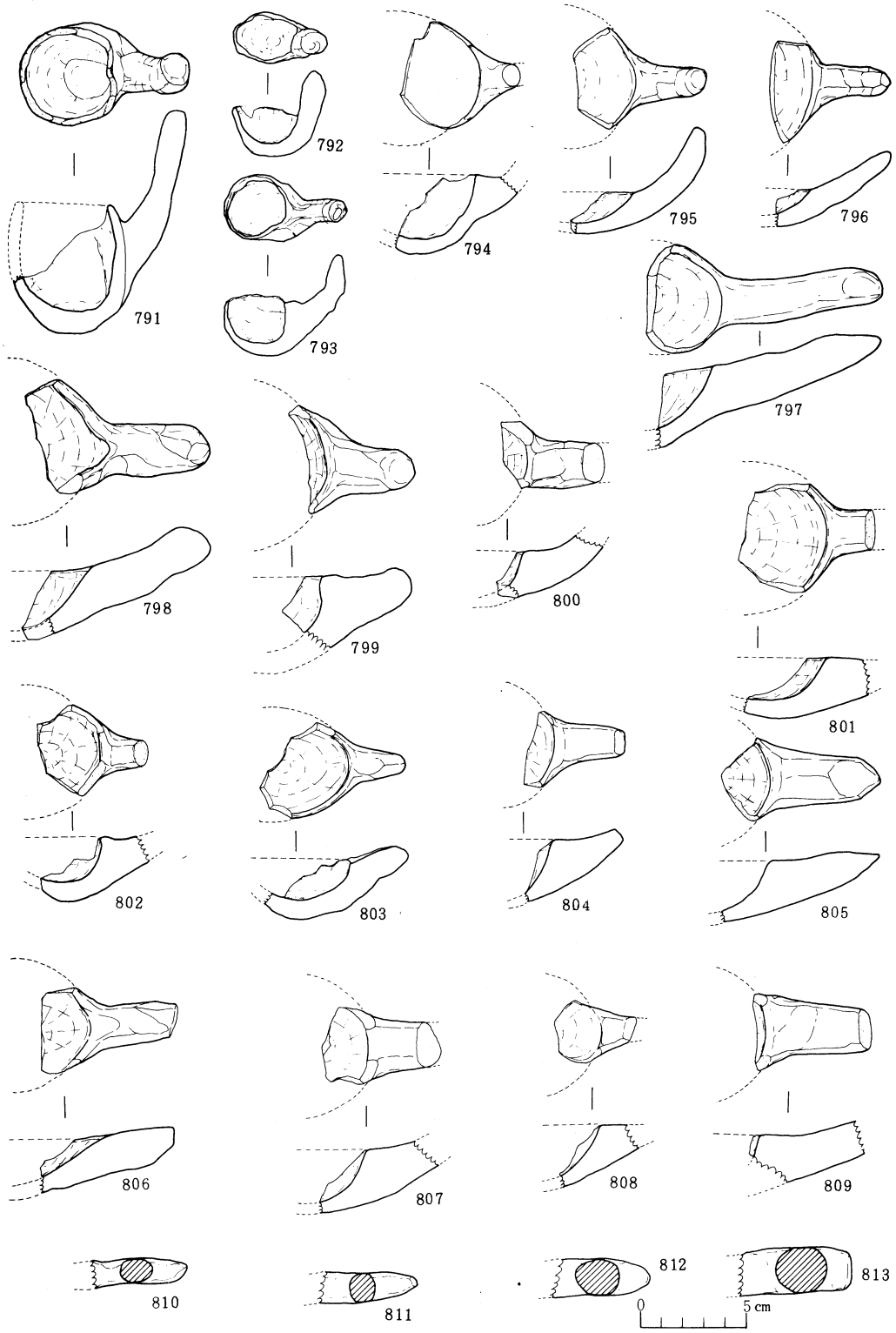
754

0 5cm

第63図　器　　台（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類）



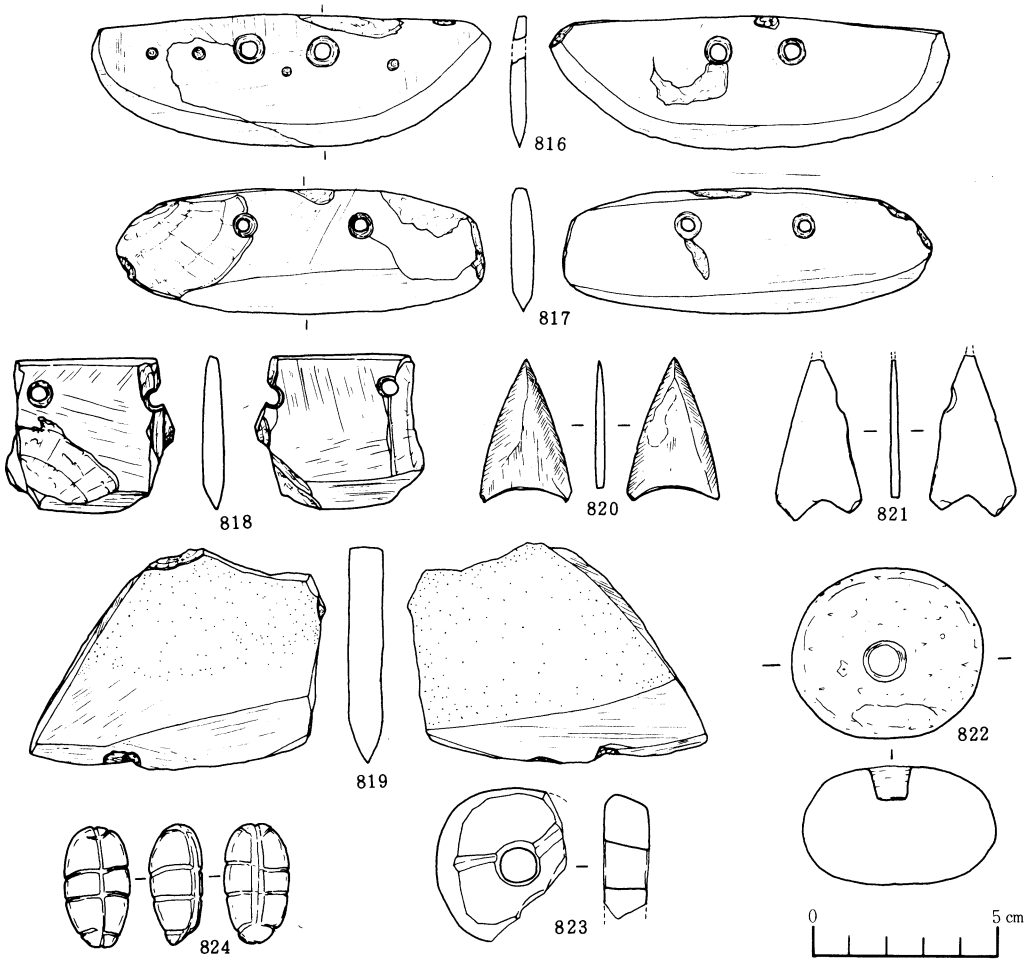
第64図　ジョッキ型土器・特殊土器ほか


791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
0
5 cm

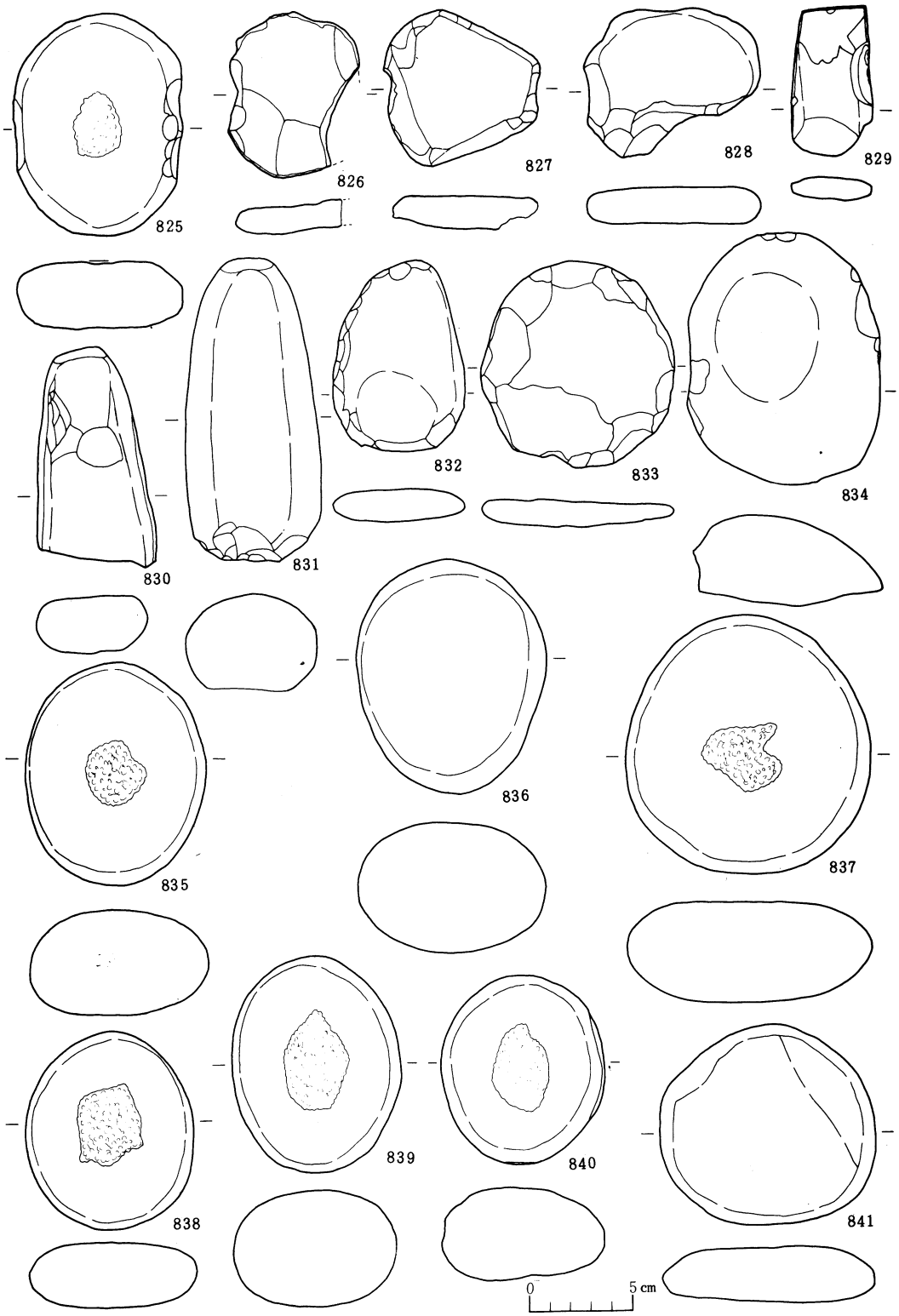
第65図　杓　子　型　土　器

Q．石器（第66～70図，816～884）

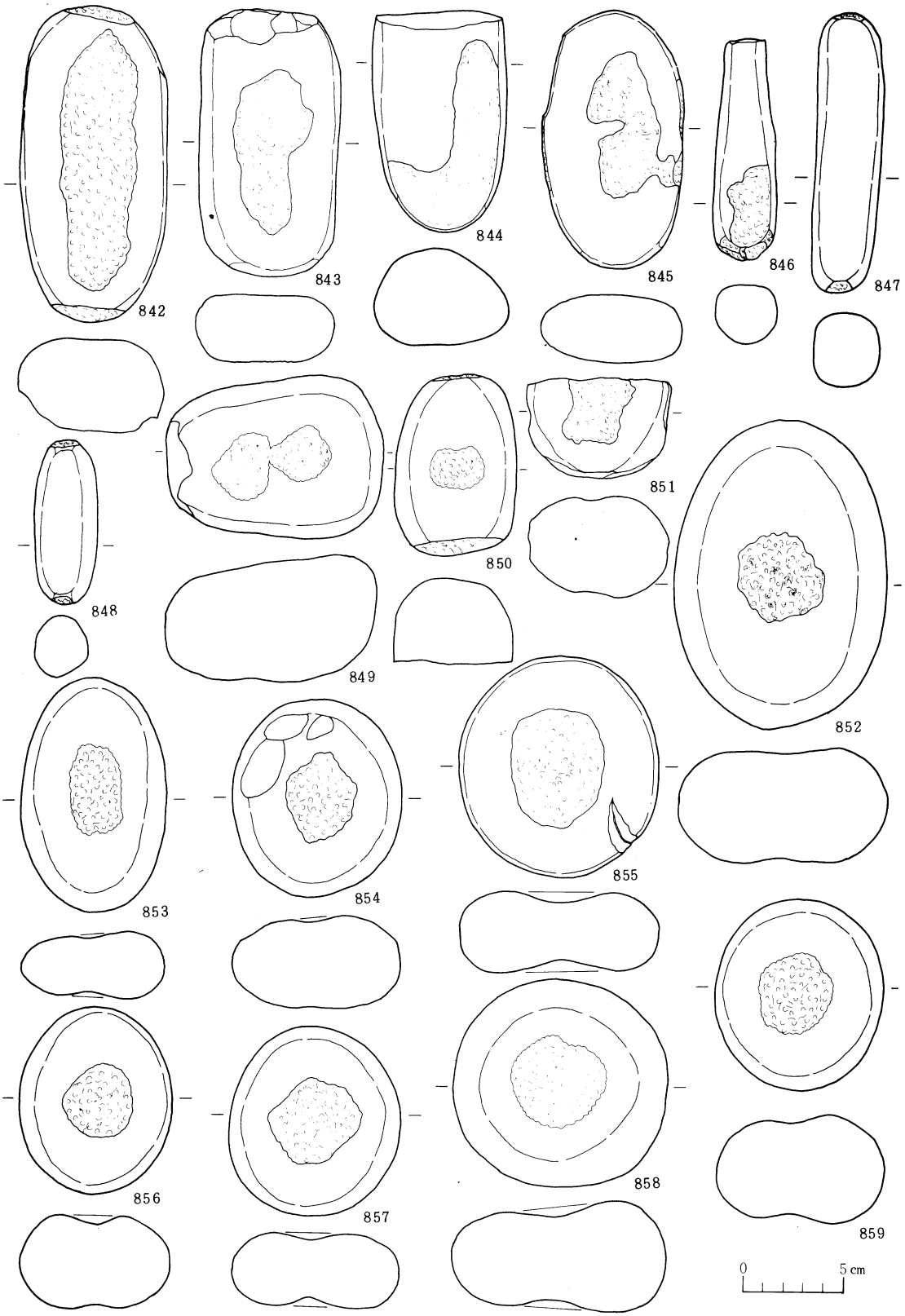
本遺跡から出土した石器は，石庖丁・磨製石鏃・滑石製品・軽石加工品・石錘・石斧・磨石・敲石・凹石・砥石などであり，ほかに表面に磨りや敲きの見られる石皿様の石や，表採品であるが線刻を有する礫などもある。816～819は石庖丁である。816は半月形，817は長方形の完全品で，それぞれ握りの部分に2つの孔を穿つ。818の半円形のものと思われる破片と共に粘板岩製である。819は砂岩製で大型のものである。820と821は磨製石鏃であり，820は抉りが弧状に入り，全面研磨された優品である。823は滑石製の有孔製品である。824～828は石錘で，824が棒状小型のものに縦1条，横2条に線を刻み，両先端にも短い線を刻す。825は長円形の敲石，他は自然礫の両側中央部を打ち欠いて作る。829～831は磨製石斧，832～834は礫片利用の石斧である。砥石は872～881のように砂岩・粘板岩の石片を利用したものが多いのが特徴である。868は石皿状を呈すし，866は5面利用のもので，共に砂岩製の自然礫を使用する。882は3つの頂部に線を廻らす線刻礫である。敲石や凹石も頻繁に使用される。



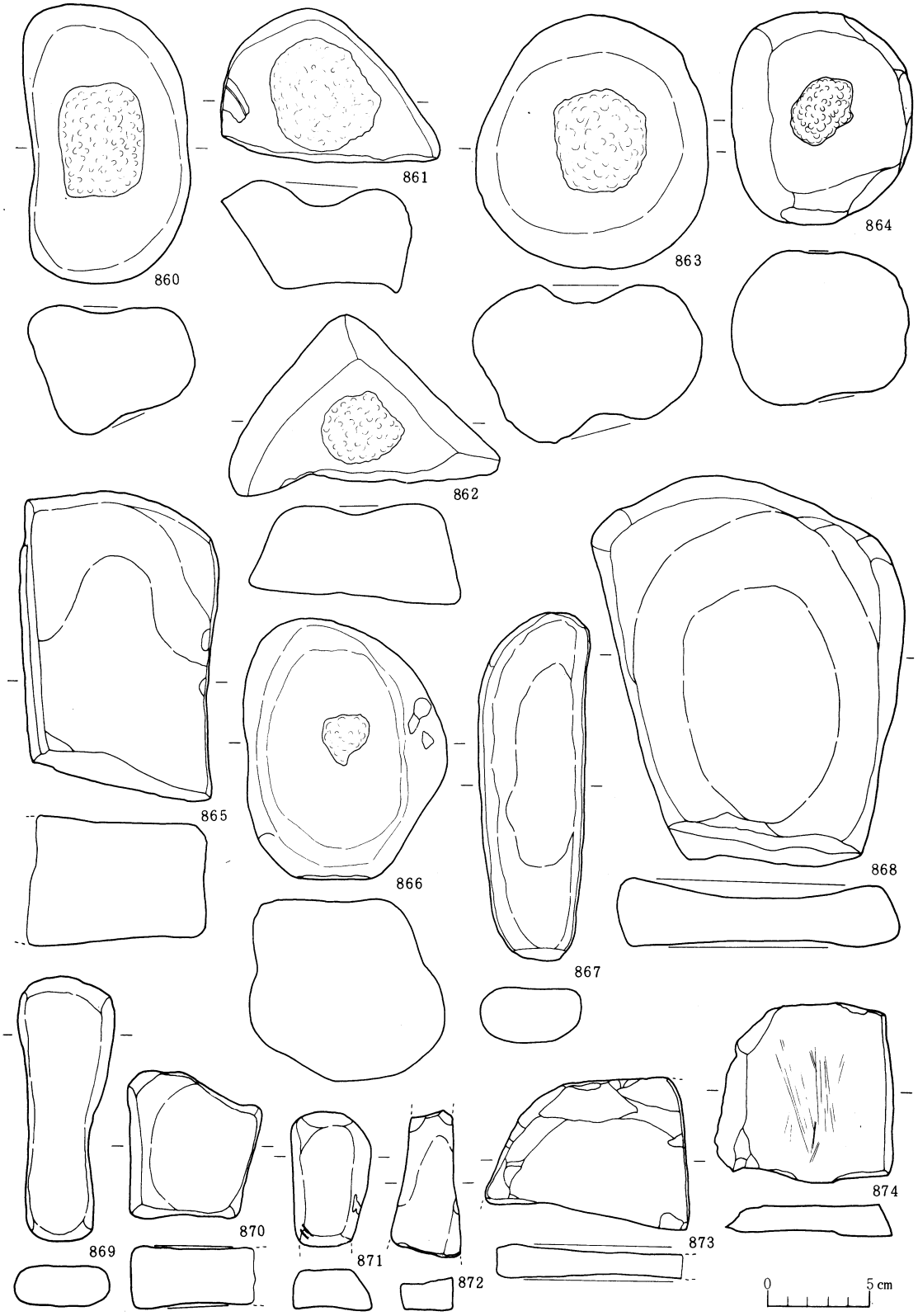
第66図　石　　器


825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
0
5 cm

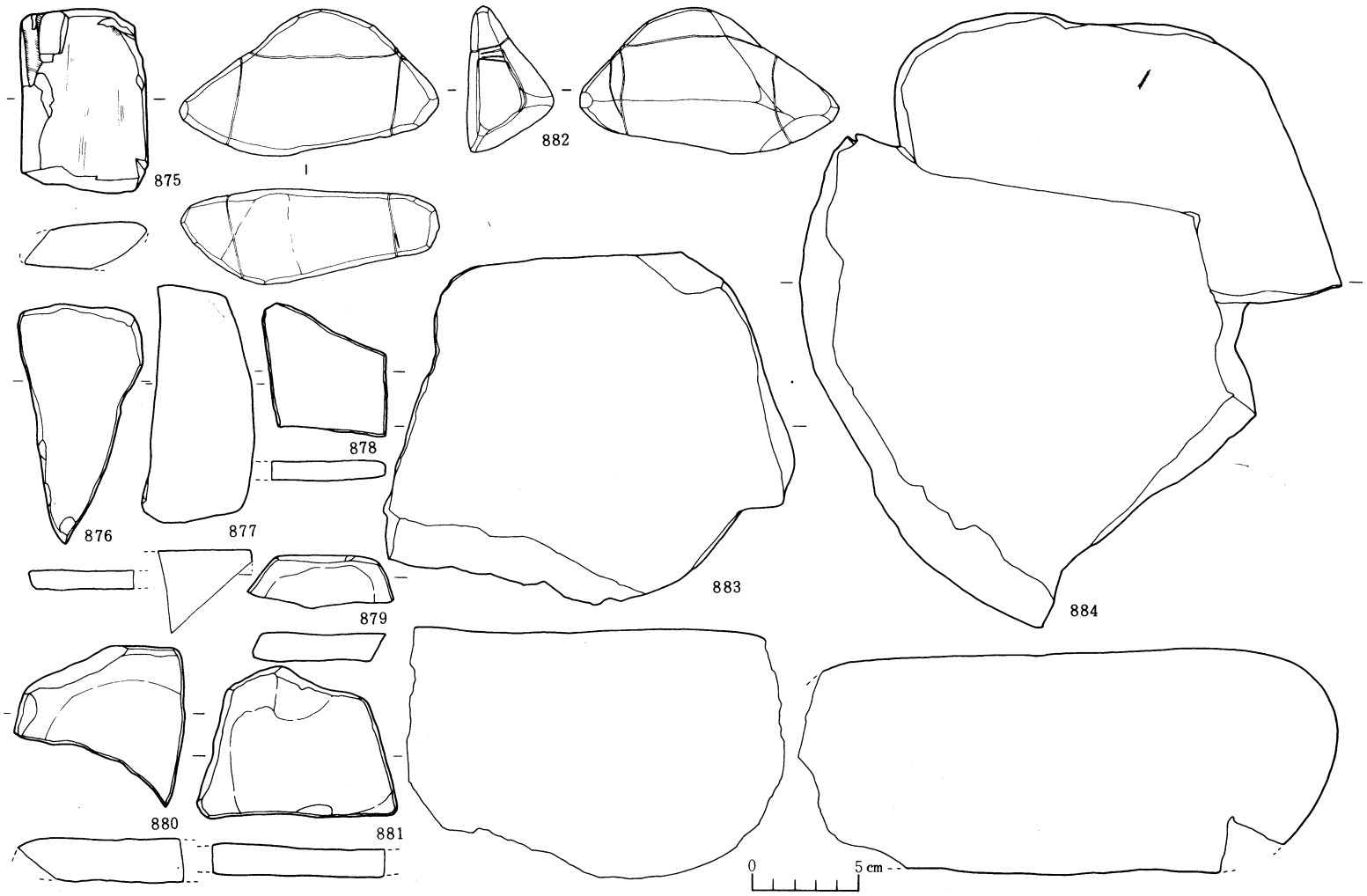
第67図　石　　器


842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
0
5 cm

第68図　石　　器



第69図　石　　器



第70図　石　　器

3節　歴史時代

A．須恵器（第71図，885～906）

885～888は甕及び壺の口縁部，889～891は頸部，892～894は肩部，895は壺の胴部，896は底部，898～906は甕の胴部を主としたものと思われる。885は壺の口縁部で，丸味を帯びた口唇部から段を有するところまではあめ色の自然釉がかかる。886及び886も壺であるが，前者に外反した頸部から直口気味に立ち上がった後に口縁端部が反って口唇上面は内傾するのに対して，後者は頸部から1つの段はあるもののほぼ直線的に外反して口縁端部が小さく外反し，口唇上面はほぼ平らとなる。887は口縁部の断面が三角形を呈する甕である。890・891は外面に自然釉がかかり，889は887と同一個体と思われ，内外面共にナデ調整を行う。892は内面の凹凸が激しく，指頭により調整したのみと思われる。895及び897は壺の肩～胴部であり，共に内面に叩きは見られない。後者は胴部に飾り（外耳？）を付す。外面は叩きのあと刷毛目による調整を行う。896は内外面共にナデ仕上げであり，底部である。898～906は破片であるが，外面は平行及び格子の叩き目，内面は平行及び同心円状の叩き目がほとんどであり，一部ナデ調整が見られる。

B．瓦（第72図，907～915）

全て1次調査時の出土品及び表採品である。907のみ軒丸瓦で，それ以外は軒平瓦と思われる。907は外面の斜格子状の叩き目は本遺物中唯一のものである。908～915はすべて外面縄目の叩き目であるが，908・915の太目のものから910・914の細目のものまで縄目の大きさも種々ある。908・911～913・915は磨耗が著しい。908・909・912は縁を有する。907・910は灰色を呈し硬質であるが，それ以外は黄白色～灰白色を呈して軟質である。907・911～913・915は粘土を練る際に生ずる縞文様が断面に現われている。薩摩国分寺跡出土[(註14)]の瓦に類似している。

C．内黒土師器（第73図，916～919）

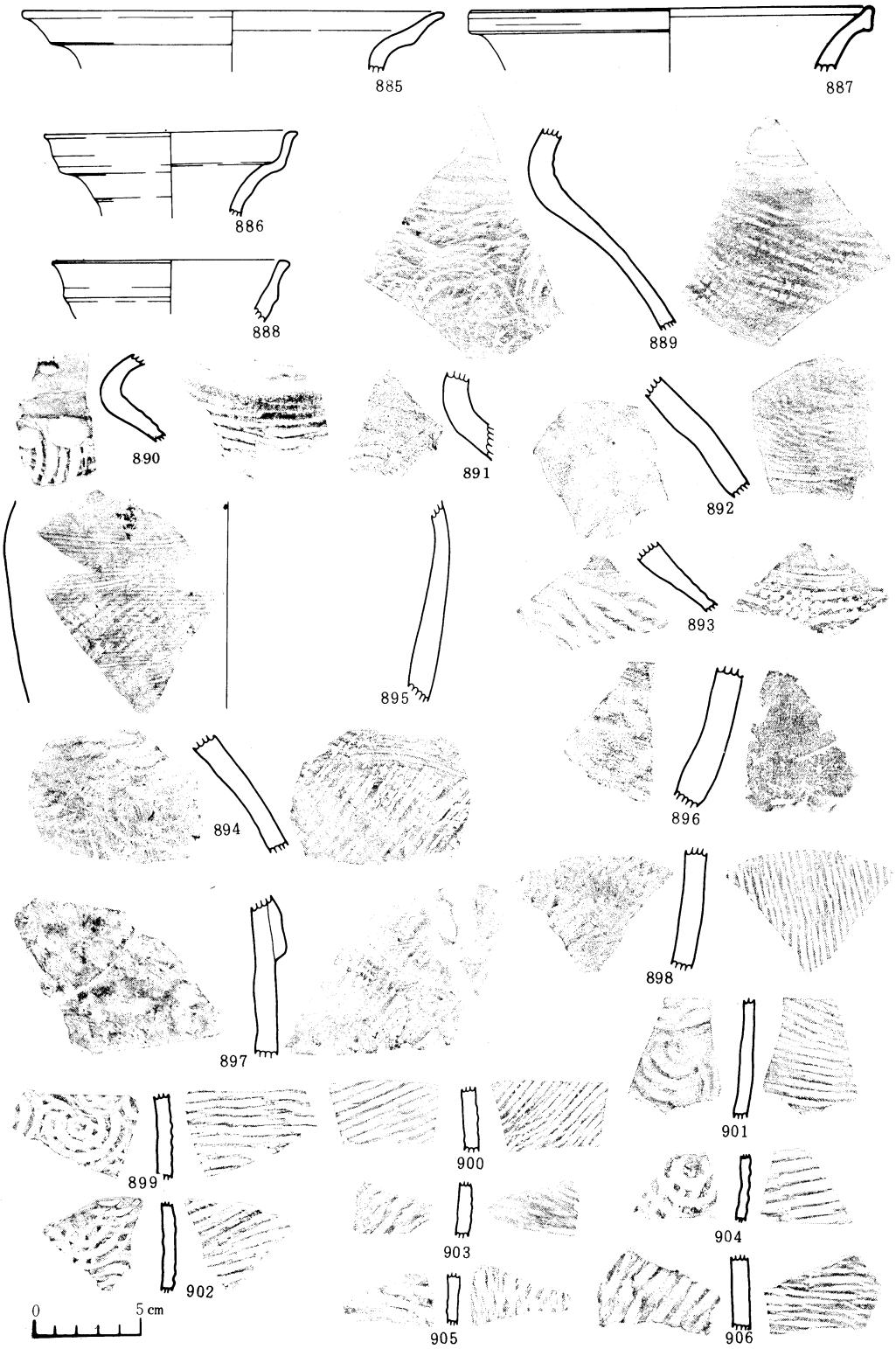
帯状遺構Ⅱ出土の1点を除いて4点の出土で，台付きの埦と思われる。外面は淡黄褐色ないしは淡褐色，内面は917が色がやや薄いものの他はすべて黒色が明瞭である。919は体部を作った後，台の取り付け部分に2条の沈線（幅・深さ共に約1㎜）を引いた後に高台を貼り付ける。917も台の部分を貼り付けた後にナデ回しにより調整を行っている。

D．青磁（第73図，920）

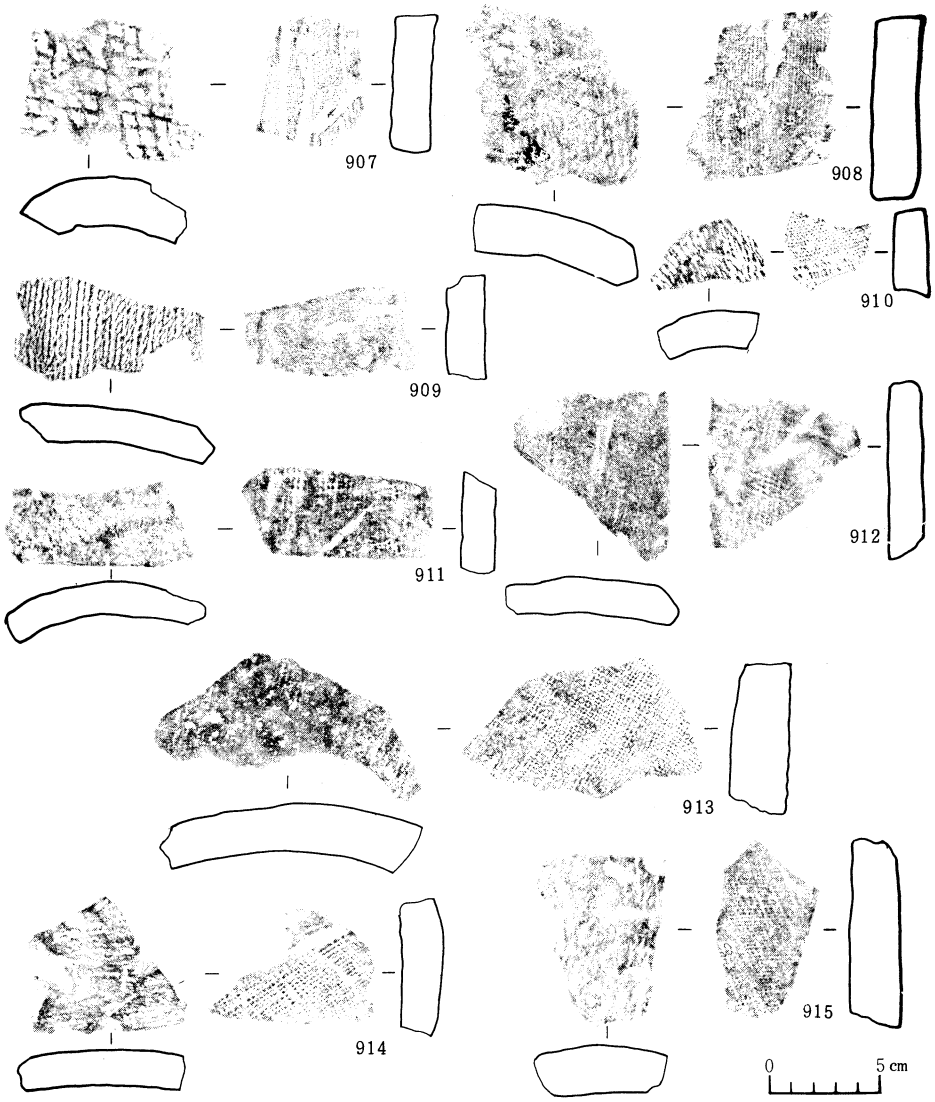
P－11区Ⅳ層から1点出土した。碗の底部で，篦削りの肥厚する高台，露胎であるが高台及び内底に釉流れを生じる。淡褐色の磁胎に淡緑青色の施釉。中心部も露胎で，重ね焼きの際の五徳が残る。

E．古銭（第73図，921・922）

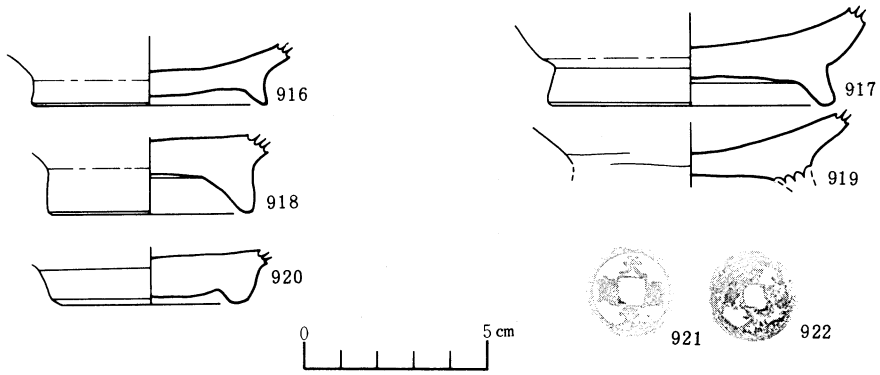
921は天元通寶と読める。922は下の字が元と読めることから同一と思われる。


885
887
886
888
889
890
891
892
893
895
894
896
897
898
899
900
901
902
903
904
905
906
0
5 cm

第71図　須　恵　器



第72図　瓦



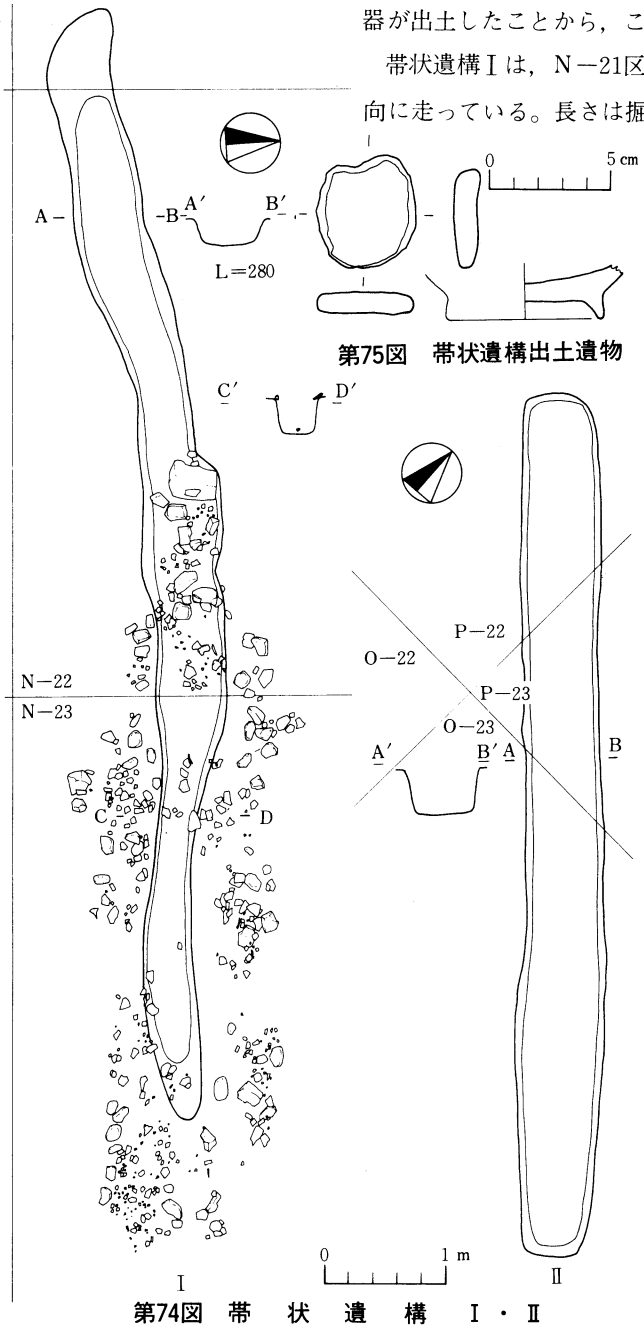
第73図　内黒土器・青磁

第Ⅴ章　遺　　構

帯状遺構Ⅰ・Ⅱ（第74図）

第２次調査で２本の帯状掘り方遺構が検出された。何れも東北部の土器の集中する地域に，これらの土器群の包含層を掘り込む形で作られたものである。帯状遺構Ⅱの埋土から内黒土師器が出土したことから，この時期のものと推定される。

帯状遺構Ⅰは，Ｎ－21区からＮ－23区にかけて，ほぼ東西方向に走っている。長さは掘り方上面で約9.15mでやや蛇行しており，幅は最も広いところで上面約60cm，狭いところで35cm，深さは上面から20～30cm程度である。全体的に東側から西側に傾斜する（下る）傾向が認められた。周囲には礫及び土器片が散在し，中には遺構内部に入っているものも見られた。



第74図　帯　状　遺　構　Ⅰ・Ⅱ

第75図　帯状遺構出土遺物

帯状遺構Ⅱは，Ｐ－22区からＯ－23区にかけて，南西～北東にほぼ一直線に走る。長さは，上面で約7.15m，幅は約60cmでほぼ一定しており，中央部付近での深さは約35cmを測る。Ⅰと同様，周囲には石や土器片が散在していたが，遺構上面には遺物は全く見られず，埋土から内黒土師器が１点出土したのみである。このことからこの遺構は平安時代のころのものとみなして大過ないと思われる。

なお，Ⅰについては，形状の細部はやや蛇行しているが，全体から見るとほぼ直線的である。遺物は極めて新しい時期のものが見られないことから，Ⅱと同様に平安時代頃と推定して良いように思う。

遺物は，Ⅰから円盤状土製品，Ⅱから内黒土師器が出土したほかは際立ったものはなかった。

ま と め

外川江遺跡は近年まで低地の水田地であった場所である。調査は高城川の河道整正後ということで遺跡地は分断された形となった。又，昭和８年頃小高い畑地であった当地を造成して田圃につくりかえたとのことで，中央部分の遺物包含層は削除され耕作土の直下にⅣ層の砂層が堆積し，遺物の空白地がみられた。この空白地を堺に両サイドの東・西に地形が緩かに傾斜しており４ケ所に分散して遺物が散布していた。したがって本遺跡の旧地形は高城川河岸の小丘陵状の微高地であったことがうかがわれ，耕地整理によって遺跡の主体部は壊滅し，小丘陵の裾野にあたる緩傾斜部分に包蔵されていた部分が今日まで残存したものである。

遺跡の性格

遺跡の主体部はすでに破壊されているため遺構の存在は確認できなかった。遺物もⅤ層（縄文晩期）とⅣ層を遺物包含層とする弥生前期～後期～古墳時代～平安～薩摩国分寺の瓦と併行する古瓦など数世紀にわたる遺物が混在して出土する出土状況であって層位的にあるいは共伴関係などを把握することは極めて困難である。主体は足の踏み場のない状態での弥生終末～古式土師にかけての夥しい土器の出土であった。出土遺物は甕形土器，壺形土器，蓋形土器，器台，ジョッキ形土器などがあり，特に，手捏土器，杓子形土器に加えてガラス玉，小形彷製鏡などの出土や高城川と麦之浦川の合流するという地理的環境から祭礼性の強い性格をもつ遺跡とも考えられる。又，磨製の石包丁や木器が出土したことから周辺には農耕に関する遺構の所在も推定される。

出土遺物について

縄文式土器のⅠ類（１～３）は口唇部や体部に貝殻腹縁による擬縄文を施す鉢形土器で北久根山式第二類，(4)は第一類ａに相当するものと思われる。Ⅱ類は瀬戸内系の津雲Ａ式類似と想定されいずれも本県では最初の発見例といえる。Ⅲ類は西平式土器，Ⅳａ類は口唇部に特長を示す市来式に先行する松山式系統の土器，Ⅳｂ類は市来式土器である。Ⅴ類は晩期に比定されａ類は晩期Ⅲ式相当の深鉢，ｂ類は晩期Ⅰ式の浅鉢と思われる。

弥生時代～古墳時代にかけて甕，壺，鉢など出土したが層位的に前後関係を把握することは不可能であり，器種や形態から分類をこころみてみた。

甕形土器－Ⅰ類は高橋Ⅱ式，Ⅱ類は逆Ｌ字口縁で中期中葉に比定されよう。Ⅲ類は「く」字口縁で，口縁下内面に稜が施されているものである。底部は中空の脚台を有し，甕形土器で九州以東にみられる丸底と異なり南九州独自のもので弥生中期の入来式土器の伝統を受け継いだ形態といえる。胴部はなだらかに底部へ移行するものと，やや膨らむものである。いわゆる成川式土器には口縁内側に明瞭な稜線がないのが特徴であるが，松木薗遺跡の溝状遺構出土(註15)の一括土器の中に，明瞭な稜がつく甕が出土しており後期前期～中葉に位置づけられている。最近，辻堂原遺跡出土の土器がそれに後続するものとして提唱があり(註16)，外川江甕Ⅲ類も辻堂原式相当に位置づけられる。Ⅳ類は二重口縁を有するⅣａ類と頸部に刻目凸帯を有するⅣｂ類に分類し

た。Ⅳa類は最近，その出土例が増えつつあるが口縁内側に弱い稜線がみられ，松木薗甕Ⅱ期に影響を受けて後続するもので後期末に比定されようか，Ⅳb類はa類より古いものではないと考える。Ⅴ類は叩き目を有するものでその手法は肥後の影響をうけたものと思われる。

壺形土器ーⅡb類は櫛描波状文を施すもので，塚崎遺跡[註17]にも出土している。Ⅰ，Ⅱ類は弥生中期中葉～後半にかけてのもの，Ⅲ類，Ⅳ類は壺形土器のうち主体をなす一群で凸帯がないものと凸帯を施すものである。底部は平底及び尖底気味の丸底である。辻堂原式，中津野式タイプと思われる。Ⅴ類は甕Ⅴ類と同様叩き目を有するものである。器形はⅢ・Ⅳ類とさして違いはない。Ⅵ類土器は複合口縁壺で安国寺系の土器であるが，口縁部に櫛描波状文を施すものではない。354は底部が平底に近い丸底を呈す。安国寺式の櫛描波状文を施す複合口縁壺は第Ⅱ期に確立するといわれ古式土師器の時期まで存続することがいわれている。したがって外川江壺Ⅵ類は弥生終末～古式土師器に相当するものといえよう。Ⅵa類とⅥb類には口縁部の長さや，拡張部の開きに若干の相異がみられるが筑肥型の系統を引くものと思われる。Ⅳa類の中で362は口縁部が外向きを呈し口縁下位に弱い引き出しが施されているが西新町出土[註18]に類似しているように思われる。Ⅶ類は櫛描文や篦書文・重弧文を有す土器で本県では最初の発見である。386，387には流麗な櫛描文が付されている。Ⅷ類は重弧文を施す免田系の長頸壺である。免田系土器は弥生後期相当といわれるが本県では，最近成川式土器と供伴して出土する例もあり，古墳時代まで続くことが知られている。Ⅶ類はヘラ描き文と櫛描文が同時に施されている。定かではないが，瀬戸内地方の中期に源を発し，北九州肥後を経て南九州にも影響をもったものと思われ弥生末～古式土師相当期とする。Ⅸ類は平底と丸底の底部を呈し，Ⅹ類は小型丸底の坩形土器である。Ⅸ類に比べⅩ類は極めて少なく本遺跡の特徴といえ，小型丸底壺の発生を古墳時代とするならば，器形や数量からも弥生から古墳への過渡期的な資料といえる。

鉢型土器ーⅠ類は脚を有し，Ⅱ類は脚は無く肥厚した平底や丸底を主するものである。鉢Ⅰ類には中型や小型があるが，特に455は坏部が浅く内湾気味の口縁部となり，高坏や器台様の形状を示すものである。

高坏ーⅠa類は中期に比定される。Ⅱ類は口縁部は大きく外析反転し口縁部が長くなる，この傾向は弥生終末期にみられ古式土師になるとさらに口縁部が長くなることから，弥生終末に比定されよう。脚部は脚裾部が広いものと内湾しながらひろがっているものがある。脚部には円形の透しを穿っているものが大半を占め，外川江の特徴的な要因である。

器台ーⅠ類は，鼓形器台が宮崎県大萩遺跡[註19]から出土する。本県では，時期的には先行する弥生中期中葉後半とする鎮守ケ迫遺跡[註20]や塚崎遺跡出土[註21]のものがある。Ⅲ類の小型の高坏模造品を思わせるがⅡ類と同様胎土，焼成，色とも特異なもので搬入土器の可能性もあり，古墳時代まで降ることを予想される。その他，壺形土器や多量の手捏ね土器，杓子型土器などが出土した

以上，外川江遺跡の出土土器について紹介したが，土器の形態や器種による層位的な共伴関係や，セット関係を把握することは不可能な状況での分類であり，今後の課題としたい。

本遺跡出土の小形内行花文S字状文鏡について

小形彷製鏡は全国に57例が知られ，そのうちの40例については，内区に内行花文帯が施されている。高倉氏は小形彷製鏡を型式によって３型式６分類(註22)に細分されている。この中でも弥生時代彷製鏡の中心をなす型式が第Ⅱ型で，朝鮮南部から兵庫県下に及ぶ広域に分布し，特に弥永原・酒殿・宮原など北九州を中心として分布している。第Ⅱ型ａ類は『……幅広の平縁，目の粗…斜行櫛歯文帯・内行花文帯・乳文・蕨手文などの図文……。ｂ類は『図文の簡略化が進み，同時に定型化する。ａ類に比べ蕨手文・獣形文などの図文を使うことがなくなり…』…の条件のもとで本遺跡出土の小型内行花文Ｓ字状文鏡は，平縁で斜行櫛歯文帯・半月形浮彫状の内行花文帯・四乳文などが配され，高倉氏分類による弥生後期中～後半の第Ⅱ型ａ類に相当するものと思われる。又，蠅竜文の影響と思われる四個のＳ字状文を有した第Ⅱ型ａ類に属する亀の甲Ⅰ鏡と斜行櫛歯文帯の方向が逆であるという違いこそあれ，他の図面がまったく同形の鏡ということは興味深いことである。小形彷製鏡の性格については手鏡・祭器などの説があり，箱式石棺の副葬遺物や散布地からの出土例が多い。外川江遺跡にいたっては遺構や墓に伴っての発見ではなく鏡出土地として一例を加えたことになる。

《参考文献》

註11　青崎和憲・中村耕治・宮田栄二「前畑遺跡」菱刈町文化財報告書(2)　1983年

12　平田信芳他「萩原遺跡Ⅱ」姶良町文化財報告書　1980年

13　池畑耕一他「成岡遺跡」鹿児島県文化財報告書　1983年

14　河口貞徳・小田富士雄「薩摩国府跡・国分寺跡」鹿児島県教育委員会　1975年

15　本田道輝「松木薗遺跡出土の土器について」鹿児島考古第14号　1980年

16　池畑耕一「成川式土器の細分編年試案」鹿児島考古第14号　1980年

17　立神次郎・中村耕治「塚崎遺跡」鹿児島県文化財報告書(13)　1980年

18　福岡市教育委員会「西新町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第79集

19　宮崎県教育委員会「大茨遺跡1)」宮崎県文化財調査報告書　1974年

20　立神次郎・中村耕治「鎮守ケ迫遺跡」鹿児島県文化財報告書(13)　1980年

21　立神次郎・中村耕治「塚崎遺跡」鹿児島県文化財報告書(9)　1978年

22　高倉洋彰「弥生時代小形彷製鏡について」考古学雑誌　第58巻第３号

外川江遺跡遠影

遺物出土状況

図版2

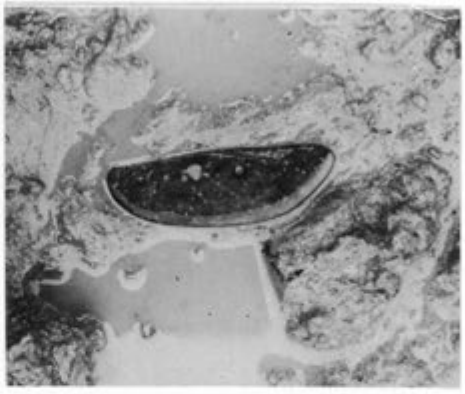
土器出土状況

小形仿製鏡出土状況

壺出土状況

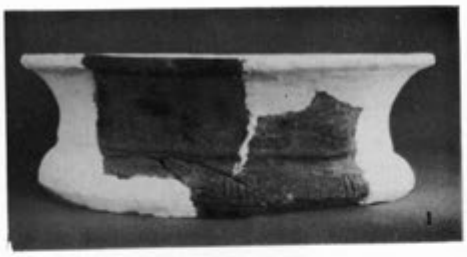
勾玉出土状況

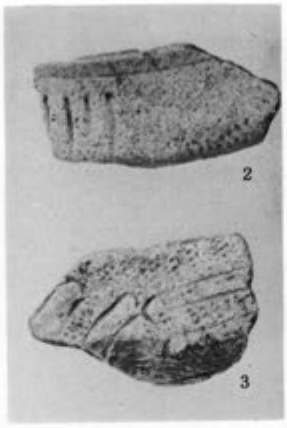
双孔棒状出土状況

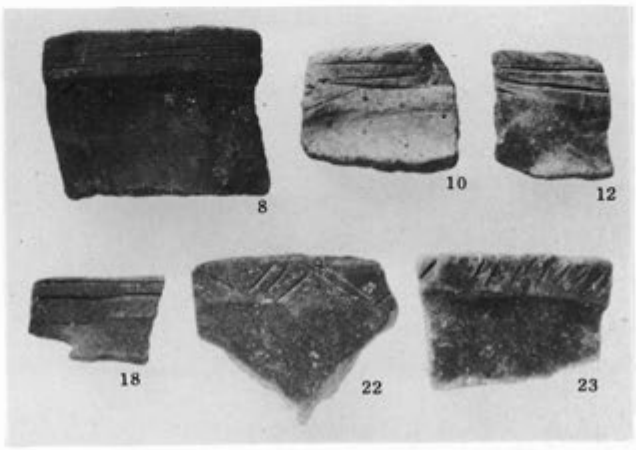


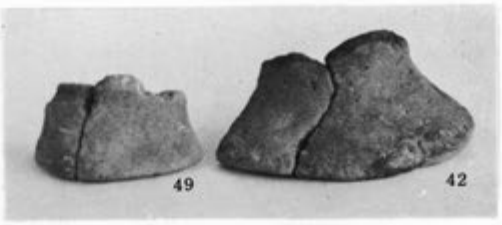
石庖丁出土状況

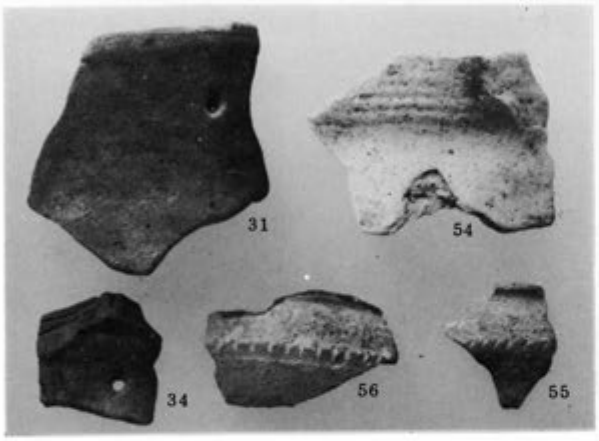
図版 3

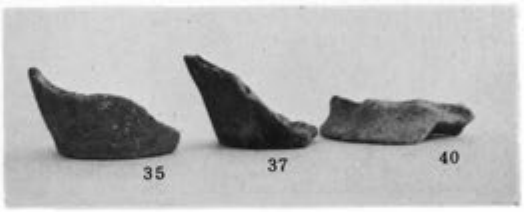




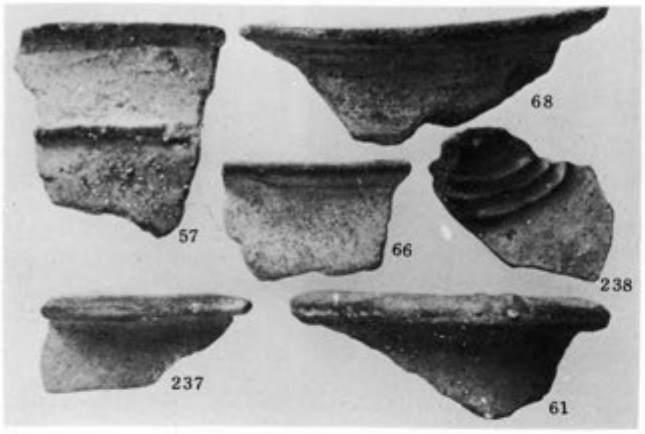


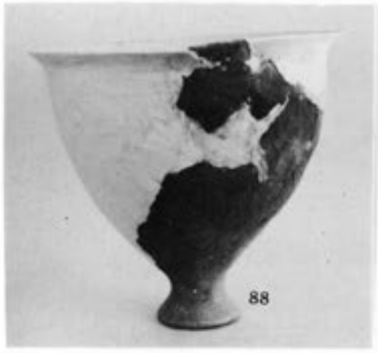






図版4

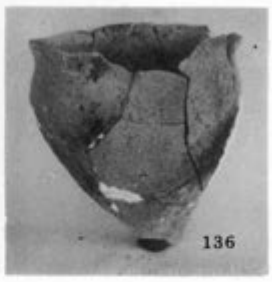




127

130

134


136

137

138

139

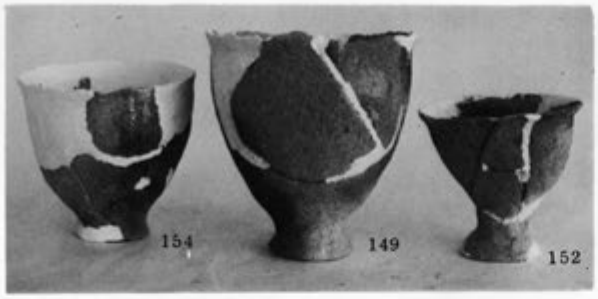
142

141

143

146

150


154 149 152

153

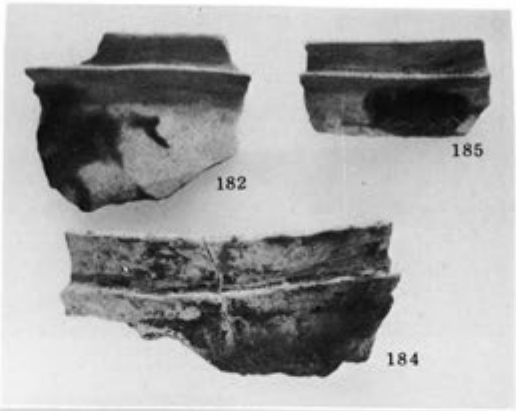
157

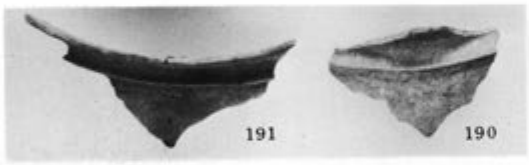
172

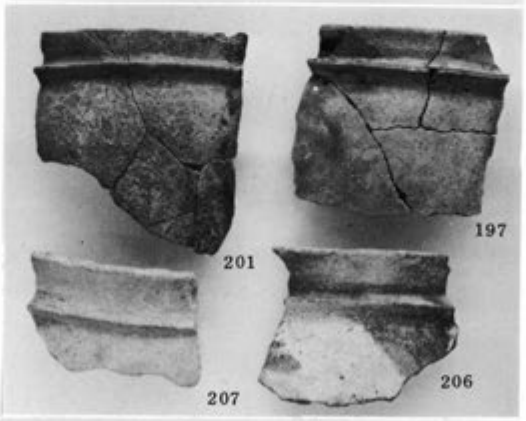
175

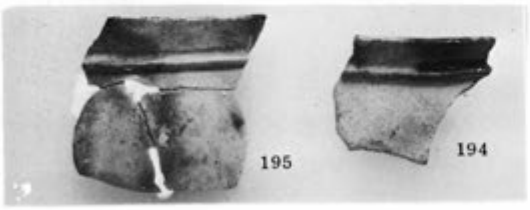
図版6

180


182
185
184

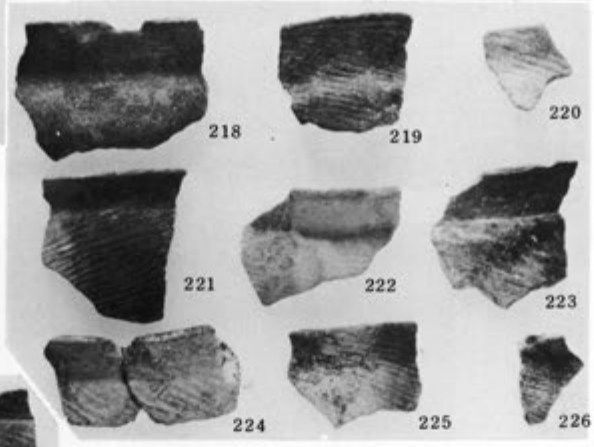

191
190

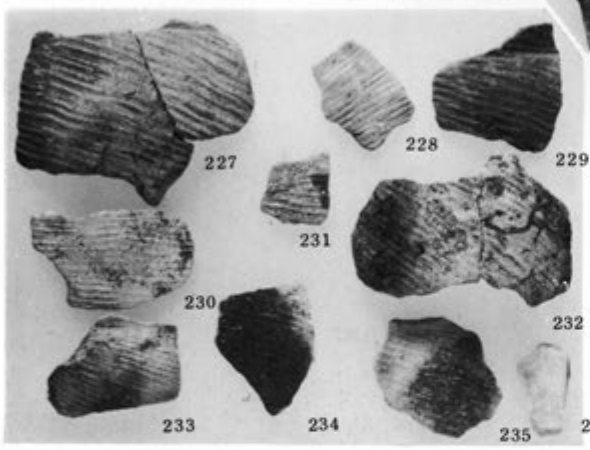

197
201
207
206


195
194

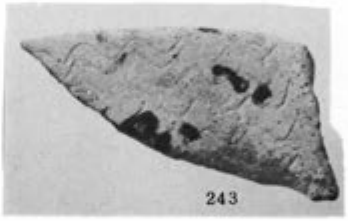
209

213


218
219
220
221
222
223
224
225
226


227
228
229
231
230
232
233
234
235
236

244


243

245

248

249

251

253

257

258

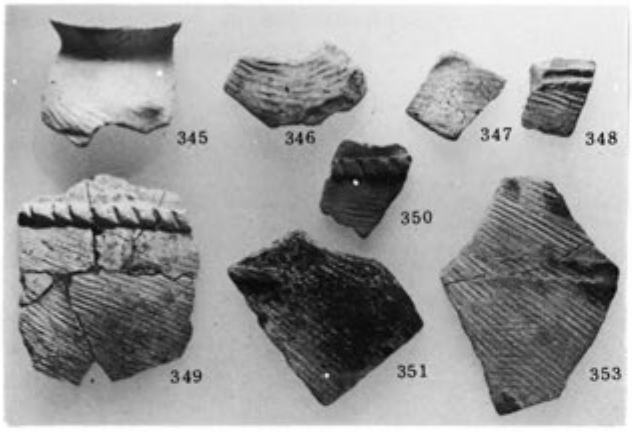
265

246

250

297

305

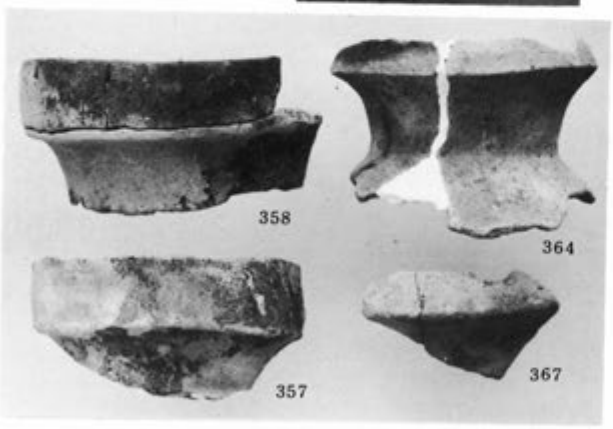

345
346
347
348
350
349
351
353

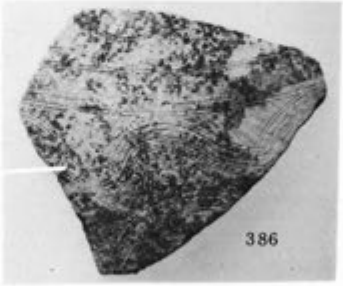
図版8

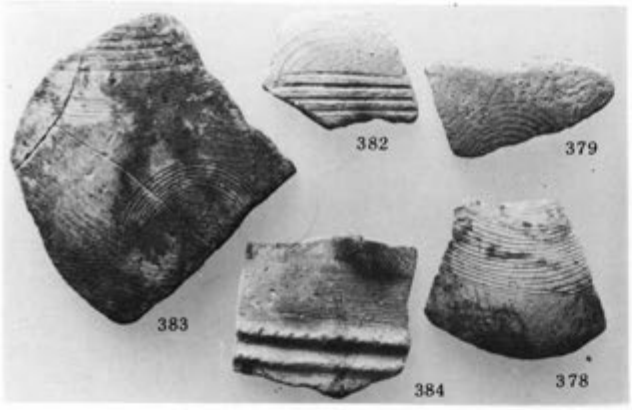
354

363

375


358
364
357
367


386

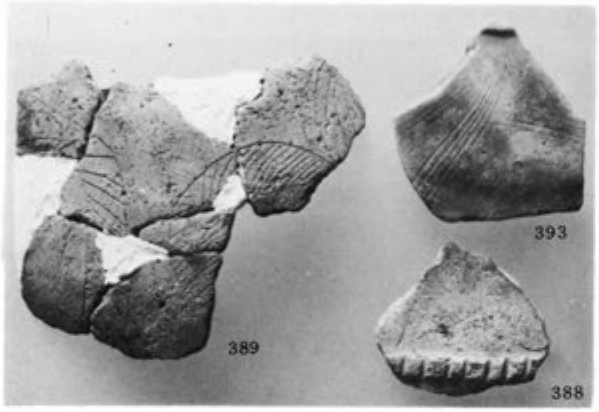

382
379
383
384
378

387

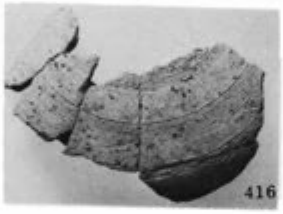
395

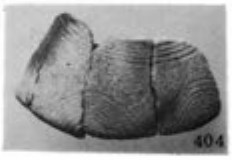
414

415


393
389
388

400
399


416


404

図版 9

421

420

422

454

457

464

468

472

432

496

498

504

510 506

518

512 516

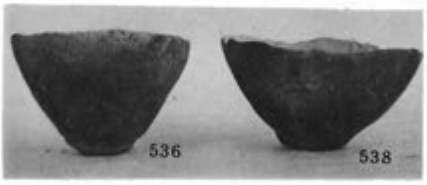
519

521

523

526

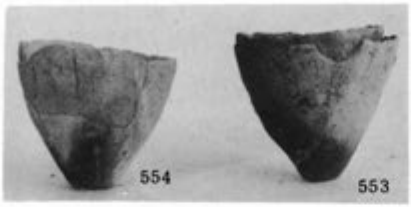
532


536 538

541

図版10

548


554
553

555

556

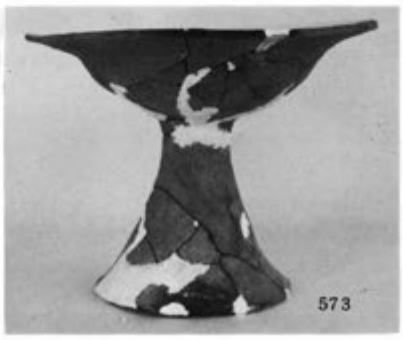
557

559

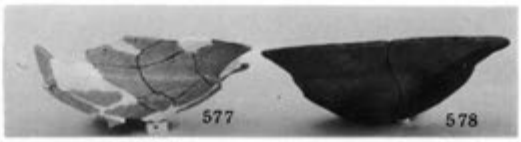
562

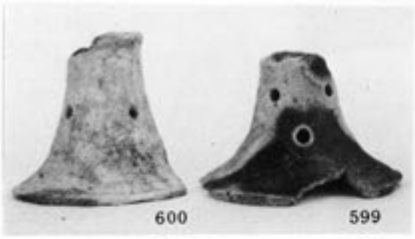
561

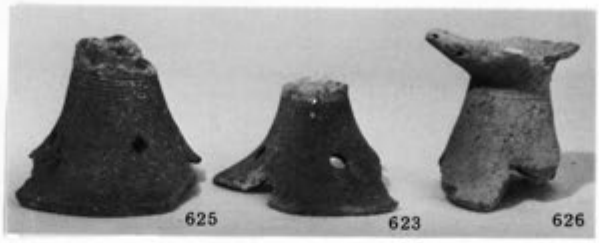
572

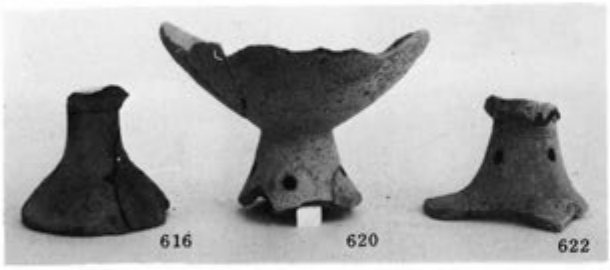

573

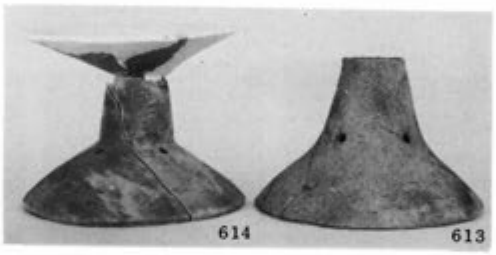
580
584


577
578


600
599


625
623
626


616
620
622


614
613

629

632

633

634

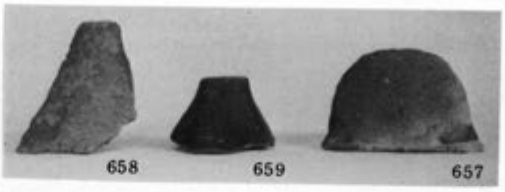
635

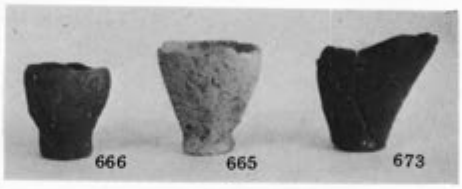
645

646

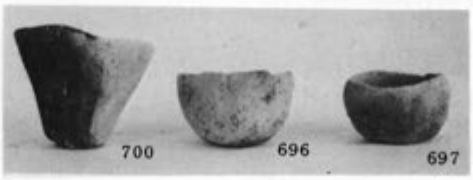
648

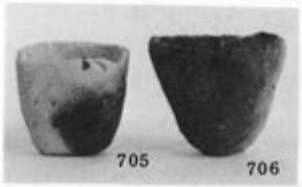
653


658
659
657


666
665
673

701
707
702


700
696
697


705
706

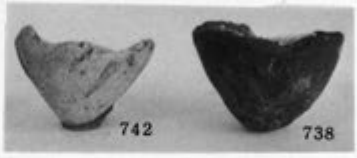
726

729

730

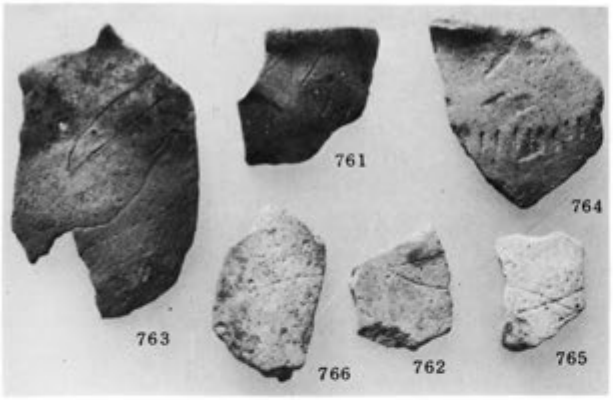
734

731
732
736


742
738

758
759
760

図版12


761
764
763
766
762
765

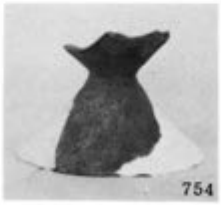
770
769

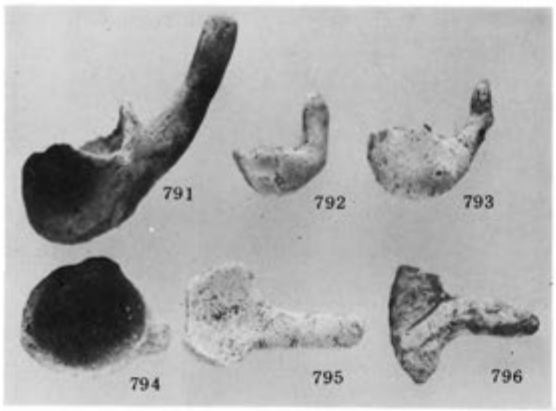
753

750

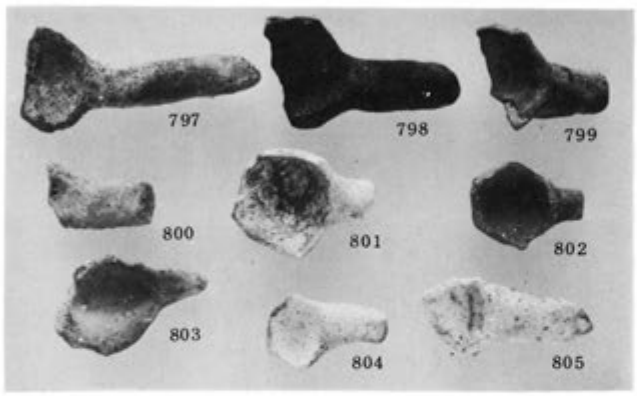
751

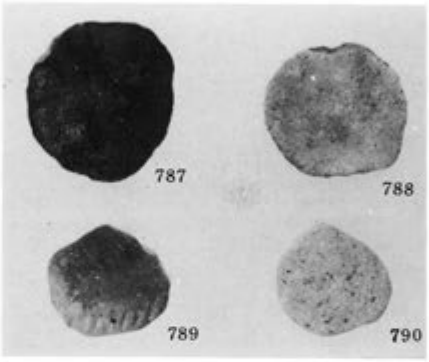
752

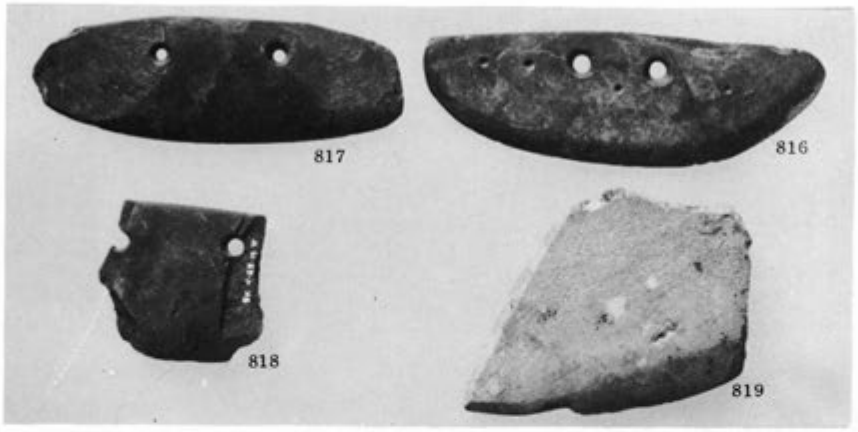

754

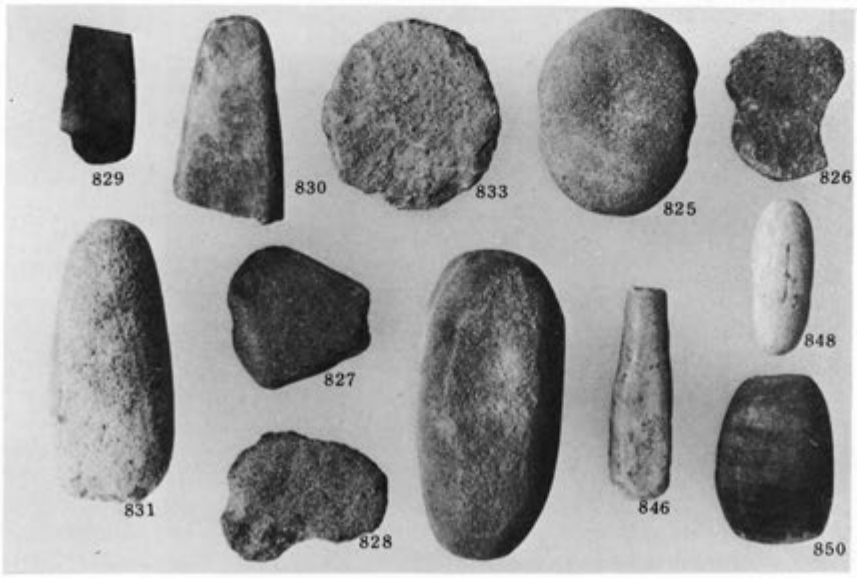

791
792
793
794
795
796

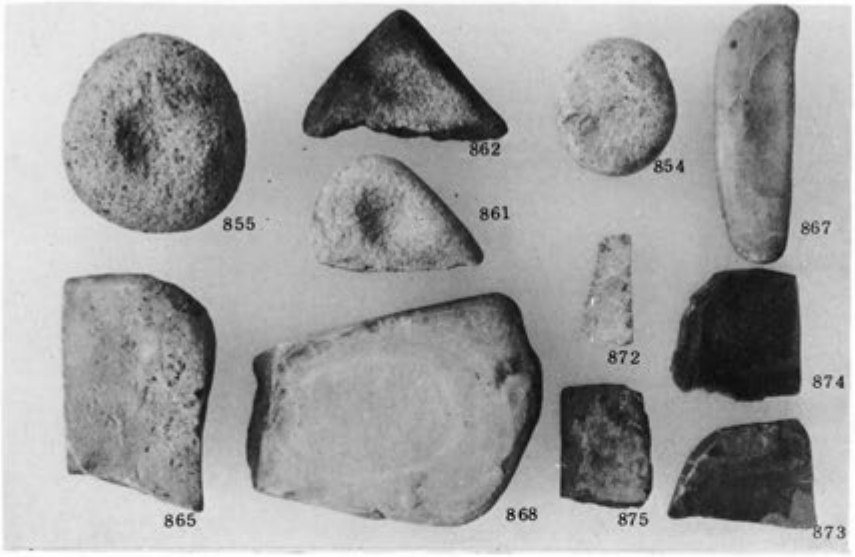
767
768
774


797
798
799
800
801
802
803
804
805

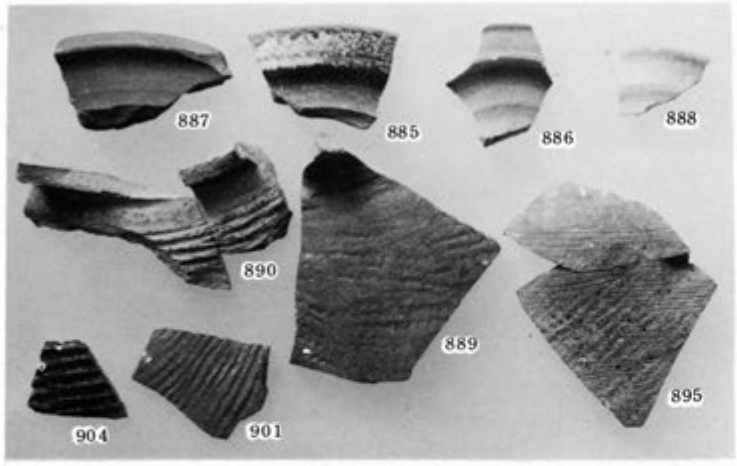

787
788
789
790


817
816
818
819


829
830
833
825
826
827
848
831
828
846
850

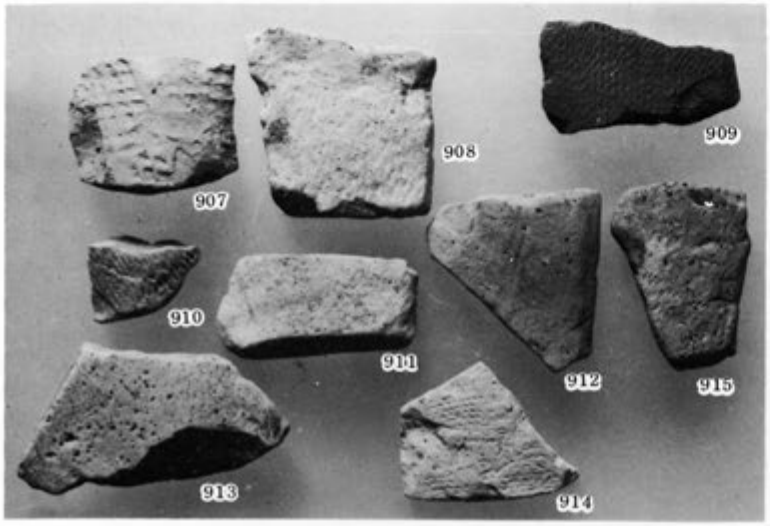

862
854
855
861
867
872
874
865
868
875
873

図版14

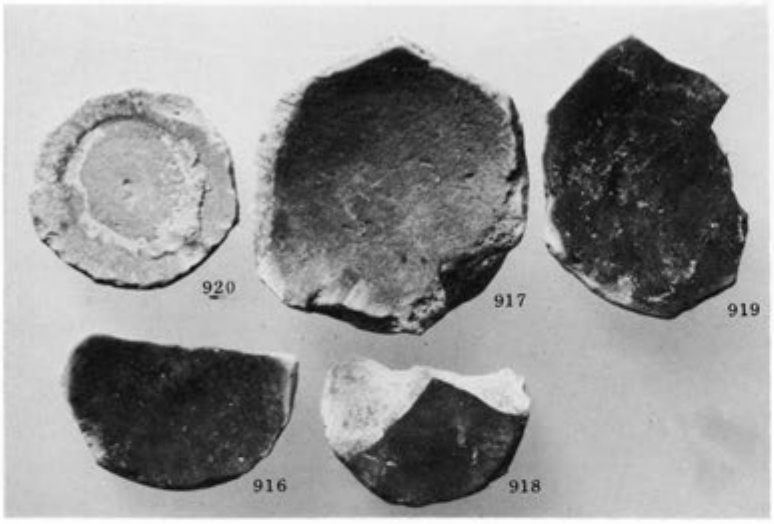

887
885
886
888
890
889
895
904
901

814

815


907
908
909
910
911
912
915
913
914

921


920
917
919
916
918

922

鹿児島県川内市外川江遺跡の泥土の花粉分析

広島大学　　安　田　喜　憲

Ⅰ　試料の採取と層序

川内市外川江遺跡は，鹿児島県川内市五代町外川江に位置する。遺跡は高城川の河岸に立地する弥生～古墳時代の遺跡である。花粉分析用の泥土は，1975年12月29日，発掘地点に近接した河岸の露頭から直接採取し，ポリ袋に密封して実験室に持ち帰った。

露頭の層序は図Ⅰに示す如く，下位より，灰白色砂礫層（地表下－230cm以下）暗褐色有機質粘土層　地表下（－230～－150cm）灰白色砂層　（－150～－140cm）暗青色シルト層（－140～－100cm）暗褐色水酸化鉄の沈着をもつシルト層（－100～－60cm）人工的盛土（－60～0cm）の順である。

Ⅱ　分析方法

花粉分析の方法は，KOH処理（10％水酸化カリウム溶液にて10分間湯せん）－水洗（蒸留水にて５～６回・遠心分離）－比重分離（70％塩化亜鉛溶液，比重2.1～2.2にて，比重・遠心分離・２～３回）－水洗－酢酸処理（氷酢酸にて脱水）－アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液にて，３分間湯せん）－酢酸処理－水洗－グリセリンジェリーにてマウントの順に行った。

顕鏡は 400倍～1000倍で行い，樹木花粉 200個以上を同定するまでカウントを行った。また写真撮影を行ない，必要なものについては，シングルマウント法にて，単体標本を作成し，保管した。検鏡に使用した残りは，管瓶に密封して保存した。

Ⅲ　分析結果

分析結果は表Ⅰに示す如くである。また主要な樹木花粉，草本花粉，胞子それに炭片の出現率の変化については，図Ⅰの花粉ダイアグラムに示した。図Ⅰの花粉ダイアグラムは，樹木花粉を基数としたパーセントで表示してある。炭片の出現についても同様にしてもとめた。また主要や花粉・胞子と珪藻の遺体について，写真図板に示した。

花粉ダイアグラムは，全体を通してアカガシ亜属（Cyclobalanopsis）とシイノキ属（Castanopsis）の高い出現率で特色づけられる。このアカガシ亜属とシイノキ属の２属で，全体の樹木花粉の８０％以上を占める。残りの中には，針葉樹花粉ではモミ属（Abies），二葉マツ亜属（Pinus ・Diploxylon），広葉樹ではハンノキ属（Alnus），ハシバミ属(Corylus)，カエデ属（Acer），エノキ属・ムキノキ属（Celtis －Aphananthe）などの落葉樹と，ヤマモモ属（Myrica），モチノキ属（Ilex）などの常緑樹が比較的高い出現率を示す。

一方，草本花粉・胞子は，出現率が低く，わずかにイネ科（Gramineae）やヨモギ属（Arte

misia)，カヤツリグサ科（Cyperaceae）や単条型胞子（Monolete） Spore）が比較的高率で連続的に出現するのみである。

樹木花粉（ＡＰ）が全体として高い出現率を示すが，試科No.14より上位では，しだいに草本花粉・胞子（NAP）の出現率も増加する。これとともに注目されるのは炭片の出現率であり，炭片が増加するとともに，樹木花粉の構成比率が減少していく。このことは山火事などの一時的なものとともに，人間によるインパクトが考えられる。特に試科No.14より上位では炭片が急増し，周辺に人類の居住とその森林に対する影響の開始が推測される。しかし，イネ属やその他の栽培種の花粉が検出されず，周辺で稲作を行った証拠は検出されなかった。

なお，地表下 230 ～ 150 cmの暗褐色有機質粘土層からは，海に生息する珪藻の遺体も検出されている（写真参照）。

Ⅳ 結 語

外川江遺跡の泥土の花粉分析の結果，遺跡周辺の環境は，長くカシやシイを中心とする照葉樹林がうっそうと繁茂していた。炭平や樹木花粉・非樹木花粉の変遷から，人間のインパクトも考えられたが，栽培作物の花粉は検出されず，周辺で稲作をはじめ農耕が行われていたこん跡はみられなかった。

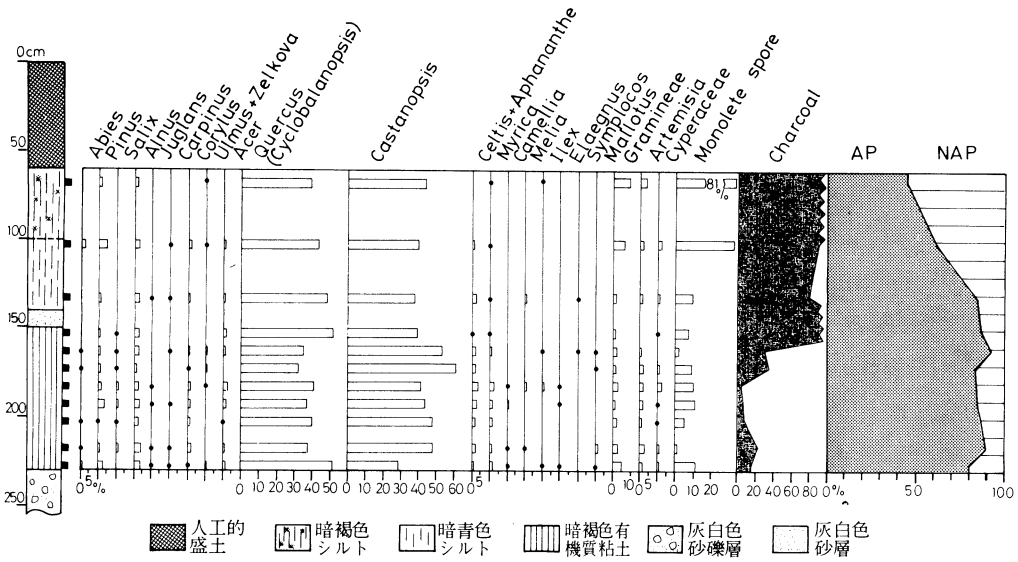
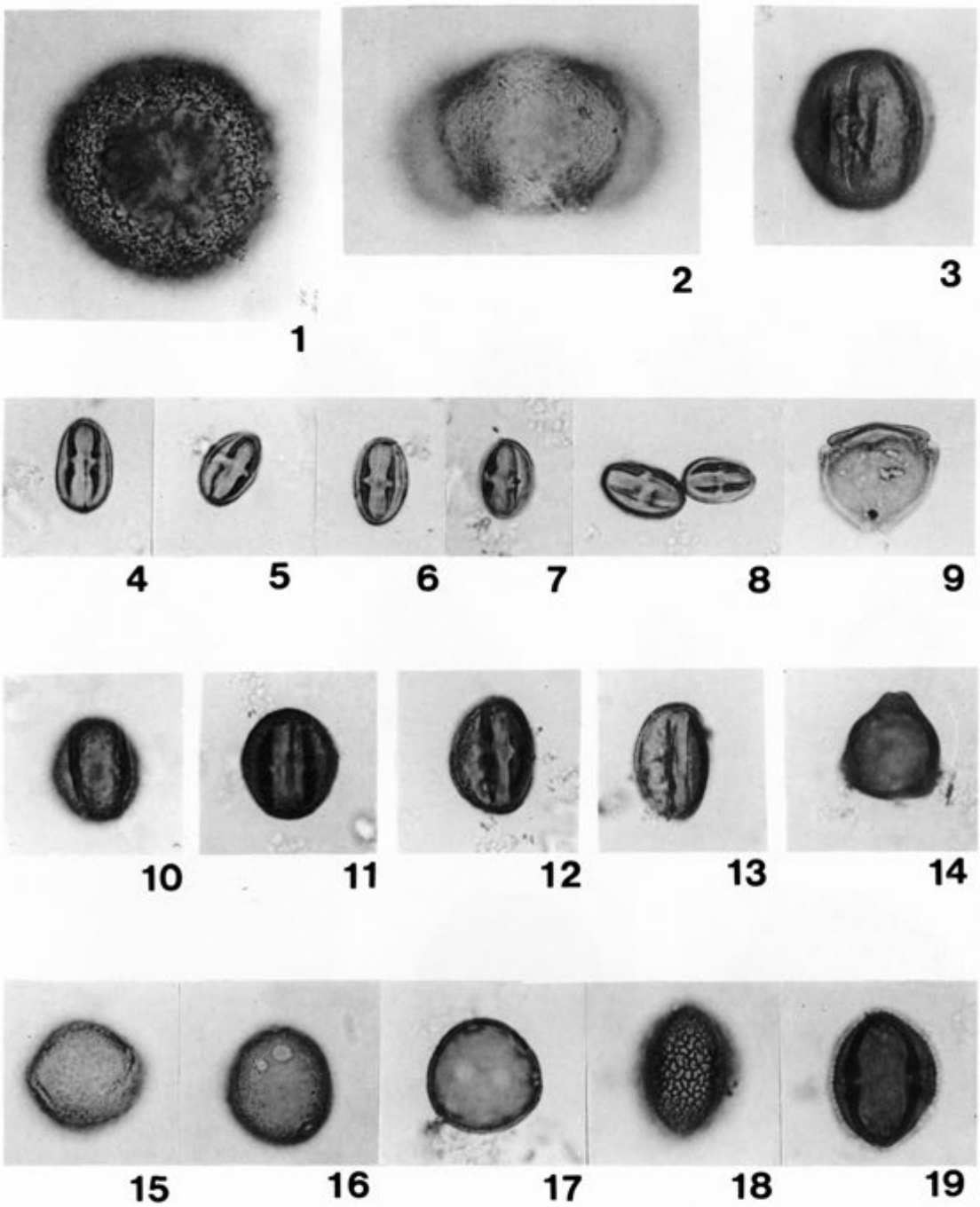


図１ 鹿児島県外川江遺跡の主要花粉・胞子のダイアグラム
（出現率は樹木花粉を基数とするパーセント）

表１　鹿児島県外川江遺跡の泥土の花粉・胞子出現率表

科・属＼試料	No. 2	No. 4	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 12	No. 14	No. 16	No. 18	No. 20
Abies	2個 0.8%	1個 0.3%	1個 0.3%	2個 0.7%	個 %	1個 0.3%	1個 0.2%	個 %	個 %	6個 2.5%	個 %
Tsuga	1 0.4									1 0.4	
Pinus	8 3.2	3 0.9	1 0.3	10 3.5	4 1.3	3 0.9	4 0.9	2 0.9	3 1.0	10 4.2	1 2.0
Cryptomeria	1 0.4										
Podocarpus									1 0.3		
Salix		2 0.6	1 0.3	2 0.7	2 0.6	1 0.3	1 0.2	1 0.4			
Alnus	8 3.2	11 3.5	7 2.5	8 2.8	7 2.4	4 1.2	13 3.0	5 2.3	8 2.7	6 2.5	1 2.0
Juglans	1 0.4	1 0.3		1 0.3	1 0.3				1 0.3		
Carpinus	1 0.4	1 0.3		1 0.3			1 0.2		1 0.3	1 0.4	
Corylus	1 0.4	6 1.9	4 1.4	5 1.7	5 1.7	1 0.3	3 0.6		2 0.6	4 1.6	
Fagus	1 0.4										
Ulmus	2 0.8	1 0.3			1 0.3	1 0.3	2 0.4				1 2.0
Zelkova	1 0.4	1 0.3				1 0.3	2 0.4			1 0.4	
Acer	4 1.6	2 0.6	1 0.3	4 1.4	7 2.4		4 0.9	4 1.9	2 0.6	2 0.8	
Moraceae			2 0.7	1 0.3			1 0.2				
Rhus	1 0.4						1 0.2				
Fraxinus		1 0.3							1 0.3		
Cyclobalanopsis	125 51.0	117 37.5	112 40.1	105 37.1	120 41.2	102 32.5	147 34.7	110 52.3	142 48.4	104 43.8	19 39.5
Quercus		1 0.3	1 0.3						3 1.0	1 0.4	
Castanopsis	71 28.9	149 47.7	132 47.3	122 43.1	120 41.2	191 61.0	226 53.4	82 39.0	112 38.2	95 40.0	21 43.7
Castanea			1 0.3	4 1.4				3 1.4	2 0.6		
Celtis-Aphananthe	3 1.2	6 1.9	5 1.7	8 2.8	10 3.4	7 2.2	7 1.6	1 0.4	8 2.7	3 1.2	
Rutaceae	2 0.8			1 0.3			1 0.2	1 0.4	1 0.3		
Prunus									1 0.3		1 2.0
Myrica	5 2.0	3 0.9	4 1.4	5 1.7	7 2.4		2 0.4	1 0.4	1 0.3	1 0.4	1 2.0
Camellia	1 0.4	1 0.3		2 0.7	1 0.3						
Ilex	1 0.4				2 0.6		1 0.2				1 2.0
Callicarpa	1 0.4	1 0.3	1 0.3								
Elaegnus	1 0.4			1 0.3	1 0.3						
Ericaceae	2 0.8										1 2.0
Mallotus	1 0.4	3 0.9				1 0.3	2 0.4				
Melia		1 0.3			2 0.6				3 1.0		
Araliaceae			1 0.3				1 0.2			1 0.4	
Vitis			5 1.7	1 0.3	1 0.3		1 0.2		1 0.3		
Symplocos							2 0.4			1 0.4	
Ligustrum											1 2.0
AP Total	245	312	279	283	291	313	423	210	293	237	48
Gramineae	12 4.8	9 2.8	6 2.1	2 0.7	7 2.4	2 0.6	7 1.6	2 0.9	5 1.7	17 7.1	4 8.3
Compositae	1 0.4		1 0.3				1 0.2		1 0.3		
Artemisia	3 1.2	6 1.9	3 1.0	5 1.7	6 2.0	5 1.5	2 0.4		4 1.3	6 2.5	2 4.1
Cyperaceae	3 1.2	3 0.9	1 0.3	1 0.3	7 2.4	4 1.2		1 0.4	2 0.6	5 2.1	
Borginaceae	2 0.8	1 0.3	9 3.2	1 0.3	1 0.3						
Scraophulariaceae	3 1.2	1 0.3	1 0.3								
Nymphoides	2 0.8										2 4.1
Liliaceae		1 0.3									
Potamogeton			1 0.3			1 0.3					
Thalictrum						2 0.6					
Sparganium						2 0.6					
Myriophyllum							1 0.2				
Typha									1 0.3	1 0.4	
Chenopodiaceae											1 2.0
Monolete spore	28 11.4	4 1.2	15 5.3	32 11.3	29 9.9	28 8.9	7 1.6	15 7.1	29 9.8	93 39.2	39 81.2
Trilete spore	9 3.6	10 3.2	7 2.5	10 3.5	7 2.4	13 4.1	13 3.0	12 5.7	15 5.1	20 8.4	11 22.9
NAP Total	63	35	44	51	57	57	31	30	57	142	59
Charcoal	41 16.7	73 23.4	20 7.1	19 6.7	11 3.7	115 36.7	128 30.2	313 14.9	243 82.9	223 94.0	518 107.9
AP＋NAP Total	308	347	323	334	348	370	454	240	350	379	107
Σ AP／Σ NAP	79.5/20.5	89.9/10.1	86.3/13.7	84.7/15.3	83.6/16.4	84.5/15.5	93.1/ 6.9	87.5/12.5	83.7/16.3	62.5/37.5	44.8/55.2

写真1



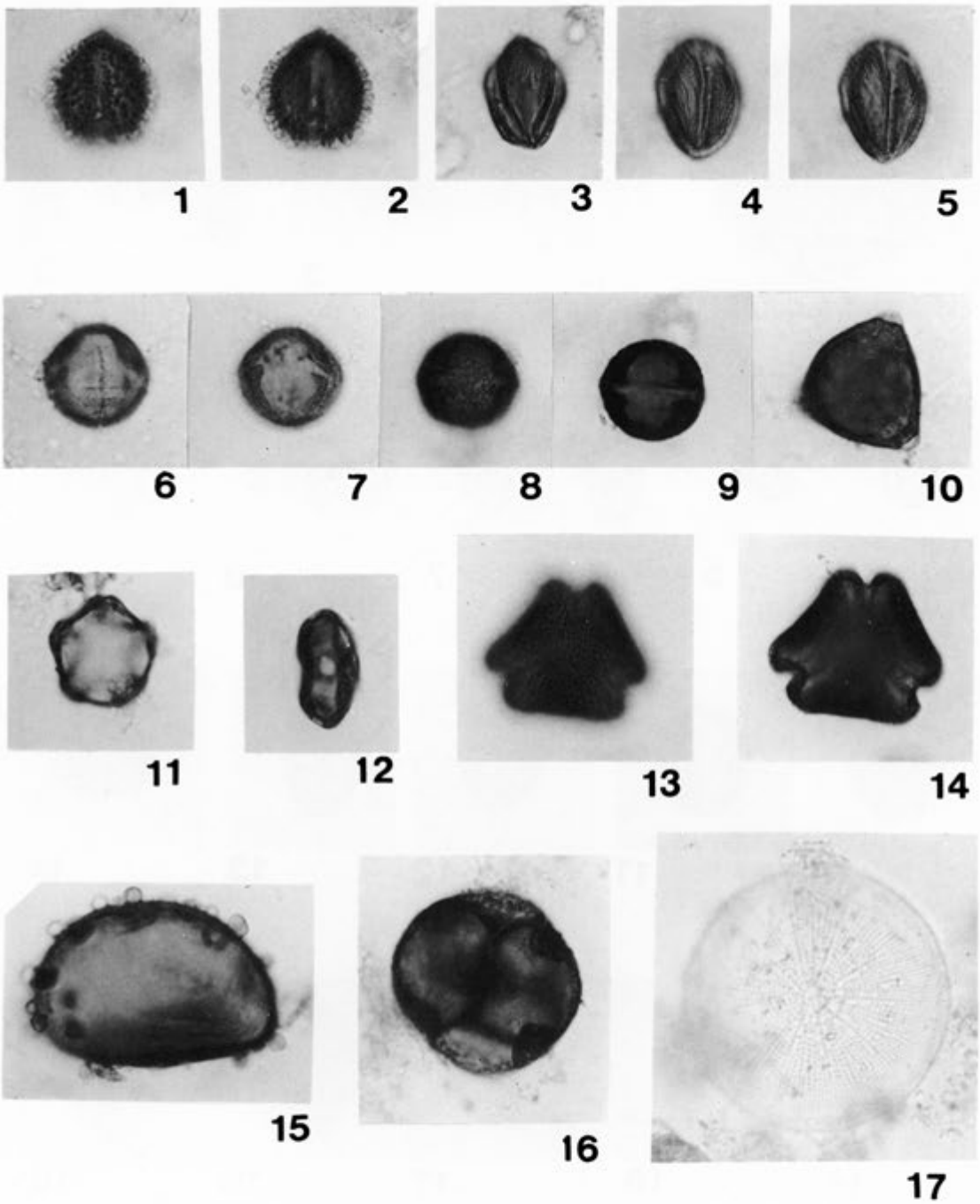
1, *Tsuga*, 2, *Pinus*, 3, *Melia*, 4, 5, 6, 7, 8, *Castanopsis*,

9, *Myrica*, 10, 11, 12, 13, *Quercus(Cyclobalanopsis)*,

14, *Myrica*, 15, *Quercus (Lepidobalanus)*, 16, 17, *Celtis- Aphananthe*

18, 19, Rutaceae

写真2



1, 2, *Ilex*, 3,4,5, *Acer*, 6,7,8,9, *Mallotus*, 10, *Elaegnus*

11, 12, *Alnus*, 13, 14, Araliaceae, 15, Monolete spore,

16, Unkown pollen, 17, Diatom living in marine

横　岡　古　墳

目　　次

第Ⅰ章　調査の経過及び概要…… 118
第Ⅱ章　土　層…… 122
第Ⅲ章　調　査…… 124
(1)　遺　構…… 124
(2)　出土遺物…… 130
第Ⅳ章　縄文時代…… 134
ま　と　め…… 134
Ⅶ号墳出土の人骨について（松下孝幸）…… 142

挿　図　目　次

第１図　横岡古墳周辺地形図……120
第２図　横岡古墳調査区・墳墓位置図…121
第３図　ａ～Ｅ－４区東側土層断面図…122
第４図　横岡古墳遺構配置図……123
第５図　Ⅳ号墳……124
第６図　Ⅴ号墳……125
第７図　Ⅵ号墳……125
第８図　Ⅶ号墳……127
第９図　Ⅶ号墳出土鉄器……128
第10図　帯状遺構・出土土器（高坏・坩）　129
第11図　落ち込み遺構……129
第12図　出土土器（須恵器）……130
第13図　鉄器（鉄鏃・刀子），鉄製品……132
銅製品
第14図　刀・剣……133
第15図　曽畑式土器・石器……134

図　版　目　次

図版１　横岡古墳遠影…… 137
図版２　全景・Ⅳ・Ⅴ号墳…… 138
図版３　Ⅶ号墳…… 139
図版４　Ⅶ号墳出土（人骨・鉄器）… 140
図版５　出土遺物…… 141

表　目　次

表１　鉄鏃一覧表…… 131

第Ⅰ章　調査の経過及び概要

第1節　調査に至る経過

横岡古墳は川内市上川内町釜口横岡に位置し，南北約95m，東西約14～33m，標高約7mで三方を水田に囲まれた小丘陵にあり，6－15（鹿児島県遺跡地名番号）の周知の遺跡である。当該古墳は過去2回にわたって調査が実施されその結果地下式板石積石室の群集墓[(註1)]で，集骨葬の埋葬形態を示すものもあり，鉄鏃・刀・剣・金・銀環・兜・鍔などが出土している。

横岡古墳に隣接する高城川は，昭和46年・47年の大水害により市街地に多大の被害をもたらした。そのため，県土木部は高城川の川幅拡幅，蛇行部の河道整正等の大規模河川改修事業を計画した。それによると，当該古墳の丘陵の南側端部が護岸工事区域内にはいることになり，県教育委員会と県土木部が協議した結果，約320㎡の対象区について発掘調査を行い記録保存を画ることとなった。

第2節　調査組織

調査責任者	鹿児島県教育庁文化課長		猿渡侯昭
調査企画	〃	主任文化財研究員	諏訪昭千代
調査担当	〃	主　事	青崎和憲
	〃	研究員	繁昌正幸
事　　務	〃	係　長	寺園晃一
	〃	主　査	安藤幸治

なお，調査にあたっては河口貞徳氏（県考古学会長）の現地指導のほか，出土人骨については松下孝幸氏（長崎大学医学部第二解剖教室）の実測・鑑定をいただいた。

更にⅦ号墳については川内市歴史資料館に復元展示した（取り上げには川内市教委の中島哲郎・長谷川順一・中村一美氏等の協力を得た）。

第3節　調査の概要

発掘調査は，昭和58年7月4日～27日まで実施した（一部実測やⅦ号墳取り上げ作業は外川江遺跡発掘調査と並行して実施した）。調査区の両側はすでに提防工事が終了し，調査区だけが河川敷内に突出している状況であった。

調査の結果，Ⅳ号墳～Ⅶ号墳を調査した。Ⅵ号墳については昭和39年度に発見されているが，調査区内にあるということで再度の調査をおこなった。その他，帯状遺構や落ち込み遺構，台地縁辺部に多数の角礫の散在を確認した。遺物にはⅦ号墳出土の人骨の頭蓋骨や刀・剣（蛇行剣）の副葬品をはじめ，鉄鏃や刀子・須恵器・土師器等が出土した。

なお，古墳の番号付けは，昭和39年調査の番号に引き続いての通し番号を付した。

日誌抄

7/4　横岡古墳発掘調査開始。調査区に繁茂する草木の伐採作業。東側崖面にⅤ号墳は露呈している。

5　雨天の為，現場作業中止。天気のあい間をみてボーリング調査。

6　4ｍ方眼のグリッド設定。台地中央部に巾50cmの帯を残して東側部分（Ｃ～Ｅ－５～７区）の表土削ぎ作業。Ⅳ号墳の位置を確認した。1/200 の地形平板測量。

7　Ⅳ層上面までの掘り下げ。Ⅳ号墳の検出状況写真撮影。西区（Ｃ～Ｅ－４区）の表土剝ぎぎ作業。Ｅ－４区から直刀出土。

8　Ⅳ号墳の葺石除去。Ⅶ号墳は比較的保存状態は良好。石室内より人骨や直刀が出土した。

11　Ⅳ号墳実測，Ⅶ号墳清掃後，写真撮影。台地の４区を土層確認の為，巾50cmで深掘り。一段下のテラス部分の表土剝ぎ。

12　台地縁辺部の葺石状の検出作業。Ⅳ号墳とⅤ号墳の間に集石がみられたが，石室ではないことが判明した。Ⅶ号墳1/10の実測。

13　Ⅳ号墳1/20実測。台地西側のテラス部分表土剝ぎ。

14　Ⅴ号墳検出作業，鉄剣や鉄鏃出土。昨日にひき続きテラス部分の表土剝ぎ。

15　Ⅶ号墳人骨取り上げ作業。Ｅ－４区の帯状遺構検出作業。坩や高坏出土。

18　帯状遺構実測，遺構検出面の地形実測及びコンタ実測。Ｂ－２区須恵器片出土。

19　遺構実測の厚の水糸張り，Ｅ－４区落ち込み遺構検出作業。Ⅶ号墳実測。

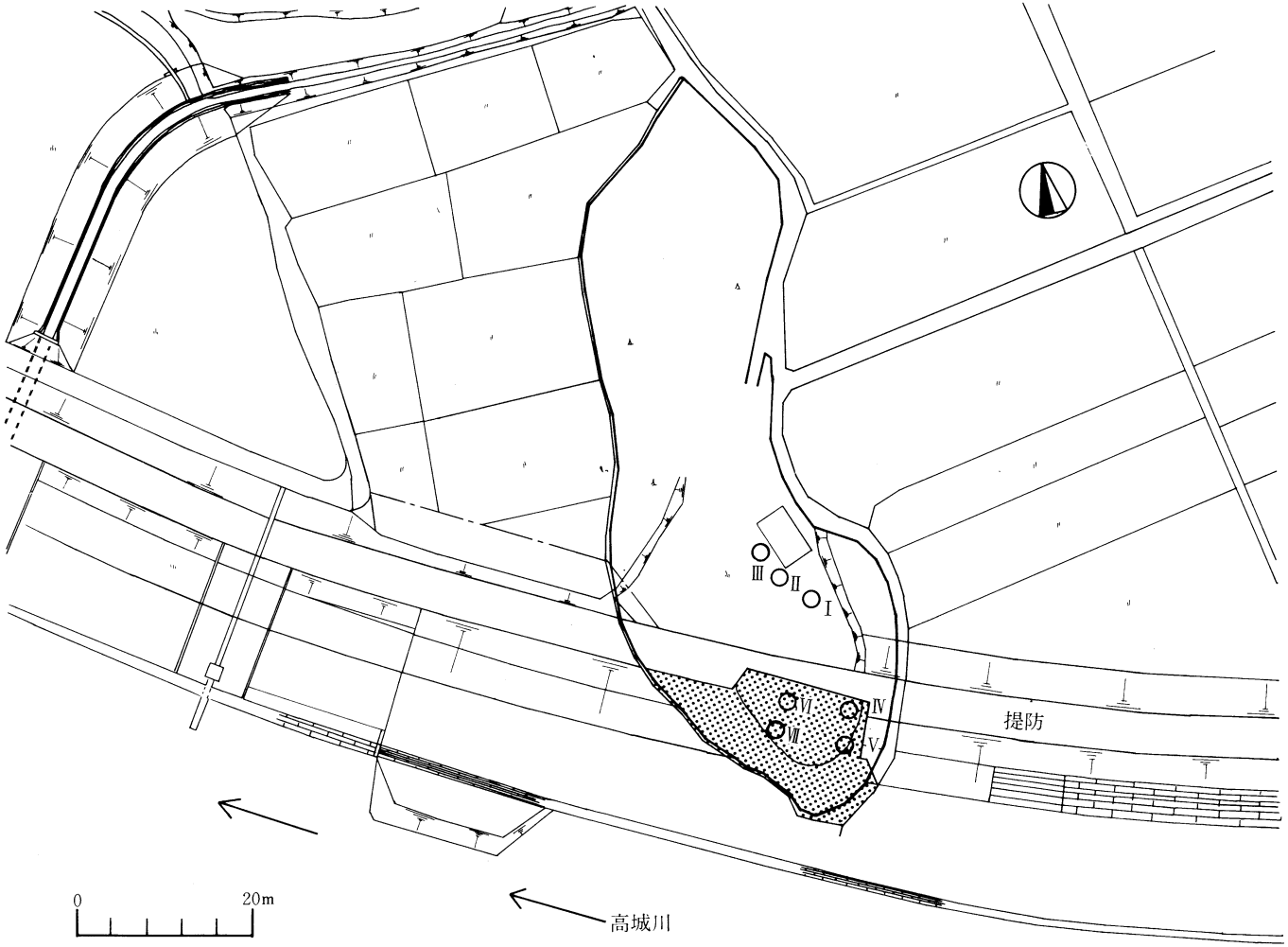
20　Ⅵ号墳実測。台地縁辺部の傾斜面の掘り下げ作業。一部外川江遺跡の草刈り。

21　台地の土層断面調査の為の深掘り作業。礫の実測，Ⅶ号墳遺物取り上げ。河口貞徳氏（県文化財専門員）指導。

22　深掘り作業。遺構実測。外川江遺跡の草刈り。

26　土層実測及び土手の取りはずし。遺構実測。写真撮影。横岡古墳調査ほぼ終了。

第1図 横岡古墳周辺地形図



第2図　横岡古墳調査区・墳墓位置図

※Ⅰ＝Ⅰ号墳……Ⅶ＝Ⅶ号墳

第Ⅱ章　土　　層

現在，横岡古墳が立地する丘陵の形状は，開墾によって丘陵の頂部や周辺が削平され，平担な面と一段低いテラス状の面が廻り，杉林となっているところに分けられる。なお，杉の植林の前は，畑地として使用されていたこともある。従って，古墳造築時の地形は原形をとどめていないものと言える。

丘陵の地層は，概ね次のとおりである。

Ⅰ層―耕作土層

Ⅱ層―黒褐色土層。C区南端に約6cmの堆積をみる。古墳時代の遺物包含層と思われる。

以下，Ⅲ～Ⅶ層は無遺物層である。

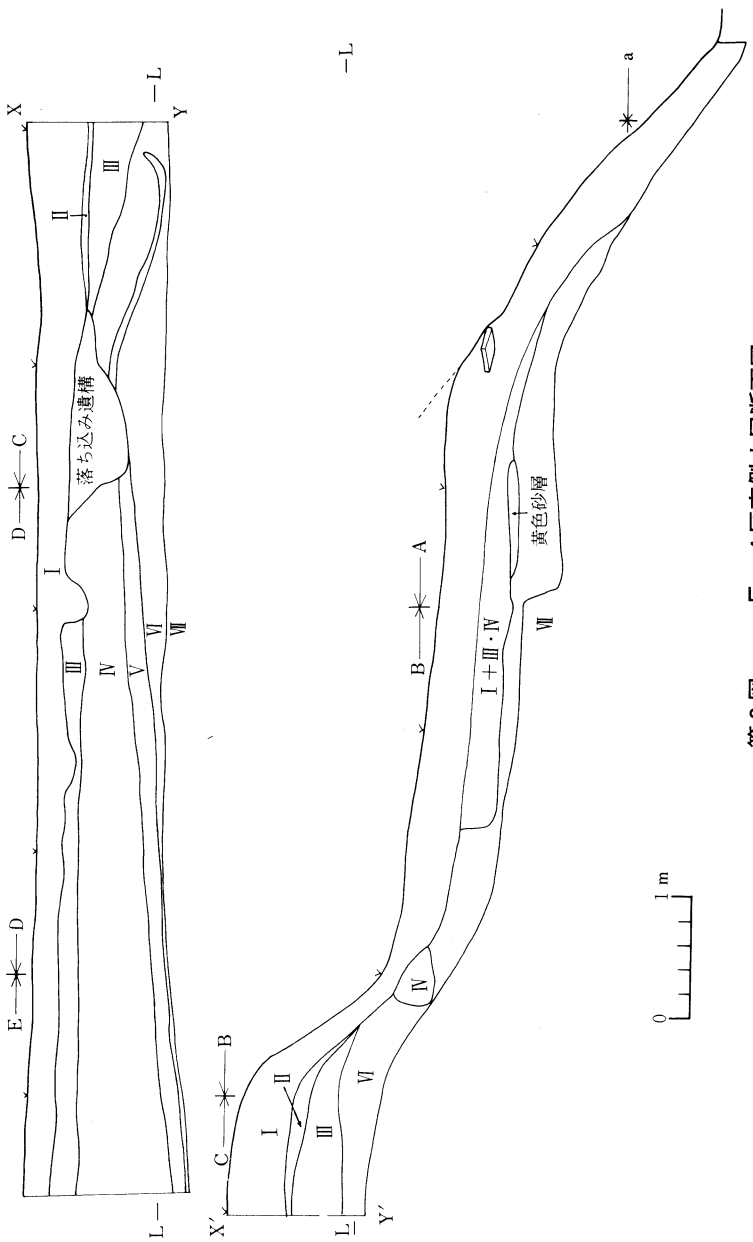
Ⅲ層―黄色砂層。

Ⅳ層―黄色砂礫層。小礫多量。

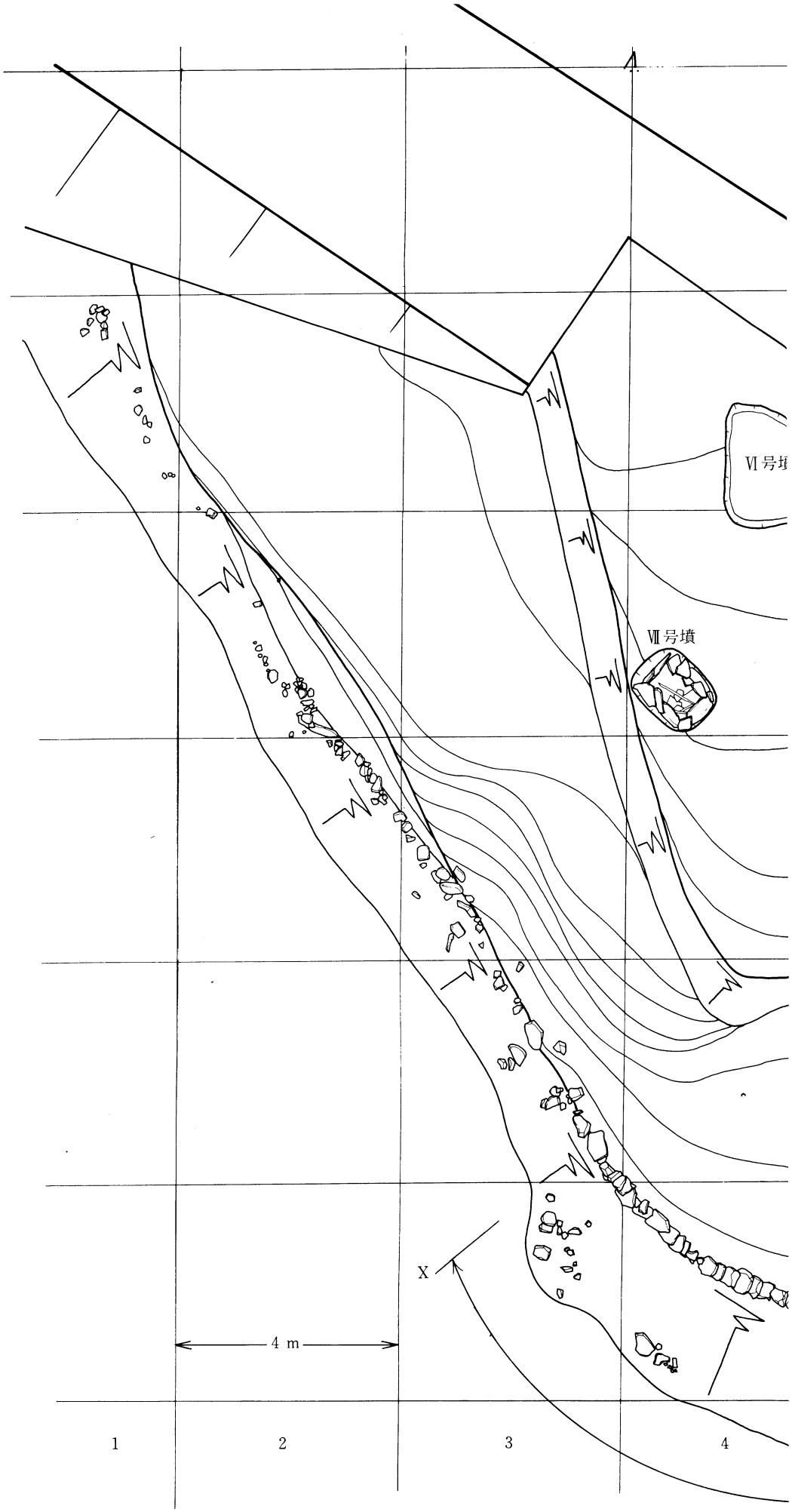
Ⅴ層―鉄分を含む暗褐色礫層。

Ⅵ層―灰色のローム層。

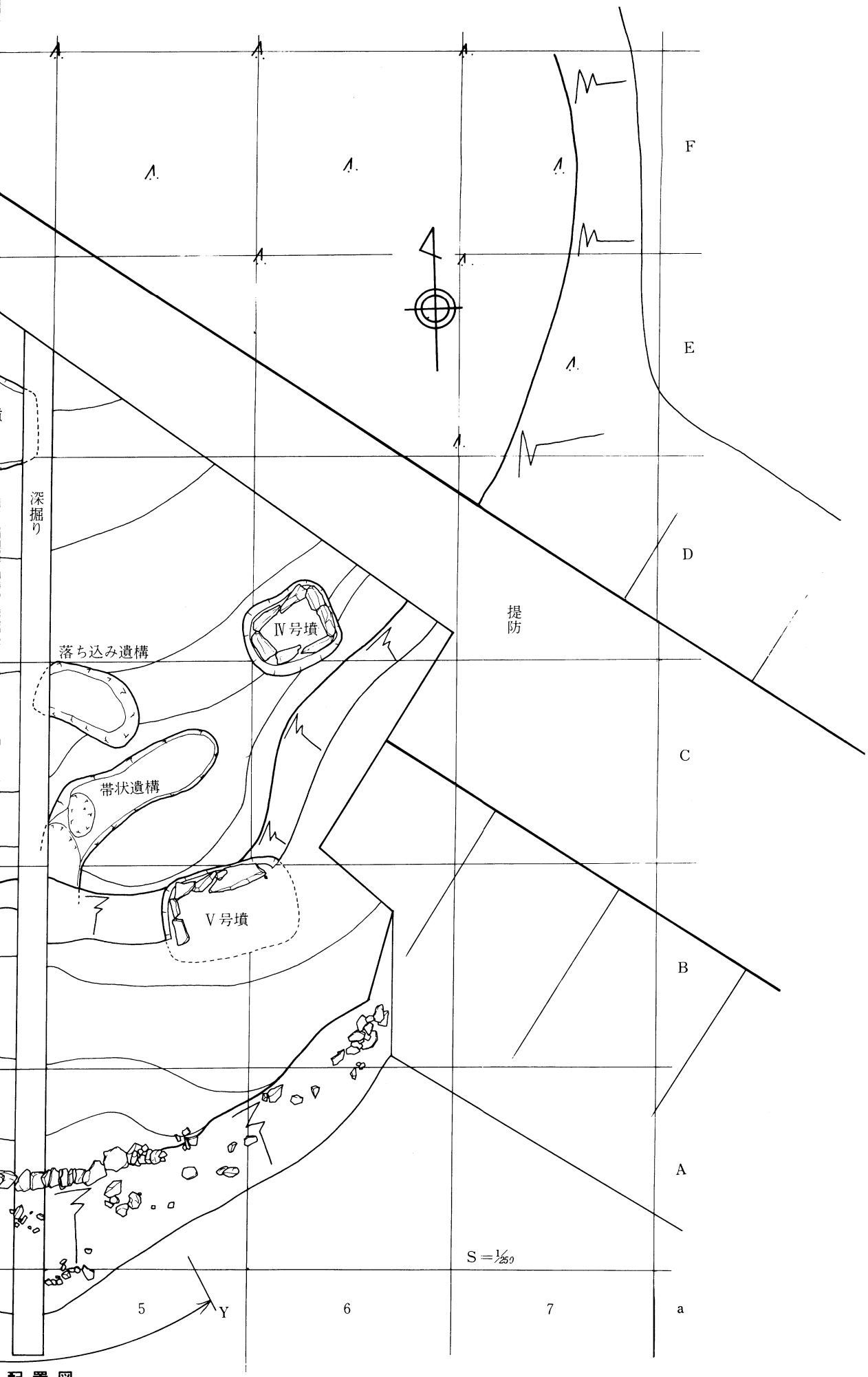
Ⅶ層―凝灰岩の風化層。



第3図　a～E－4区東側土層断面図



第4図 横岡古墳遺構



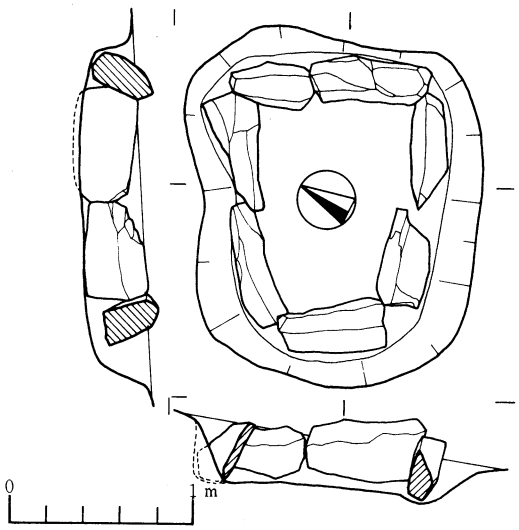
配置図

第Ⅲ章　調　　査

(1) **遺構**　今回の発掘調査によって地下式板石積石室のⅣ号～Ⅶ号を発見したほか，帯状遺構や落ち込み遺構，台地縁辺部を取り巻いて散在する礫などが発見され新しい知見を得ることができた。

A，Ⅳ号墳（第５図）

昭和39年に河口貞徳氏らによって調査されたⅣ号墳と同一である。今回は工事範囲内に当ったため，再度の調査となった。遺構の細目については１節とほぼ変りないと思われるが，今回調査した数値を記しておきたい。



第５図　Ⅳ　号　墳

主軸はN61°Ｅ，掘り方の上面で長軸1.85m，短軸1.55m，石室は長軸1.25m，短軸は北東端で0.85m，南西端0.50mの台形を呈する。石室は７板の板石で構成され，そのうち１枚を除き全て内傾しているが，外傾した１板は前回の調査で動かされた可能性もある。遺物は，石室外より鉄鏃片１点が出土した。覆石は東側斜面に雑然と積まれていた。使用されている石材は，遺跡周辺に多い安山岩である。石室の床面には礫混りの黄色の砂が敷かれていた。

B，Ⅴ号墳（第６図）

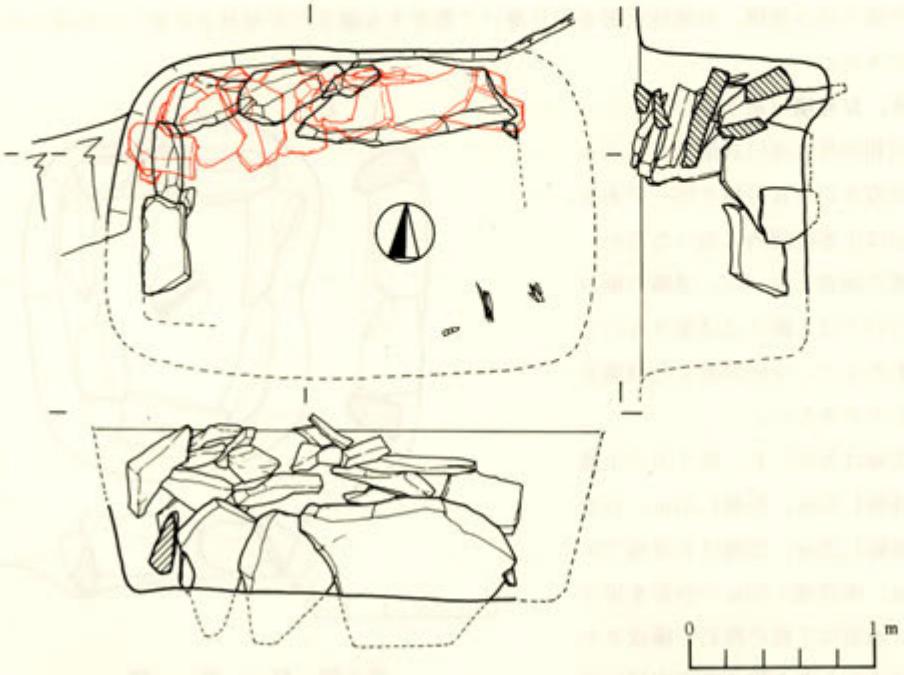
調査に入る段階で露呈していたもので，昭和39年の調査にある『崖端に露呈したもの』に該当すると思われる。遺物は盗難に逢った可能性が大きい。石室の南及び東側は欠損している。

主軸はN86°Ｅで，ほぼ東西を向く。掘り方は，上面で長軸約2.6m，短軸約1.8ｍ，石室は長軸約1.8ｍ，短軸約1.2ｍで，長方形をなすもので規模の大きい部類になる。側石はほとんど内傾し，北側に大きいものを使用してあるのに対して，西側のものはそれほどでない。調査段階で石室内部に巨大な石があったが，これは南側の側石が動かされたものと判断されることから，Ⅴ号墳は北及び南側に巨大な石を用いて石室を築いたと思われるのである。東側には側石の一部の破片が辛うじて残存していた。覆石の状況は，やや内傾した側石の上部に，同様な方向に積み上げている。石材はⅣ号墳と同様，安山岩である。

遺物は石室内の東南隅に一括して出土した。西端のものは鉄剣の破片で，剣身の先端より約10cm分である。中央及び東端のものは鉄鏃（刀子１点を含む）が銹束したものである。

構築方法をⅤ号墳について見ると，まず約１ｍの深さに掘り込みを行い，更に，石室の側石

に当る部分を10～30cm程度深く掘って側石をやや内傾した形で埋め込んで石室とする。しかる後に主体及び副葬品を納め，覆土した後に板石を一定の方向に葺くという手順が想像される。

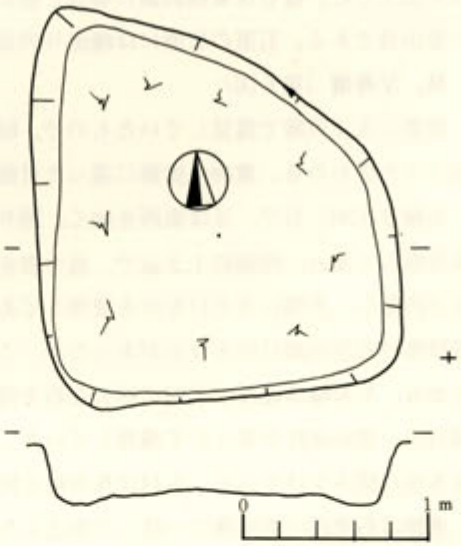


第6図　V　号　墳

C，Ⅵ号墳（第7図）

E－4区から検出された。攪乱が激しく土壙のみが発見された。地下式板石積石室としての板石等の確かな資料は不明であったが，土壙の形状や位置関係から耕作時に破壊され攪乱したものと考えられるので，Ⅵ号墳として取扱った。

土壙の規模は中心部の計測値で約100cm×97cmを測り，不安形な平面プランを呈す。底面は凸凹しているが，底面周辺部はくぼみを呈していた。



第7図　Ⅵ　号　墳

D，Ⅶ号墳（第８図）

Ｄ－４区から発見された。調査した中では比較的保存状態が良いものであったが，地表面から深さ約30cmと浅いレベルでの発見ということで，覆石の大半は剝ぎ取られていた。主軸はＮ－35°－Ｅとなる。石室構築のために掘られた土壙の規模は，遺構検出面での測定値で長軸 145 cm，短軸 114 cmの略方形プランを呈しⅢ層を掘り深さは約35cmを計る。土壙の壁はほぼ垂直である。土壙底面の四方には側壁の板石を挿入し安定させるために小溝がⅣ・Ⅴ層を掘込んでいる。土壙の中には安山岩質の大きな板石を４枚用い，ていねいに組合せて箱式石室を構築する。側壁の板石は角度26°～32°にかけて内傾している。内側床面での石室の規模は長軸97cm，短軸66cmを計る。床面の東側半分には５枚の板石をほぼ水平に置き床石としている。覆石は１段目と２段目の板石９枚が残存していた。なお，石室の側壁と覆石の内側には朱塗りの痕跡が点在して見られる。

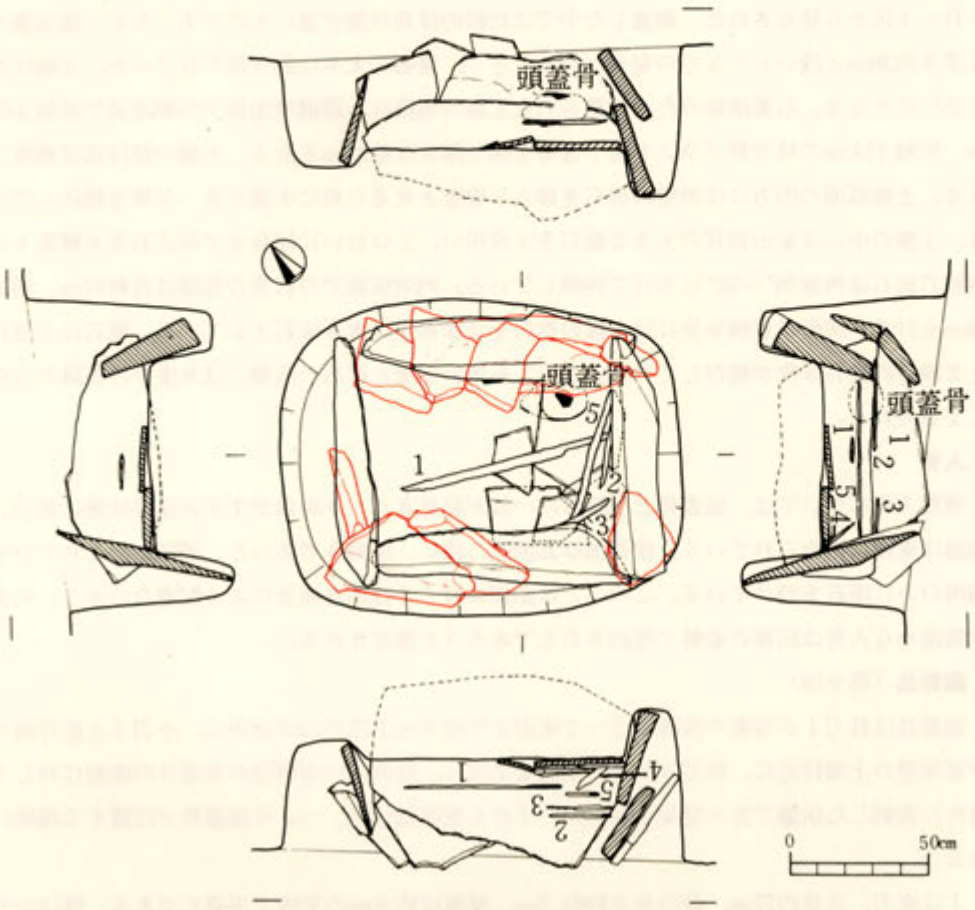
人骨

埋葬人骨については，頭蓋骨と上腕骨の一部が発見されたが腐蝕がすすみ保存状態は悪い。頭部は東側に納められている。後頭部は北側壁に接し，横向きであった。頭部が置かれている場所のみに床石を設けている。このことは頭部に対する特別な観念による配慮なのか？。石室の規模から人骨は屈葬の姿勢で埋納されたであろうと推定される。

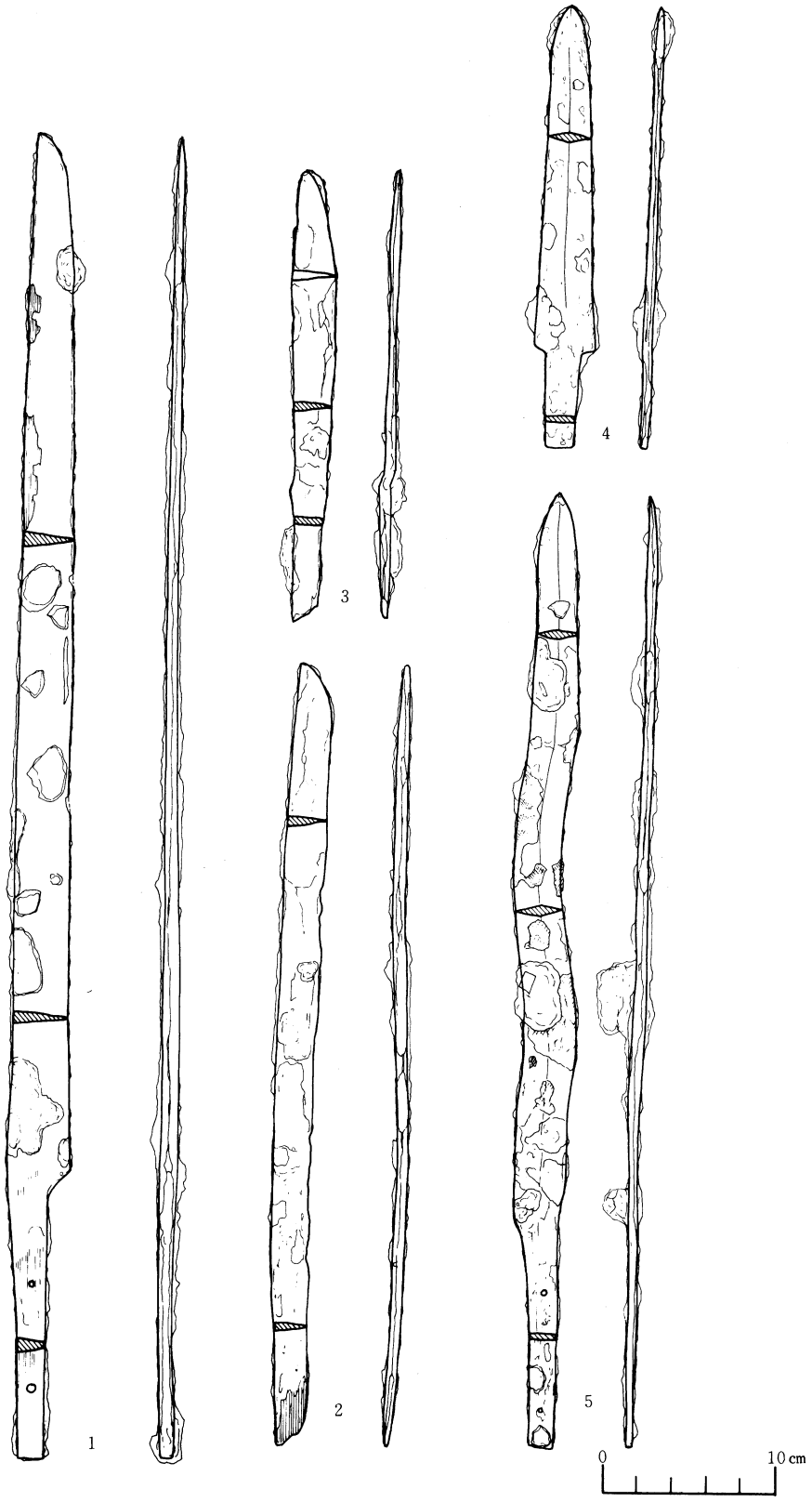
副葬品（第９図）

副葬品は長刀１が石室の長軸に添って床面より約８cm上位のほぼ真中に，小刀２と蛇行剣５が東側壁の上端付近に，短刀３が東・南側壁上端に，短剣４は南側壁の東寄りの床面に対して斜めに突刺した状態で各々発見された。いずれも東側壁付近，つまり頭蓋骨が位置する場所にある。

1は直刀。全長約77cm，身の長さ約61.5cm，棟厚は約８mmの平棟で平造りである。鋒はややふくら粘れとなる。身幅は鋒から関にむかってしだいに広くなる。刀身にはさやの木質が銹着している。関は角関。茎の長さは約16.5cmで２個。目釘孔を有す。茎には柄木を巻いたであろう紐が茎棟に残る。茎尻は切尻となる。**2**は小刀。残存長46.2cmで茎は欠損している。棟厚は７mmで平棟で平造りである。身幅は鋒から関にかけてしだいに広くなるが細身の刀といえる。鋒は銹塊のため定かではないが，ふくら粘れと思われる。刀身はわずかではあるが内反りしている。さやの木質を残す。**3**は短刀。全長約26.6cm，身の長さ約18cm，棟厚は５mmの平棟で平造りとなる。身幅は中心部で広くなる。関の部分で屈折している。銹塊のため定かではないが茎尻付近に１個の目釘孔らしい痕跡が残っている。茎尻は切尻となる。**4**は短剣。全長約25.8cm。きっさきは銹塊のため定かではないがあまり鋭くはない。身には弱い鎬がみられ横断面は扁平な菱形をなしている。関は両関の角関となる。茎は長さ約５.５cmである。茎尻は切尻となる。**5**は蛇行剣。全長約56.6cm。身の長さは約42.8cm。きっさきは鋭く尖り気味である。身幅はきっさきより関にむかってわずかに幅が広くなり全体的に細身となる。きっさきより約13cmと23cmの２ケ所の部分で蛇行状にカーブしている。身には弱い鎬がみられ横断面は扁平な菱形



第8図 Ⅶ 号 墳



第9図 Ⅶ 号 墳 出 土 鉄 器

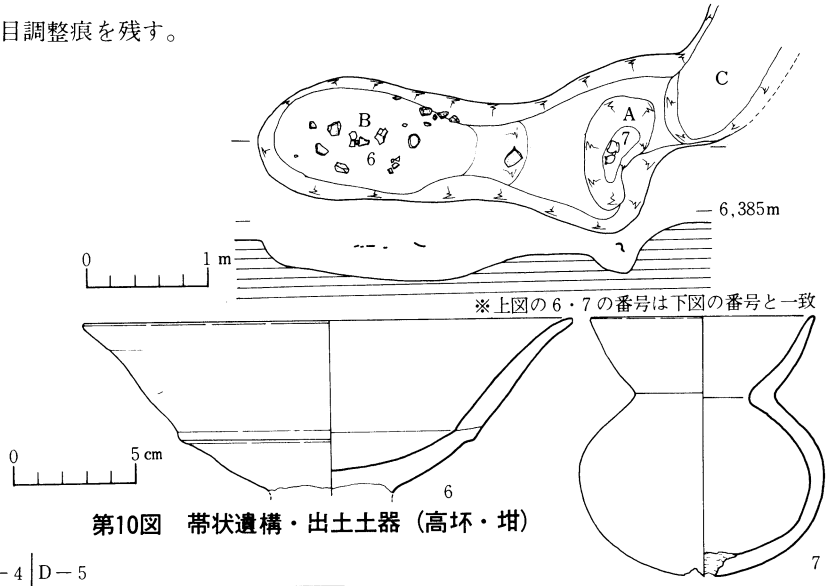
を呈する。剣身は布帛で包んだと思われる痕跡が銹着の中に認められる。関は両削関である。茎は約13.8cmを測る。銹塊のため不明瞭ではあるが２個の目釘孔が穿たれている。茎尻は切尻となる。茎には柄木の痕跡が認められる。

E，帯状遺構（第10図）

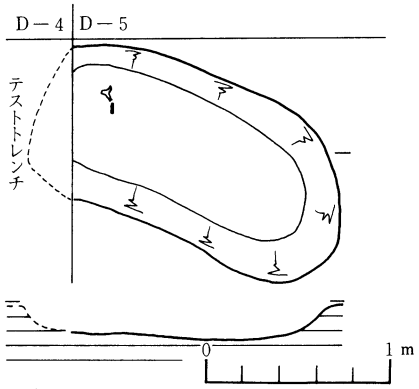
Ⅱ層を埋土とし，C－５区より発見された。南端は後世の開墾によって削平され全容は不明である。平面形は帯状を呈し弧を描く。現存長は約4.4ｍである。床面は不安定で中ほどに短径約50cm，長径約105cmの不整形で深さ約37cmの窪地Ａが検出され，さらに，窪地Ａの両サイドにＢ，Ｃの窪地がみられた。北側の窪地Ｂには脚を欠いた高坏の坏部の破片や安山岩質の角礫が散在して出土し，中央の窪地Ａから坩が出土した。

高坏6　脚部は欠損している。復元口径約21cm。体部に充実した陵を有し，外反する口縁部となる。外面は細かい刷毛目を残す。

坩7　口径は約9.2cm，器高は約10.2cm。胴部は丸く，頸部でしまり外開きで若干内湾する口縁部となる。底部は丸底と思われるが，外から中へ意識的に力を加え穴を穿っている。器面に刷毛目調整痕を残す。



第10図　帯状遺構・出土土器（高坏・坩）



第11図　落ち込み遺構

F，落ち込み遺構（第11図）

C－５区より検出された。長径約170cm，短径約88cmの長楕円形を呈し，深さは17cm。北側に雁股鉄鏃が出土した。

雁股式鉄鏃（第13図－18）　身の頂部は二叉に分かれ一方は欠損している。身の長さは約7.6cm。茎の断面は方形をなす。身と茎の片面には斜めに植物性の繊維痕がさびとともに顕著に残っている。

G，台地縁辺部・台地傾斜面の配石について（第４図）

一段底いテラス状の南側台地縁辺部（Ａ－３～５区）に添って約８ｍの範囲に板石が１列に重ね並べられた状況で検出された（第４図のX↖↗Y線）。３区～４区にかけては板石の西側端を，５区には板石の東側端を各々順次重ねていく手法で整然と列べられている。この列石が位置するテラスは，（Ⅴ号墳が½カットされ露呈している場所）開墾時に削平され所であり，さらに頂部についても同様で同古墳が壊された際，耕作に支障をきたすことから石室の一部や覆石の板石が一ケ所に集められ並べられたものと思われ，古墳築造時の遺構とは考えられない。

台地縁辺部の傾斜面の上端から下端にかけて，握拳大～幼児頭大の角礫や自然礫が多数検出され台地を取り巻くように傾斜面の全面にみられるが，その配置は無秩序で雑然と置かれている状況であるが，層位的にはⅡ層の中であって後世に攪乱された形跡がないことから古墳築造時の遺構としてとらえたい。

(2) 出土遺物

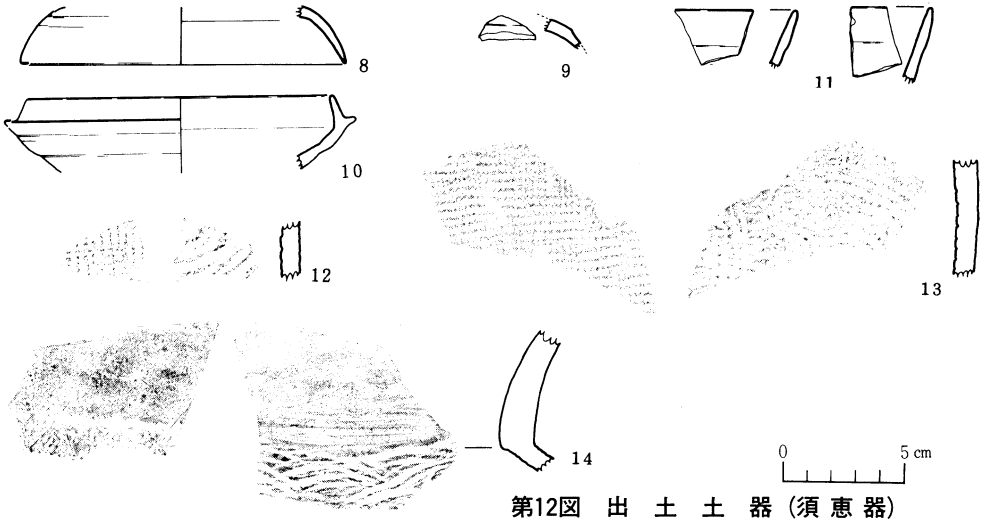
須恵器の蓋・身・坏・壺などの土器片をはじめ，小破片の土師器や鉄製の刀・剣・鏃・銅製品等が出土した。

(a) 須恵器

８・９は蓋の小破片である。８はⅣ号墳石室上の攪乱層より出土したもので，復元口径約13.3cmを測る。口縁部は外開きで口唇部は尖がり気味。内側体部に弱い稜線を有す。器面は灰色，内胎は赤褐色を呈している。須恵器の所産か。８・９は須恵器編年Ⅳ様で類似で６世紀頃を推定。

10はＣ－４区出土。復元口径は約12.6cm。口縁部は比較的短かく，若干内傾する。器面にはロクロ痕を残す。胎土は緻密，焼成はやや軟弱，色調は黄褐色を呈す。

11は坏の口縁部である。復元口径12cm。外開きで直口する口縁部となり，口唇部は丸味を帯びる。時期的には７Ｃ頃に比定されるか。



第12図　出　土　土　器（須恵器）

12・13は小破片で器形・器種は不詳である。外側は格子目叩き，内側は同心円叩きを施す。

14は壺形土器の頸部片である。C－5区より出土した。外側頸部には緑色に吹き出した自然釉が付着し全体に薄い透明の自然釉がかかっている。外側は格子目叩き，内側は同心円叩きである。

(b) 鉄器

13・14・52はV号墳の副葬品である。13は3本の鏃，14は4本の鏃と1本の刀子が銹束となって互いに付着しているものである。

(i) 鏃―形態から5類に分けられる。いずれも有茎鏃である。

圭頭広根斧箭式―身は菱形を呈し刃は鋒だけにつけられる。11・12・13（a～c），14（a～d）・15・16・17。

表1 鏃一覧表

/	長さ	身幅	/	長さ	身幅	/	長さ	身幅	/	長さ	身幅
11	(11.8)	(4.5)	13-b	14.2	3.1	14-b	(10.4)	3.9	15	(4.3)	1.8
12	(10.2)	3	13-c	15.6	4.6	14-c	(11.2)	3.8	16	(4.8)	2.7
13-a	13.9	2.9	14-a	(9.7)	3.1	14-d	(8.7)	(3.0)	17	—	—

(単位 cm)

圭頭細根斧箭式―15。身長は4cm。身幅は1.8cm。茎は欠損している。

雁股鏃―18。（C落ち込み遺構参照）

細根柳葉式―19・20。19の鋒は鋭利に尖がる。関は両削関となり，断面は方形の細長い茎を有す。全長約14cmで身幅は約9mm，茎尻をわずかに失う。

片関片刃箭式―21。鋒はふくらとなり約3mmの平棟で平造りとなる。関は不明。

その他，26～31・34・40は広根・細根斧箭式，22～25・37・39は細根柳葉式鏃の茎と思われる。茎には竹に刺込んだと思われ銹着痕跡のある27・28・31，桜皮を巻いて茎を固定した13－b，19・22～24・26や紐で巻いた32，布巻した32・35・36・40がある。

(ii) 刀（46・47・48・49・41）

46・47はE－3区表層より出土した。46は現存長約60.4cm。鋒と茎の端部は欠損する。棟は約8mmで平造りである。身幅は関にむかってしだいに広くなり，しっかりした刀である。刀身にはさやの木質が銹着している。関は角関となる。茎には1つの目釘孔を穿っている。47の現存長は約76.1cmを測るが茎の端部は欠損する。鋒はややふくら粘れとなる。棟厚は約8mmで平造りである。身幅は鋒から関にむかってしだいに広くなる。全体的に細身である。関は角関となる。茎には1つの目釘孔がみられる。48・49は刀身の断片でいずれも平造りとなる。41は茎で茎尻は切尻である。目釘孔は鈍着のため不明。柄木の木質とそれを巻いたであろう紐が茎棟に残る。

(iii) 刀子 14－e・42・50 （14－eはV号墳内出土）

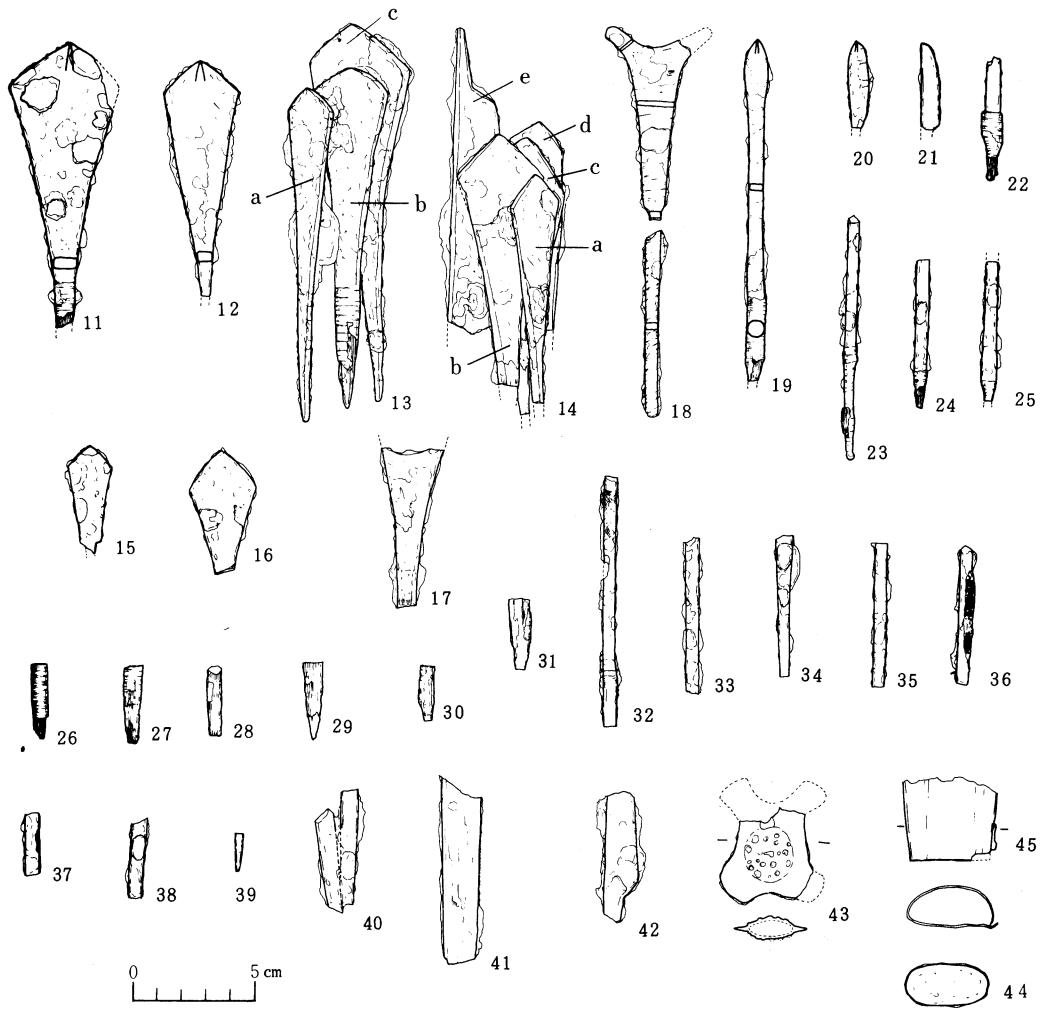
14－eは現存長約12.5cm。鋒と茎端を欠損する。平棟で厚さ約5mmの平造りである。関は角関となる。茎には紐が巻かれている。42は身と茎を欠損した関付近の刀子片である。平棟で平造り。関は角関。50は刀の断片。平棟で平造りである。

(Ⅳ) 剣　51・52・53・54（52はⅤ号墳内出土）

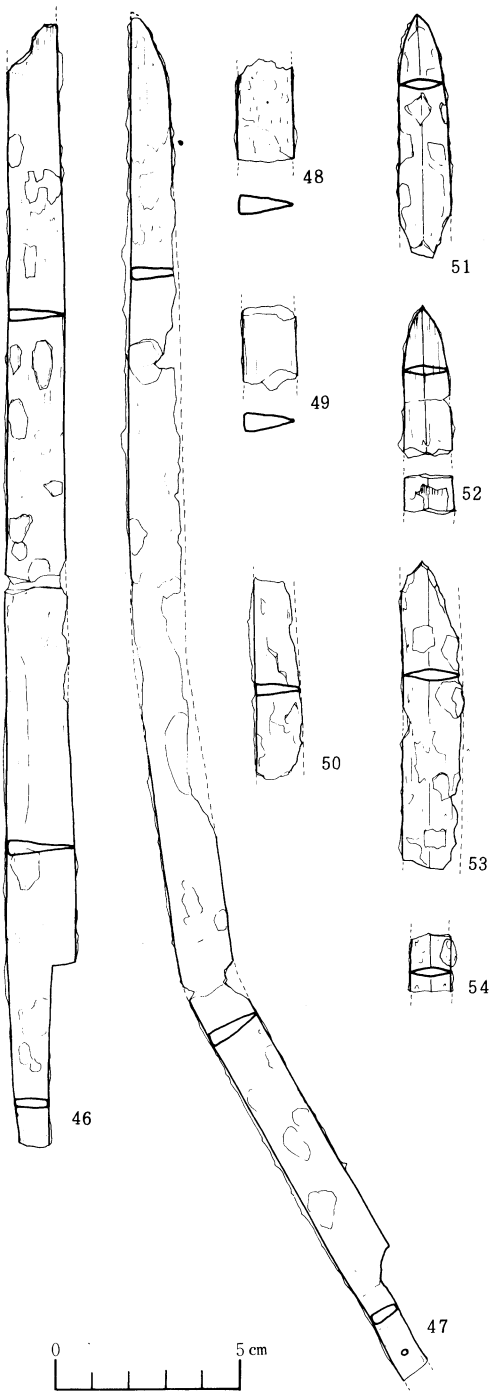
51・52のきっ先は比較的鋭い。身には弱い鎬がみられ横断面は扁平な菱刈を呈す。52の身にはさやの木質が銹着する。関は欠損しているため不明。

(Ⅴ) 鉄製品　43・45

43は欠落部分があり全体の形は不明である。左右に凸起を設け，中心部の両面には楕円形のふくらみを設け，小円形の凸起を多数装飾する。45は約3.4×1.7cmの楕円形の鉄板である。



第13図　鉄器（鉄鏃・刀子）、鉄製品・銅製品



第14図　刀　・　剣

(Ⅵ)　銅製品　45（Ⅳ号墳埋土）

厚さ約0.7㎜の銅板の曲物である。

《参考文献》

(註１）河口貞徳「横岡古墳」川内市史

(註２）１に同じ。

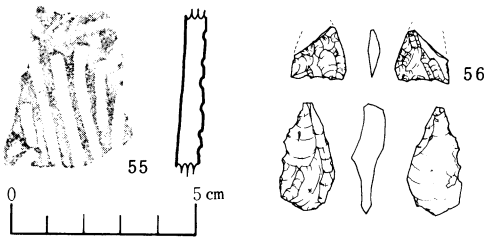
(註３）乙益重隆「熊襲・隼人のクニ」
古代の日本３，九州。

(註４）３に同じ。

(註５）河口貞徳・上村俊雄「堂前古墳」
考古学雑誌　第57巻１号　1971年

(註６）青崎和憲・中村耕治・宮田栄二
「前畑遺跡」菱刈町文化財報告書(2)

第Ⅵ章　縄文時代



第15図　曽畑式土器・石器

遺物は耕作土より出土したもので，縄文時代の遺物包含層は台地の削平および耕作の為，取り除かれたものと思われる。

土器　55は短い線を幾何学文様を施す曽畑式土器の小破片である。胎土に石英粒を含む，焼成は良好，色調は赤褐色を呈す。

石器　56は先端部を欠損する黒曜石製の三角鏃である。57は黒曜石製のフレイクである。

ま　と　め

横岡古墳は南北約95m，東西約14～33mで標高約７mでの三方を水面に囲まれ独立した細長い小丘陵にある。現在は杉の植林や雑木が繁茂しているが，以前は畑地であったという。丘陵の頂部や周囲は開墾によって削り取られ，平坦な頂部と縁辺部は一段低いテラス状の平坦地が廻る段丘からなり，古墳構築時の地形は殆んど原形をとどめていないものである。

横岡古墳は過去２回発掘調査が行われている。大正12～13年の調査では10基の板石積石室が発見され金環・胃・刀・剣・鍔などが出土し，昭和39年には河口貞徳氏等によって集骨葬・追葬の埋葬形態を示すⅡ号墳をはじめ４基の地下式板石積石室が調査された。その結果，５世紀後半～７世紀後半の築造と報告されている。(註2) 今回の発掘調査では新たに３基が発見されていることから，丘陵の広さや，石室の分布を考慮して少なくとも20基を越える地下式板石積石室の群集墓が推定される。

地下式板石積石室が周知されている遺跡の分布は次のとおりである。本県で最も濃密な分布が見られるのは大口盆地に大口市下殿・焼山・大往・大田・忠元神社・青木・小木原・塞ノ神遺跡があり，次いで川内川上流の吉松町永山・北方，川内川中流の薩摩町別府原・尾原・日露・鶴田町京塚原，川内川下流の川内市横岡・平島・若宮，本県西海岸の阿久根市脇本・出水市溝下・高尾野町堂前があり，また熊本県では球磨川上流の人吉市荒尾・尾園・高ン原・本目・芦北部芦北町宮浦神社，天草の本渡市妻ノ鼻など約26遺跡約270余基，いずれも群集している。

乙益重隆氏は地下式板石積石室の形状によって，第一類(楕円形)，第二類(円形)，第三類(長方形)，第四類(方形)の四類に形態分類している。(註3) 前述した石室の分布は大別して内陸地帯と海岸地帯に分けられ，前者には第一・二類が多く副葬品には攻撃用武器(刀・剣・鏃)，後者には第三・四類が多く防禦用武具・装飾品（冑・馬具・金環・銀環・矩甲など)等が出土し石室形態によって副葬品にも若干の差異がみられる傾向にある。埋葬法については，横岡古墳のⅡ号墳には３体分の集骨葬やⅣ号墳出土の副葬品の破砕や散乱による出土状況，妻ノ鼻古墳には３～５体，又は11体分の人骨が埋納されていたことから，集骨葬や追葬も行われていたことが

うかがわれる。埋葬人骨も石室の規模から屈葬がとられたものと推定される。

以上のように，地下式板石積石室の分布と特色を述べたが横岡古墳は位置的に海岸地帯に含まれ，石室形態の分類は第三・四類に属するものである。副葬品においても大正12～13年の調査では金環・銀環・冑・刀・剣・鍔・轡などが出土し海岸地帯の性質を示しているものと思われる。なお，他の古墳に比して若干の特質がみられるので触れておきたい。まず，地形的な立地条件であるが，前述した多くの古墳は丘陵の一画や平坦地の一画を墓域として設定しそこに石室が群集して営まれるのが大半であるのに対し，当古墳は三方を水田に囲まれた自然の独立した小丘陵全体を墓地化して古墳が営まれたものであることや，Ⅶ号墳のように床石を設けた組合せ小形箱式石室類似の石室を有し，石室構造にややすぐれた点がみられ，副葬品においても地下式板石積石室の形態では初めての蛇行剣を出土したことなどが特色といえる。

地下式板石積石室の起源については未だ解決にはいたっていないが，乙益重隆氏は長崎県五島宇久町松原遺跡の地下式板石積石室類似の石棺（Ⅱ号）や熊本県免田町市房隠の免田Ⅰ式土器を伴う小形箱式石棺を例に，弥生文化の中にその祖形があることを示唆されている。(註4) 河口貞徳氏は高尾野町堂前の土壙や免田式土器を伴う17号墳から土壙に石を配して，石囲をつくるに至る過程について今一歩の解明が必要であるとしながら，弥生時代後期の土壙墓にその発生を求めている。(註5) なお，菱刈町前畑遺跡において，土壙墓・箱式木棺墓・組合小形箱式石棺などの埋葬法の異なる弥生時代終末の群集基の中に，免田式の長頸壺を供献する22号墳がある。(註6) 直径約2.73cmで略円形プランの土壙内中央部に長軸1.3m，短軸0.8mの方形状に数枚の板石を用いた組合せ箱式石棺墓に類似する形状を呈し，葺石を覆ったもので，地下式板石積石室を思わせる興味深い遺構である。

河口・乙益両氏は起源を弥生時代に求めながらも，河口氏は海岸地帯の方形石室から円形石室へ，乙益氏はその逆の系統であろうと考えられている。地下式板石積石室の年代については，免田式土器や成川式土器，鉄鏃などの供伴遺物より４世紀から古墳時代中葉ということで大体一致している。横岡古墳の時期について河口貞徳氏は，昭和39年調査の結果によると須恵器片や出土遺物から５世紀後半～７世紀後半に比定され年代的に大きな幅があるとされている。

今回の調査において，後述するⅦ号墳出土の蛇行剣の年代は通説に従い５～６世紀相当と思われ，須恵器の蓋８・坏身10は須恵器編年第Ⅳ様式（６世紀頃），溝状遺構出土の高坏・坩は５世紀後半頃と規定され，横岡古墳は５世紀～６世紀にかけての所産であると考えたい。

蛇行剣の分布と性格について，

剣身がＳ字状に蛇行した剣のことで「蛇行状剣身」・「蛇行剣」の名記があるが，本項では蛇行剣の表記を使用した。蛇行剣については後藤守一・田中茂・金井典義氏等によって報告や論考が加えられている。

全国の古墳出土の刀剣数に比べ蛇行剣の出土数は極めて少ないといえる。分布をみると栃木県小山市桑57号墳を北限に，宮崎県内の地下式横穴地帯に集中し，本県の高山町上ノ原地下式横穴，成川遺跡・前目土壙・横岡古墳の新資料を加え，おおよそ18遺跡24本を数える。地名表

は以下別表のごとくである。

蛇行剣の性格は実用の武器という考え方もあるが，供伴の副葬品などから呪術的・儀器的性格が強いものといわれる。本州のものは５世紀の高塚古墳出土であり，南九州（宮崎県南部～鹿児島県大隅地方）特有の墓制である６世紀相当の地下式横穴土壙，特に宮崎県下の地下式横穴土壙※から集中して出土していることは特筆すべき事象といえる。さらに今回の調査で地下式板石積石室分布圏内の横岡古墳からも発見されたことも注目されよう。

田中茂氏によると宮崎県下の地下式横穴出土６例の分布をみると，６ヶ所の群集地から出土しており，いずれも各群に１本ずつが副葬され，被葬者はおそらく部族の祭礼（呪術）を司さどる地位にあった人物と思われるとし，蛇行剣の性格を知る貴重な論考が加えられている。

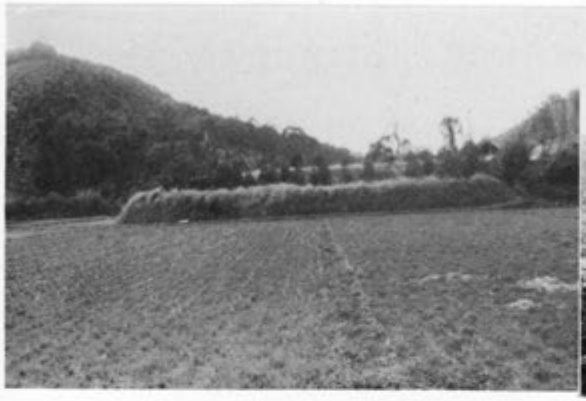
以上のように埋葬形態の異なる古墳からの出土や，特に南九州に数多く分布すること，時期的な差は何を意味するのか，中央との係り合いによる移入なのか，被葬者との係り合いは…など未解決のままであるが，新資料の一つとして横岡古墳出土の蛇行剣を紹介した。

蛇行剣出土遺跡地名表

古墳名	所在地	墳形式	年代C	数	古墳名	所在地	墳形式	年代C	数
①桑57号墳	栃木県小山市桑	帆立貝	6C	1	⑩灰ヶ野第1号	宮崎郡田野町灰ヶ野	地下式横穴	6C	1
②フネ古墳	長野県諏訪市神宮寺	?	5C	4	⑪牧ノ原第2号	都城市川東牧ノ原	〃	6C	1
③狐山古墳	石川県加賀市勅使町	前方後円	5C	1	⑫大萩第7号	西諸県郡野尻町大萩	〃	6C	1
④七観古墳	大阪府堺市石津ヶ丘	円	5C	2	⑬久見迫第3号	えびの市上江久見迫	〃	6C	1
⑤亀山古墳	兵庫県加西郡在田村	円	5C	2	⑭馬頭観音第5号	〃 馬頭観音	〃	6C	1
⑥寺内63号墳	和歌山市寺内	円	5C	1	⑮上ノ原土壙	鹿児島県肝属郡高山町	〃	6C	1
⑦里公文	岡山県久米町里公文	表採？	5C	1	⑯成川遺跡	〃 揖宿郡山川町成川	〃	3C後半	2
⑧浄土寺山古墳	宮崎県延岡市大貫浄土		6C	1	⑰前目土壙	〃 菱刈郡菱刈町前目	地下式横穴	6C	1
⑨鐙古墳	宮崎県児湯郡新富町	円		1	⑱横岡古墳	〃 川内市上川内町横岡	地下式板石積石室	5~6C	1

① 大和震平「桑57号墳発掘調査報告書」 S.47
② 藤森栄一・宮坂光昭「諏訪上古墳」『古学集刊』３巻１号 S.40
③ 後藤守一「石川県江沼郡勅使村二子塚狐山古墳調査報告」S.12
④ 樋口・岡崎・宮川「和泉国七観古墳調査報告」『古代学研究』第27号 S.36
⑤ 兵庫県教育委員会「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告」第14輯 S.14
⑥ 蘭田香融「和歌山市における古墳文化」 S.47
⑦ 久米町教育委員会「久米町の文化財」1973
⑧ 鳥居竜蔵「上代の日向・延岡」S.10
⑨ 面高哲郎「鐙古墳」新富町文化財報告書 第２集 1983
⑩～⑮ 田中茂「地下式横穴出土の蛇行剣について」日本考古学協会昭和51年大会
⑯ 諏訪昭千代・中村耕治氏からの指摘であるが参考資料としてあげた。
河口貞徳「成川遺跡」文化庁埋蔵文化財発掘調査報告 第７号
河口貞徳・河野治雄「成川弥生式群集墓」考古学雑誌43巻４号
⑰ 昭和54年県教育委員会調査，整理中
※宮崎県内の蛇行剣については，田中茂氏に資料提供・御教示をたまわった。

図版1



横岡古墳遠影（東より）『川内市提供』

横岡古墳遠影（北西より）

横岡古墳近影（東より）

横岡古墳全影（南より）

横岡古墳全景

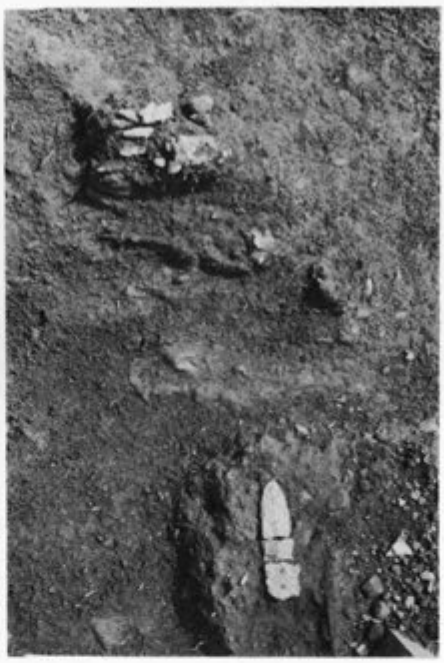
Ⅳ号墳

Ⅳ号墳（石室）

Ⅴ号墳

Ⅴ号墳（石室）

剣・鏃出土状況（Ⅴ号墳）



図版 3

① Ⅶ号墳検出状況

② Ⅶ号墳検出状況

③ Ⅶ号墳鉄器出土状況

④ Ⅶ号墳の石室・床石検出状況

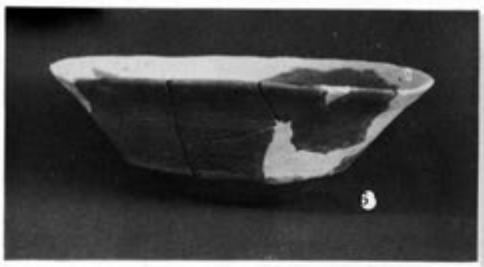
Ⅶ号墳
（人骨出土状況）

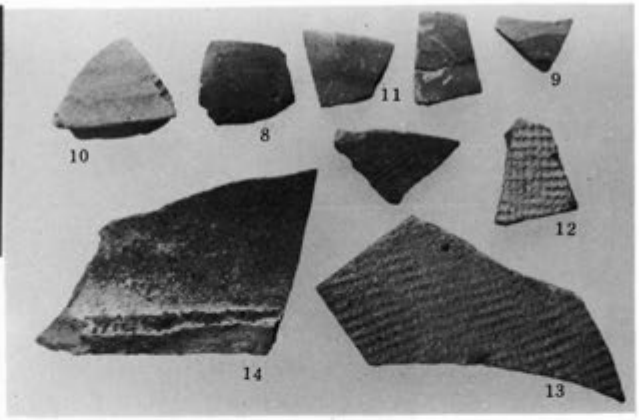
Ⅶ号墳
（鉄器出土状況）

帯状遺構

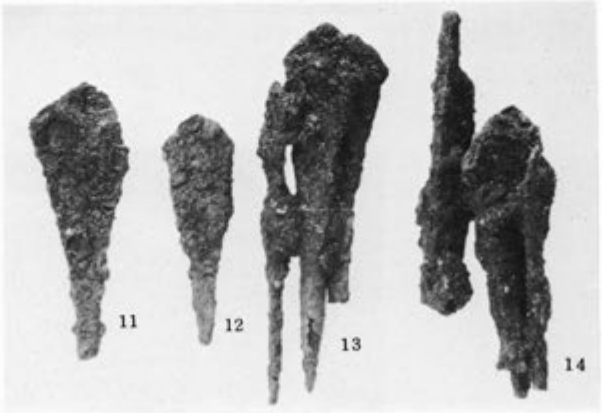
帯状遺構内坩形土器出土状況

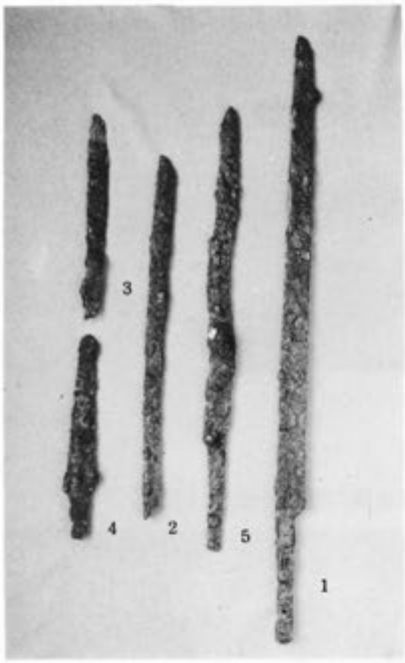
図版5

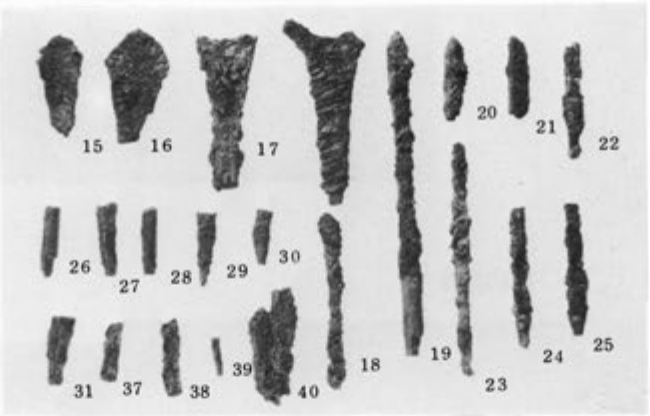

6


10
8
11
9
12
14
13

7

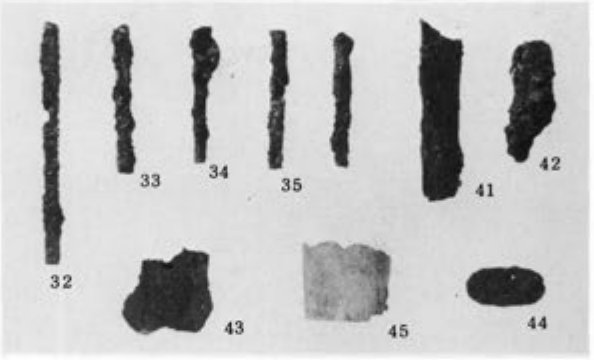

11
12
13
14


3
4
2
5
1


15
16
17
20
21
22
26
27
28
29
30
31
37
38
39
40
18
19
23
24
25

55

56


33
34
35
41
42
32
43
45
44

川内市横岡古墳Ⅶ号墳出土の古墳時代人骨

松　下　孝　幸※

はじめに

横岡古墳群は鹿児島県川内市上川内町釜口横岡にある古墳群であるが，高城川の河川改修に伴い，この古墳群の一部の調査が1983年（昭和58年）に行なわれ，Ⅶ号墳から人骨が出土した。

鹿児島県の古墳時代の葬法には，地下式横穴地下式板石積石室といった九州でも特殊な埋葬様式が認められ，埋葬様式の違いと形質上の差異，あるいは同じ地下式横穴が存在する宮崎県の古墳時代人との関係など形質人類学的に明らかにしなければならない課題は多いが，鹿児島県から出土する古墳時代人骨の保存状態はきわめて悪いものである。

Ⅶ号墳の内部主体は地下式板石積石室と称されるものであり，しかもこの人骨は蛇行剣を伴っていた。地下式板石積石室から出土した人骨の調査は，当教室では本例が初めてであったので，前述したような課題を解決するための貴重な資料になるものと期待されたが，人骨の保存状態は著しく悪いものであった。残存していたのは，頭蓋と四肢骨のそれぞれ一部のみであったが，できる限り詳しく観察したので，その結果を報告したい。

なお，この人骨は別稿で述べられているとおり，考古学的所見より，古墳時代の中期（5～6世紀）に属する人骨である。

※Takayuki Matsushita　（長崎大学医学部解剖学第二教室）
（Dtpartment of Anatomy, Faculty of medicine, Nagasaki University）

資料および所見

Ⅶ号墳から検出された人骨は，解剖学的精査の結果，1体分の人骨であり，残存していたのは，頭蓋，歯，大腿骨および脛骨であった。

(1) 頭蓋

残存していたのは脳頭蓋の一部である。

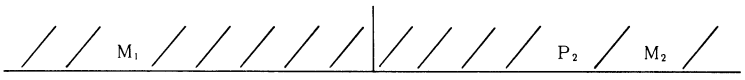
1．脳頭蓋

後頭骨，左側頭頂骨のラムダ縫合に沿ったごく一部分，右側頭頂骨のうしろ半分および右側側頭骨の岩様部が残存していた。上項線は明瞭で，外後頭隆起の発達も比較的良好であり，また乳様突起も大きい。縫合はラムダ縫合と矢状縫合のラムダに近いごく一部が観察できたが，これらの内板はいずれも癒合しており，外板はともに開離している。外耳孔は右側のみが観察可能であったが，外耳道骨腫は認められなかった。

計測はできなかったが，残存部から推測すれば，頭蓋の径はかなり大きいようである。

2．歯

上顎の歯が3本残存していた。この遊離歯を歯式で示すと次のとおりである。



／：不明（破損）

歯の径は大きく，咬耗度はBrocaの１～２度である。

(2) 四肢骨

大腿骨および脛骨が残存していた。

１．大腿骨

右側骨体と骨体の破片が残存していた。右側骨体は近位部が約15cm残っていたが，後面の保存状態が悪く，矢状径は計測できない。骨体の径は著しく大きく，ほぼ中央と推定される部分での横径は29mmもある。表１に示すように，宮崎県の旭台地下式古墳人よりも大きく，宮崎県の地下式横穴から出土する古墳人にはこのように大きな大腿骨は認められない。小片ら(1983)によれば，甑島の里村から出土した弥生人の腿骨は大きなものであるといい，また佐賀平野の二塚山弥生人の大腿骨も大きいものである。本例の横径は里村弥生人のＡ大腿骨や二塚山弥生人に近い。矢状径は計測できないが，おそらく30mmを越えるものと推定され，この大腿骨は宮崎県の地下式古墳人や薩摩半島南端の成川古墳人とは異なり，甑島の里村弥生人の大腿骨に近似しているようである。

表１　大腿骨計測値（男性、右、mm）

	横　岡 古墳人	旭台地下式 古墳人 （松下、他）		里　村 弥生人 （小片、他）			二塚山 弥生人 （松下）	
	M	n	M	A	B	C	n	M
６．骨体中央矢状径	—	4	28.25	33	32(左)	29	25	30.40
７．骨体中央横径	29	4	27.00	28.5	26.5(左)	26	26	28.12
８．骨体中央周	—	4	87.75	99	94(左)	87	25	91.84

２．脛骨

骨体の一部が残存していたが，観察も計測もできないものであった。

(3) 性別・年令

性別は，上項線が明瞭で，外後頭隆起の発達も比較的良好であり，乳様突起も大きく，また頭蓋や大腿骨の径も大きいことから，男性と考えられ，年齢はラムダ縫合と矢状縫合の内板がいずれも癒合していることから，熟年と推定される。

総　　括

鹿児島県川内市上川内町釜口横岡にある横岡古墳群の発掘調査が1983年（昭和58年）に行なわれ，Ⅶ号墳から１体分の人骨が出土した。人骨の保存状態は悪いものであったが，興味ある所見が認められた。その結果を要約すれば次のとおりである。

１．人骨が残存していたⅦ号墳の内部主体は地下式板石積石室であり，築造年代は古墳時代の中期（５～６世紀）である。

２．人骨の保存状態は悪いもので，残存していたのは，頭蓋，歯，大腿骨および脛骨のそれぞれ一部であった。

3．この人骨は，熟年男性骨と推定される。

4．頭蓋は脳頭蓋のうしろの部分が残存しており，上項線は明瞭で，外後頭隆起の発達も比較的良好であり，また乳様突起も大きいものである。また頭蓋の径は大きいことが推測される。

5．外耳道骨腫は認められない。

6．大腿骨骨体の径は大きい。

7．以上のように，Ⅶ号墳出土人骨は頭蓋も大腿骨も大きく，また縫合の癒合状態の割に歯の咬耗が弱いという特徴が認められた。

鹿児島県の弥生時代人や古墳時代人は，短頭で，身長も低く，一般的に体が小さいと言われてきたが，その資料は同じ鹿児島県でも南端部から得られたものであり，北部の資料はほとんどなかった。本例は頭蓋や大腿骨の径が大きく，被葬者は体格の良い男性と考えられ，本遺跡と距離的にも近い甑島の里村弥生人に近いようである。これらの遺跡から出土した人骨の形質だけから推測すれば，鹿児島県の西海岸地帯には南部地域とは異なった形質が認められそうであるが，両遺跡は時代が異なり，また被葬者の社会的地位や所属する階級も異なることが考えられるので，この地方の資料数の増加を待ち，その上でさらに詳しく検討したい。

《擱筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた鹿児島県教育庁文化課の諸先生方ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

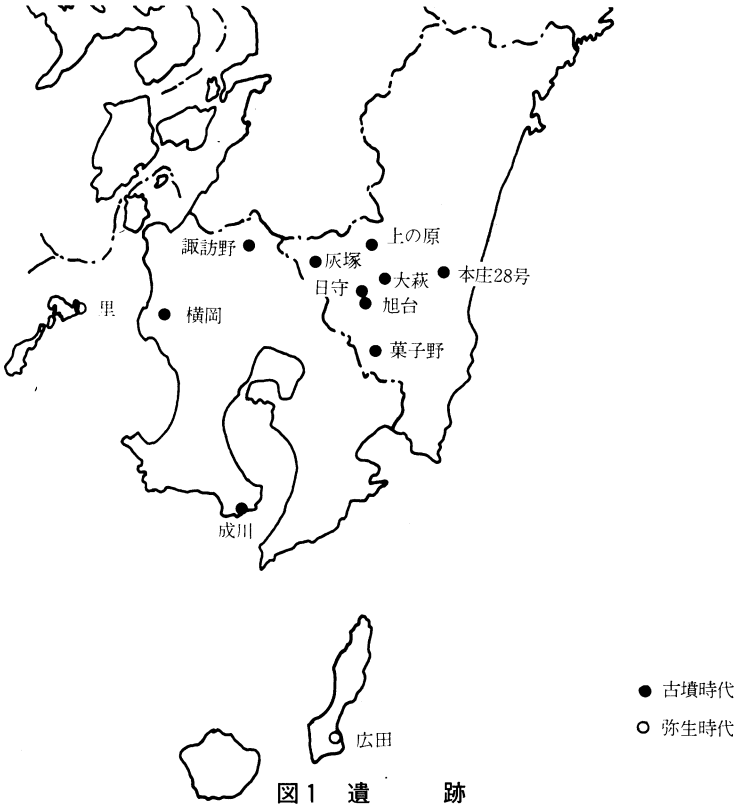


図1　遺　　跡

参　考　文　献

1．城一郎，1938：古墳時代日本人人骨の人類学的研究。人類学輯報 Ⅰ．

2．金関丈夫，1973：人骨概要。埋蔵文化財調査報告第7「成川遺跡」：110—116，文化庁。

3．Martin-Saller，1957：Lehrbuch der Anthropologie・Bd. l. Gustav Fisher Verlag，Stuttugart：429—597.

4．松下孝幸，1979：二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山（佐賀県文化財調査報告書46）：242—255.

5．松下孝幸，1981：日守地下式古墳出土の人骨。日守地下式古墳群発掘調査（55—1—4号)(宮崎県文化財調査報告書23）：169—178，182—183.

6．松下孝幸，1981：宮崎県上ノ原地下式古墳出土の人骨。上ノ原地下式古墳群発掘調査（宮崎県文化財調査報告書24）：114—129.

7．松下孝幸，1982：山口県朝田墳墓郡第Ⅱ地区出土の人骨。朝田墳墓群Ⅴ（山口県埋蔵文化財調査報告第64集）：179—206.

8．松下孝幸，分部哲秋，石田肇，佐熊正史，1982：鹿児島県諏訪野地下式土壙3号出土の人骨。諏訪野地下式土壙3号（大口市埋蔵文化財調査報告書2）：11—15.

9．松下孝幸，分部哲秋，1982：宮崎県国富町本庄28号地下式古墳出土の人骨。宮崎考古，第8号：16—20.

10．松下孝幸，野田耕一，1983：宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書，26：78—107.

11．松下孝幸，石田肇，佐熊正史，1983：鹿児島県成川遺跡出土の古墳時代人骨。成川遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24）：236—261.

12．松下孝幸，1983：山口県山口市朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨—総括篇—。朝田墳墓郡Ⅵ（山口県埋蔵文化財調査報告第69集）：219—242.

13．松下孝幸，分部哲秋，石田肇，1983：宮崎県都城市菓子野地下式横穴出土の古墳人骨。都城・中之城跡，菓子野地下式横穴（都城市文化財調査報告書3）：105—145.

14．永井昌文，1981：古墳時代人骨。季刊人類学，12：18—26.

15．内藤芳篤，1973：灰塚地下式横穴人骨。灰塚遺跡：72—77.

16．内藤芳篤，1974：人骨とその埋葬方法。大萩遺跡(1)：55—62.

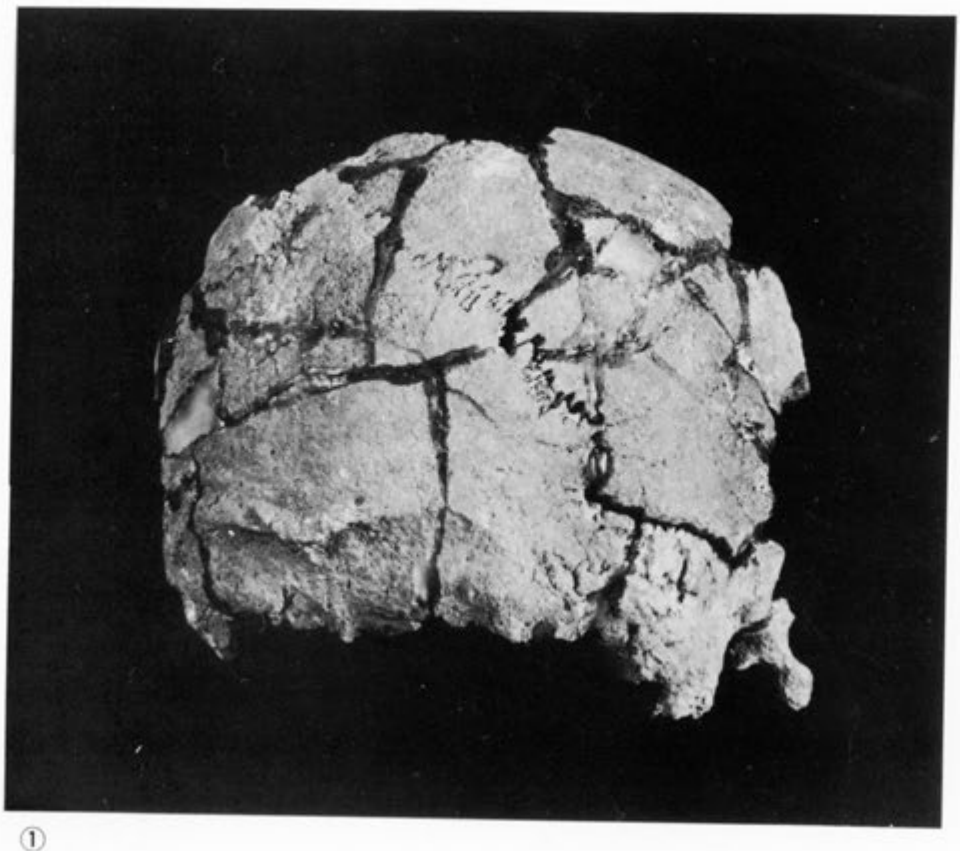
17．内藤芳篤，松下孝幸，1976：南九州出土の古墳時代人骨。解剖学雑誌，51：279.

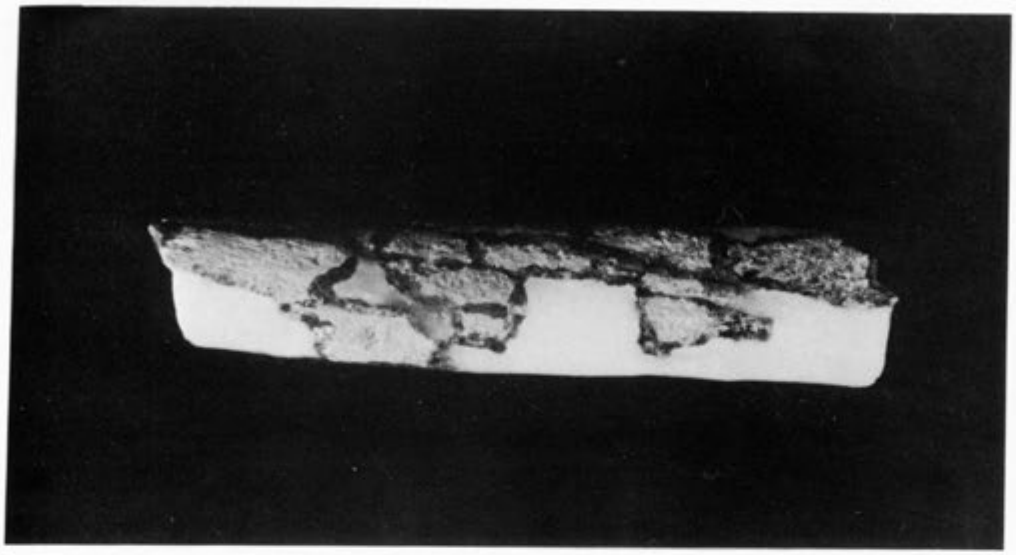
小片丘彦，川路則友，1983：鹿児島県薩摩郡里村（甑島）出土の弥生人骨について。鹿児島考古，第17号：67—74.

18．島五郎，寺門之隆，1957：近畿地方古墳時代人頭骨について(略報)。人類学雑誌，66：57—64.

19．鈴木尚，1963：日本人の骨。岩波書店，東京。

20．Suzuki，H.，1969：Microevolution Chnges in the Japanese Population from the Prehistrie Age to Present-day. J. Fac. Sci.，Univ. Tokyo，Sec. V，3：279—309.



①

②